
仁義なき妹【改訂版】

ゲレゲレ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仁義なき妹【改訂版】

【Nコード】

N9403W

【作者名】

ゲレゲレ

【あらすじ】

———無茶も通りも、私の愛の前では“ただの言葉”———

兄以外の異性は眼中に無い……むしろ世界の汚物とも考えている桐嶋家の愚昧……桐嶋美夏、高校一年生。

この物語は、そんな困った思想の持ち主である人物にスポットを当てた。学園ラブ？ コメディィー？ である。

※この小説は『ブラコンとツンデレと』からタイトルを『仁義なき』

妹』に変えたものの改訂版です。

おおよその登場人物には、あまり変化はありませんが。彼らが身を置いている環境がガラリと変わっています。

なので改訂前よりも大分話しが変わってしまうと思います。

改訂前より読んで頂いている数少ない方々には不快な思いをさせてしまう可能性もありますが、どうぞご了承下さい、お願いします。

設定（まだネタバレ無し）（前書き）

読んで頂く前に、大まかな設定です。

まだネタバレとかは御座いませので、安心してください。

設定（まだネタバレ無し）

・学園都市

第一区から第十三区まである、小・中・高・大と様々な学校・学園が存在している一つの都市。

基本的に、そこに住んでいる住民は特に学生だけだとか、学校の関係者だけという訳ではなく。外食の店舗を構えている者だったり会社勤めしている者だったり、そこら辺の街と変わりの無い一般人もいる。

しかし、学園都市と呼ばれるだけあって、学生や学校関係者の数が圧倒的に多いのも事実。

所によつては、大学生などが研究などのために開いている店もあるぐらい。

また、この学園都市の区分けには特徴……というより、俗称の様なものがある。

第一区から第三区までを“才能の区画”と称し。

第四区から第五区までを“品格の区画”と称し。

第六区から第十区までを“勤勉の区画”と称し。

残り第十一区から第十三区までを“未知の区画”と称している。

“才能の区画”はスポーツや芸術、または勉学でも一芸に秀でたものだけが入れる区画と呼ばれ、その中にはプロの世界で活躍する者だったりだとか、芸能の世界、遥か海の向こうの海外でも活躍出来る者だったり、非常に多種多様な才能たちが溢れかえっている事から、そう呼ばれている。

“品格の区画”とは、基本にお嬢様だとかお坊ちゃまだとか、はたまた御曹司といった上流階級の親を持つ者達が集まる区画で。学校のカリキュラムでは通常の基礎知識だけではなくマナー講座だったり、彼らの将来にとっては必要な学問などが組み込まれている。

また、この区画には共学の学校または学園は一つも無く。その全てが男子校だったり女子高だったりといった、男女を分ける形をとられている。これは、将来の結婚相手を選ぶ際に、他の家の娘・息子に手を出してしまい、余計なトラブルが起こってしまう事を防ぐためにあるとかないとか……真意は謎に包まれている。

“勤勉の区画”とは、その名の通り、才能だとかではなく、努力で学園都市内の学校・学園に入学できた者達を集めた区画だ。そのため、学力だけなら“才能の区画”と時たま互角を張る時があり。なかなか侮り難い者達がいる場所。

そして最後に“未知の区画”とは、まさに未知。つまり、住んでいる者たちが理解していない、または手を及ぼしてはいない地区であり。その区画内には、問題を起こし他の区画から追放された学生だったりだとかが集まるアンダーグラウンド的な場所があるだとか。学園都市が秘密裏に行なっている研究を隠す為の場所だとか、もはや都市伝説の様な扱いを受けている場所。ちなみに、住民自体は普通に住んでいる。

また、それぞれの区画には留学生もかなりの数が在籍している。

・執行部

区画内で定められた規定の人数で構成された組織で。

基本、学校・学園内、区画内で起きた荒事を処理するために存在していると言われている。

また、構成されたメンバーは、その学校・学園の生徒会にしか知らされておらず、一般生徒はその存在すら認知していないのではないのかと言われている。

だが実は、中には執行部の存在を知っている一般生徒も存在しているらしい。

なんとも曖昧な組織だ。

・『JUDGE』

国内外問わず、格闘技団体史上最も最強を決めるに相応しい舞台を用意できる団体と言われている、格闘技のメジャー団体。

その団体に所属している選手達は、基本的に前に所属していた団体でトップ、または優秀な実績を収めた者でないといけないとされており。非常にレベルが世界規模で高い面子が集められている。

桐嶋竜蔵も、高校入学から少し経った16歳の頃にフルコンタクト空手で世界を最年少という記録で制覇し、この団体に所属している。

また、この団体には“階級という概念は存在しておらず”。その全ての試合が無差別級といった常識では考えられない制度を採用している。

基本ルールはMMA……しかし、肘や裏拳などといった制限は一切ない、真の“value tudo【何でもあり】”の世界。

しかし、選手間の交渉次第では、様々なルールが適応される場合もあり、時にキック、時に肘などを抜きにした総合だったり、様々な種類のルールを適応する事が出来る。

基本リングは六角形ヘキサゴンの金網で囲まれた物……しかし、これもルールの適応によっては普通のロープを張られた四角いリングになることもある。

リングの制度は、つい最近に作られたものであり、それまでは見やすいという事で四角いロープのリングのみであった。

竜蔵の父親、桐嶋虎刃喜は、この『JUDGE』の試合中に亡くなっている。

『JUDGE』という団体名は、『全世界で最強の男を、平等の試合で裁き決める』という考えの下、創設者によって名づけられた。

入学式（前書き）

第一章です。

入学式

眩いばかりのライトが、一つの白いキャンバスを照らす中、二人の異なる国籍を持った男達が、文字通り、血で血を洗う殴り合いを繰り広げていた……。

赤と青のコーナーポストや、白いインターバルゾーンのポストなど、リング内だけを見ればどこにでもありそうな光景。

しかし、このリングのキャンバスに立っている二人の男達が。その手に着けているオープンフィンガーグローブの拳面を相手の顔面に衝突させ合う度に、周りを囲む万を超える人々の歓声は地鳴りにする程に二人の男達の全身を包み込んでいた。

その万の人員を動員出来るほどの会場は、既に中央で戦う二人以外に興味を示していないかのように、白いライトの照明を、そこしか集中させていない。

男の一人……東洋系の肌や顔立ちをした、一切の脂肪が無いほどに絞り上げられた完璧なまでの肉体を持つ男が、相手の白人男性の右頬を、文字通り左の拳で刈り取る様に打ち抜く。

もはやその拳は、ショートフックなどという名詞の枠では現せないぐらいのキレを誇っており、まるで鎌で相手の顎を削ぎ落としたのではないかという錯覚まで周囲に与えていた程だ。

左の拳を右頬に受けた白人男性の頑丈そうな顎が、殴られた軌道側へと弾き飛ばされるかの様に揺らいだ。

しかし、白人男性は殴られた勢いそのままに沈みそうになっていた巨軀な肉体を、前足として置いていた左足を横に差出し、キャンバスに踏ん張ることで、その場に留めた。

だが東洋系の男の猛攻は止まない……。

崩れ落ちそうだった体を残した白人男性の奥足……つまりは右足の内腿に、右足によるインローキックを打ち込んだ。

バチイイイイン!!!!——と、地鳴りが響く程に大きな歓声の中でもハッキリと聞こえる、白人男性の右内腿が、東洋系の男の右脛に蹴り抜かれた音。

その音は正に破裂音といっても過言ではなく、例外なく、白人男性の右足を蹴った方向に刈り取った。

右頬への左フックをかるうじて耐えた後の、右内腿へのインローで完全にバランスを崩してしまう白人男性……体格差は195?125?に185?の100?と、明らかに勝っている筈なのに、これほどこまでに良い様にされてしまう事に白人男性の表情には、ダメージだけのものではない何かが浮き彫りになっていた。

無理やり足幅^{スタンス}を広げられる格好となった白人男性の大きな顔に、再び東洋系の男の拳——今度は利き腕の右——が飛び込んでくる。

真っ直ぐに……真正面に……真正直に、突き出されるその拳は。右のインローを引いたと同時に打ち込まれたために、腰の回転にツイスト気味の力がかかり、東洋系の男の柔軟な肩甲骨の使い方も相まって。普通のコンビネーションの決めに使われる右ストレートの威力や迫力となんら差異は感じられなかった。

当たる!!!!——東洋系の男は、この両者の顔面が血で染まるほどの殴り合いの終結を、そこに見た。

しかし、その刹那……。

グシャッ!!

「親父イイイイ!!!!」

鈍い……なんてものではない。

まるで、高速で飛んできた鉄球に顔面を潰された様な、短くも衝撃的な音が、両者の顔面を襲った。

同時に、東洋系の男の耳に、聞き慣れ過ぎた子供の悲鳴も飛び込んできた……。

相打ち……それも、相手が苦し紛れに打った右拳と自身の右拳が、同時に両者の顔面を捉えるほどのドンピシャなタイミング。

二人の鍛え上げられた首が、背中が、足が、ゆっくりと後ろへと倒れ込もうとする……。

打ち込まれた拳から離れた顔面からは、ネチャリと赤色で染まった粘液が共に糸を引きながら、生々しく離れていくのが見えた。

そして倒れ行く東洋系の男が、青コーナーからこちらを泣きながら見ている子供を、精根尽き果て朦朧とする意識の中で一瞬だけ捉えることが出来た。

本当に……本当に情けないぐらいに涙で顔をクシャクシャにした、小さな男の子だった。

(ごめんな……竜蔵……)

東洋系の男は、暗闇に包まれつつあった思考の中で、最後にそう囁いた後。

力なく、リングの上でこちらを照らし続けていたライトを仰ぎながら意識を沈めるのであった。

その男の筋骨隆々の肉体に纏った道着の黒帯には、金色の刺繍できりしま桐嶋虎刃喜”と書かれていた……。



桜色の季節とは、まさにこの事……。

三月の別れから、大して時を経たずに訪れる新たな出会いの季節。そう、現在は四月の入学シーズン真っ只中の季節だった――――

「美夏みなつさーん！ もう皆多目的ホールに入っちゃってるよー！！」

晴天の空！ 正面に見据える桜色満載の並木道や、赤い煉瓦が敷き詰められたお洒落な地面が、視覚的にも新しい心境の訪れを感じさせる今日この頃。

そんな中、一人の少女の後ろから、少し焦り気味の声が聞こえてきた……。

「？」

その声をかけられた少女は、無言で後ろを振り向く。

少女の腰まで伸びた黒真珠の様に日光を反射させているロングストレートの髪が、春風によって桜の花びらと共に舞う。

「……」

この光景に、少女に声をかけた同学年の女生徒が思わず見惚れてしまう……。

先の艶やかな髪もさることながら、美しくも女子高生という若さ特有の可愛さを持つ瞳や、細く整った小顔の輪郭。まだ15歳という年齢ながら、165cmという身長に出るとこは出ているモデルのような体型のラインが、有無を言わさぬ優美さを誇っていたからだ。こちらを呼んだにも関わらず、突然口をポカンと開けて黙りこくってしまった同学年の女生徒に、美夏と呼ばれた少女は首を傾げる。

「どうしたの？ 急に黙り込んで……」

「……え、あ、うん！ そろそろ入学式が始まるって、伝えに来たんだけど……」

自身が思わず見惚れてしまった少女に声をかけられ、ようやく意識を覚醒させた同学年の女生徒が。ここに来た理由を思い出したかのように伝える。

「そう……」

同学年の女生徒の言葉に、そう言って短く答える美夏と呼ばれた少女……。

この様子に、同学年の女生徒が心配そうな表情になる。

「もう緊張の方は大丈夫なの？ 私はやらないから結局他人事になっちゃうけど、やっぱり新入生代表の挨拶って、そんなに緊張するものなの？」

同学年の女生徒からかけられた言葉に、美夏は軽く微笑んで見せてから。

「うん……昨日までは楽しみって感じだったけど。今はそれなりに緊張してるかな」

「それなりにつて。緊張を解すために外に出るほどなんだから、相当の間違いなんじゃない？」

「ふふ、そうかもしれないね？」

おそらく、こちらの緊張を和らげようと頑張ってくれているのだろう。この言葉のチョイスは、いささか逆効果なんじゃないかと感じる美夏であった……まあ、口には出さないが。

「でもまあ、どうせやる事になるんだし、なるようになれって思っただ方が気が楽になるよ？ 人間はリラックスが大事って言うしね」
しかし、相手方はこれでこちらの緊張が解れていると感じているのか、言っただけという表情を浮かべながら、こちらに満面の笑みを浮かべてくる。

この瞬間、美夏の胸中では“この娘は対象外ね、まずいきなり下の名前で呼んできた時点で対象外だけど”と謎の評価が下されていた……。

「アドバースありがとうね。そうする事にするよ」

「うん！ 頑張つてとしか私は言えないけど、ちゃんと後ろで応援してるからね！」

「ええ、でも、もう少しだけ外で落ち着きたいの。だから、先に行つてて」

「分かった！ なら、遅れないでね？ あと2・3分ぐらいで始まるらしいから」

そう言つて、同学年の女生徒は、多目的ホールや図書館が一体となった、地下一階地上四階の建物へと姿を消していく。

女生徒が去るのを、これまでの微笑みとは打って変わって特に興味なさげな視線で見送った美夏は、再び先程まで眺め続けていた桜並木の向こうに視線を戻した。

相も変わらず、綺麗な桜の花びらが、一枚一枚自己主張をしながら散っていく……非常に綺麗で風流な光景だ。

だが、そんなものには美夏は興味を示そうとはしない……ただただ、並木道の向こう側を見つめ続ける。

（やっぱり、お兄ちゃんは来ないのかな……）

胸中での寂しそうな呟きは、春の暖かな風にも乗らずに、美夏の中だけで響き渡るだけだった。

そして、そろそろ入学式の時間が迫ってきていたのに気付いた美夏は。少々後ろ髪が引かれる思いをしながらも、後ろに佇んでいた大きな建物へと踵を返した。



入学式……それも高校生でのと来れば、誰しもが新たな何かに淡い期待を抱くであろう。

そして、そんな淡い期待を、入学式会場である多目的ホールへと入ってきた瞬間に、他方から浴びた人物がいた。

しかし、様々な視線を全身に感じながらも、その人物は一切の興味や物怖じすら見せずに、悠然とした足取りで多目的ホールの最前列へと歩を進めていった。

ここ多目的ホールは“第一区”新入生総勢3200人の内、新入生の500人は軽く収容できるほどの大きさを誇っている。

まあ確かに新入生の来賓やら父母の方々やらを合わせたら、この多目的ホールでも席がギリギリといった状態になってしまうが。高校にしてこれ程の人員を収容できる多目的ホールがある事自体珍しい事で……更には、この様な空間が、この地下にはあと二つあるというのだから驚きだ。

そんな中を、この多目的ホールにいる人々から視線を集めながら最前列へと躍り出た人物が、ようやく席に着いた。

席は、最前列一番右側だ。

瞬間、多目的ホールに灯っていたライトの明かりが一斉に消え、今度は目の前の壇上へと再び灯ったライトの明かりが注がれた。

この間、気持ちが入学式という事で高揚していた者達の中から驚きの声が上がっていたが。先ほど入ってきた人物は、至って平静のまま次なる出来事を待った。

『これより、今年度の二橋学園高等部の入学式を開式いたします』

いつの間に現れたのか――多目的ホールの殆どのライトが集めた壇上の中で、一人の上級生であろう女生徒がマイクに向けて宣言すると共に、会場中の喋り声が一斉に鳴り止んだ。

その様子を確認したあと、壇上の女生徒が照明に向けて、手によるジェスチャーで鬱陶しそうに『ライトを向けるな』と指示を出す。と。途端に壇上に向けられていたライトが、壇上の上にある照明だけとなった。

そして再び、マイクへと口を開く。

『国歌斉唱。皆さんご起立のうえ、壇上の国旗に注目してください』すると、会場中の全ての人間がバタバタと中々に座り心地の良かったシートから起立していく。

会場中の起立が済むと同時に、国家が多目的ホールに設置されているスピーカー越しに流れ始めた。

いよいよ、二橋学園高等部入学式の始まりだ……。



入学式など、皆のウキウキ具合に比べ、何事もなく終わる様な退屈な一面も備えている。

そして、それはこの二橋学園高等部も例外ではない。既に入学式も校長やらなんやらの有り難い訓示も終わり佳境に入っている。

だが未だに皆、入学初日から可笑しな目立ち方をしたくないがために、座り心地の良いシートに背を預けながらも話しに耳を傾け続

けている……。

そうこうしていると、先の女生徒、美夏の出番が回ってきた。

『新入生の挨拶。新入生代表、桐嶋美夏^{きりしま みなつ}さん。壇上へお上がりください』

この言葉を耳に入れた瞬間、壇下最前列の一番右側に座っていた美夏がハッキリとした透き通る声で「はい！」と返事をした後、シートからスッと立ち上がった。

そして、腰まで伸びた長く真っ直ぐな黒髪を靡かせながら、優美な曲線を描いたスラリと長い足を歩かせ、壇上へと上がって行く。

この間、新入生の男子生徒や後ろの方に座っている父母……特に男の方から、異様な視線と感慨の声が漏れ出していたのを、美夏はスルーする。

弧を描いた壇上へと足をつけると、目の前には丁度、美夏の身長に合わされたスタンドマイクが設置されていた。

その前で、女性でありながら堂々と気を付けの姿勢を取る美夏……心なしか、それだけの事で彼女の垢抜けた気品が感じられた。

しかし、彼女にはこの様なことに対して、何の感慨も生まれてこない。

むしろ、早く終わらそうという気持ち彼女の中では勝っていたぐらいだ……もちろん緊張などではなく、本気でどうでも良いと考えている様であった。

だが表情には一切表れない。

この多目的ホールに入ってから依然として、確りとしたなかにも余裕が感じられる表情のままだ。

これを対面で見て、壇上に立っていた二橋学園生徒会長、二橋^{ふたつばし}姫樹^{めき}の微笑ましそうに閉じていた瞼が、少しだけ興味深げに開いたのを、美夏は気付いていた。

しかし、それでも全く動じなかった美夏は、優等生らしく、桐嶋という名字に恥じぬよう、悠々と新入生代表挨拶をこなしたのであった。



入学式も問題なく終わり、現在は多目的ホールからクラス別に退場している。

そして美夏も例に漏れず、多目的ホールの両開きのドアから退場し、約1時間半ぶりに外の空気を体内に入れることが出来た。

本当に退屈だった……家族である母も妹も、そして何より兄も来てくれない入学式に、何の意味があるのか？

そんな事を考えながら、長い桜並木の道を歩いている時であった。突然、後ろから右肩をツンツンと突つかれた……。

これに自然に反応した美夏は、何かなと言った風に後ろを振り返る。

そこには、165?と、同年代の女子にしては発育良好な美夏よりも、10cm以上は高い女生徒が人懐っこい笑みを漏らしながら立っていた。

「新人生代表の桐嶋さんだね。あたしは同じクラスの木下藍きのしたあいって言うんだけど、一緒に教室まで行かない？」

フランクな物言いもそうだが、美夏に話し掛けてきた木下藍という女生徒は、長身にも関わらず均整の取れた体型がスマートな印象を持たせ、高い腰の位置や、コバルトブルーの瞳、少し赤茶がかった活発なショートヘアなどが、どこか日本人離れした雰囲気を出していた。

「うん、いいよ」

美夏の返事に「そう、じゃあ行こうか♪」と言って隣に並ぶ木下藍。

そうすると、よけいに美夏との身長差が際立って見える。

「木下さんって、何か部活とかやってるの？」

やはり、いくらこれまで興味が沸く事が少なかった美夏でも、こればかりは気になったのか、思わず質問を投げかけてしまう。

「あたしは女バスだよ。まあ、この成りを見れば、なんとなく想像が着いたでしょ？」

「ええ、まあ」

「そういう桐嶋さんは、何かやってるの？ 見たところ凄いプロポーションだから、体とか鍛えてるんでしょ。特に足とか見ると、結構やってる感じがするよ」

少しだけ俗っぽい視線を美夏に向けつつも、意外に観察力の鋭い木下。

これに美夏は、密かに抱いていた彼女の第一印象である“大雑把そうな女”という評価をちよつとだけ改善させた。

「私は中学まで新体操をやってたけど、高校では続けないかな」

「へ〜新体操ね〜……続けてれば、男子達が煩いからって理由で？」
ニヤニヤと美夏の豊かな美乳を眺めつつ尋ねてくる木下に。

「そうじゃないってば。ただ続けられる自信が無いって言うか、暇が無いっていうか……そんな感じかな」

「ふ〜ん、もったいない……桐嶋さんのレオタード姿とか、絶対に男子達が面白そうな反応すると思ったのに」

「まあ、確かに面白い反応はしてたけどね（思い出したくも無いくらいにね。ホント、お兄ちゃん以外の男子って“糞”ね）」
うん？ ちよつと待ってくれ……。

これまで、確かに桐嶋美夏という女生徒は、節々で影のある感じを醸し出していたが……。

今の副音声は一体……？

非常に問いただしたい所ではあるが、ここで美夏にとって、最も出会いたかった……いや、死ぬまで添い遂げたい人物が、いつの間にかに来ていた桜並木の終わり、二橋学園“入り口”の校門前に現れた。

周囲にはまだ、美夏達の他にも新入生達の姿がゾロゾロとしていたが、その匂い、その存在感により、美夏は神業とも言える探知能力で、件の人物がいる方向へと“バ”っと振り向いた。

「うん？ どうしたのいきなり？」

突然の美夏の動きに、木下が不思議そうな表情をするも、もはや本人には眼中に無い。

視線の先には、一人の体格のいい……いや、もはや芸術とも呼べる肉体を誇った男性が、本学園の男子の制服を身に纏いながら誰かを探している光景が映っていて、その表情には、一向に見つかる気配が無いのか焦燥感すら漂わせていた。

「桐嶋さくん、俺同じクラスの佐々木ってんだけど」

「ねえ、桐嶋さんだよな？ 俺、君と中学が一緒だった……」

不意に、視線を固定してしまった美夏の後ろから、同じクラスの男子生徒達が声をかけてきた。

おそらく、彼女の容姿に惹かれた者達であろう……。

しかし、美夏は一切の反応を示さない。

ただただ、校門前で誰かを探し回る男を見つめているだけ……。

「桐嶋さん？」

当然、美夏の隣にいた木下は、新しく出来た知り合いを氣遣うように、上から顔を覗き込む。

そこで、動きがあった。

「え？ ちょっ……」

木下が言い終わる前に、なんと美夏が前方へと飛び出したではないか。

柔らかい物腰や華奢な容姿からは考えられない、流れるように動く柔軟な走りで、美夏はあっという間に木下や後ろにいた男子達を置き去りにしてしまった……。

そのスピードは、本当に高一女子とは思えない素晴らしいもので、腰まで伸びた黒髪を颯爽と風になびかせながら、一気に目的の人物までの距離を縮め……そして。

「うん？」

件の人物の厚い胸板に、思いつきりダイブもといタックルをかました。

ドン！——という中々に良い音を鳴らした美夏のタツクルであったが、男は何の問題も無く、飛び込んできた美夏を抱き止める形で包み込んでいた。

ガバッと、美夏が男の胸に埋めていた顔を上げる。

するとそこには、高校男児らしい若さと男らしい強さを持つ顔つきをした、自慢の兄の姿があった。

頑丈そうながらも、それなりに整った輪郭や、眼力のあるハッキリとした瞳。

逆立てた黒髪の短髪は、高校生らしくワックスでセットされ、美夏が抱きついている肉体は、胸囲と腹回りが反比例した理想的な逆三角形をしている……。

また、彼の鍛え上げられた太い首筋を見れば、中も相当な筋が浮き彫りになっているのだろうと想像が出来る。

そんなガチムチな兄貴が、受け止めた美夏を見る。

「おお、やっと見つけた……ごめん？ 入学式に間に合わなくて」「そんな事ないよ！ こうして来てくれただけでも、私は嬉しいんだから……」

抱きつきながら見上げる瞳を潤ませ、本当に嬉しそうに聞こえる美夏の声音。

それを見て、美夏を抱きとめた格好となっている兄貴の表情が“悪いことしたな”と言外で語る様に眉を八の字にしていた。

しかし、ここにはまだ他にも新入生の面子が大勢いるのだ。

当然だ、なぜならここは学園都市第一区にある“二橋学園”の校門前なのだ。入学式を終えた生徒は、それぞれ教師との顔合わせのために自身の教室へと向かわねばならない。

そして、そんな場所で抱き合う二人……当然、二人の関係を兄妹と知らない周りからの注目を集めるわけで。

「え、嘘……桐嶋さんって彼氏持ち？」

「うわ、大胆……」

「マジかよ、あんあむさ苦しい奴に何で……」

ヒソヒソと聞こえてくる戸惑いの声。

そして、先程まで一緒に歩いてきた木下の後ろからは、声をかけようとしていた男子達が落胆の表情を浮かべている……が、ここで何がなんだか分かっていなかった木下が、ある事に気付いたようだ。（あれ……あの男の人、どこかで見た事があるような）

頭の片隅に、様々な記憶を巡らせる木下。

もともと考えるということでは得意ではないのだが、こればかりはどうにも考えずにはいられなかった。

「うん？　もしかして、あの人って格闘家の……」

すると、どこからともなく木下の耳に、そんな声が静かに届いた。瞬間、木下の活発な眼が“カッ”と見開かれる。

「思い出した！　あの人、『JUDGE』に出てる人だ！」

この木下の言葉と共に、周りから「ああ！　そういえば！」だとか「学園パンフレットに載ってた人か」だとか様々な声が聞こえてきた。

「え？　ああ、そうか。そういえば、うちの学園に……書いてあったな」

「確か名前って、“桐嶋竜蔵”きりしまりゅうざうだったっけ？」

「馬鹿、今は先輩を付けろよ」

桜が舞う学園校門前で、方々から向けられる“有名人を見た”というミィハーな高校生の視線に、美夏の兄、桐嶋竜蔵は気付いたのか……。

「うん？　そういえば、まだ全部終わってなかったっけか」

目と目を合わせていた美夏から視線を外し、周囲を見回した後、そんな事を気付いたように呟いた。

同時に、現在兄妹で抱き合っている姿にようやく気付いたのか、抱きとめていた美夏の体をスッと放した……が。

「おい、ちょっと周りが見てるから……」

なぜか、こちらをニコニコと見つめたまま、美夏が離れようとしてくれない。

むしろ、ますますその發育良好な胸を押し当ててきたぐらいだ。
「ダ〜メ♪ これは入学式に来てくれなかった罰なんだから」
「いや、それは悪かったって……だけど、今は離れてくれないか？
お前もまだやる事が残ってるんだろ？」

「嫌♪」

甘えた声で、竜蔵の厚い鉄板の様な胸板に頬擦りをする。

困った……周りの視線が、何やら嫉妬やら何やらが混ざった痛い者を見る感じになってきてる。

これは早く何とかしないと。

そう考えた竜蔵は、ここである提案を持ち出す。

「なら、今日の夜に入学祝として何かプレゼントするから、それで許してくれないか？」

「そういうのは本人には黙ってるものなんだよ？」

もつともな指摘を受けて、竜蔵はますます困った顔をする……。

拙い、本当に拙い……。

このままだと俺は、極度のシスコン野郎って勘違いされてしまう。
周りの新人生は、まだこの二人が兄妹とは気付いていない様であったが。そろそろ名字が同じだとかで気付く者が出てきても可笑しくは無い。

そして気付かれた上で、こんな事をいつまでもしていると、確実にこれから後輩となる連中に示しがつかなくなる。

故に竜蔵は、その懸垂で出来た^{たこ}尻や格闘家として作り上げてきた拳^{こぶし}が目立つ、ゴツゴツとした両手で、美夏の細い両肩をガシッと掴むと。

「あっ！」

「はい、そろそろ本気で離れろよ？」

その岩石の様な筋張った太い両腕を駆使して、懷に抱きついていた美夏を無理やり剥がした。

むくくと両頬を膨らませながら、不服そうにこちらを見る美夏。
しかし、入学式に参加できなかった事を悪いとは思いつつも、公

私を弁えなければならぬと考えた竜蔵は。

「必ずこの埋め合わせはするから、今は言うことを聞いてくれ」

「む……必ずだよ？ 絶対だよ？」

身長差は竜蔵170？なので、男女にしては5？しか差は無いが。先ほどの美夏の仕草で、どうにも彼女が子供っぽく見えてしまう。

これに、新入生代表の挨拶を見ていた周りの男子達は、いわゆるギャップ萌えという奴で既に陥落寸前の状態であった。

しかし、何度も言うが、周りはまだ二人の関係には気付いていない……。

故に、最初から彼女に目をつけていた男子達からは嫉妬という負の感情が漏れ出るというより噴出していた。

だが、ここでもうやく、何やら気付いたものがあるようで。

「あれ、そういえば先輩の名字って、桐嶋さんと同じ……」

そう呟いたのは、先ほど竜蔵を『JUDGE』に出てる人と見抜いた木下藍だ。

そういえば『JUDGE』とは、ここ日本国内だけではなく、既に世界にも認められたメイドイン・ジャパンの格闘技団体で、各方面の団体から本当の実績を挙げたものしか出場出来ない狭き門の団体なのだが……今は割合しておく。

木下の呟きに、周りの新入生達も何かに気付いたのか。

「確かに、同じ名字だ……」

「え？ じゃあもしかして……」

「マジで？ でも、二人って言っちゃ悪いけど似て無くない？」

この周りのざわめきに、美夏と綺麗な耳がピクリと動く……。

同時に、向けていた体の正面を、今度はざわつく同級生達へと振り向かせた。

「急に騒いでゴメンね？ 今から紹介するけど、この人が私の“お兄ちゃん”で……」

視線を同級生達に向けたまま、後ろにいた竜蔵のブレザーの袖を

クイクイと引っ張り。

「うん？ ああ、桐嶋竜蔵って言います。知ってる人もいるかもしれないけど、一応空手やってます。部活はラグビー部です」

美夏のサインに気がついた竜蔵が、先輩らしい軽い口調で自己紹介をする。

すると、周囲から驚きと予想外だったという声が上がった。

「え！ うそマジ！？」なんて反応は当たり前で、もはや桜並木の終着点でもある二橋学園校門前では一種の騒ぎが起こり始めていた。

現役高校生格闘家の妹……ましてや、その現役高校生は、世界を相手に戦っているという説得力を持った風貌をしていて、既に気の弱い男子達は、目をつけていた美夏から手を引こうかと考えている様であった。

だが、気の強いというより意志の強い連中には、どうやったらあの兄をどかして美夏と接触するのかを画策している者もあり、男子間では非常に混沌とした思惑が入り混じっていた。

「皆さん、一体何の騒ぎですか？」

しかしそこに、なにやら決して大きくは無いが、不思議と誰の耳にも良く聞こえる女性の声が割り込んできた。

その声に、なぜかこれまで騒いでいた校門前にいた全員が振り向いてしまう。

それは例外が無く、美夏や竜蔵も同じことであった。

声の主である女性は、多目的ホール側の桜並木から、丁度ここに辿り着いたという所に、数人の生徒を連れながら立っていた。

「あ、会長だ」

突然現れた彼女を視界に入れた竜蔵の言葉に、美夏も「挨拶の時に会った人だ」と先の入学式での事を思い出していた。

「あら、桐嶋君に妹さんね♪ 丁度良かったわ」

二人の反応を、まだ少し距離があるにも関わらず気付いた会長と呼ばれた人物は。

緩やかなウェーブのかかった、豊かな栗色の長髪を揺らしながら、優雅な足取りで二人に歩み寄っていく……その間、道の邪魔になっていた新入生たちは、自然とこの会長と呼ばれる人物に道を譲ってしまっていた。

そして美夏と竜蔵の前で、朗らかな笑顔を浮かべている会長が歩みを止めた。

「入学おめでとう、桐嶋美夏さん。さっき聞いたと思うけど、私は二橋姫樹^{ふたつばしひめき}。学園都市第一区二橋学園高等学校の生徒会長を務めてます♪」

「ありがとうございます、二橋会長。私も改めて自己紹介をの方をさせていただきます、桐嶋美夏、後ろにいる桐嶋竜蔵とは兄妹の関係にあります」

行儀良く……というより、ただ自己紹介を礼混じりに行なっただけで、どこか涼やかな雰囲気すら醸し出す二人の所作に。周りの者達は一瞬だけ空気に吞まれる感覚を覚えた。

学園の生徒会長。

もちろん、先ほどの入学式にも出席していたために新入生には既に知られているが。

目の前で見ると、美夏に負けず劣らず……というより、胸の大きさと大人の女性といった物腰の所為で、どちらかといえば美夏にすら勝っているスタイルを誇っており。

その常に目は瞑っているが朗らかな微笑みを浮かべている表情のお陰で、周りに楽しそうな雰囲気分け与えている様であった。

この目の前に現れた魅力的な女性に、外見には出さないが美夏の警戒心が高まる……。

（なんなのこの女……底が見えないだけじゃなくて、容姿も油断なら無いじゃない。これは、リストの方に即効で追加ね）

なにやら黒い感情の籠った思惑……。

しかし、もしや気付いているのか？

目の前の姫樹はそれを片目だけ薄っすらと開けるだけで流した。

「ええ、一応名簿の方は目を通していたから知っています。しかし、それにしても兄妹揃って同じ学園とは……ちゃんと面倒を見てあげなくてはダメよ？　“お兄さん”」

悪戯な笑みを浮かべ、竜蔵を茶化す姫樹。

「やめてくださいよ。コイツは俺より出来た妹ですから、その必要も無いですよ」

「あらあら♪　随分と妹さんの事を信頼しているのね」

「やだ、お兄ちゃんたら……♪」

「お前はからかうな」

姫樹に続き、兄の事を茶化そうとした妹を咎める。

春風が吹く中で、桜の花びらが赤煉瓦調の地面に散りばめられる光景で、このまま他愛の無い会話が続けても良いが。生憎と新入生にはまだやらなくてはならない事がある。

「仲が良いのも結構ですが。そろそろ教室に向かわないと、担当の先生方が待ち草臥くたひれてしまいますよ？」

故に姫樹が、やんわりとその事について口にする。

「あ、そっか。じゃあ美夏、また後でな？」

姫樹の言葉で随分と妹を引き止めて？　しまっていた事に気付いた竜蔵は、気軽な調子で美夏に言った。

「え……って言いたいところだけど、仕方ないよね。じゃあ、また後で、お兄ちゃん♪」

「ああ。それと、学校内では“お兄ちゃん”は止めてくれ。先輩に弄られるから」

気恥ずかしそうにする竜蔵に、美夏は嬉しそうな微笑を浮かべると。

「やだもーん。これは入学式に来てくれなかった罰です」

言いながら、「ちょ！」と反論しようとする竜蔵から逃げるように、学園の校門の向こう側へと走っていく美夏。

妹が竜蔵を過ぎ去る際に、彼女の髪の毛が一瞬だけ竜蔵の確りと筋の通った鼻を擦った……春の陽気と相まって、とても甘い香りが

したのは、兄としては口に出しづらいところであろう。

「良い妹さんね。会長とても気に入っちゃったわ♪」

「俺には出来すぎた妹ですよ……家事も出来るし運動も勉強も完璧にこなすんですから」

妹である美夏が、制服のスカートを揺らしながら去って行った後で、竜蔵が疲れたように「ふん」と鼻で溜息をつく。

すると、姫樹の後ろにこれまでずっと控えていた連れの生徒達――――おそらく生徒会のメンバーであろう――――が、周りにまだ残っていた新入生達に早く教室へ向かうように促し始めた。

それに反応した、立ち止まっていた新入生達が慌てて校門の向こう側へと走っていく姿を見送ると。

「それで桐嶋君、折り入って会長からお願いがあるのだけれど……」
突然、姫樹が静かな声音で竜蔵に尋ねた。

何事かと、竜蔵が視線を新入生達から姫樹の方へと戻すと。

「なんですか？」

「お願いっていうより、“命令”って言った方が格好良いかしら？」

「いや、割とどうでも良いです」

「そう？」

おかしいわねーと、右頬に右の掌を当てながら、困ったように表情を曇らせる姫樹。

「で、折りいったお願いって何ですか？」

その竜蔵の本気でどうでも良いから、早く本題に入ってくれというニュアンスの込められた態度に。

自身もこの後、色々忙しい予定の姫樹は、とりあえず遊びを手放すことにした。

「“執行部”としてのお願いになるのだけれど、いま時間の方は大丈夫かしら？」

姫樹の柔らかそうな唇から出てきた“執行部”というワードに、竜蔵が露骨に面倒くさそうな顔をする。

その表情を見て、姫樹は「やっぱり、今はダメなの？」と残念そ

うにしたが。

「いえ、今さっき対戦相手との契約が終わったところなんで。特にこの後、予定って言う予定は無いんですが……俺じゃないとダメなんですか？」

「別に桐嶋君じゃないとって訳ではないのだけど……他の子たちが一切受けてくれなかったのよ」

「全員ですか？ 確か俺以外に、後何人いましたっけ？」

「うちの学園は少ないから、桐嶋君以外にあと二人しかいないのよ……その二人にさっき『興味が無い』って理由で、断られちゃったから。受けてくれないかしら？」

姫樹の両手を合わせて“お願い”というポーズに、竜蔵の胸が撃ち抜かれそうになるも。それはその鋼鉄の大胸筋が弾丸を防いでくれたお陰で、難を逃れた。

理性を失う一歩手前……非常に危なかった。

しかし、防いだとしても他に人員がいらないと言う事では受けざる負えないのが残り物の宿命。

故に竜蔵は、まだ見たことも無い他の面子に“俺はただの手伝いなんだぞ”という意思を込めながら。思いつきり仕方ないといったふう「はあ」と溜息を吐いた。

「分かりました、どっちにしろ暇だった訳ですし。アイツの入学祝のプレゼントを選ぶついでに行つて来ますよ」

瞬間、姫樹のもとと朗らかな微笑みを浮かべていた顔が、更に嬉しそうに花が開いた。

「本当に！ なら、お言葉に甘えてお願いしちゃうわね♪」

「ええ、どうぞ」

「場所は多目的ホールで、対象はやんちゃ盛りな新入生一名よ」

それを聴いた瞬間、竜蔵は眉を少しだけ意外そうに吊り上げた。

「へー入学式早々に問題起こす奴が出たんですか。でも、それにしては落ち着いてコッチまで歩いてきてましたよね？ 会場で暴れる奴がいるって言うのに」

やんちゃ盛りな新入生が対象ということで、おそらくそういった事だろうなと当たりを付けた竜蔵の読みは、どうやら正解だったようだ。

「うん、暴れていた子が私の親の友人の息子って話らしくて、先生方も手が着けられない状態だったし。私なんかじゃ血気盛んな男の子を取り押さえるなんて事出来ないから。潔く他の人を探してたってわけ」

「潔くって……後ろにいる人たちじゃ無理だったんですか？ 男も何人かいるみたいじゃないですか」

そう言って、竜蔵は姫樹の後ろに控えていた数名の生徒会メンバーを覗き見る。

すると、竜蔵に視線を向けられた生徒会メンバー達は、なにやら三つ編み眼鏡娘以外の全員が視線を反らし始めた。

竜蔵は心の中で初めて意気地なしという言葉を彼らに向ける事にした。

「うちの生徒会って、皆荒事には向かないタイプだから、仕方ないのよね」

「いや、少しは努力をしましょうよ……」

「うん♪ だから我が学園でも数少ない“執行部”の子を探してたのよ」

「俺、確か一応“手伝い”だけっていう話でしたよね？ それがないで……」

「“累積”よ、る・い・せ・き♪ 本来なら、アナタは既に停学とかいうレベルの範疇を超えて、退学になったって不思議じゃないくらいに問題を起こしているのだから、当然でしょ？」

意地悪に微笑み、竜蔵に理由を容赦なく突きつける姫樹の姿は。やはり上に立つもので、弱みなどいくらでも利用してやるという心意気が伺えるものであった。

「それに、そんなアナタを聖母の如く拾ってあげた恩人に、恩を倍にして返すなんて当たり前の事なのよ？ 返すチャンスを与えてい

るのだから、むしろ感謝して欲しいぐらいね♪」

このとき竜蔵は、目の前の人物とはそろそろ一年来付き合いに突入しそうではあったが。改めて彼女の微笑みの裏に隠れている黒い部分を垣間見た気がしたのであった。

流石に、自分の犯してきた過ちを引き合いというより盾に出されてしまっは。潔く逃げてきたという彼女達を責める訳には行かない。

ここは大人しく、無難に従った方が嫌な所を突付かれなくて済むと考えた竜蔵は、再び仕方ないというニュアンスを込めた溜息を盛大に吐き出しながら。

「分かりました、感謝しますよ……とりあえず、多目的ホールに行けば良いんですね？」

「ええ、きっと彼もそこに居座り続けていると思うから」

その姫樹の意味深な言葉に、竜蔵は「え、どうしてですか？」と思わず尋ねてしまった。

姫樹はそれに、楽しそうな微笑を浮かべ。

「だって、“桐嶋竜蔵を出せ”とか言ってたんですもの、きっとまだいると思うわ♪」

再三に渡っての溜息が、また盛大に竜蔵の口から吐き出された。

「それって結局、俺が行かなきゃダメだったって事じゃないですか

……」

「え？ どうして？ 他の子を使って、後ろからズドンってやれば

……」

「高校の生徒会長が言うことじゃないでしょうに、それは」

心底この人は腹黒いのだなと、竜蔵はまた改めて心に刻むのであった。

そして、もうこの人と話すのは本当に疲れると判断した竜蔵は。そのまま歩を入学式を行っていた多目的ホールへと、勝手に進め始める。

「あーじゃあ、俺もう行きますから。後で美夏に会ったら、先に帰

つててくれって伝えといってもらえませんか？」

「ええ、確りと伝えておくわ」

「頼みましたよ」

そう言っつて、竜蔵は生徒会のメンバー達とすれ違いながら、本当に面倒くさそうな足取りで桜並木の道を歩き始めた……そりゃもう、後頭部を左手でボリボリと搔いているぐらいにだ。

新しい環境、新しい友人

入学式後のクラスごとに始まる、最初の先生との顔合わせ。

二橋学園では通常とは違って、入学式で担当する教員を発表するのではなく。この入学式後のクラスごとの集まりの時に初めて行なわれるのだ。

ちなみに、特に理由は無い。

学園のクラスは基本、大学の様な段状になっていて、教卓からクラス全体が見渡せる様な構造になっている。

生徒はこのクラスの三人掛けの机を二人で使う事になっており、やはり新学期は窓際一番前の列から名前順に生徒達が並べられる。

そしてここは一年A組、桐嶋美夏きりしま みなつが在籍しているクラスで。美夏は運良く窓際最後列の一つ手前の席に座ることが出来ていた。

しかし、現在は肩に掛けるタイプの学生鞆の中身は空っぽのため、非常に手持ち無沙汰な気持ちに晒されていて。

また既に隣の男子との会話も無難に“退けた”後のために、余計な手持ち無沙汰感を味わっている最中なのであった。

左手で頬杖を付きながら、窓際の特権である外の様子を伺い見る……。

ここは校舎四階のため、窓の外の見晴らしは最高に良く。学園敷地内にある桜も、その外にある桜並木の風景もまとめて一望できた。学園の校舎の近くには、他にもパンフレットにも載っていた三面ガラス張りのデザインと屋上のテラスが売りの四階建て食堂棟や、地下には近代的なトレーニングルームもあるやたらデカイ体育館に、サッカーグラウンドとラグビーグラウンドが一面ずつ人工芝の上に白線で描かれたナイターも可能なグラウンドなど、普通の学校の施設とは一線を画した施設が点々としていた。

この学園は敷地は、どれだけ広いのだと疑問を投げかけたいぐら

いに充実した施設の数々。

またこの他にも、各部活動が部室として使用している部室棟や、校内合宿用に建てられた合宿棟なるものであるから驚きだ……更に言えば、この校舎自体デカイ。

これほどの施設……確かにこれなら、“才能の区画”と呼ばれる第一区から第三区の中で最も個性的で優秀な人材を集めた学園と呼ばれているのも頷けるというものだ。

ちなみに、プールは屋内にあり当然の様に温水も可能で“男女別”だ。

美夏にとって、ある意味ではこれが一番嬉しい事だったのかもしれない。

（だって、お兄ちゃんという至高の存在以外の“汚物共”に私の水着姿を見せるなんて。本当に鳥肌が立ちそうで嫌だったんだもん……）

その誰とも知れない胸中での呟きは当然誰にも聞き取れない。

すると、頬杖を付きながら外を眺めていた美夏の背中に、ツンツンといった細い指の感触が伝わってきた。

「うん？」

それに反応し、上を見上げる形で振り向く美夏……段状というのは、こういう時に面倒だ。

しかし、美夏を振り向かせた張本人は、そんな事は気にしてないようだ。

「何見てるの？ ぼくつと外なんか眺めちゃってさ？」

後ろの席に座っていたのは、長身でスレンダーな体型が特徴的な活発な女子、きのしたあい木下藍。

彼女はコバルトブルーの瞳や、赤みがかったボーイッシュな短髪から、どこか日本人離れした容姿をしているが、先ほど美夏が気になって聞いたところ、やはり日本人とアイルランド人のクウォーターだと言う事らしかった。

また、これも先ほど教室に入ってきたばかりの時に聞いたことだ

が。

彼女はバスケットの選手として、ここ二橋学園に特待生で入学したらしく。その腰の位置が高い足だったり、指の長い手だったり、何よりも彼女の才能を誇示していた。

「ふふ、だって桜が綺麗じゃない……日本人なら、こういうのを静かに眺みたい時だってあるのよ？」

「そんな感覚、あたしにだってあるよ。伊達に日本で育ってないし」本当に桜が綺麗というだけで嬉しそうな声音で語る美夏に、木下も楽しそうに微笑を浮かべる。

やはり入学式を終えたばかりかつ、新入生としての始まりを実感し始めたからだろうか？

教室中の空気が、どこか浮ついた調子にあるのを誰もが感じていた。

そりゃそうだ、新しい仲間、新しい環境……ワクワクする事など、今は吐き捨てるほどにあるのだから。

すると、二人が他愛の無い会話で交流を深めている、そんな時であつた——

ガラガラガラ——

教室の一番前にある鉄製のドアが開けられる音が、不思議と浮ついた空気で騒がしい教室中に響いた。

その音に、誰もが視線と耳を傾ける……。

「お、全員席に着いてるな」

陽気な声と共に、カツカツとヒールで教室を歩く音が小気味良く鳴る。

教室中の視線を一心に集めながら、教卓へと歩を進めるのは、フォーマルなスーツに身を包んだ、背の高い女性。

吊り目気味なアーモンド形のハッキリとした瞳に、ほんのりと塗られた口紅が魅惑的なぷっくりとした柔らかな唇。少々癖毛が

強い長髪に、八頭身を体現した高い位置の腰や長い足。そしてそのピシリと伸ばされた背筋の所為で、更なる存在を強調している、ウエストとかなり反比例をした大きな胸。

また、黒のフォーマルなスーツの下に着ている白いワイシャツは、胸元がかなり開けられており、健全な男子学生の理性をズタボロに引き裂く程の谷間^{ゆめ}が、姿を晒していた……首元に着けられた小さなハートのネックレスが、これまた魅力的だ。

そんな完璧なまでのスタイルを持った女性が、段状に広がっているクラスメイト達を前に教卓に立った。

「はい！　まずは入学おめでとさん。色々新しい仲間と話したい気持ちはあるだろうけど、今はこちらに注目してくれ」

教卓に両手を突きながら、前へと気持ちを押し出す形でクラスメイト達に姉御肌全開の声音で話す女性。

「私はお前達にとつて、この学園で最初の担任となる大熊月美^{おおくまつきみ}って言うんだ。これから何も無ければ一年間、よろしくお願いな！」

そう言つて、軽く頭だけを下げる大熊月美に、クラス中の生徒が一斉に一礼を返した。

「仰々しいのは苦手だから、お前達も緊張しないでいいぞ？　とにかく、今日は顔合わせ以外にやる事は特に無い。やるとしたら、学級委員とか決めたいところだけど、それもメンドイから後回しだ」

勝気でスタイルの良い女性でありながら、恰幅の良い雰囲気を出す大熊の姿勢に、生徒達もどこか楽しそうな先生だなという事を理解していた。

「だから今日はプリントだけ配つて、やる事は明日やる事にする！　誰か、プリント配るの手伝ってくれる奴はいないか？」

瞬間、クラスの男子生徒の大半が、まだ新入生というひよつこの分際では考えられないキレとスピードで、我こそはと手を挙げ始めた。

「お、良いねーやる気あるじゃん。まあ、何人か下心丸出しの奴もいるみたいだけどさ」

ニヤニヤと意地悪に笑いながら、挙手をした男子生徒達を見渡す大熊。

すると、何人かの真面目そうな雰囲気を持つ男子生徒達が、ゆっくりと挙げていた手を下ろしていった。

「言っとくけど、こう見えても私は確りと相手を選んで付き合うタイプだから、まだお前達じゃ十年早いよ♪ それに高校生なら同年代と付き合ったほうが楽しいしね、そっちに努力の趣を置きな」

やはり教師というぐらいの年齢にもなれば、自分の容姿がどれぐらいのものか客観的に理解できているのか、その口調は自信に満ちたものであった。

「ただ、さっきも言ったけどやる気は買ってやる。大体下心程度で恥ずかしがる事なんて無いんだ、むしろそれを原動力にして動かないと若者らしくないしな。じゃあ、そこの一番前の男子、プリント配るの手伝ってくれ」

そう言って、最前列ど真ん中の席に座っていた坊主頭の男子に指示を出す。

「はい！」

勢いのある返事とともに、指示を出された男子生徒が立ち上がった。

「お、良い返事じゃないか。お前は何部だ？」

「野球部です」

「ああ通りで……金本先生なら納得だわ」

大熊は他愛の無い会話を指示を出した生徒としながらも、持っていたプリントを三つに分けた。

「じゃあ、お前はこれを配ってくれ」

「はい！」

再び勢いのある返事と共に、差し出された一つのプリントの束を受け取る男子生徒。

どうやら大熊は二つの束を自分で配るようだ。

まあ、入学初日の生徒をいつまでも前に出しておくのは可哀想か

もしれないという配慮からだろう。

そして、二人は分けたプリントを、それぞれクラスメイト全員に配り終えた。

ここからは、ただこれからの約一週間を事務的に伝えるだけだったので、閑話休題させていただく。



配布されたプリントを眺めつつ、高校初めてのHRを終えた美夏は。とりあえずこれから何をしようか考えていた。

先ほど、教卓でこれからの予定などを話す大熊の眼を盗んで送った、兄へのメールはまだ返事が来ていないし。学園にいる筈の兄を置いて、先に帰宅するというのもありえない。

どうせなら、入学祝いとして昼食だとか買い物だとか、一緒に外を歩いて回りたい。

しかし、返事が返ってこない事には動きようが無いので、美夏はまた手持ち無沙汰な感じを味わっていた。

他のクラスメイト達は、皆これから家族と食事だったり一緒に帰宅だったり……または新しく出来た友人と遊びに行くだったりと、それなりの賑わいを見せている。

そんな中でも、やはり美夏に声を掛ける男子生徒はいたし、新生代表として挨拶をした事に興味を持ってくれた同性の者達もいた。だが男子など兄以外汚物としか考えていないこの妹に、薔薇色の高校生活を夢見た連中に靡くなどありえる筈も無く。そのこと如くが絶妙な当たり障りの無い断り方で撃沈していた……もったも、撃沈したと感じている男子などいなかった。それほど上手く断ったということだ。

また同性にも同じで「これから兄と予定があるから……」と、本当に申し訳なさそうに断っていた……のだが、やはり格闘家といえども有名人を兄に持つという事には変わりなく、ミーハーな性質を

持つ彼女達から質問攻めに合うという出来事を味わった。

しかし、ここでも彼女の驚異的な能力が発揮され。

いかに兄であるあの“異性”が素晴らしいのか？

いかに、その兄に相応しい異性は自分以外には存在しないのか？
などの事を語ることを、唇を噛み千切りたいほどに我慢をしながら、いわゆる印象操作を行なった。

簡単に言ってしまうえば、興味を持った彼女達から、兄という存在をどれだけ薄れさせるか、どれだけ幻滅させるのかという事をしたのだ。

だが、恋に恋するなどではなく、兄との恋愛を生涯をかけて熱望している彼女に。愛する兄を蔑む事など酷な事であり、結果中途半端な形に落ち着いてしまったことは彼女にとって誤算であった。

実際、半々の結果に持ち込んだこと自体、彼女の思いにとっては驚異的な数字だったのだが……。

まあ、その話題に上がった当の本人がイケメンというよりも男前に近い、若い女子高生には中々理解され辛い顔立ちをしていた所為もある事にはあったのも要因といえる。

「さつきは大変だったねー桐嶋さん？」

「まあ、慣れてるからね。それ程でも無かったよ」

人当たりの良い陽気な声で、美夏に労いの言葉を送る木下。

今はHRも終わり、各自自由に下校が許されているため、木下は美夏の直ぐ横で机の上に腰を乗せて座っている。

しかし、それにしても背の高い娘だ……と見上げながらに思った美夏ではあったが、決して口にするのではなく、話を続けた。

「やっぱり中学でも有名だったの？ 桐嶋さんのお兄さんって」

「そうだね、TVに出た去年ぐらいから急になって感じかな？ もともと、雑誌とかでも取り上げられてたけど、やっぱりそこが一番大きかった気がする」

「へー、あたしも結構格闘技とか好きだから見るけど、お兄さんって本当に強いし良い体してるよね。初めて見たときは一つ上だって

全く気付かなかったぐらいだし」

「本人はそれを気にしてるみたいで、結構『今日年上の人に“年上でしょ？”』って言われた』とか言ってるよ」

あれ……なんだか、この木下という同年代の娘と話していると、打算なしに自然と会話が出来る気がする。

もともと中学でも、こんな雰囲気娘は沢山いて、結構仲良くやってたけど。やっぱり、サバサバとした性格の人と話すのは気が楽だ。

先の通り、美夏と言う新女子高生は、自身の兄に悪い虫を寄せ付けないために様々な小細工を弄してきた。

しかし、これは例えば美夏を通して兄と接触を試みようとする者や、同じく美夏という男が寄り付いてきそうな甘い蜜に集ってお零れを貰おうとする蛆虫以下の同性だった場合にしか行使されず。木下の様な、打算なしでこちらと仲良くなろうとしている者には機能しないのだ。

また美夏は、これまでの経験からそういった輩の見分け方を心得ているので、まず間違えるということはない。

故にこの時、不思議な高揚感を感じられる木下に対して、美夏は純粋に友人になりたいと考えた……が、それよりも先に木下の方が同じ事を考えていたようだ。

「外見の割りに面白い人なんだね。てか、桐嶋さんも何だかんだで面白い人だよね♪」

「え、なんで？」

「だって入学式終わったばかりだっていうのに、いきなり校門前にいたお兄さんに抱きつきに行くんだもん。あの時は流石にビックリしたね。桐嶋さんって、結構ブラコン入ってるって言われるでしょ？」

この面白がって問いかけてきた質問に、美夏は即答で『ブラコンじゃなくて愛しているのよ!!』とかなんとか答えそうになってしまったが、それはなんとか押し留めることが出来たようだ。

「うーん、確かに言われたりはするけど、私としては普通に接して

るだけなんだけどな……」

「あれは正直普通じゃないって……まあ、でも兄妹仲が良いって悪いことじゃないしね。桐嶋さんって他に兄弟いたりするの？」

「うん、小学生の妹が一人いるよ。私よりも、妹の方がお兄ちゃんにベツタリって感じかな？」

「へーそうなんだ。桐嶋さんの妹って事は、相当可愛いんでしょ」

「そうだね、今のところもう既に40人の男の子から告白されてるんじゃないかな？」

「40人!？」

なんだその魔性の女は！ 半端な数じゃないぞ小学生!？」

木下は、そのあまりに飛び抜けた数字に素で驚きの声を漏らしてしまう。

「え、でもそれってホントなの？ ただ妹さんが言ってるってだけじゃないの？」

「うちの妹は、簡単にそういう事はバラさないからね、すごい口が堅いし」

「じゃあ、なんで40人もいるって分かったの？」

「普通に机の中から出てきたんだよ、40人分のラブレターが」

その事実には、更なる驚きの色に染まる木下の整った顔。

「なんでそんなに机の中に入れてたの？」

「なんだか、折角気持ちを伝えるため一生懸命に書かれたラブレターを捨てるのは悪いから、処分に困ってたんだって。それでドンドン溜まっちゃって、終いには勉強机の一つの引き出しを占領するぐらいになっちゃったらしいよ」

「はー……あたしならすぐに捨てちゃうから、あまり理解は出来ないけど。なるほどね、何となく桐嶋さんの妹さんがモテる理由が分かった気がする」

よく言えば純粋な良い子で、悪く言えばどこか抜けた子……。

まだ見ぬ相手の妹ではあったが、木下はその娘の事を“きつと将来は末恐ろしい女になるね”と勝手に本人が聞いたらちよっと困っ

てしまいそうな評価を下していた。

「まあ心配りも出来るし家事も出来るし勉強も運動だって人より出来ちゃう娘だからね。我が妹ながら誇らしい反面、もっと色んな面で楽に構えて欲しいって感じかな」

「新人生代表を務める桐嶋さんが、そこまで言うなら凄い娘なんだね。でもそうになると、お兄さんが色々黙ってないんじゃない？ほら、告白してきた子に対して脅迫めいたことするとかさ♪ なんだかあの人って、子育てとかしたら過保護っぽいイメージあるんだよね」

子育てというワードを、美夏は一瞬の内に脳内で“子作り”に変換させ妄想を膨らませた後。その様子を全く外見に出さず、直ぐに木下の方へと意識を向け直した。

まっこと、神業がかった思考の切り替えの持ち主である。

「ああ、それは確かにあるかも♪ お兄ちゃんって、この学園の近くにある道場で支部長をやってるんだけど。そこに門下生としている私の妹と同じ学校に通っている子に対して、遠回しに『妹と付き合いたいのなら、俺を倒さないとダメ』みたいな事を言ったときがあってね……」

美夏は当時のことを楽しそうに語りだした……。

内容自体、シスコンを否定はしているが否定しきれなかった兄のエピソードだったのだが。

普段TVでしか美夏の兄を見たときの無かった木下にとっては、どこか新鮮というかイメージ通りの人というか……そんな有名人の新たな一面を発見した時の様な、少し嬉しい気分を味わえたのであった。

それから数十分後、他愛の無い会話をした二人は、いつの間にかお互いに下の名前で呼び合うような関係になっていた。

多分、二人はもともとそりが合う者同士だったのだろう。

出なければ、こんなに早く意気投合するということのも難しいというものだ。

だが、そんな新しい友人と会話をするという楽しい時間も、そろそろ終わりにしなくてはならないようであった。

「あ、もう13時回ってる……」

「え？ もうそんなに時間経ってたんだ。気付かなかったよ」

「私もだよ。じゃあ、今日はそろそろ帰ろうか？ 私、この後、お兄ちゃんと会わなきゃいけないから」

「そうだね。私も家の連中とご飯食べに行く約束してたし、そうしようか」

二人はそう言って同意し合うと、互いに座っていた場所から立ち上がった。

やはり、高校一年の女子にしては背の高い美夏にとっても、木下藍という女子はデカク見える……しかし、スレンダーな体型のお陰で、特に威圧感などは感じられない。

むしろ、ウエストが55以下の美夏をもってしても、彼女のしなやかでアスリートの様な体型は綺麗だと思うし、とても魅力的に感じる。

おそらくこの娘も、色々な男子に好意を抱かれているのであろう。多分、それに気付いていないかもしれないが……。

先ほど配布されたプリントが入れた、殆ど空っぽの鞆を肩に掛けると。美夏と藍は共に教室から出る。

お互い御揃いの制服を着た、タイプは違えど見栄えのする者同士なので、ただ並んで歩いているだけでとても絵になる光景を作り出していた。

片や女性らしい膨らみや可愛らしさを持った、凹凸がハッキリとした体型のタイプに。片やボーイッシュな雰囲気を出しながらも、モデルと見間違えても可笑しくは無いスレンダーな体型をしたタイプ。

これだけでも、思春期の男児ならば小一時間程議論が行なえるというものだ。

二人は四階の階段を急ぐことも無く下りて行き、校舎の一年生専

用の出入り口である第三出入り口から、履いているものをローファ
ーに履き替えてから外へと出て行く。

ガラス張りの両開きのドアから外へと出ると、そこにはやはり地
面であるアスファルトとは対照的な桜の柔らかな色が出迎えてくれ
ていた。

また第三出入り口の近くには一年生専用の地下駐輪場があるのだ
が、美夏と藍には特に関係の無い施設だったので、二人は現代的な
エレベーターと地下駐輪場への坂道などは無視して学園の校門へと
足を進めていく。

春の風が、二人の髪やスカートを揺らしていく。

美夏は揺れる髪が顔の前に来るのが嫌なのか、顔の横の髪を片手
でちよつとだけ抑えながら歩いていく……その姿はどこかお嬢様と
いった雰囲気醸し出していた。

隣を歩く藍は肩に掛けるタイプの鞆を——こちらの方が楽な
のか——片手で肩に担ぐようにして持ち、春風に晒される赤み
がかったボーイッシュなショートヘアなどは抑えるのも面倒なのか、
片目を瞑るだけで対処していた。

「なんだか午前中より風が強いね」

「こういう春風って気持ちは良いんだけど、たまに目に自分の髪と
か飛んできたゴミとかが入ってくるから鬱陶しいんだよね」

先程からそよ風のように吹くときもあれば、突然ブワッと目を細め
たくなる風も吹いている。

だがそんな事よりも、二人は先程一回だけ通ってきた二橋学園の
様々な施設が見られる広い道を、あっちへこっちへと好奇心の眼差
しを左右させながら歩いていた。

また、敷地内にも桜の木が所々にあるため、非常に視覚的にも喜
の感情を高めさせてくれるものであった。

そして、学園の校門へと辿り着いた二人の目に、少々信じ難い光
景が飛び込んでくる。

「ねえ、あれって……」

「うん、お兄ちゃんなんだろうけど……何やってるんだろ？」

校門の向こう側には、さっき入学式後に歩いた赤い煉瓦が敷き詰められた道の桜並木がある……だが、二人はその桜並木から“一人の男を背負って歩いてくる”、上をブレザーではなくワイシャツ一枚となった桐嶋竜蔵に視線を向けていた。

岩石の様な筋張った太腕と、その腕を後ろに回しているために広がっている大胸筋が非常に力強そうで、後ろに背負っている男を絶対に落さないだろうという安定感を回りに与えていた。

そしてやはり両脇に抱えている、背負っている男の足に挟まれた腹回りは、理想的な逆三角形を描くだけではなく、ワイシャツの上からだというのに六つの筋肉の塊の存在を強調させていた。

また竜蔵のブレザーは、背負っている男の肩に掛けられている。

「ごめんね、ちよつと行つて来る！」

「あ、待つてよ美夏！ 私も行くから！」

なんだか訳の分からない光景を眺めていた美夏と藍は、とりあえず既に校門を跨いだ竜蔵の下へと向かった。

「何してるの？ お兄ちゃん？」

「うん？ おく美夏か、待たせちゃったな」

状況がイマイチ理解できないため、案外普通に尋ねた美夏に、竜蔵がちよつと機嫌が良さそうな口調で答えた。

美夏が竜蔵の前に立つと、遅れて藍も駆け寄ってくる。

「うわ！ その人、顔怪我してるじゃないですか！」

駆け寄ってきた藍が開口一番、竜蔵のゴツゴツとした僧帽筋やら広背筋やらの背中に背負われた男を見て驚きの声を挙げる。

最初に駆け寄ってきた美夏はどうやら、兄以外の異性を視界に入れるのも嫌がった所為で、今気付いた様であった。

「ああ、ちよつとコイツが暴れててね。言うこと聞かないから手っ取り早く済ませたら、こんななんだった」

「うわ……モロ鼻血出てるじゃないですか」

「まあ、もう止まって乾いちゃってるけどね。ところで、君は？」

「はい？」

金で染められた長髪のせいではなかなか確認し辛いですが、確かに竜蔵の言う通り、背負っている男の鼻血は止まっている。まあ、唇の方も数箇所の切り傷があるし、気を失ってもいたが。

だがそんな男を背負っていても普通に世間話でもしようとする雰

囲気の竜蔵に、一瞬藍は呆気にとられた顔をしたが。

「あ、木下藍きのしたあいです」

「背が高いね。何部に入るの？」

「一応、女バスに特待で……」

「へへ凄いじゃん！ 肌の色とか髪の色とか、もしかしてハーフ？」

「あ、いえ、日本とアイルランドのクウォーターです」

アイルランドと聴いた瞬間、一瞬竜蔵は某有名プロレス団体に所属している白人の選手を思い浮かべたが、おそらく言っても伝わらないと思ったので自重した。

すると、二人の初対面の会話に美夏がどこか不機嫌な表情を割り込んできた。

「ところでさあ、後ろの人、早く保健室に運ばなくていいの？」

「ああそうだった、忘れてたわ」

「もう、確りしてよねお兄ちゃん」

「はは。まあ取り合えず、俺はコイツを運ばないといけないから、もう少しだけ待っててくれない？」

「待ってるのは良いけど、なるべく早くしてね？ もうお腹が空いて仕方が無いんだから」

「分かったよ、それじゃあ、また後でな？」

そう言って、軽い笑みを浮かべながら美夏と藍を過ぎ去っていこうとする竜蔵に。

藍が思い出したかのように口を開いた。

「そういえばお兄さん！ 確か、携帯で保健室の方に連絡すれば、直接専用の車とか出してくれるんじゃない？」

藍の言った事は、この広い二橋学園だけに限らず、学園都市の全

区画で取られている制度であり。

学園都市内に存在する全ての学校・学園には、生徒達の緊急を要する怪我や病気などが起こってしまった際に、すぐに保健室や病院へと運ぶための専用の足……つまり輸送車を用意する事を義務付けられているため、電話一本入れれば現場に走らせてきてくれるという非常に便利な制度がある。

だが実際には、緊急を要する境目が分からないために、大抵は保健室などではなく近くの大学病院などに搬送される事が多い。

藍が竜蔵に提案したのは、わざわざ広い敷地内を男一人背負って歩くのではなく、この専用の足を使っ**て**はどうかという事であったのだが。

「いや、一応これって“勧誘”も兼ねてるから、使う気はないね」「“勧誘”……ですか？」

その言葉に、藍は首を傾げざる負えない。

藍の仕草を見て、竜蔵は軽く微笑みながら「結構根性ある奴だったからさ、ラグビー部に引っ張ろうと思って」と短く説明をした。

竜蔵が所属する二橋学園ラグビー部とは。

学園都市内でも有数の強豪チームとして知られていて、毎年シーズンになると必ず県内の大会で決勝・準決勝には上がってくるチームなのだ。ちなみに竜蔵は、このチームのFLというポジションでレギュラーを張っている……空手の実力でも格闘技界最高峰の団体に所属し、ラグビーの強豪高でもレギュラーを張るとは、恐るべき身体能力と才能の持ち主である。

しかしここで、普通の思考の持ち主なら疑問に思うことがあるかもしれない。

そんな強豪高の部活に、どうみても素行の悪そうな新生入生を無理やり入れるのは大丈夫なのかと？

だが……。

「なるほど、そういう事ですか」

もともと活発で男勝りな性格をしていた藍は、この短い説明だけ

で何かに納得した様であった。

しかし後ろでは美夏が（早くお兄ちゃん来ないかな〜♪）と、眼中にない異性など気にする価値もないとでも言うかのように、次に備えていた。

「でも、根性があるって言ってましたけど……お兄さん、その人と違って全く怪我とかしてないですよね？」

納得はした事にはしたが、やはり何か引っかかったのか、藍が素朴な疑問をぶつける。

すると竜蔵が、軽く「ぷっ」と噴出した後、口を開いた。

「いやいや、一応俺もプロだからね？ 素人に怪我なんてしてちゃ、面子が保てないから」

「でも、根性があるって……」

さも当然の様に言う竜蔵に、少々驚く藍。

だが疑問が解けたのではないので、再び尋ねると。

「それはただ、コイツが手加減したとはいえ膝まともに蹴り喰らって、ちよつとの間だけ立とうとしてからだよ」

「は、はあ……」

軽い調子で言う竜蔵に、若干引き気味の藍。

そりゃそうだ……プロの格闘家が、素人の顔面に膝蹴りを入れたというのだから。

おそらく、背負っている男の背が竜蔵よりも高いため、首相撲からの膝蹴りだとは推測ができるが。それにしたって、エグイ技で仕留めたものだど、藍は胸中で考えていた。

「じゃあ、美夏待たせる訳にいかないし、俺は行くよ」

「はい、お気を付けて？」

「はは、じゃあね。美夏をよろしく頼むよ？」

そう言って、ようやく竜蔵は校舎の方へと歩いていった。

美夏をよろしく頼む……つまり、状況的に入学式で妹が既に友人を作ったのだと推理したのであろう。

校舎の方へと向かっていく竜蔵を見送りながら、藍は後ろにいる

美夏へと振り返った。

「なんだか初めて話したけど、豪快？ いや、大雑把な人なんだね、美夏のお兄さんって」

藍の素直な感想に、兄が戻ってくるのを待つ気持ちに切り替えていた美夏は。

「え？ まあ確かに大雑把と言えば大雑把だけど。確りしてるところもあるんだよ？」

自身の兄の話をするだけで嬉しいのか？

表情にホクホクと暖かい微笑みを浮かべる美夏。

これを見て、藍は胸中で（ああ、やっぱりこの娘は相当なブラコンなんだな）と確信するのであった。

新しい環境、新しい友人（後書き）

一応、改訂前の時に書いていたキャラクター達のイメージ絵です。
ですが主人公である美夏は、また書き直そうと考えているため、
今回は載せていません。

※いらないと思う方は、各々で好きにイメージしてください。

桐嶋竜蔵“美夏の兄”

> i 3 0 0 2 6 — 2 3 7 9 <

木下藍“高校で出来た友人”

> i 2 8 7 6 4 — 2 3 7 9 <

基本コピー用紙にシャープペンで書くド素人なので、この程度のレベルしか書けません。今後とも自分なりに納得の出来た絵が描けたら、勝手に載せたいと思いますので、あしからず……。

『伊藤の空間』（前書き）

今回以降の更新は、私事の事情によりかなり遅れます。

よって、この話しは急いで仕上げたために小さなミスがそこかしこにあるかもしれません。

いつかちゃんと直そうと思います。

『伊藤の空間』

二橋学園から出ている学生バスを使って、本来のバス停とは違う目的地へと向かう美夏と竜蔵の二人。

あの後、背負っていた男を保健室に預けてきた竜蔵が妙に満足気な表情で戻ってきたときには、既に木下藍の姿は見えず、それを美夏に尋ねたところ。

「藍も、この後に予定があるみたいだったから、先に帰ったよ」

との事で、ようやく二人も学園から出たという訳であった。

バスの車内は、既に同じ学生の姿は見えず、美夏と竜蔵の貸しきり状態となっている。

学園にはまだ、生徒会などの生徒達が残っているが、どうやら二人はタイミングに恵まれたらしい。

故に、人がいない寂しい車内にある後部の二人掛けのシートだけを、美夏と竜蔵で埋めていた。

竜蔵の肩幅が広い所為で、先程からバスに揺られる度に、美夏の肩に兄の鍛え上げられた制服越しの三角筋が当たってくる……しかし、美夏には嫌そうな表情など一つも無い。

むしろ先程からニヤニヤと嬉しそうに微笑んでいるだけだ。

竜蔵自身、妹の入学式に出席できなかったことを後悔しているの
で、なにやら嬉しそうな彼女を見て悪い気はしない。ただ、なんで嬉しそうにしているのかが分からないのが問題なだけだ。

だが、そんな事は美夏自身理解している……兄にそんな甲斐性があれば、もっと浮ついた話がいくつあっても可笑しくは無いからだ。
「そういえば、新入生代表の挨拶はどうだったんだ？ 上手く出来たのか？」

「上手くもなにも、ただ昨日書いた挨拶の文章を暗記すればいいだけだったから、特に失敗したとかは無いけど？」

「暗記ね……俺じゃ無理だな。前に出て体動かすならともかく、何か言うだとか宣言するだとかは緊張しちゃうからな」

何と言う脳筋……という考えなど、兄を崇拜していると言っても過言ではない美夏には一切浮かぶ事は無い。

むしろ、そんな事を言う兄にたいして心の中で（お兄ちゃんが弱い部分を曝け出すなんて、ギャップ萌え！？ これはギャップ萌えなの？）などと興奮しているぐらいなのだから。

ちなみに、この興奮も外に出すことは無い……いくら愛しているといっても、相手に見せていいレベルとダメなレベルがあるという事を、美夏は一応弁えているからだ。

窓際に座っている美夏の横で、外の風景が流れるように過ぎ去っていく。

その間も、二人の他愛の無い会話は続き。

いつもとは違った目的地に到着したときに感じた時間の経過は、それはもう短いと感じるものであった。

『次は～二橋駅前～二橋駅前で御座います』

バス内のアナウンスが、美夏と竜蔵の目的地であった場所の名前を流し始め。

これに反応した美夏が手馴れた手つきで“降りる”のボタンを押し、隣に座っている竜蔵に振り返った。

「ところで、行く場所とか決めてるの？」

ウキウキとした表情を隠そうともせず、竜蔵を上目遣いで仰ぎ見る美夏。

我が妹ながら、それを身内ではなく異性に向けていれば何人の馬鹿が引つかかるのかと考えた竜蔵であったが。まあ、そんな事をしなくても既に選り取りみどりの状況なんだろうと、改めて妹の優れた容姿に感心を覚えた。

しかし、ここで困ったことが発生する……。

「いや、特には決めてない」

「えゝ！？ 自分から埋め合わせするって言ったのにつ！？」

「え、俺が考えなきゃいけなかったのか？」

「当たり前でしょ？ もう」

実はこの兄、入学祝をしようと言ったくせに、ノープランで街に繰り出そうとしていたのだ。

それに、頬を膨らませながら抗議の意思を示す妹。

確かに可愛らしい仕草ではあったが美夏の場合、それをするには少し大人っぽい雰囲気があり過ぎていたために、どこか滑稽に見える……まあ、グツと来るものが有るのには変わりはないが。

だが向けられている対象は身内である兄なために、全く持って反応を示さない。

というより、ちょっと困った表情をしていた。

「あゝ……いや、今日はお前が行きたい所とかに行こうと思ってから」

「言い訳はいいよ。だけど、今度からは自分で誘ったんなら自分で行く場所を決めときなよ？」

「ああ、分かったよ」

竜蔵が美夏の指摘に不承不承と頷くと、どうやら丁度バスが目的地へと到着したようだ。

エアブレイクの音と共にバスはバス停の直ぐ横に止まり、入り口と出口の全ての扉を開放した。

「さて、行くぞ美夏」

「うん♪ でも、ちゃんと今言ったことは覚えててよね？」

「はいはい」

もともと手荷物など持っていなかった制服姿の竜蔵は、美夏の荷物を代わりに持ちながら席を立ち、バスを降りていく。美夏も、スカートに皺が出来ないように座っていた状態から立ち上がり、バスのステップを軽やかな足取りで降りていった。

駅前のバス停という事で、そのロータリーに並んで立つ二人の

前に。二橋駅と大きな看板に書かれた、それなりに大きな現代風の駅が佇んでいた。

その駅には、これから利用しようという人々が行き交い、周りには美容院やら飲食店、携帯ショップなどといった様々な店が所狭しと構えており、非常に賑わった雰囲気醸し出している。

「で、とりあえず、まずは飯だろ？」

「そうだね、流石にお腹空いちゃってるし」

「じゃあ、この辺だとどこにしようかな……」

学園都市の街並みというのは、それほど普通の街とは変わるところは無い。

変わるところといえば、その行き交う人々の殆どが学生というだけで、背の高いビルやゲームセンター、家電量販店など見つけようと思えばいくらでも普通の街と同じ箇所を見つけられる。

だが、これらの店舗や会社を経営しているのは確かに企業の大人たちなのだが、その従業員の殆どは大学生やら学生達の親やら、はたまた学園都市が外から雇ってきた大人たちだったりと少々特殊な人選をしている。

まあ、この話はここまでにして、今は二人の方へとスポットライトを戻すことにしよう。

竜蔵は二橋駅付近で、とりあえず昼食を取れるようなところを記憶の中から掘り出していく……。

しかし出てくるのは牛丼屋だったりラーメン屋だったり、男が遊びがてらに軽く済ませるような所ばかり……流石に、妹の入学祝と銘打ったこの状況で、そんな所をチョイスするへマなど竜蔵はしない。

故に悩む……そして後悔する。

（俺って、本当に洒落っ気の無い遊びをしてたんだな……）

普段空手仲間だったたりラグビー部の連中とだったらと、男臭い集まりでしか遊んでこなかった竜蔵にとって、これは仕方の無い事であったが。手痛い状況に陥っているのもまた事実。

ニコやかに兄のチョイスを待つ妹の横で、眉間に皺を寄せながら唸って悩む竜蔵……。

傍から見れば、厳つい肉体をした男が眉間に指を当てながら渋い顔をしているという、どうみても怒っているような空気を出していたので。周りを行き交う者達は美夏の優美な姿に見惚れた後、隣の兄の姿を見てすぐさま視線を反らすという条件反射を起こしていた。

すると、竜蔵の頭に一つの店の風景が浮かんだ……。

「そういやあ、あの店ってまだ有ったっけかな？」

「うん？ あのお店って？」

ポツリと呟いた竜蔵の言葉に、美夏がまた再び上目遣いで覗き込むようにして視線を向ける。

あざとい、なんてあざといんだ……と思うかもしれないが、兄に對してだけは、美夏は打算抜きで攻めている。まあ、それもそれで問題ではあるが。

「いや、中学の時に“鬼姫”って奴がいただろ？」

その問いかけに、美夏の声音がワントーン下がり、表情に至ってはジト目で竜蔵の事を見る様になっていた。

「いたね、そんな人も」

「そいつと一緒に遊びに行った時に、教えてもらった場所があるんだわ。そこならお前も満足できると思う」

「へー、一緒に遊びに行ったんだ（あのゴリラ女と）」

「ああ、そのときはアイツもやっぱ女子だったんだなって考えを改めたな、流石に」

当事を思い出したのか、懐かしむように微笑みながら美夏に語る竜蔵であったが。

そろそろ美夏のテンションがダダ下がりなのに気付くべきだろう……まあ、身内という事で気にしてないという事もあるにはあるのだが。

「とりあえず、さっさと行くか。俺も腹減ってるし」

「そうだね、そうしよう」

二人は各々違ったテンションの具合で、バス停がある駅前ロータリーから歩を進めた。



二人が向かったのは、駅周辺の大通りをちよつと進んだところにある横道に入った場所だ。

そこにあったのは、第一区に学校があったり家があったりする生徒達が良く遊びに来る。ちよつとしたガーデニングや、それに合わせた赤茶色の地面に、ウッドデッキなどでテラスを構えているカフェだったり立ち並ぶ、少しお洒落な繁華街であった。

学園都市では車よりも交通手段がバスや電車、はたまた自転車が主流な訳で。こういった駅周辺の繁華街といった地域には、全く持つて通行人達の邪魔になる車やらなんやらの進入は無い。あるとすれば、深夜や早朝に来る業者のトラックぐらいのものか。

故に駅に近い繁華街を行き交う人々には、そういった突然通路を塞がれるといった心配も無いため。普通の繁華街を歩くときよりも、どこか安心した様子が見られる様な気がした。

まあ、あくまで見られる様な気がしただけだ……本当は、別段学園都市外で見られるものと変わりはないと言えるかもしれない。だがまあ、そういった無用な時間を喰うといった心配が無いのは事実なのだ。

行き交う人々は殆ど学生……たまに社会人の様にスーツを着た人や、明らかに十代二十代ではない年齢の方々も見事出来るが。そういった人たちは、大抵近くのお店やオフィスから昼を求めて彷徨っている人達だと、ここでは相場が決まっている。

そんな大半が学生だらけの繁華街の道を、美夏と竜蔵は肩を並べあつて歩く。

「なんだか、皆こっちを見てるね♪ 私達を恋人同士だと思ってるのかな？」

今にも油断をしたら思いっきり腕を組んでくるぐらいに、こちらの様子を伺いながら笑顔を向けてくる美夏に。竜蔵は少々うんざりとした表情をしながら。

「勘弁してくれよ……ただでさえ、部内でシスコンシスコン言われてんだからさ。それと、腕は組まないからな？ お前も、もう高校生だろ」

もし、こんな学生だらけといっても、更にその大半がカップルで構成されている空間で知っている奴らに見つかりでもしたら……桐嶋家の家族構成を知る者たちにとって、これほど弄り甲斐のあるネタは無いだろう。

ましてや本日付で、同じ高校に入学したのだ。

見つかってしまった時のリスクは想像だけに出来ない。

「ぶっ！ 別に見られたって良いじゃん！ 兄妹同士なんだからさ！ 大体、年齢なんか関係ないじゃん！」

「お前は良いかも知れないけど、俺はやなの。分かってくれ、頼むから」

そう言いながら、右腕に絡もうとしてきた美夏のオデコを反対の左手で押さえる竜蔵。

視線は正面を向いたままで、もはや手馴れたように片手間でやるその光景は。これが二人が外と一緒に歩くときの常識なのだと教えてくれていた。

だが、周りにいる者達——主に男性陣——は納得がいかないようだ。

『あの野郎、あんなに可愛い子連れてるのに腕も組ませねえなんて……』

『見せびらかしてるんだろ？ 気分わりい』

『あれ？ あれってもしかして、桐嶋竜蔵じゃね？』

といった具合に、嫉妬だったりという様々な感情が男性陣の中では渦巻いていた。

しかし、ここにいるのは大半がカップルということを前記した筈

だ。

故に、美夏という十人いたら変な趣味の者がいない限り十人が美少女と答える女性に視線を奪われていた彼氏に、彼女による何かしらの制裁が其処かしこで行なわれていたのは言うまでも無い。

お昼時の時間も過ぎ、店からまた繁華街を回ろうとする若者達が出てきた事によって雑多とし始めた道を、いつも通リな感じで歩いていく二人……。

途中、美夏の嗅覚を刺激する、とても美味しそうなコーヒーの匂いがするオープンテラスなカフェを見つけたりしたが。竜蔵が「コーヒーとかカフェオレとかじゃなくて、飯食いに行くんだろ？」と言ったために、美夏は渋々そのカフェを諦めるのであった……いつか、あの店には絶対に入ってやる。

しかし、いつ昼食に辿り着けるのか？

入学式が終わり、ちよつと新しく出来た友人と他愛の無い会話で時間を潰してしまい、お昼時を逃してしまつたまでは良い、そんな事は良くある事で済む……だが、あれから既に一時間も経つたというのに、まだお昼にありつけないとはどういった事なのか？

流石の美夏も、さっきから何やら周りをキョロキョロとしている兄にビシツと言ってやらねばと思つたようで。

「お兄ちゃん？ 一体いつになつたらお店に着くの？ もしかして迷つたとかじゃないよね？」

疑うような視線で、右隣を歩く竜蔵を見る。

が、どうにも反応が見られない……。

これは、もう一回言わねばダメかと考えたとき……。

「あ、あつた」

「ほえ？」

竜蔵の声に、美夏も思わず呆けた声を出してしまふ。

普段の美夏なら、こんな声は出さないのだが……やはり空腹や信頼できる者が近くにいる場合、気の緩みというのがどうしても出てしまふのだろう。

だが、今はそんな場合ではない。

「どこ！ お店どこ！？」

あまりの空腹に、竜蔵の視線を一生懸命に追う美夏。

「あそこだ。あの緑の店」

そういつて、ゴツゴツとした手の指で示す竜蔵……その指の先に、視線を向けてみると。

「おお、お兄ちゃんにしては結構お洒落な店が……」

美夏の視線の先に、一軒の緑を基調としたパスタの専門店が、他の飲食店と並んで店を構えていた。

店の窓付近には、視覚的に不快にならない程度の色とりどりの花が並べられ。他にも店の人が育てているのだろうと分かる花が、店先に並べられている花壇に植えられていた。

店の入り口前に置かれている緑の縁に黒いボードの看板に書かれた『祝入学記念メニュー1100円』の明らかに女性による手書きの文字は、年頃の美夏に好感を持たせ。他にも『春の新作メニュー・旬の魚介と春野菜を使用したペロンチーノ1000円♪』だったり『蛸タコのカルパッチョ680円だにゃ』だったり……非常に今のハングリー精神旺盛な美夏に対して挑戦的なメニューの数々が記されていた。

「あーもう我慢できないよ！ 早く入ろう！ ね！？」

「分かったから、いきなり手を引っ張るなよ」

もう我慢の限界だしする必要も無いと判断した美夏は、竜蔵の太い右腕が纏っているブレザーの袖を引っ張りながら、店の入り口へと走っていく。

そして美夏は、兄である竜蔵を引っ張りながら、その店の入り口の扉を開いた……すると。

カランカラン——『いらっしやいませ』

扉を開けると同時に、非常に落ち着いた店内の雰囲気と香り、そしてホール担当のウェイトレスの声が二人を出迎えた。

やはり店の外の雰囲気通り、中も濃い色の木材を使用した内装をしていて、非常に落ち着いた雰囲気を醸し出しており。カウンター式のキッチンでは、この店のシェフである二人の男性が衛生面に確りと気を遣ったユニフォームで手際よくパスタ料理を作っていた。

また、照明も明る過ぎず暗過ぎずで、どこか大人の店といった印象を初めて入った美夏に与えてくれている。しかも、客席も意図的に少なくしてある様で、店内の雰囲気だけではなく、実際にも騒がしくない程度の談笑が聞こえるシックで落ち着いた空間を作り出していた。

そんな中、最初に二人に気付いたウェイトレスの女性が近づいてきた。

「ようこそ『伊藤の空間』へ♪ 二名様で宜しいでしょうか？」

「はい♪」

「ではご案内しますね♪こちらにどうぞ♪」

店の名前で笑うものか……特に気にしていない美夏ならいざ知らず、竜蔵はこの『伊藤の空間』というネーミングセンスに吹き出す寸前だった。

そういえば前もこの店の名前で笑いそうになったっけかと、懐かしみながらも。

竜蔵は店内という事で、もはや諦めた美夏との腕組をしながら案内された席まで引っ張られていく。

「では、ごゆっくりどうぞ♪」

良く外からの日差しが当たる窓際の席に、美夏と竜蔵の二人を案内し座らせたウェイトレスは。メニューを黒いテーブルの中心に置いた後、そう言いながら一度深くお辞儀をし、二人から優美な足取

りで去っていった。

その間中、竜蔵はこの店のウェイトレスが着ている、フリルなどが目立つミニスカートの制服を眺めながら。着ている本人も中々に美人だったために、ついでにそっちも相手に嫌がられない程度にジツクリと見続けていた……。

「……お兄ちゃん？」

対面に座る妹の目が、こちらを蔑むように座っている。

「うん？ どうした？」

何事も無かったかのように美夏に視線を向け直し、中央に置かれたメニューを相手にも見えるようにテーブルの上で広げる竜蔵。

ああ、これは誤魔化す気だなと感じた美夏は……。

「今のウェイトレスの人って、なんだか垢抜けた感じで綺麗だったよね」

全く持って心の籠ってない賛辞……なぜなら、自分の方が数倍美しく愛らしいと確信しているからだ。

「そうだな、多分大学生だろう？ 高校生って感じはしなかったし」

バイトかなと、美夏を見ながら尋ねるが、どうにも様子が可笑しいことに気付く。

何と言うか、表情が読めないのだ……。

機嫌が悪いのか？ と考えた竜蔵は。

「どうした？ いきなり静かになって」

「いいえ、別になってませんよ」

急にこちらから視線を外し、外の景色を覗き始めた美夏……。

ああ、これは何かやっちゃったかなと、長い付き合いで培った経験から竜蔵が察すると。

「水をお持ちいたしました♪ ご注文はお決まりでしょうか？」

さきのウェイトレスが、水とお絞りを持って再び二人の前に現れた。

フワツとしたショートヘアを茶色に染め、おっとりとした目と雰囲気はこちらに安心感を与えてくれて。まるで彼女のために詠た

かのような胸元の開いたフリルのミニスカ制服は、男性客の視線を一身に集めていた。

そして例に漏れず、竜蔵の視線も彼女が独占し始める……。

水やお絞りをテーブルに置く際に前屈みになるため、どうしても強調してしまう張りのある肌が魅力的な大きな胸に、竜蔵は鼻の下を伸ばしてしまう。

「あ、もう少し待ってもらえますか？」

そう言えばとオーダーを催促された事を思い出した竜蔵は、すぐさまメニューの方へと視線を向けなおす。

これはいくら本能的な反応だったとしても、妹の前でだらしない顔は出来ないと判断した竜蔵なりの行動だったのだが……。

「……スケベ」

(うつ……)

もはや頬杖を付きながら、顔は外に向け横目だけでメニューを見ている美夏に、小声で棘のある言葉を突き刺されてしまう竜蔵。

声音的に機嫌も悪ければ、態度もメニューに向けている視線も最悪な妹。

だが内面はというと……。

(ふふふ、お兄ちゃんが私の機嫌を伺ってる……ちよつと悪い気もするけど、私と一緒にいるのに他の女に目を奪われたお兄ちゃんが悪いんだから、もう少し楽しませてもらおうと♪)

折角の入学祝に主役の機嫌を悪くさせてしまったと罪悪感を感じている兄を、まるで弄ぶかのように楽しんで観察していた。

「じゃあ、俺は明太子の和風パスタで。その……お前はどする？」

しかし、そんな妹の内面など知らない竜蔵が、よそよそしく低姿勢で何をオーダーするか尋ねてくる。

一生懸命にこちらの機嫌を直そうとする兄の様子に改めてグツと来ながらも、美夏は努めて内面を外には出さずに面倒臭そうな態度で「じゃあ祝入学記念メニューと食後デザートでイチゴDXパフェ」と常時ニコやかなウエイトレスに注文した。

ちなみに、美夏が頼んだイチゴDXパフェとは、メニューに表記されている値段が4000を超えている。

「かしこまりました♪ ではオーダーを再確認しますね♪ 明太子の和風パスタお一つ。祝入学記念メニューとイチゴDXパフェをそれぞれお一つで宜しいでしょうか？」

「はい、お願いします……」

メニューに載っている値段を暗算で合計した竜蔵は（ああ、これで俺の財布から諭吉が一枚旅立つわけだ）と、金は天下の回り物という世の理を悟り始めていた。

その様子を見て、美夏のS心が段々とボルテージを上げていく。（じゅるり……まずいわ。さっきまでの私の空腹を、お兄ちゃんの沈んだ表情が満たしていつてしまっている。これは、品が来るまで持つのかな？）

何度も言うが美夏という妹は、外見は至って平然を装っているが、内面はもはや眼が充血し涎も口端から漏れ出てしまうほどに興奮をしている。

すると、そんな外見だけは空気の悪い二人の様子を眺めていたウエイトレスさんが、何か気ままずく思ったのか。二人の仲をフォローするために口を開いた。

「今日は“彼女”さんの入学式だったんですか？ お二人とも制服みたいですし♪」

瞬間、美夏の表情が一気に綻ぶ。

当然だ、何せ兄妹でも親子でもなく“学生カップル”だと思われているのだから。

こちらの空気を和ませようとニコやかに微笑んでいるウエイトレスさんに、美夏は緩みきった幸せそうな笑みを向けた

「はい♪ そうなんです♪」

どう考えても嘘の肯定なのだが、事情を知らないウエイトレスさんにとっては、この反応は真実なのだと錯覚してしまう。

「良いですね、私もそういう入学を祝ってくれる人とか欲しかっ

たな」

これまで営業のために丁寧な物腰だったウエイトレスさんが、妙に砕けた調子で美夏を羨ましがる。

おそらくこれが、女性店員と女性客が砕けあった時の様子なのだろうと、目の前で見ていた竜蔵は考えていたのだが……そうではない。

「あ、いえ。俺とコイツは別に……っ!？」

盛り上がる二人の間に入って、己と美夏が兄妹であると説明しようとした瞬間。

インテリア調の黒いテーブルの下で、竜蔵の右足が美夏のローファースを履いた左足の踵によって踏み潰された。

暗に『お兄ちゃんが悪いんだから、今は黙ってようね♪』と、目の前でウエイトレスさんと談笑している妹に警告された気分陥る竜蔵。

一瞬抗議の言葉を吐こうとした竜蔵であったが、確かに——何が原因か分からないが——悪いのは自分なので、ここは黙ってしようと即座に決心するのであった。

本当に、こういった場面に滅法弱いなど、桐嶋家の男……桐嶋竜蔵は、己が弱点を再確認した。



「美味しいなこれ!」

「うん♪ 確かに美味しいよ! こんな店を“鬼姫”さんが知ってたなんて意外だったな」

二人がテーブルに並べられた、自分のメニューを食したときに思わず出てしまった素直な声。

その中にはどこか棘のある部分もあったが——特に他の女性の名前を態々出した妹——概ね味に関しては良好どころか絶賛の域に達していた。

「明太子と和風って書いてあったから、結構しょっぱいかとも思ってたけど。いい具合に醤油加減とかが効いてて、これは誰でも食えるな」

竜蔵がフォークだけで食していた明太子の和風パスタは、もともと濃い明太子の色を刻み海苔やネギ・大葉などを散りばめて調和させた盛り付けがされており。茹でる際に塩を少々絡められたパスタの匂いと相まって、非常に食欲をそそる風味を醸し出していた。

そしてそれを食せば、バターと醤油が混ぜられた明太子の味が竜蔵の舌を満たしてくれる。

これは、濃い目の味付けが好きな竜蔵にとっては最高のメニューとなったことであろう。

「へー、ちょっとだけ私のと食べ比べしてみようよ♪」

そう言う美夏の前には、祝入学記念メニューとして特別に作られた品がテーブルの上に置かれていた。

一つはマグロの焼きカルパッチョという、オリーブ油で軽く焼かれたマグロが薄切りにされ、水菜・リーフレタス・マッシュルームと共に桜の花が書かれたお洒落なお皿に盛り付けられた料理で、横には薄切りにされたレモンが添えられている

そしてもう一つは、なんとまあパスタ専門店だからこそ出来たことなのか？

唐辛子とニンニクを入れたオリーブ油を味付けとして使用した、ちらし寿司の様な色合いのパスタ料理だ。また、パスタにはもともと、軽くマヨネーズを絡ませているために、本当にちらし寿司のご飯の代わりとしてパスタを使った様に見える。

「そうだな」

美夏の提案に、竜蔵はスツと自分が食べていた明太子の和風パスタを前に出す。

しかし、当の美夏はというと……。

「違うよお兄ちゃん」

「へ?」

何が違うのか……いきなり言われた竜蔵は、全く持って目の前で悪戯に微笑んでいる妹の思惑が理解できていなかった。

だが、そんな竜蔵のキョトンとした表情を見て、美夏が甘えた様な声音で言葉を続けた。

「そのフオークで食べさせて？」

「ぶっ!？」

あゝんと、こちらに身を乗り出して口を開ける美夏に、竜蔵は思わず吹き出してしまう。

「何言ってるんだよ……」

「だって、私のフオークにはもうオリーブ油とかマヨネーズだとかが着いちちゃってるし、混ぜるわけにはいかないじゃん明太子とは？

だから早く〜？」

喋るために戻した口を、再びあゝんと開き直す美夏。

さっきまでの不機嫌さはどうしたと呆れる竜蔵を他所に、目の前の妹は本当にウキウキとした表情で、こちらからパスタを口に運んでやるのを待っている。

どうしてこんな事を……と、頭を抱えそうになる竜蔵であったが。「彼氏さん彼氏さん、祝いの席なのですから、ここは“ズドン”と行っちゃいましょう!」

いつの間にかいたのか、先程のウエイトレスが小声で囁くように、竜蔵に向けて謎のメールを送ってきていた……更に言えば、決して広くは無い店内でバレバレだというのに、近くにある他の席との仕切りに身を隠しながら、こちらの様子を伺っていた。

何をしてるんだ、この人はと呆れながらウエイトレスが隠れている仕切りに視線を送るが。こちらの様子を影ながらに伺っているウエイトレスは、何故か自信満々な表情で“いったれ”というニュアンスを込めたサムズアップをこちらに送ってきた。

心なしか、真剣な表情の割りに眼が興奮しているようで怖い。

「は・や・く？」

そして視線を正面に戻せば、眼を瞑った状態で来るのを待ってい

る妹の姿が……。

実際、この妹は身内としての鼻屑目に見ても可愛らしい綺麗な
と思う。

口を開いている事で強調される、オリブ油で艶やかになった唇
や歯並びの良い白い歯。精端な鼻つきや優美な細さと曲線を描いた
眉毛……また彼女が意外と自分のチャームポイントだと良く主張し
ている長い睫毛は、確りとカールを描いている。

これで、一切のメイクを使用していないというのが殊更に驚きだ。
何故メイクを高校生にもなって一切していないのかと言えば……
簡単に言えば、竜蔵が『やっぱ女の人はずっぴんが良いよな』と以
前に漏らしたことがあるのが原因だ。

「ファイトですよ！ 彼氏さん！！」

待機中の妹を困ったように眺めていれば、横から飛び込んでくる
巨乳ウエイトレスの鬱陶しい小声。

その仕切りの影に隠れているウエイトレスに気付いてか、周りの
客達もこちらの様子に気付いたようで……。

『ほら、あそこ見て見て！ 彼氏が照れちゃって初々しいわね♪』

『あの娘も綺麗な子だけど、彼氏もガタイ良すぎるだろ……何やつ
てる学生なんだ？』

『うわ、あの娘メチャメチャ美人じゃん！ 高校生なのに！』

『なに他の女に目えやってんのよ……後で、分かってるわよね？』

といった具合に、好き勝手に騒ぎ始めていた。

突然周囲からの生暖かい視線を向けられるようになった現状に、
竜蔵は居心地悪く感じていたが……目の前で楽しそうに待ってい
る妹は、今日入学式だったのだ。

それをどうしても外せない事情で直接見に行けず、せめて祝いだ
けでもと誘った昼食。

更に言えば埋め合わせと謳った手前、これは罪滅ぼしでもあるの
だ……。

（仕方ないか……）

様々な葛藤の末、竜蔵は自身のフォークで明太子の和風パスタを絡めとり始めた。

量は丁度、美夏が一口で食べられる程度のもの……。

普段、絶対にこういった事はやらなかっただけに。竜蔵の行動を目の前で、薄目にしながら見ていた美夏は。

（え！ 嘘！？ 本当にやってくれるのっ！？ ど、どどどうしよう！ おふざけのつもりだったのに、いきなりこんなビッグサプライズにっ！！）

興奮のボルテージが最高潮に上がってしまい、注意しなければ今にも鼻息が荒くなってしまいそうなほど混乱していた。

とはいえ、折角のチャンス……ここは、必ずものにする！！

竜蔵がフォークに絡めすくい上げた、明太子のソースが確りと着けられたパスタの麺が、美夏の開けられた口へとゆっくりと運ばれていく……。

それを気配で感じ取った美夏は、もはや赤面している兄が直接口まで運んでくれるまで一切の動きを見せずに待ち続ける。

徐々に、徐々に近づいてくる美味しそうな匂いは、美夏の嗅覚を刺激して……遂に。

「あむ……」

その開いていた口へと運ばれた。

同時に艶かしく唇を閉じながら、もぐもぐとし始める美夏を赤面している竜蔵は見守る。

「ど、どうだ……？」

妹の口がつけられたフォークなど気にするような性格ではない竜蔵であったが、自身が美味しいといった品が相手にはどう感じるのかは気になる様だ。

すると、尋ねられた美夏は確りと口に含んでいたパスタを食した後。

再び悪戯な笑みを浮かべながら、竜蔵へと口を開いた。

「うーん……一口じゃ分からなかったから、もう一回して♪」

たった一回だとしても、それで味を占めてしまった美夏が再び竜蔵に酷な事を言う……が、当の竜蔵は。

「調子に乗るな。もう絶対にやらないからな……」

必死に赤面している顔を直そうとしながら、極めて不貞腐れたように言い放った。

「えーやダ！ もう一回してよー！」

「絶対にやらない！ 俺はもう絶対にやらない！！」

甘えた声で抗議する美夏に対して、まるで自らに言い聞かせるように突っぱねる竜蔵。

こうなると、自身の兄は絶対に言うことを聞いてくれないと知っていた美夏は……。

「ぶー……ケチ」

「勝手に言ってるよ」

頬を膨らませながら引つ込む美夏に、視線も合わさずに返す恥かしがり屋な兄。

その様子を仕切りの影から覗いていたウエイトレスは……。

「彼女さん彼女さん！」

「うん？」

そのバレバレにも関わらず小声で呼びかけてくるウエイトレスに、実はさっきから存在に気付いていた美夏が不思議そうに振り向くと。

「今度は彼女さんの番ですよ！ 彼氏さんの口に“ズドン”です！」

「はっ！？ そうか！」

まるで天啓を得たとはかりに衝撃を受ける美夏であったが……。

「それも絶対にやらない！ 絶対にだぞ！？」

「えー別に私は気にしないから良いのに……」

先に竜蔵から釘を刺されてしまった。

しかし、この様子を仕切りの影から覗いていたウエイトレスは……。

「彼氏さん、それはいくらなんでも根性なしというものですよ……」

普通、そんな可愛い娘から言われたら即決でOKを出す筈ですよ？
だというのに、それは余りにもチキンというものです」

やれやれ、これだから最近の男はと首を振りながら溜息まで吐く
ウエイトレス……。

一体お前は何様だという視線を、竜蔵が思いっきり送っていると。

「こら、仕事をサボって何をやっている！」

ゴスッ！——「あぁっ!？」

突然、仕切りの影に隠れていたウエイトレスの頭頂部に、厳格そうな顔をしたダンディズム剥き出しなナイスミドルが後ろから拳骨を振り落とした。

鈍い音と共に、間拔けたウエイトレスの声が店内に響く。

その様子を、先程まで色々とピンチだった竜蔵と、原因である美夏が眺めていると。

「申し訳御座いません、うちのウエイトレスがお客様方にご迷惑をお掛けしたようで……」

巨乳ウエイトレスの頭頂部に拳骨を落した背の高い男性が、美夏と竜蔵の二人に深々と頭を下げた。

「あ、いえいえ、お氣遣い無く……」

あまりにも突然、客前で拳骨を喰らわせるシーンを見た竜蔵が、頭を下げた男ではなく拳骨を受けたウエイトレスの方へと視線を向ける。

ウエイトレスは、痛そうに熱を持った頭頂部を両手で擦りながら涙目になっていた……不覚にも可愛いと思ってしまったのは内緒だ。竜蔵の言葉を受けて、深々と頭を下げていた背の高いダンディな男が、顔をゆっくりと上げていく。

短く整えられた顎鬚に、確りとセットされた白髪混じりのオールバック。鋭い眼光に筋の通った鼻や、程よい具合にある顔の皺……それは微妙に骨ばった輪郭や彫りの深い顔の造形も相まって、非常に味のある男という雰囲気醸し出していた。

またスタイルも良く、身に纏っているウエイターの衣装が若い従

業員よりも様になっている。

そんなナイスミドルが、顔を上げきると同時に竜蔵へと視線を合わせた。

「いえ、そういう訳にもいきません。お客様にご迷惑をお掛けしたのは事実ですので、私から確りと、この娘には言い付けておきますので」

「あゝ別に良いですよ。そちらのウエイトレスさんも、悪気があってやっていた訳じゃないんですし」

むしろ結果的に見れば、何故か機嫌の悪かった妹の機嫌を直すことが出来たのだ。

お礼を言うのは、逆にコッチのほうだと竜蔵は続けようとしたのだが……。

「お客様のお気遣いは大変嬉しいのですが、何分、このウエイトレスはこれが初めてではないのです」

「あちゃ……」

既に痛みでへたり込んでいるウエイトレスに二人で視線を向けると。

「いたた……って、え？」

痛む頭を押さえながら、ウエイトレスが何を話しているんだといった表情で、竜蔵と背の高い男の顔を交互に見た。

すると、背の高い男が口を開いた。

「お前は先に裏に行っている。話しは後でする」

その怒気の含まれた静かな予告に、ウエイトレスは何やら小動物の様に涙目になりながら。

「えー！ 私はお客様の仲を更に進展させようと……『裏に行っている』……はあい」

必死に抗議をしようとしたのだが、それはダンディな男の低く魅力的な声の一言で封殺されてしまった。

するとウエイトレスがゆっくりと立ち上がり、しよぼくれた様子でトボトボと裏へと消えていく。

それを見送った後、ダンディな男が再び美夏と竜蔵の二人に向き直った。

「改めて本当に申し訳御座いませんでした。先程申し上げたとおり、確りと私の方から言い聞かせておきますので」

「いえ、そんなに気にしてないですし……むしろ、少しだけ助けてもらった感じもするので」

「ええ、私も楽しかったですし……」

ダンディな男の誠意ある謝罪に、流石にここまで謝られても二人は逆に恐縮してしまう。

「そうですか、では、その言葉も添えて確りと言いつけておきます」

そんな二人の様子を見てか、ダンディな男は突然これまで厳しうだった表情をニツコリと綻ばせた。

美夏と竜蔵は、その途端に雰囲気を変えた男に呆氣に取られる……。

ペースが分からない、まさにこの一言に尽きた。

すると、ダンディな男がそのまま言葉を続ける。

「ご安心ください、あのウェイトレスが真面目にお客様方に対して接していたことは、確りと理解はしていますので」

そう言ったダンディな男に、竜蔵がホッとした表情で尋ねる。

「じゃあ怒るにしても、そんなに厳しくしないであげてください」

「はっはっは！ 大丈夫です、私は怒るにしても厳しい方ではないので」

「お願いします」

「どうぞお任せ下さい」

ペースは独特なものがあるが、話してみれば普通のおじさんだと感じた竜蔵は。若干男に対して碎けた様子を見せ始めた。

流石に、あまり人見知りをしない竜蔵ではあっても、いきないの第一印象が怒っていたときのものでは、ちょっとだけ萎縮してしまうと言うことだ。

そこはプロの格闘家と言っても、まだ子供ということだろうか……。

竜蔵と男が向き合っていると、美夏が何か気になったのか、男に向かって口を開いた。

「あの、アナタはこの店長さんですか？」

その問いかけに、男は竜蔵から美夏に視線を移しながら。

「はい、ここ『伊藤の空間』の店長は私です。どうして分かったのですか？ 名札などは着けていないのですが……」

「なんとなく雰囲気で聞いただけです。なんだか他の方とは違った感じがしたので」

「ははは、なかなか鋭い恋人さんですね？」

茶化す様な声音で、竜蔵に聞く男。

竜蔵は、それに対して何を当たり前なといった表情で答えた。

「まあ、他の人は若い方ばかりですし」

一見すれば失礼な物言いだが、ダンディな男は特に気にした様子も無かった。

「確かに、ここ学園都市に飲食店を構えているのは若い専門学校の方々か、私の様な枯れた男ぐらいなものですからね」

自虐的ではなく、これは正に本当のことで。

学園都市に住んでいる人間の中で確かに“大人”という年齢層は決して少なくは無いが、基本都市の年齢層は学生が多いために、現場で働いている者達の殆どはアルバイトの学生が占めているのだ。

それはごく当たり前なことで、例外といえば大学生や専門学校生達が研究や現場研修として店を構える、または経営するなどといった時の事……または一部の天才と呼ばれる者達がいた時だけだ。

よって、逆に経営者や管理職などといった重役を担うポジションには、やはり“大人”が就く事になるのが当たり前なのだ。

「そんな枯れたなんて、十分姿勢も良いですし若々しいじゃないですか」

お世辞ではなく本音でフォローをする竜蔵。

流石に、目の前で店長が本当のことを喋っていたとしても、自虐の入ったネタを混ぜてきたら若者としてフォローをしなければならぬ。

そのフォローを素直に受け止めたのか、店長の男はコホンと咳払いをした後。

「ありがとうございます。一応こう見えても、昔は武術の方を嗜んでおりましたので」

「へえ、どんな武術なんですか？」

これに食いついたのは再び竜蔵だ。

まあ、格闘家としては当然の反応か……。

しかし、男は武道でも格闘技でもなく“武術”といった。

これに気付かない筈が無い竜蔵の相手を知りたいといった好奇心は、徐々に高まってきていた。

だが、店長の男は興味を持ち始めた竜蔵に対して、どこか恐縮した様に答えた。

「いえいえ、おそらく言ったとしてもマイナー過ぎてご存じないと思いますので……」

「そんな事いわずに、気になるので名前だけでも教えてくださいよ」
若干置き去りになっている美夏が、表情を不機嫌そうにしながら、興味で店長の男へと向いている竜蔵にとっては関係の無い話だ……
後々、また大変な事になりそうで怖いが。

「そうですね……では、恐縮ですが」

「はい、どうぞ」

「伊賀流徒手格闘という、古武術から派生した流派の武術なのですが……ご存知でしょうか？」

先程から促してはいたが。

もちろん、本人自身がマイナーと言っただけあって。

「すみません、やっぱり分からないです」

竜蔵は知る由もなかった様だ。

しかし、店長の男は結局知らなかった竜蔵に対して、別に気にし

た様子も見せず。

「いえいえ、これを聞いた他の皆さんも同じ反応をしていましたので、別に謝ることもありませんよ」

はっはっはと笑いながら、竜蔵に気にするなと言う店長の男。

すると、その店長の男が、今気付いたかのように、竜蔵に向けて小声で声を発した。

「そういえば、間違っていたのなら失礼なのですが……もしかして、格闘家の桐嶋竜蔵さんですよ？」

周りに聞こえない様に気遣いをしているのか、耳打ち出来るぐらいに近い距離で尋ねられた竜蔵。

しかし、別に周りにバレようと気にするタイプでない竜蔵は、特に間も置かずに答えを返した。

「はい、そうですよ。良く自分の顔なんて覚えてましたね？」

「やはりそうでしたか……いえ、顔もそうなのですが。やはり肉体の方で気付いたのと、以前他の女性の方といらっしゃった時にお見かけした時がありましたので」

間違えなくて良かったというより、本当に嬉しそうに微笑む店長の男。

それに“他の女性の方”というワードで気まずそうな表情をした竜蔵。

「はは、あの時ですか」

だが、本人も店長の男も、そのワードには特には触れずに当時の事を思い出していた。

と、ここで店長の男が、なにやら突然気まずそうにし始める……。

何となく仕草で店長の様子が可笑しいのを察知した竜蔵は。

「どうしたんですか？」

「あ、いえ。そのく大変図々しいお願いを、桐嶋さんに申し上げたいのですが……」

「はい、なんでしょう？」

妙に畏まった口調に、竜蔵は不思議そうにしていると。

「うちの店……というより、学園都市の大半の飲食店には外の飲食店とは違って、その……いわゆる、有名人のサイン色紙というものが飾られてないのです」

ここまで聞けば、このダンディな店長が何を言いたいのか竜蔵でも分かるというものだ。

「ああ、なるほど、そういう事ですか。良いですよ別に？」

「本当ですか!？」

竜蔵の許可を得た瞬間、店長の表情がパツと明るくなる。

年齢も中年を過ぎていそうな感じがする渋いおじさんではあるが、こういう時は誰だって子供の様な笑顔をやるものだ。

もちろん、相手がおじさんといえども、ここまで喜んでくれれば竜蔵も悪い気はしない。

というより、サインを身内以外から求められただけで、かなり嬉しいものがあるのだが……。

「ええ全然構わないですよ」

そんなこんな嬉しさからか、竜蔵が上機嫌で微笑みながら店長の男の再確認に返事を返す。

すると店長の男は。

「なら、今すぐに色紙とペンを持ってきますので。料理をごゆっくり堪能しながらお待ち下さいね!」

「は、はあ……」

目の色を変え、異常なまでに張り切った様子の店長の男に、上機嫌だった竜蔵の機嫌が一瞬で引き気味にされる……。

しかし、そんな竜蔵などお構い無しに、許可を得た店長はそくさと裏へと消えていく。

「サイン書くん」

その兄と店長の男のやり取りを、かなり置いてけぼりな状態で眺めていた美夏が意外そうに言葉を吐いた。

妹の言葉に、若干面を喰らった状態の竜蔵が視線を向けなおすと。「まあ、断る理由も無いしな」

「ふ〜ん……妹の入学祝いの最中なのに？ 頼まれたからって書いて書いちゃうんだ。入学祝いの最中の妹を置いてけぼりにしたの？」

やはり気に障っていたのか、棘のある口調で美夏が竜蔵を再び攻め始める。

これにまた何も言えなくなる竜蔵……本当に、こういった事には滅法弱いようであった。

その様子を見て、美夏が今日何度目か分からない悪戯な笑みを浮かべると。

「悪いと思ってるなら、罰として、食後に来るイチゴDXパフェと一緒に食べることに」

という、また周囲から生暖かい視線を向けられそうな事を言い始めた。

だがまあ、この程度なら、さっきの恥かしさと比べればと腹を括ろうとした矢先……。

「もちろん“同じスプーン”でね♪」

竜蔵はこの瞬間、人生で初めて妹に本気で頭を下げるのであった。



えらい目に合った……。

『伊藤の空間』から会計を済ませて出てきた竜蔵が、一番最初に思い浮かべた言葉だ。

あの後、イチゴDXパフェを同じスプーンで食べるという恥辱の極みを味わわずには済んだのだが。

またいつの間にかに復帰していたのか、あの巨乳ウエイトレスが再び美夏と今度は店長まで煽りだし。まさかまさかの“店内公開食べ合わせいっこ？”という、もし知人が見ていたのなら、そいつを撲殺しなくてはならないイベントを強制されたのだ。

店内では生暖かい視線を送っていた他の客たちも、なぜかいつの

間にか美夏と巨乳ウエイトレスの味方となり、こちらを煽る始末：
…そして、更に最悪だったのが、食べさせ終わったあと、皆から謎
の拍手や指笛を貰う最中起きた、店長の『サインくれよ』のコール。
もともと竜蔵の外見を見て、もしかしたらと思っていた客もいた
ようで、その時は本当に恥かしくて死ねると思ったぐらいであった
……。

これがもし、妹などではなく本当の彼女だったのならと考える竜
蔵。

しかし、それはそれでかなり恥かしいものがあると気付く竜蔵。
どっちにしたって、恥をかくのは変わらないと気付いた竜蔵。
救われない……本当に救われない。

また、この時の竜蔵は知る由も無いが、店長が悪乗りして取った
美夏とのツーショット写真が。あの店に飾られることとなった竜蔵
のサインと共に飾られているという事が、近いうちに起こる事にな
る。

まあ自分、竜蔵は『伊藤の空間』という敵か味方か分からない空
間には近づかないと思うが。

そんなこんなで現在、お腹を満たした二人は再び繁華街を練り歩
いている。

目的は入学祝のプレゼント……。

竜蔵はとりあえずマグカップでも買ってやろうかと考えていたよ
うだが、それは美夏の『ヤダ、ペアリングが良い』という理不尽な
要求により却下された。

だが流石に妹とペアリングなどするつもりはない竜蔵は、店につ
いた瞬間に自分が気に入ったアクセサリを購入して、有無も言わさ
ずに手渡す算段を企てていた。

すると、そんな時であった……。

ドン————「きゃっ！」

さっきまでの赤茶色の地面ではなく、白い煉瓦が敷き詰められた人通りの多い道を二人で歩いていると。突然、竜蔵の左胸に、丸眼鏡と三つ編みお下げが特徴的な昭和チックな少女がぶつかってきた。「あ、おい！」

鍛え上げられた厚い胸板にぶつかり、弾かれるように転びそうになる少女の手を、竜蔵が咄嗟の反応で伸ばした左手で掴み取る。それにより、少女の華奢な体が地面に倒れるという事態は回避されたようだ。

「あ、ありがとうございます……」

ぶつかって倒れそうになった事に相当驚いたのか？

少女が狼狽しているかのように、手を取り引っ張ってくれた竜蔵を見上げる。だが、一応お礼は言えるようであった。

「いや、こっちもすみません……って、あれ？」

転びそうになった少女の手を取ったまま、竜蔵が何かに気付いたようだ。

（やばい、同じ制服だ……）

そう、なんとたまたま妹の入学祝いのために訪れていた繁華街で、同じ学校の生徒とまさかの遭遇を果たしてしまったのだ。

更に言えば、この丸眼鏡に三つ編みお下げが特徴的な少女を、竜蔵はどこかで見たことがある……。

それがどこかと思いついて出そうとしていると。

「あの、すみません！ 私、急いでますので！」

「あ、ちょっと！」

突然、少女が焦った雰囲気で竜蔵の手を振り払い、そのままどこかへと走り去ってしまった。

その後姿を見送った竜蔵は。

（なんだ？ てか、外見の割りに足が速えな）

と、脳内でクエッションマークを浮かべながら、そんな事を呟いていた。

「なに？　いまの人……同じ学校だったみたいだけど、態度悪過ぎない？」

これまでの様子を隣で黙って見ていた美夏が、悪態を付くように先の少女に対して嫌悪感を示す。

まあ、この妹の場合、兄に手を合法的に握られた事に対して嫉妬を覚えているだけなのだが。

「さあ？　まあ怪我が無かっただけでも良いんじゃない？」

機嫌の悪い美夏は流しながら、竜蔵は再び視線を歩いている方向へと戻す。

するとそこで、なにやら違和感を感じた。

正確に言えば、ブレザーの左胸にある二橋学園の校章が刺繍された胸ポケットに、何か紙切れの様なものが入っているのだ。

それを、めげずに腕を組もうとしている美夏をあしらいながら、右の手で取り出し広げてみると。

「ッ！？」

「うん？　どうしたの、お兄ちゃん？」

紙切れの開かれた場所を見た瞬間に表情を一変させた竜蔵に、美夏がようやく気付いたのか、不思議そうな声音で尋ねてくる……。

だが、竜蔵の表情の変化は、すぐに収まってしまったようである。

「いや、なんでもない……とりあえず急ごう。下手したら“千秋”ちあきがへそを曲げる」

「え？　あ、待ってよお兄ちゃん」

突然先を急ぐために、歩くペースを上げた兄に、美夏が“そんな事無いのにな”と思いつつも付いていく……。

今さっき竜蔵が開いた紙切れは、既に左の胸ポケットという元の場所に収められている。

その紙切れに書かれていた内容とは……。

『明日の放課後、学園の屋上で待っています。来なかった場合、“今日起こったことを包み隠さずに、新聞部の方々へリークします”。』

もちろん“執行部”の話も含めて……』

——同じ執行部の“忍者”より、待ってますよ♪——

『伊藤の空間』 (後書き)

絵を描こうとしたけど無理でした。

幕間 尖った青春の変化（前書き）

入学式後に起きた事件の話です。

幕間 尖った青春の変化

目が覚めたのは、夕日が殆ど沈んだ時間だった……。

俺が仰ぐ天井には、おそらく取り替えたばかりの蛍光灯の明かりが眩いばかりの白光を放っていた。

その光に目を細めつつも、俺はある事に気付く……。

(ここ、どこだ……?)

何故だか朦朧とする意識の中で、突然襲ってきた顔面の痛み……心なしか、首の方にも鞭打ちを起こしたときの様な痛みが走っている。

俺は、この痛みに堪らず、天井を仰いでいた状態から起き上がるうとするも。

「あ……」

起き上がろうとした途中で、目の前の視界がぼんやりと霞がかり、俺の上半身を再び寝た覚えの無い、純白のシャツがしかれたベットに引き戻していく……いや、落ちていったといった方が正しいのかもしれない。

ギシ——と、ベットのスプリングが、衝撃を吸収する音が聞こえた。

すると、ベットの周りを囲んでいたカーテンの向こう側で、なにやらシルエットの的にスタイルの良い女が、座っていた椅子から立ち上がるのが見えた。

そしてそのまま、俺が寝ているベットと外を仕切っているカーテンが無遠慮に開けられる。

「あら、ようやくお目覚めね。おはようって時間じゃないのは分かるかな?」

カーテンの向こう側から現れたのは、白衣を袖を通さずに肩に羽織った、一人の落ち着いた雰囲気を持つ女だった。

お洒落というよりも邪魔にならないように、緑がかった黒髪を項
辺りで一つに括り。緩やかな曲線を描いた細眉や、口紅が薄く塗ら
れた唇……そしてその、柔らかそうな唇の下には小さなホクロが彼
女の大人な魅力を不思議と引き立たせていた。

また、小顔を強調するかのような八頭身に纏った、胸元の開いた
ピンクのワイシャツや、ストッキングの上に履かれた黒いタイトス
カートは、何故だか意識を朦朧とさせる俺にすら、性的な興奮を覚
えさせる。

「あ、あう……」

そんな美女といっても過言ではない女に、言葉を帰そうとするが
上手く口が動いてくれない……それに血の味もする。

多分、口の何箇所かを切ってしまっているのであろう。

「無理しないの。君は脳震盪を起こして運ばれてきたんだから、大
人しくしてなさい」

舌も口も言うことの聞いてくれない俺に、白衣の女が呆れた様に
前髪を掻き揚げる。

露となった毛穴一つ見えなさそうな額は、多分俺好みなんだが……
……いかんせん、視界がまだ霞がかっているから殆ど確認できない。

正直、今の状況を全く理解できないために、俺は仕方なく女の言
うことを聞く事にした。

「そう、保健室に一人で来れなかった人は、大人しく寝てるのが一
番なんだから」

いや、そこは病院に運んだ方が良いんじゃないかと思うが、ここ
は黙っておくのが吉だろう。

大人しく身を寝ているベットに預けると、後頭部に良く日干しさ
れた枕の暖かい感触が伝わってきた。

このまま目を瞑れば、また一眠りできそうな心地よさだ。

「あ、あのう……」

そうすると、喋ることだけに意識が集中出来たのか、ようやくま
ともな言葉を発せられるようになる……まあ、まだこれが限界とい

う所なのだが。

「うん？ どうしたのかな……って、聞きたいところだけど」

俺の搾り出すように出された言葉に、女はアーモンド形の目を優しげに細めながら。

「今は本当に無理はしないこと、喋るのが難しいのなら黙って寝てること。用件なら、私がちゃんと伝えてあげるから」

手のかかる子供をあやす様な声音で、暗に何もするなと言ってきた。

だが確かに、今の俺は何故か起き上がることも喋ることも、頭がクラクラしてまともに出来ない。

すると、ベットの前に立っている女は。履いているサンダル音をゆったりとした歩調で鳴らしながら、俺が寝ているベットの横に移動した。

「君をここに運んでくれた先輩から、預かってる物があるの」
そう言って、女はベットの傍に置いてあった丸椅子の上にある、一枚の紙を手に取り、俺に差し出した。

俺は、その差し出された一枚の紙を、なんとか動いた右手で受け取る……。

「その先輩からは、君が起きたら直ぐに読ませてくれって頼まれてたからね。ちゃんと渡したわよ？」

頼まれたことを完了したぞと、確認を取ってくる女に、俺は特に何も言わずに。右手に持った紙に書かれた文章に目をやった。

相変わらず、モヤのかかった様に見づらい視界だったが、まあ何とか文字は読み取ることが出来た。

その紙に書かれた文面は……。

『来るか来ないかは、お前が決めるんだぞ？』

たった、これだけの文章に記された言葉————だけど俺は。

この時だけは不思議と、朦朧とする意識の中で、ある事だけはハ

ツキリと思い出せていた。

それは、空いている左手に残っている、とても力強い感触……。手を両側から強い力で圧迫されたような、そんな感触……。

俺はここまで感じて、ようやく何故こんな所で寝ていたのかを思い出した。



退屈な入学式……多目的ホールの壇上で、新入生代表として何かを喋っている、レベルの高い女子と。それに負けず劣らずな容姿をした生徒会長とかいう先輩以外に、何の興味も持てない入学式。

それを証明するかのように、男……御堂^{みどう}勇輝^{ゆうき}は「あゝあ」などという大欠伸を、惜しげもなく座り心地の良いシートで披露していた。席は多目的ホールの生徒側の、丁度真ん中辺り……周りに座る者達は。

その御堂のふんぞり返って座っている、ふてぶてしい態度に嫌悪感を抱きつつも、何も言えないでいた。

（マジでつまんね……てか、先公も何も注意しねえのかよ）

あまり綺麗とはいえない、明らかに染めたと分かるボサボサな金髪頭。

別に、この程度なら——二橋学園では珍しいが——あまり珍しくも無い荒れた生徒なのだが。

男の身長は185cmと、高一になりたてと言う割には長身で、しかも新調された制服越しにでも分かる程度には、程よく肉付けされた体格をしていた。

そのせいか、周りにいる生徒達は皆、入学早々に厄介ごとに巻き込まれたくないがために、この態度のデカイ男子生徒を無視していた。

（ホント、これなら早く目当ての奴と喧嘩して、退学貰ったほうが良いかもしれねえな）

顔こそは整っていて、輪郭も細い青年なのだが。いかんせん、鋭い眼光と細い眉毛を携えた状態で無表情なために、御堂が何を考えしているかなど周囲には到底理解できない事であった。

故に、余計不気味に感じる周囲の生徒達。

それを見て、更に退屈な気分になる御堂……。

御堂勇輝にとって、二橋学園の入学式は。

こういった調子で、そのまま終わりを迎えてしまった。

入学式も終わり、周りの進人生達が自分の新しい教室へと向かう最中。

御堂だけは、多目的ホールの席に腰掛けたまま、微動だにしないまま……。

それを不審に思った教職員が、男数人構成で御堂のもとへと近寄ってくる。

「おい、もう入学式は終わったぞ！ 教室に戻れ！」

「私は終始、君を見ていたが。なんだあの態度は！？ 他の生徒達にはもちろん、ここに居る全員に不快な思いをさせていたんだぞ！ 分かってるのか！？」

口々に、やかましい説教を捲くし立てる数人の教職員達……。

だが御堂は、全く持って聞く耳を持たない。

「おい、なめてんのか？」

その態度に、血の気の多い一人の男性教職員が遂に我慢の限界を向かえ、御堂の胸倉を掴み、捻り挙げる。

男性教職員は、武道系の出身だったのか？

185cmもある座っている状態の御堂を、軽々と片手で持ち上げてしまった。

だが、それでも無表情な御堂……。

それが、再び癪に障ったのか、男性教職員が声を張り上げようとする。

「いいんですか？ 俺ん家、ここの学園の理事長と仲が良くんですよ？」

すると、声を張り上げようとしていた男性教職員の表情がピタリと止まった……。

それはそうだ、自分の雇い主と仲の良い家の息子かもしれない生徒に、もしかしたら勢いで行っていたかもしれないのだから。

しかし、ここで引いてしまったら、この生徒は一生自分の事を軽く見ると考えた男性教職員は。もう関係ないとばかりに、再び声を張り上げ『どうかなさいましたか？ 先生方？』られなかった。

突然聞こえてきた、澄んだ女性の声に皆が振り向けば……そこには、豊かな栗色の長髪と、いつもニコやかにしている朗らかな美顔が特徴的な女生徒、二橋姫樹^{ふたつばしひめぎ}生徒会長の姿があった。

その存在感は、一触即発な雰囲気だった、この現場を、一瞬で治められてしまいそう……そんな、不思議な安心感を持たせるものがあった。

「姫樹か、いやなに、ただ久しぶりに生意気な新生が入ってきただけだ」

御堂の襟首を片手で捻り挙げた体勢のまま、体格の良い男性教職員は、後ろにいる姫樹に、そう告げた。

だが、その言葉に姫樹は……。

「この学園は……というより、第一区から三区までにある殆どの学舎は皆。生徒自身が殆どの自治管理を任されています」

「うん？ 何が言いたいんだ？」

突然、学園の基本方針を口に出し始めた姫樹に、男性教職員は頭に“？”を浮かべる。

しかし姫樹は、そんな教職員など無視して話を続ける。

「ですので、こういった些細なトラブルも学園の生徒が解決すべきなのです……これは、学園のほぼ全ての懸案事項、または生徒間に存在する問題の解決までに至るまでの決定権が生徒会長である私や、それを支えてくれる他のメンバーや委員会にある事からも頷け

ることです」

表情こそは朗らかな微笑みを浮かべてはいるが、完全に教職員達に対して遠まわしに『さがれ』と言っている様に思える、姫樹の言葉。

本来なら教職員達は、この姫樹の言葉にも反応しなければならぬのだが……。

「……そうか、なら勝手にしろ」

そう言っ、男性教職員は簡単に御堂を下ろしてしまった。

するとそのまま、ゾロゾロと散っていく教職員達。

まるで、言葉通りに皆“勝手にしろ”とでも言っているかのような去り具合に、当事者である御堂も面を喰らってしまう。

そんな御堂の、無表情からあまり変わっていない驚きの顔を見ながら、姫樹が口を開く。

「それで？　まずは何故、アナタは終始同じ態度を取っていたのか？　それを聞きたいのだけれど……話してくれるかしら？」

凹凸のあるスタイルや、落ち着いた雰囲気のある顔は、とても大人びているのに。なぜか子供っぽい仕草で、コテンと困った表情をしながら首を傾げる姫樹。

その仕草は彼女の、のほほんとした雰囲気も相まって、非常に男心を擽るものがあつたのだが。

今、たとえ他人からくだらないと言われても、明確な目的がある者にとっては、何の感情の起伏も起きなかった。

「……別に、俺は入学式に来たわけじゃねえから」

「あら？　なら、何でここに居るの？」

ポケットに両手を突っ込みながら、面倒臭そうに言う御堂に、姫樹が訪ねる。

そりゃ高校の入学式なのに、それに来たわけじゃないと言われてば、誰だって疑問に思うことだろう。

もしかしたら、余程の理由があるのかもしれない。

だが、出てきた答えは……。

「アンタ、生徒会長なんだろう？　しかも、ここでは結構偉い感じだし」

「ええ、一応去年から任されているわ。それがどうしたの？」

「偉いんだったら、ここに一人ぐらい誰か連れて来れるんだろ？」

「……話が見えないわ。もっと具体的に言ってくれないと」

右頬に掌を添えながら、眉を顰める姫樹……。

「俺が言いてえのは、ここで一番喧嘩の強い奴を連れて来いって事だ」

その言葉で、ようやく理解できたのか。

姫樹が胸中で（あゝなるほどね）と手を叩く。

目の前の様な風貌をした、血気盛んな若者が。この学園で一番強い奴を連れて来いと言ったら、彼しかないだろうと目星が付いたからだ。

実際、姫樹自身は本当に彼が“この学園で一番なのかを断言できない”が……おそらく、これで良いのだろうと判断が出来た。

故に。

「そういう事なら、私に任せて頂戴♪」

「……は？」

なにやら楽しそうに微笑みながら、やたら乗り気な様子の生徒会長に。

まさか要求が通ると思ってはいなかった御堂が、間拔けた声を漏らしてしまう。

本来なら、このまま居座ったり、必要なら近くの先公か男子生徒をぶん殴って騒ぎを起こし、目的の人物を呼び込もうとしていたのだが……。

どうやら、目の前の抜けていそうな割には腹黒そうな生徒会長のお陰で、余計な手間は省けたようであった。

「アナタが呼んで来て欲しいと言っている子を、私が連れてきてあげます。そうすれば、アナタも満足が行くのでしょうか？」

「……ああ」

御堂の返事を聞くと、姫樹の微笑みが一層明るさを増す……。

それは見るものが見れば、本当に嬉しくて微笑んだのか？ もしくは何か企みが出来て微笑んでいるのか？ どちらか判断出来るものだった。

「じゃあ、皆。後の片付けは、手伝いの生徒や先生方にお任せして、私達は明日の健康診断や奨学金申請などに必要な書類を確認してきましょう」

姫樹はそう言って、ここ多目的ホールに施されていた入学式専用の装飾などを片付けている、他の生徒会メンバーに声をかけた。

すると、生徒会のメンバー達は、いま手に着けていた作業に確りと折り合いをつけてから、ゾロゾロと何事も無かったかのような足取りで、姫樹の後ろに控え始めた。

それを確認すると、姫樹は改めてポケットに両手を突っ込んでいる御堂に視線を向ける。

「必ずアナタが呼んで来て欲しいと思っている子を連れてくるから、ちゃんと待っているように。分かった？」

まるで親気取りの物言いに、御堂は鬱陶しそうな表情を露にするも、一応の同意を示すために「ああ」とだけ返事を帰した。

姫樹は、それをニツコリと微笑んだ後に確認すると。後ろに控えていた生徒会メンバーを引き連れて、多目的ホールを後にしようとす……。

だが、多目的ホールの出入り口である、現在は開けっ放しになっている両開きのドアの前で。姫樹は、あまり高くは無い階段の段差を上ることで揺らしていた、緩やかなウェーブのかかった栗色の豊かな髪をピタリと止めながら、後ろを振り返った。

視線を向けたのは、やはり多目的ホールの中央で、いまだこちらを鋭い眼光で眺めている御堂にだ。

目と目が、自然と合わさる……。

しかし、振り返った姫樹と目を合わせた御堂は、無意識の内に、一筋の冷や汗を右頬に流していた。

微笑んでいる……それも、不気味に、不敵に、大胆に。

更に言えば、さっきまで閉じていた“紅い瞳”が、妙な圧力プレッシャーを御堂に与えていた。

そして、何がなんだか分からないといったふうには物怖じする御堂に、底冷えするぐらいに美しくも冷たい微笑みを向けながら、姫樹がゆっくりと口を開いた。

「一応、新人生のアナタには忠告をしておくけど……」

さっきまでと変わらぬ、決して声は張っていない和やかな声……だが、不思議と距離の開いた御堂の耳には届いていた。

「殺られる前に殺ること。それがアナタが、これから私が連れてくるであろう人物に対して、唯一出来る事……分かったかしら？」

彼女の薄く開かれた瞼の先にある眼を見れば、これがハッターでも過大された表現でもないことぐらい、中学上りの御堂でも理解できる……。

それだけ、これから連れて来ると言っている奴に、相当な自信が有るのだろう。

なら、俺の目当ての奴が来る可能性が一段と高まった。

故に引かない……今さっきまでしていた物怖じも、鳴りを潜めた。

「上等だよ」

何故なら、もともと“そいつ”と喧嘩をするために、こんな退屈なところに来たのだから……。



多目的ホールの中心で待つこと数十分……。

別段、御堂自身は待つことに苦痛は感じない。

むしろ今は、目当ての奴が来ることを、今か今かと待ち侘びているぐらいなのだ。

苦痛なんて、感じるはずも無い……。

多目的ホールの中央の席に座りながら、周囲を見渡せば。既に殆

どの後片付けが終わり、仕事の終わった奴から多目的ホールを出て行くといった所まで進んでいた。
すると、そんな時であった。

「あ、桐嶋」

この一言で、目的の人物を待っていた御堂にとっては十分であった。

聞こえてきたのは、多目的ホールの出入り口付近。

中央の席に座っていた御堂は、まるで獲物を目の前でお預けされ続けた狼の様に、席から立ち上がり、切れ長の鋭い眼光を、多目的ホールの出入り口へと向けた。

普段、何を考えているのか分からない無気力な表情をしている彼にとって、非常に珍しい挙動と顔つきであった。

「なんだ？ 会長の言ってたことと違うな」

多目的ホールに堂々と入ってきた男は、こちらに向けられる御堂の凄みの効いたガン付けを楽しそうに受け止めながら。思っていた状況と違うことに、多少残念な声音で呟いた。

「会長の言ってたことって？」

最初に多目的ホールへと入ってきた男に気付いた男子生徒が、不思議そうに疑問を投げかける。

すると、男は。

「いや、ここで入学早々暴れてる奴がいるって聞いたから、止めてくれて頼まれて来たんだけど……静かなもんだね」

「まあ、実際さっきまで暴れる寸前だったけどな……」

睨み付けてくる御堂に対して、わざわざ真っ向から視線をぶつける男は。そう相手を挑発するかののような態度で、最初に入ってきたのに気付いた男子生徒と会話をしていた。

だが、それも、もう終わり……。

「帰る途中だったのか？」

「ああ、入学式の片付けも、俺の分は終わったしな。だけどまあ、ちよっと残る事にするわ」

「悪いね、帰るの邪魔して」

「そうでもないだろ？　だって、合法的にプロの喧嘩を見られるんだからさ」

男と話をしていた男子生徒は、どうやら中々に血の気の多い部類の人間だったようだ。

しかし、竜蔵の表情には、その男子生徒の期待には答えられないといった色が伺えた。

別に、勝つ自信が無いというわけではない……。

「喧嘩になれば良いんだけどね……多分、無理だろ」

ただ単に、相手の実力が、自分には到底及ぶものではないと確信していたから。

それだけ答えると、竜蔵は期待の眼差しで、こちらを見ている男子生徒から離れていく。

一步……また一步が、確実に中央の通路に既に出てきていた御堂の前へと近づいていた。

近づいてくる男……目当ての男であった、桐嶋竜蔵が近づいてくる度に。

御堂には、嫌にでも気づく事があった。

（なんだ……これ）

背丈自体は、御堂のそれよりも10？以上低いことが分かる。だが、そんな背丈のハンデなど、帳消しにするどころか相手に“自分よりも大きい”と錯覚させるほどの肉体が、ブレザーの制服越しですら存在を強調させていた。

厚く、そして太い……傍目からは、理想的な逆三角形を描いた均整の取れている肉体に見えても。よく見れば、外に露出している筋ばった首の筋肉や、もはや拳の形状が鈍器の様に膨れ上がった手が、桐嶋竜蔵という男の計り知れなさを物語っている。

どうすれば勝てるのか？———などという次元ではなく、どうすれば無事に済ませられるのかと、考えることしか出来なくなる。

御堂は、この時。

己がこれまで通ってきた、不良^{しろうと}たちの世界が、どれだけ狭かったのかを知る。

TVは見ない方だ……だから、コイツが今まで、どんな奴らと戦ってきたのなんて知る由も無い。

だが、これだけは分かる。

俺らがいる不良の世界での圧力^{プレッシャー}が赤子に見えるぐらいに、奴らがいる格闘家の世界の圧力^{プレッシャー}は甘くは無く、ただ相対せただけで凄いことなのだという事が。

「どうした新人生？ 俺に何かあるんだろ？」

こちらの内心を見抜いているのか、小馬鹿にした笑みを浮かべながら、俺に問いかけてくる。

既に俺の背中^はは、嫌な汗でワイシャツを濡らしている……。

目線は立っている場所の段差が違うとはいえ、背の低い奴を見る高さ^と、さほど変わりはない。

しかし、奴が段差を降りるために肩を揺らしながら歩いてくる度に、その大きさを見誤りそうになる。

そして、遂に奴と俺の距離が、大体、二・三步で手が届く間合いとなる。

御堂は、この相手と距離を認識した瞬間に、これから始める事に對しての気構えを一気に組み直した。

瞬間、さっきまでの何もされていないのに押し込まれていた空気は一掃されるが、感じる圧力^{プレッシャー}に変化は無い。

むしろ、間合いを認識してしまった事によって、相手が何から出てくるのかという考えが浮かぶようになってしまい、余計に圧力を感じる。

すると、一向に口を開かない御堂に痺れを切らしたのか？

竜蔵が、また一歩間合いを歩くだけで詰め、そこで立ち止まった。

「おい？ 黙ってちゃ分からないだろ。何か言おうぜ、なあ？」

相も変わらず、こちらを挑発するかのような喧嘩腰。

やっている事自体は、その辺の同年代と変わらない……だが、こ

ちらを挑発するだけの説得力が、目の前の男にはあった。

近くで見れば、頑丈そうな顔立ちをしている割にパーツは整っており、眼はギラギラと好戦的な雰囲気醸し出しながら、こちらを見つめている。

多分、こういった魅力は女よりも男のほうが分かりやすいのだろうと、御堂は無意識のうちに考えていた。

だが、挑発してくる相手に、いつまでも啖呵も切らずに立ち尽くしているなど、今まで過ごしてきた世界では有りえない事……中には、啖呵すら切らずに、無言で殴りかかってくる“キレてる”奴もいることにはいるが、生憎、御堂はそういうタイプではない。

「やっぱり、アンタが来たか……」

もともと、竜蔵自身が目的であったと、暗に語る口調。

それに、当の本人は眉間に皺を寄せ、疑問気に御堂を見る。

「やっぱり来たか……？ ああ、なるほどな」

突然、何かに納得したかのようにしている竜蔵を見て、今度は御堂が分からないといった表情をする。

しかし、これに竜蔵は答えてはくれない……当たり前だ、いくら疑問に感じたからといって、御堂が問いただそうとはしなかったからだ。

まあ、竜蔵がそういった雰囲気を出したのは。ただ単に、会長である姫樹の言葉に、若干の“嘘”が含まれていたことに気付いただけなのだが。

すると、今のやり取りで、相手が会話を続ける気が無いと理解した竜蔵の纏う空気がガラリと変わる。

「さて、“やる”んだろ？ 来いよ」

何の脈絡も無い誘い……これが、もしも異性との会話なら少々魅惑的な意味が含まれているのであろうが、生憎と相手は野郎だ。

しかも見た目以上に、喧嘩が好きに見える。

なら、竜蔵が発した言葉の意味を正しく理解出来たのであろう。二人の醸し出す空気が、一気に周囲にすらも危機感を煽るものへ

と様変わりする。

これから何が起きるのか？ 二人は何をしようとしているのか？
それが、今からこの光景を見る者だとしても理解できる空気。

もう、喋る口も、ガンの付け合いも必要ない。

ただ、殴り合うのみ——

最初に突っかけたのは、御堂……いや、意外にも竜蔵の方からであつた。

来いよと言ったにも関わらず、そんなものは関係ないと。御堂が重心を前に傾けると同時に、段差から流れるように降り、間合いを詰めた竜蔵。

（速ッ！）

自身が地面を蹴り出すよりも早く、間合いを完璧に詰めて来た相手に、御堂が驚嘆を覚えながら表情を強張らせる。

相手は重心こそ、安定させるために腰を落しているが。本質を見れば、後ろ足である右足の踵は地面には着いておらず、膝はバネを何時でも利かせられるように、脱力して少しだけ曲げられているために、フットワークの軽そうな足の構えを取っていた。

だが、問題はそこではなく。

御堂が目についたのは、完全に両腕を下ろした状態の無防備で、
ノーガード
間合いを詰めてきたことにある。

それを、驚きはしたが逃す御堂ではない。

伊達に喧嘩馴れしていない御堂は、突っ込んできた竜蔵の、意図的に空きとなっている顔面に向けて、右腕を少しだけ振りかぶった後に出した、ストレートとも言えない、荒っぽい突きを放つ。

身長差10？以上あるために、上から振り落とされる要領で、突っ込んできた竜蔵の顔面に迫る、御堂の右拳……だが、それは竜蔵が目線は相手に固定したまま、上半身だけを前に屈めるだけで空を切る事となる。

ダッキング、ボクシングの基本技術の一つだ。

ただただ、全身の力と体重を素人なりのやり方で乗せた御堂のオーバーフック気味の右拳は、空を切った途端。御堂もろとも、重心を少しだけ前に引っ張り出してしまう。

体勢が、出したパンチに持ってかれたのだ。

これは当然の事で、大抵の突きというのは、前足である足を確りと置くことにより。相手に効かせるために突いた際、どうしても前へと傾いてしまう重心を抑えることが出来るのだ。

今の御堂には、それが無く。ただ突っ込んできた相手を迎え撃つために殴ろうとしてしまったために、重心を前に傾けてしまったのだ。

一般人同士なら、勢いだけで大抵は勝てるために、それで良いのかも知れない……だが、相手が悪すぎた。

こちらに空振った勢いそのままに、御堂が前に出てくる。

見る限り、次に御堂が打撃を放つ場合は、一旦間合いを取らないと上手く打てそうに無い。

瞬間、ダッキング状態だった竜蔵の上半身が跳ね上がる。

同時に、御堂の首下を通り抜け、後頭部の所で竜蔵の両手がクラッチされた。

拙い……と感じた瞬間、御堂が背中の中背筋群と首の筋肉を総動員させて、背筋を反らそうとするが。

ガクン————と、俄かには信じられない程の力で、御堂の上半身が一瞬のうちに下へと引き付けられてしまう。

紺色のカーペットが、御堂の視界に移る。

頭を完全に下げられた……。

気付いた瞬間に、御堂が顔を守ろうと両手を動かすが。

グシャッ！————

それよりも先に、竜蔵の右膝が、御堂の顔面……正に真正面に突き刺さった。

「きゃッ!？」 「うわッ!」 「エグ!」

あまりの生々しい打撃音に、周囲に居た生徒達が思わず声を出してしまう。

御堂の視点からは分からなかったが、竜蔵がやったのは、ただ単に首相撲からの上段右膝という、至ってシンプルな技。

しかし、その首相撲は竜蔵の太い両腕と、鍛え上げられた背筋力により、相手の顔を無理やりにも引き込むなどといった強引な手段を取ることを可能とし。右膝に至っては、地面を爪先まで使って蹴り出し、腰を前に突き出した、全身を上手く使った容赦の無いもので。正に天を貫く膝といっても過言ではなかった。

しかも、首相撲の引き込みによって生まれた勢いのせいで、この右膝は若干のカウンター性も含めており。その威力は、御堂の意識を刈り取るだけではなく、唇に裂傷を作る事や、鼻から大量の血を吹き出させるには十分すぎる程のものであった。

竜蔵の右膝による一撃を受けた御堂が、そのまま前のめりで多目的ホールのカーペットに倒れこむ。

倒れこんだときの御堂の全身には、既に力は感じられなかった。しばし、静寂がこの場を包む……。

まるで土下座をするかのように倒れ付している御堂を、竜蔵が注意深げに見下ろす。

もう終わっている……そう理解していても、自然とそれをやってしまっただけは、やはり住む世界が違うと感じさせる。

幸い、竜蔵の右膝や衣服には、御堂の返り血は付いておらず、綺麗なものだ。

代わりに、紺色のカーペットに、御堂の鼻から出た粘液混じりの血が染み込み始めた。

すると、そこで動きがあった。

「あ……あ……」

なんと、地面に頬を擦り付けている御堂が、僅かながらも口を動かしたではないか。

瞬間、竜蔵の眼が鋭くなるも、それも直ぐに収まる……どう考え

ても、今の御堂には10の間に立ち上がるなど不可能だからだ。
実際、路上でも、こんなになってしまった相手に追撃することなど、余程の加減の効かない奴で無いとする事は無い。

故に竜蔵は、警戒心のために取っていた、意識下の構えを自然に解く。

これにより、勝敗はあまりにも呆気なく決した事になる。

別に、このまま竜蔵は御堂を放って置いて、多目的ホールを後にしたって良い。

だが竜蔵は、完全に落ちそうになっている意識の中で、こちらに何かを言おうとしている御堂に耳を傾ける。

「ま……まてや……こら」

おそらく、御堂の視界の中は殆ど竜蔵を捉えることは出来ていないだろう。

しかし、いまだ眼ではなく心に、折れていない闘争心が伺えた。

文字通り一撃で、文字通り5秒とかからない秒殺で、軽く一蹴されたにも関わらず、まだ闘う気がある事に、流石の竜蔵も驚きを見せた……同時に、面白い奴だとも思った。

故に竜蔵は、その場で膝をカーペットに着けた。

「終ってない、か……意外に、根性は有るんだな？」

「あ……う……」

そろそろ、意識も完全に沈んでしまおうだろうに……。

だが、御堂は土下座の体勢でカーペットにひれ伏したまま、なんとか動こうとしている。

それを見ていた竜蔵が、突然御堂の両肩を両手で掴んだ。

そして己が立ち上がると同時に、完全に体に力が入っていない御堂を軽々と立たせる。

足元だけを見ればフラフラだ……だが、竜蔵が掴み、支えることによって御堂は頭をグラグラとさせながらも何とか立っている。

正直、傍目から見れば危ない状況だ。

しかし、止めれるものが居ないのも事実だ。

すると、無理やり立ち上がらせた御堂と改めて視線を合わせた竜蔵が、相手に語りかける様に口を開いた。

「お前、ラグビーをやってみないか？」

瞬間、周囲にいた者達全員がポカンとした顔をする。

当然、御堂もと言いたい所だが、生憎、彼は表情を作れるほど、まだ回復してはいない。

「別に、すぐに答えを出さなくても良い。取り合えず、今の状態じゃキツイかもしれないが、俺に誘われたって事を覚えていれば、それでいい」

竜蔵は言いながら、今度は御堂の左手を、同じ左手で無理やり掴み取る。

握手だ。

「俺は桐嶋竜蔵、この学園のラグビー部に所属してる二年だ。今は左手同士だが、お前が本気でラグビーに来るのなら、右手同士で握手をしよう」

やっている事は馬鹿げているが、本人の表情は真剣そのものだ……本気で、御堂を勧誘している事が、それだけで周りにも伝わるほどに。

そして竜蔵は、今度はそのまま御堂を器用に担ぎ上げ、背中へと背負うようにした。

おんぶだ……それも、自分より背の高い者を。

「じゃあ、保健室に行くぞ」

そう言って、竜蔵はこれまでの事が何事も無かったかのように、多目的ホールを後にする。

残された者達は、皆啞然として、既に意識が飛んでいた御堂を拉致していく竜蔵の後姿を眺めていた。



実際、御堂が薄っすらとではあるが覚えているのは、左手で無理

やり握手させられた所までだ。

なんで、左手なのか？

それは、今の御堂には全く理解出来ない。

だが、なんとなく“あの人”にとっては特別なことなのであろうと、理解は出来た。

入学式後の事を薄っすらと思い出していたとしても、まだ頭はグラグラだ。

視界が、時たま霞がかかる事がある。

既に、無理をして動こうという気力は無くなっていた。

今は、動けるようになるまで、まだ傍に立っている白衣の女の言葉に甘えることにしよう。

そんな事を考えていると、また彼の瞼が眠ろうとする……。

別に、抵抗する必要も無い。

すると、御堂は再び、この部屋のベッドで瞼を閉じ、眠りに付いた……。

それを、隣で見下ろしていた女。

二橋学園養護教諭の岡崎胡桃おかざきくるみは、仕方が無いなといった表情で。

眠りに付いた御堂にかけてあった布団を、優しくかけ直した。

同時に、その御堂の右手にあった紙切れを、スツと取り出す。

預かった時も、そうであったが。

改めて読んでみると、また笑みが零れそうになる。

「ふふ、あの子も随分と変わったわね……」

まるで懐かしむ様に、大人の女性らしい魅惑的な微笑みを浮かべながら、岡崎胡桃は呟く。

あの子は変わった、本当に変わった……。

胸中で手の掛かった子供の成長を喜びながら、胡桃は眠っている御堂から離れ、ベッドを仕切っていたカーテンを閉める。

動き出す二人

「軽率ですね」

まだ日も昇ったばかりといった時間。

二橋学園のとある一室で、そんな相手の行いを冷たく咎める様な、女子高生にしては色気のある少々低い声が響いた。

部屋にある、天井に埋め込み式の照明は明かりを点けられておらず。

その代わりに、早朝の淡い春の日差しが部屋を少しだけ明るくしていた。

「なにが、でしょうか？ 私には身に覚えがありません」

部屋の隅……窓際の横に長いロッカーの上で、ゆったりと座りながら早朝の窓の外を眺めている女生徒が。丁寧な言葉遣いの割りに、ひょうひょうとした態度で答える。

部屋の扉付近で立っていた、最初に声を発した女生徒には、それが気に喰わなかったのか？

一瞬、その皺一つ無い白く綺麗な眉間に、歪みを見せた……が、すぐにそれは成りを潜める。

「昨日の夕暮れ時の事です。一体、何を考えているのですか？ 確か、“彼”は執行部の“手伝い”だった筈です。なのに、わざわざ自らの正体を晒そうなどと……本気なのですか？」

執行部の手伝い……この学園には、その様な役職を持った生徒は一人しかいない。

いや、正確に言えば、既に———既成事実として———存在はしていない。

おそらく、扉の方に立っている女性は、それを知らなかったのであろう。

故に、窓のすぐ下に設置してある、横に長いロッカーの上に座っ

ていた女生徒は。相手を嗜める様に、その事実を教えてあげる事にした。

「それは古い情報ですね」

「はい？」

「もう既に、“彼”は昨日付けで執行部のメンバーに入っています……まあ、まだ非公式という形ですが。昨日の会長の様子からすると、今日にでも呼び出して、正式な手続きを彼に踏ませる事でしよう」

窓際に座っている女生徒の言うことに納得がなかったのか。

扉付近に立っている女生徒が、信じられないといった様子で声を張り上げる。

「馬鹿な！ 本当に“彼”を正式な執行部のメンバーに入れるというのですか！？ 手伝いだけならまだしも、機密性の高い執行部の仕事を、“彼”の様な人間がこなせるとは思えません！！」

まだ早朝だというのに、こちらに向かって紛糾しだした相手に対して。

「“彼”の実力……というより、実践的な能力の高さはご存知でしょうに。それを評価すれば、彼の執行部入りは当然だと思えますが？」

窓際の女生徒は特に気にした様子も無く、ただ淡々と事実を述べるようにして、自分の考えを相手に伝えた。

しかし、やはり納得がいかないのか。

「それは所詮、ただのゴロツキ相手の荒事に限った話です。私達の仕事には、本当の武術家が相手だったり、武装した者が相手の時だってあるのかもしれないですよ？ それを“見世物”としてしか闘うことの出来ない者に……」

その、ここにはいない相手を見下しているような主張に……。

「なら、アナタは“彼”に勝てるというのですか？」

窓際の女生徒が、掛けていた丸眼鏡のレンズを、昇ったばかりの日差しに反射させながら口を挟んだ。

眼鏡の奥に見える瞳は、微かに鋭い圧力を、こちらに放っている。
「……今は、そういった話ではありません。“彼”が本当の執行部の仕事をこなせるかどうか？　です」

言葉通り、今の議題はそこではないと言ったのだが。

窓際の女生徒は、それをどこか含みのある声音で。

「答えられない……と。では、私なりに解釈するとしましょう」
自己完結する事にしたのである。

「どういう意味でしょうか？」

どうやら、扉付近に立っている女生徒には、その窓際の相手の態度が挑発にしか捉えられなかったようだ。

それを見た、丸眼鏡の女生徒は、口端を嬉しそうに吊り上げてしまふのを我慢しながら、胸中で悪戯に微笑んだ。

「どういう意味、ですか？　それは、私の解釈をアナタに伝えろという事でしょうか？」

わざとらしく、分かっているのがバレバレな芝居掛かった仕草と表情に、扉付近で立っている女生徒の鋭い目が、ますます鋭さを増していく。

下手をすれば、今の彼女の間に合いに入っただけで、何かに切られたと錯覚してしまいそうな程の威圧感と存在感が周囲に漏れ出る。

ただ立っているだけで、これなのだ……凜とした雰囲気を持つ彼女が、普通の女子高生などではない事を窺わせていた。

しかし、そんな怒気に近い感情を向けられたとしても、丸眼鏡の女生徒の表情どころか纏う空気も揺るぐ気配が無い。まるで、目の前で異常なまでの緊迫した間合いを一人で形成した女生徒が、取るに足らない実力だとも言うかのように。

「フフ。この程度で感情を昂ぶらせてしまうのですか……意外に短気なのは、昔からという事なのでしょう」

「……」

相手を茶化す様に、天井を仰ぎながら懐かしみ始めた女生徒を、もう一人の女生徒は油断無く見つめる……睨みつけるではなく、無

駄な感情、無駄な力、無駄な考えを一切削ぎ落とした、冷静な瞳。それは、どこか研ぎ澄まされた刃物を彷彿させるような、鋭く、妖艶な印象を持たせる切れ長の目で。異性が見たとしたのならば、その一点にしか興味を示さなくなってしまういそうな、そんな蠱惑的こわくてきで危険な魅力を宿していた。

しかし――――

「ですが」

この程度のものでは――――

「それがアナタの魅力でもあるのですよ？」

「ッ!？」

窓際に座っていた女生徒を、尻込みさせるどころか、“こちらの懷に潜り込ませなくする”事すら出来なかった。

いつの間にか自身の目の前に、三つ編みのお下げと丸眼鏡が特徴的な女生徒が、“仕方ない”といった表情で苦笑しながら立っていた。

いつロッカーから腰を離したのか？　いつ、この部屋の地面に足をつけたのか？　いつ、こちらに間合いを詰める踏み込みを行なったのか……その全てを捉えられなかった、理解できなかった女生徒の表情が強張る。

「そんなに驚かないで下さい。分かっていた事でしょうに？」

「……」

「もしかして、何も出来ずに間合いを侵されてしまった事が、そんなに悔しいのですか？」

首を傾げながら、拙いことをしたかなと、相手を心配した表情で訪ねるが。

一向に、返事が返ってくる気配が無い。

「フフ、やはりアナタは可愛いですね。そうやってすぐに拗ねたり悔しがったり、昔から素直な娘でした」

言いながら、丸眼鏡の女生徒は。既に顔を緩め、冷めた無表情へと変えた彼女の右頬を、左手で撫でる。

目の前で彼女を見ると、細く整った輪郭や、筋の通った小さな鼻、柔らかな唇に、先に述べた刃物を彷彿とさせる様な、切れ長でこわくてき蠱惑的な瞳が、有無を言わさぬ美しさを備えており。清らかな、それでいて凛々しい顔立ちをしている。

髪型は眉毛辺りで切り揃えられた前髪に、腰まで伸びた真っ直ぐな黒髪をしていて。

また、背も168?と女性にしては高く。キュッと締まった、柳腰と称しても過言ではない、高い位置にある腰やくびれに。見事反比例するかのように存在を強調させている、上向きの形の良い胸が、女性的な魅力を更に引き立たせていた。

「特に私は、勝負事に負けてしまったときのアナタが好きですね……」

言いながら丸眼鏡の女生徒は、目の前の触れ難い美しさを持つ女性の頬から、撫でていた手を相手の後頭部に回して、今度はきめ細かな彼女の髪を梳く様にして撫で始めた。

「一見気にしてないような冷たい表情を作って、内心では泣き出したいぐらいに悔やんでいる。今も、そうなのでしょうか？」

頭半分、背の低い位置から訪ねてくる丸眼鏡の女生徒。

しかし、好きなように撫でられている方は、その言葉を見做す。そんな態度を、愛しむ様に、丸眼鏡の女生徒は更に体を寄せる。もう、さっきまでの緊迫した間合いは、完全に瓦解していた。

すると、不意に丸眼鏡の女生徒が、後頭部の髪を梳くように撫でていた手を離し、その華奢な体も同時に離す。

いつの間にか、丸眼鏡の女生徒の表情が、こちらを愛しむものから、真剣なものへと変わっていた。

「無反応で詰まらないですね」

「……」

本当に詰まらなそうな溜息を一つ付きながら、目の前の相手を見つめる。

が、反応は無い……ただ、こちらに睨みつけるような視線を向け

ているだけだ。

おそらく、さっきのは凶星だったのであろうと、丸眼鏡の女生徒は当たりを付けた。

「では、私なりの解釈……もとい、見解を教えましょう。まず、アナタでは“彼”には勝てません、もちろん私にもです」

「ッ!？」

瞬間、こちらを睨みつけていた目が、更に強張る。

「私が、“見世物”である“彼”には勝てない?」

納得がいかない、腑に落ちないなどではなく、“ありえない”といった声音。

「相手を刀で、いかに効率よく、いかに確実に殺傷できるかを突き詰めた武術と。“彼”の現実的ではない、試合でしか役に立たない格闘技……比べるまでも無いと思いますが」

“彼”という人物と、己が修練している“もの”の違いを、当たり前といった様子で語る女生徒に。

相対している女生徒の苦笑が漏れ出した。

「そうですか。いかに効率よく、いかに確実に……ですか」

「なにが可笑しいのですか?」

明らかに、こちらの事を嘲笑っている相手に、切れ長な目を鋭く細める。

しかし、そんな視線などお構いなしに、相手は突きつける様に言い放つ。

「では、先の状況や、今のこの状況で。アナタは何回、私に殺されたと思いますか?」

「……」

「だんまり、ですか……アナタなら分からない筈が無いのですがね」
相手から答えが返ってこなかった事を、残念そうにする丸眼鏡の女生徒。

だが、それから一拍の間を置いて、相手の女生徒が口を開いた。

「……三回です」

「いいえ、ハズレです。正確には五回ですね」

「……」

即答で、紡ぎ出した答えを否定された女生徒は、唇を悔しそうに噛み締めながら表情を俯かせる……。

それは暗に、この女生徒自身が、丸眼鏡の女生徒の答えに反論は無い、正しいと認めた瞬間であった。

その様子を、真剣な表情で見つめる丸眼鏡の女生徒は。別に気にすることではないと、相手を慰める様な口調で言葉を続けた。

「私の言うことを理解できただけでも、アナタは進歩していますよ」
「……」

「ですが、これは相手が私ではなく“彼”だったとしても、殆ど同じ結果が出たことでしょう」

「そんな事！ 有り得る筈がありません！」

これには納得が出来なかったのか、俯かせていた表情を“バツ！”と上げると同時に、怒気を露にした。が、丸眼鏡の女生徒は冷静だ。

「まず、アナタは今、肝心な得物を持っていません。これでは言われても仕方の無い事でしょくに」

「ですが、私にも一応、無手の心得があります！！」

「一応のレベルで、“彼”に対抗出来るとでも？ でしたら、一度試してみると良いでしょう。“彼”なら喜んで受けるのでは無いでしょうか？ そうですね、丁度良い機会です、柔よく剛を制すを体現してみるのも悪くないのでは？ まあ、もっとも、“彼”の身体能力や鍛え上げられた肉体を、アナタの“一応のレベル”で抑えられるのかは保障しかねますが」

「……くっ」

奥歯で苦虫を噛み潰したかの様に、丸眼鏡の女生徒の言葉から引き下がる。

実際、理解は出来ている筈だったのだが、自分の修練している武術を馬鹿にされたようで頭に來てしまったのであろう……。

「そして、もう一つ……」

「……？」

「“彼”なら、アナタが無駄なことを喋っている、悔やんでいる間に。既に仕掛けている筈ですからね……今まで見てきて、彼が荒事に関わっている時は、様式美や空気など有って無きようなものでしたから。それは相手が自身より格下だろうが何だろうが、変わらなかった事の一つです」

冷静に、相手の習性を理解した上で、仮想を語る彼女の言には、不思議な説得力というものがあつた。

それに……と、続ける。

「アナタの立場が、私になったとしても、結果は同じかもしれない」

「それは……」

「有り得ない……いえ、有り得ます。まず、体格差は言わずもがな、実際のスピードは“彼”の方が早いと、私は考えていますから」

己の実力を知るものは、相手の実力も考慮した上で、イメージトレーニングを行なえる。

これは、どんな格闘技だろうがスポーツだろうが同じこと。

なぜなら自分のスピードやパワー、もしくはステップの歩幅や入り込みの速さやら……これらを知らない限り。例えば自分よりも格上の選手を想定してイメージをした場合でも、自身の実力を考慮しないで、いや、出来ないで、都合の良い試合運びしか想定しなくなってしまうからだ。

自身のスピードに相手は反応できる、自身のパワーや攻撃の仕掛け方は相手に通用する。そういった事を少しでも理解していると、またイメージトレーニングの“現実味”は増し、効率の良い有意義な、かつ、“甘くない”試合を想定できるようになる。

故に、相手を過小評価も過大評価もしなくなり、中立な立場で実力を判断できるのだ。

それを心得ているらしい丸眼鏡の女生徒は、まだ信じられないと

いった表情をしている、目の前の女生徒に至って真面目な声音で視線を向け続ける。

「これは、自身と“彼”を客観的に評価しての考えです。そんなに驚いた表情をしないでください……本当に合っているのか、自信がなくなってしまうじゃないですか」

「いえ……私はアナタの言うことでしたら、大抵は信じられます。ですが、こればかりは」

「フフ、そこまで信頼されると照れてしまいますね」

ほのかに紅く染まった右頬を、ポリポリと恥ずかしそうに人差し指で触れる……かなり芝居がかった仕草をする丸眼鏡の女生徒に、対峙している方かというと。

「あ、当たり前です……私は、アナタに育てられたと言っても、過言ではないぐらいに、お世話になっているのですから」

こちらにも、恥ずかしそうに顔を赤面させながら、その芝居がかった仕草を真に受けていた。

彼女の反応に、改めて——背もスタイルも負けてはいるが——「可愛いと思った丸眼鏡の女生徒は。もうちょっと遊んでみようかなとも考えたが、そろそろ時間も迫っていたので、話を切り上げるためにベに入った。

「ですが、安心してください。確かに身体能力では、圧倒的に“彼”の方が上でしょうが、こちらは真正面から闘うつもりはありませんから」

「真正面から闘わない、ですか？」

相手を真心から安心させるための、優しい口調。

それは、真に丸眼鏡の女生徒が、相手の女生徒を愛しているのかの様な暖かさが籠っていた……が、それは次には不敵な表情と共に、一変する。

「はい、私は何者か……それを忘れていないのですか、“さいえ冴島刀子”さん？」

冴島刀子と、丸眼鏡の女生徒に呼ばれた者は。

その彼女の絶対的な自信が内包された表情を見て、ようやく落着いた表情をした。

「なるほど……そういうえば、そうでしたね。木佐貫家第八代目女忍筆頭目“木佐貫千代女”先輩？」

傍目から聞けば、何を訳の分からないことをと感ずるかもしれない。

女忍……一般的に“くの一”とも呼ばれる、遙か昔に消えた名称。現在では、創作物などで登場したり、日本を勘違いした外国人観光客が、おふざけ程度に探している、そんな程度の言葉だ。

しかし、この場にいる二人は、そんな現実味の無い名称を、大真面目に受け入れていた。

冴島という女生徒に、木佐貫千代女と呼ばれた丸眼鏡の女生徒が。そろそろ話しも切り上げようと、視線を冴島から外しながら扉の前まで歩いていく。

「少し、今回の私の目的とは違った話になってしまいました。これで納得してくれましたか？」

扉の前で、視線も向けずに、背中越しで問いかける木佐貫……。

暗に、もう口は出すなといったニュアンスも感じられたが。

冴島は、それを無視する。

「千代女さんが、そう仰るのなら納得はします。ですが、一つだけ」

「はい？」

さっきまでの怒気を含んでいた声音とは、違った真剣みのある言葉。

それに、何かあるのかと振り返った木佐貫は。そこで、冴島刀子という洗礼された、凛々しく清らかな容姿を持つ女性の、本当の自信に満ちた表情というものを見る。

「“彼”……桐嶋竜蔵という男を、私に“試させて”下さい」

胸元に片手を添え、真に訴えかけてくる彼女の表情に、木佐貫は一度、軽い溜息を吐くと。

「良いでしょう。ですが、それは私の用件が終った後にして下さい

ね？」

それだけ言って、木佐貫千代女は嬉しそうに微笑みながら、この部屋を出た。

すると、途端に静寂に包まれる室内……まあ、いるのが一人だけになったから当たり前だが。

だが、しかし。

そこに一人残った、冴島刀子という女生徒の胸中には。室内を包む静寂とは真反対の、剥き出しの対抗心が芽生えていた。

（千代女さんに、あそこまで言わせる男か……楽しみというよりは、負けられないな、絶対に）

心で、そう決心をつけると。

冴島刀子は、学園内で所属している部活の朝練に参加するために、この部屋を後にした。



二橋学園の健康診断とは、まあ例に漏れず、皆体操着に着替えた後。

視力・聴力・身長・座高・体重などといった他に、心電図や後日の尿検査までを測定する。

また、その際に体の上からのサイズも測るため。この日の朝のために絶え間ぬ努力を三日間ぐらい限定で続けてきた女子の生徒達がいる。

そして現在、それら三日間限定で絶え間ぬ努力を続けてきた他の女子生徒達を、まるで嘲笑うかのような記録を残した者が、学園の保健室にいた。

「ウエスト……ご、54cmですって」

メジャーを持つ手を小刻みに震わせながら、敗北感と懐疑心の入り混じった表情で、信じられないと言葉を漏らす養護教諭、岡崎胡桃……。

目の前には、水分の吸収率と発散率が高められた体育着の上を捲った、黒髪の美少女が佇んでいた。

「あの、岡崎先生？」

「う、嘘よ……だって、この娘のバストは87？もあつたのよ？」

ありえるわけがない。そうよ、ありえるわけが……」

ぶつぶつと言いながら胡桃は、再び細いメジャーを目の前の美少女のウエストに巻きつける。

しかし、結果は変わらない……。

「そ、そんな……」

張りのある、透き通るような若々しい白い肌に、薄っすらと見える、お腹の筋……女性だけではなく男性ですら理想としか浮かべられない、奇跡のくびれが目の前で岡崎胡桃に、現実の厳しさ^{リアル}を教えていた。

それはもう、口惜しいや悔しいなどを通り越して、崇めたくなってしまう様な気持ちになるほどだ。

奇跡のくびれを持つ女生徒の後ろでは、既に同じクラス的女子達から、どよめきの声が上がっている。

「岡崎先生、次の人も控えているので、早く最後の方も計ってくださいませんか？」

一向に現実を認めようとしないう胡桃に向けて、目の前の女生徒が困ったように声をかける。

すると、それによりやく目を覚ましたのか。

「え、あ！ うん、ごめんなさいね、じゃあ最後も計っちゃうから……」

言いながら、胡桃は彼女のウエストに巻いていたメジャーを、今度の上とは違って下着姿になっているヒップの方へと下ろしていく。そして、胡桃は再びの絶望と、女としての敗北感を味わうのであった。

満足気な表情で鼻歌まで歌いながら、次の測定場所にまで移動をしているのは。

先程、新入生以外では大人の色気と悩ましいボディが有名な養護教諭、岡崎胡桃を絶望のどん底にまで突き落とした美少女。

その美少女は、長く真っ直ぐな黒真珠を思わせる髪と、女子高生らしい可愛らしい瞳や、細く整った輪郭が特徴的で。尚且つ、その体操着越しからでも十二分に確認できる、メリハリのある膨らみが、異性の視線を釘付けにしていた。

彼女がご機嫌な様子で、手に持っているのは健康診断の記入プリントだ。

体重・身長・スリーサイズ共に、そんじょそこらのモデルでは太刀打ちできない数値を叩き出しており、また先に述べたとおり、あの場にいた殆どの女生徒に劣等感を通り越した絶望感を与えていた。そして、その名前の欄には、桐嶋美夏きりしま みなつと記載されていた。

つまり、廊下を歩いているだけで、周囲の視線を釘付けにしていた美少女とは。

あの兄妹である竜蔵が大好きで堪らない妹であった……。

「ふっふーん♪」

「ご機嫌だね」

美夏が両手で覆うようにして、胸の前で記入プリントを大事そうに抱えていると。

隣を歩いていた木下藍が、きのしたあいこちらを少し沈んだ様子で尋ねてきた。それに、花が咲きそうなくらいの微笑みを浮かべた美夏が、“分かる？”と言ったふうに振り向く。

「だってえ、私が予想してた以上に成長していたんだもん♪」
「へー」

本人には悪気は無いのは分かるのだが、どうしても棒読みで白けた視線を向けてしまう。

そんな藍は、花も恥らう女子高校生だ。

「良いね、自分が思ったとおりに成長できてさ……」

「何言ってるの？ 藍だって、平均から見れば完全に嫌味を言えるレベルよ？」

高身長な筈なのに、表情に影が差し込むほど沈んでいる藍を見て、美夏が首を傾げる。

「へん……どうせ、それも“背の高い女”とか言われて、馬鹿にされるんだ」

へそを曲げたというよりも、不貞腐れ始めたと言った方が適当な藍の豹変ぶりを見て。

美夏は（あゝ、変なスイッチ入れちゃったかも）と、何に後悔したら良いのか分からないが、とりあえず後悔をしていた。

しかし、彼女のしなやかかつ機能的な肢体を見る限り。そんな馬鹿にしたほうが痛い目を見そうな、スレンダーな美しさがある……正直、美夏自身、彼女が持つそういった魅力には勝てないと踏んでいるぐらいなのだ。

何を落ち込む必要があるのか？ むしろ、その態度が周囲に劣等感や嫉妬を芽生えさせるのではないかとも思う。

「背が高いからって言っても、世界のモデルの人とか見ると、たまに180cmの人とかいるし、そんなに落ち込むことも無いんじゃないかな？ 実際、ウエストだってヒップだって負けてないんですよ？」

故に美夏は、事実に基づいた、彼女の正当な評価を自分なりの見解で伝えることで、慰めようとしたのだが……。

「でも、胸は負けてる……」

（あゝ……）

悲しそうに呟く藍に、美夏は返す言葉を見失ってしまった……。確かに、彼女の胸は小さくはある……だが、それは平均と比べたら大差は無い。

しかし、それは胸が出ているからとかいう次元の話ではない。ただ単に、藍の“もともとの胸囲”が、それぐらいあったというだけの事。

つまり、簡単に言ってしまうえば、彼女の胸は小さいということなのだ。

そんな胸の小さな藍が、今度は恨めしそうに美夏の大きくて形の良い胸に視線を向ける。

「世の中って、どうしてこうも格差があるんだろう。不公平だよね」「いや、それを言うのだったら、藍がやってる女バスだって同じ事なんじゃないの?」

「確かにそうだけどさ……納得いかないじゃん、こう、女として」「藍は別に女性としてダメって訳じゃないと思うんだけどな。顔だって、凛々しい感じの美人って雰囲気だし。もと自信持ちだよ」
もはや沈み続ける藍を、いかに慰めるかという難題になってしまった、この状況。

そこでふと、美夏は良い案を思いついた。

まあ、これは木下藍という、ボーイッシュな雰囲気を持ちながらも、確りと女性らしい凛々しさと清純を持った人物だからこそ、通用する手段なのだが。

しかし、思い立ったが吉日……この際、条件ありの手段だろうが何だろうが選んでられない。

自身の思いついた案を執行しようと美夏は、まだ他の新入生達が次の診断のためにゾロゾロと歩いている廊下に目を配らせた。

そして、目的のものを見つけたと共に声をかける。

「ねえ、竹島君……だっけ? ちよつと良いかな?」

「えっ!？」

美夏が声をかけた“もの”……それは、同じ1年A組の男子生徒だ。

ちなみに、なぜ“もの”なのか?

それはただ単に、美夏が“兄以外の異性を人として見ていないからだ”。

しかし、そんな美夏の事情などは知らない、声をかけられた男子生徒は。新入生代表挨拶の時や、現在の状況下でも一番目立つ、十

人が十人、美少女だと断言できる程の容姿をした美夏に。声をかけられただけではなく、名前も覚えてもらっていた事に、内心で小躍りしてしまいそうな程に胸を昂ぶらせていた。

「あのさ、素直な意見を聞かせてね？」

腰に片手を当てながら、人差し指を立て、相手に“これは重要だよ？”といった、あざといジェスチャーを取った美夏の仕草に。思春期真っ盛りの初心な男子生徒は、思わず顔を赤らめながら「おう！」と微妙に男らしい返事を返した。

おそらく、優美な容姿や纏う雰囲気とは違った、美夏の気さくな態度に。オドオドと動揺をしてしまったら、舐められてしまうかもしれない、変な誤解が彼の脳裏に浮かんだのであろう……まあ、彼女は舐めるところか、兄以外の異性などゴミ程にも思っていないのだが。

しかし、それと、高校での友人一号である藍を慰めるのとは話が別だ。

今は、どんなに兄以外の異性と話すのが面倒でも、優先すべきは友人なのだから。

「じゃあ、聞くね？」

「おう！ い、いつでも良いぞ……」

「よろしい、良い心がけだね……」

あまりの動揺で、米神に一筋の汗を垂らす男。

周囲では、その美夏に声をかけられた男に対する嫉妬心が芽生えていたが、美夏にとっては全く興味の無いことだ。

故に、美夏は男子生徒に、何の気兼ねもなく尋ねる。

「竹島君は、木下さん。藍の事、素直に可愛いと思う？」

「……え？」

受け取り様によっては、印象の悪い問いかけなのだが。

それは、美夏の嫌味のない声音や仕草、または微妙に心配している様な表情のお陰で、不思議と感じはしなかった。むしろ、友人思いの好意的な印象が持てたぐらいだ。

そして、美夏の問いに、男子生徒は全く持って迷いなく答える。
視線はもちろん、テンションのダダ下がっていた藍に向けながらだ。

「いや、普通に可愛いってか、美人だと思うけど？」

「ひゃいっ!？」

男子生徒に見つめられた状態で、そんな事を言われてしまった藍は。

これまでの暗い表情が嘘だと思えるぐらいに顔を紅潮させ、素っ頓狂な声を思わず出してしまふ。

「ほら言ったじゃない、藍は誰から見ても可愛いし美人な女の子なんだから、自信を持ちなっ♪」

「い、いや。そ、そそそんなこと! い、いきなり言われたって……」

あまりの驚きに歩いていた足を止めてしまった藍は。

こちらに嬉しそうな表情で、“言ったとおりでしょ”といった視線を向けてくる美夏に、声を萎ませてしまふ……。

昨日、今日と見てきて、彼女に活発で男勝りな印象を持っていた美夏は。この恥ずかしそうに顔を赤らめながら萎んでいく友人を見て、ちよつと面白いと感じてしまった。

故に、この面白さをもっと感じたいと思ってしまった美夏は。

「一人じゃ納得してくれないんだ……じゃあ、他の男の子にも聞いてみよっか!」

「ちよ!?! ちよつと待ってよ美夏!!!」

「え、あれ? 俺って、これだけ?」

もはや涙目になりながら、暴走しようとする美夏を止めようと、藍は走り出した彼女を追い始めた……幸い、この追いかっこのお陰で、美夏が他の男子に声をかける事はなかったが。

(何この娘! あたしが本気出しても追いつけないなんて!?)

チラホラという人の障害物を巧みなステップで避けながら走る二人。

だが、背も高く、足も前を走る美夏よりも長いはずの藍が、どうしても彼女の流れるような走りに追いつけない。

外見に似合わないピッチ（脚の回転数）やストライド（歩幅）もそうなのだが。

彼女の走りは、足を素早く入れ替えるたびに、腰まで伸びたストレートの黒髪が舞い、また、その大きく形の良い胸も揺れるために、周囲にいた男子生徒達の視線を釘付けにしていた。

しかし、そんな視線など関係ないといったふうには、美夏の表情には本当に楽しそうな笑顔が浮かんでいた……まあ、後ろを走る藍は、止まったら再び恥ずかしい思いをしてしまうので、若干の涙目を浮かべていたのだが。

だが暫くすると、突然、美夏の表情に笑顔はなくなる。

同時に、その動かしていた脚もゆっくりと止め始めた。

急に逃げなくなった友人に、何事かと思った藍は、そのまま止まった友人の隣までペースを落としながら歩を進める。

「……急に、どうしたの？」

美夏の隣へと歩いてきた藍が、その相手の顔を覗き込む。

瞬間、藍の背筋に嫌な悪寒が走った……。

「み、美夏？ 何か怖いよ？」

「え、何が？」

藍の震えた声音に反応こそするが、美夏は向けている視線を外そうとはしない。

表情は正に無表情……それも、精気というより感情を感じさせない、お面の様な無表情。

目は見開いたまま、ずっとある一点を凝視している。

流石に、この整った顔立ちをした美少女が、一切の感情を感じさせない表情をしている光景に、恐怖を感じたのか。藍が美夏の放つ空気から逃れるように、彼女が向けていた視線の先を追う。

すると、そこには本校舎と別の建物を繋ぐ渡り廊下があった。

この渡り廊下は、本校舎と別の建物の一階同士を繋いでいるため

に、外履さえあれば外に直接出れるよう、何箇所か出入り口のような所が見受けられた。

だが、美夏が視線を向けているのは、そんなどうでも良い所ではない。

視線の先には、彼女の兄である桐嶋竜蔵と“一緒に”隣を歩いている一人の女生徒がいたのだ。

ちなみに、他にも彼の友人らしき者達も近くに数人ほいたのだが、どうやら彼女には見えていないようであった……恋は盲目などという言葉では、全く持って片付けられない現象だ。

「ちよつとごめんね、藍。私、行かなきゃ」

そう言って、至って当たり前の様に兄がいる方へと行こうとする美夏を。

ガシ————藍が肩を掴む事で止めた。

「どうしたの、藍？」

「いや、行くのは別に構わないんだけど、まずはその“誰だろうと構わず虫の様に殺してしまいそうな眼”は止めてくれ。本気で恐いってか、これは誰だって止めざる負えなくなる」

静かな、それでいて透き通る様な声音で振り向いた美夏に、藍が額に汗を浮かばせながら言う。

「え？ 私、そんな眼なんてしてないよ」

カクンと、まるで人形の首が折れたかのように首を傾げる美夏。

不気味だ……また、それをやっている本人が、人形の様に造形の確りした顔立ちをしているから、余計に不気味だ。

だが、ここで彼女を野放しにしてしまうと、渡り廊下の途中で友人達と楽しげに談笑している彼女自身のお兄さんや、その周りの人たちに、確実に危害が及んでしまう。

まさか、この虫も殺さないような可憐な少女が、そんな事をするとは思えないが、一応念のためだ。

「とりあえずさ、早く次の診断に行こうよ、ね！ お兄さんと話すなら、また後でも良いじゃん！」

「え、あ、ちよつと藍!？」

藍は捲くし立てるようにしながら、美夏の肩から手を離し、今度はその右手を取って渡り廊下から離れていく。

そのあまりの唐突さに、抵抗する術もなく引っ張られていく美夏は。

「藍、放して! 私は、お兄ちゃんのところに行かなきゃいけないの!！」

「今は診断の方が先でしょ? 終ったら、それだけ早く帰れるんだからさ! 協力し合おうよ、ね!」

宥める言葉こそ、それっぽいものがあるのだが。相手の手を引っ張って、強引に歩いていく様は有無を言わさぬ……というより、どこか必死に見えた。

動き出す二人（後書き）

またイメージ絵です。

冴島刀子

> i 3 2 0 9 3 — 2 3 7 9 <

桐嶋美夏（ちょっと写りが悪かったやつです）

> i 3 2 1 0 3 — 2 3 7 9 <

カミングアウトに爆弾発言（前書き）

今回、下手ながらも描いた挿絵があります。

お見苦しいかもしれませんが、ご覧になっていただけると幸いです。

※行間というものを、少しだけ意識して書いてみました。

まだ見づらいという方がいらっしゃったら、気軽に意見を下さい。

それは直接、私の成長にも繋がるので。

カミングアウトに爆弾発言

新入生の健康診断は、特に問題も無く、順調に全生徒の診断を終えた。

ただ、一部の生徒……というより、木下藍にとっては、大変面倒臭い行事だったという事を、ここに一応記して置こうと思う――

理由は高校での最初の友人が、何やら人を殺しかねない雰囲気で、その友人の身内である兄の所へ歩こうとしていたのを阻止していたからであるが……まあ、それも暫くすると落ち着きを取り戻してくれた。

が、それは一時の安寧だった様で。

それから事あるごとに、友人はその身内である兄を見つける度、突入を繰り返し。

男友達で集団を作っていたのなら何事も無く済んだのだが。そこに一人でも女性がいると、また人を殺しかねない顔で歩み寄ろうとしてしまうので、何度も木下藍が必死に友人を引きずるという光景が見受けられた。

ただ数としては、そこまで繰り返した訳でもなかったので、助かったといえは助かったのだが。

何故このような事になるのか？――理由が全く分からない状況で、同じ事を繰り返していくのは辛いものがあつた様だ。

故に現在。

友人の原因不明の暴走に振り回された木下藍は、教室の自分の席の机の上で、ダラーっと疲れた様子で突っ伏していた。

彼女らの教室は、新入生の中でも成績優秀・中学時代に課外活動や校外活動などで高い成績を収めた者達が集められた1年A組。つまり、新入生内でのエリートを寄せ集めたような学級だ。

しかし、いくらエリートだと言っても、所詮高校生は高校生……周囲では、終わった健康診断や、昨日やっていたTV番組、はたまた既に学園の部活に入部している者達の話題で、ガヤガヤと騒がしい限りであった。

そんな中でも、名前順的に藍の前に席を置いている人物の周りでは。

入学早々、“可愛い彼女をゲットして他の男子達に優越感を感じられる薔薇色の学園生活”を夢見た、ちよっと軽そうな男子や、明らかにまだこういった事に慣れていないデビューしたての男子が集まっていた。

この光景を、突っ伏した状態で一段上の机から眺めていた藍……。中には、藍の眼から見ても（あ、ちよっと格好いいかも）だとか（へへ真っ直ぐで優しいそうな奴じゃん）だとか、そういった高評価の者達もいたのだが……。

その尽くを、美夏は小悪魔よろしくの当たり障り無い対応と微笑みで退けていた。

故に、退けられた男達の顔に無念の文字は無い……あるのは、無意味な希望を持たされた哀れな顔だけだ。

真に恐ろしい娘である。

しかし、そうなると藍には疑問に思う事がある。

（しかし、ホントにお兄さん以外に興味とか示さないよね……この娘）

昨日の入学式で的一幕。

新しい教室へと移動する際に、校門前で周りの目も憚らず、身内である兄の胸に飛び込み。そして傍から見ても恥ずかしいぐらいに甘えていた様子を藍は思い出していた。

それに今日も今日とて、次の診断がある場所に移動している最中

に、偶然その兄に会うと、毎度お馴染みの如く駆け寄る、または飛び込んで行こうとする……。

おまけに、その兄が他の女子生徒と仲よさげに歩いているだけで、不機嫌そうな顔。というより、人を殺しかねない危険な色を感じさせる表情になるのだ。

まだ何となくではあるが、藍はこの前の席に座っている友人の事を、ただのブラコンでは無いのではと感じ始めていた……まあ、まだ感じ始めた程度ではあるが。

「ねえ、どうしたの。そんなボ～っとしちゃってさ？」

「え？ ああ、うん」

思いの他、考える事に意識を向け過ぎていたのか。

いつの間にやら、件の友人、美夏がこちらに、椅子の背もたれに右ひじを乗せながら振り返っていた。

その機嫌の良さそうな声に、意識を思考の世界から引き戻された藍は、どこかまだ呆けたような返事を帰す。

しかし、あんなにもこちらに迷惑というより、労働力をかけておいて。どうしてそこまで機嫌よくいられるのであろうか？

藍は、そんな疲労により荒み始めた心によって生まれてしまった負の感情に、何の躊躇いも無く身を任せる事にした。

まだ出会って二日目の相手に、中々の度胸、思い切った性格である。

「いや、ちょっと疲れちゃってね……主に、あたしの前にいる困ったブラコン娘のせいで」

言いながら、一段下に座る美夏に、意地悪な視線を落とす。

「えっと、ホントにどうしたの？」

その視線の意味するものが分からなかったのか、美夏が困ったように聞き返す。

「……分からないの？」

聞き返された藍は、結構自分なりに皮肉を込めたつもりだったの

に、本当に分からなかったのかと、信じられないといった表情をする。

それに藍自身、一瞬可愛いと思ってしまう仕草で小首を傾げる美夏……。

だが、いくら何でも、あれだけの苦労をこちらに強いておいて（止めなければ拙いという義務感に駆られて）、全く自身の落ち度に気付いていない彼女を見て、藍の苛立ちが徐々に増していく。

故に彼女は、もう回りくどい言い回しなど捨てて、直接的な表現をぶつけてやると決意した。

「美夏さあ……本当に気付いてないなら、結構危ないかもよ？」

「え？」

「診断の最中にさ、何度か移動があったけど。その度に、美夏はお兄さんを見つけては突っ込んだりしてたじゃん？　しかも、お兄さんの近くに他の女の人がいようなものなら、すごい危ない顔してたんだよ？」

「……」

藍の直接的な指摘に、美夏は表情に苦笑いを浮かべながら固まってしまう。

おそらくさっきまでの自らの行動を、記憶の底から引き揚げているのであろう。

そんな彼女の様子を見て、藍はようやく（あ、やっと反省する気になったかな）と安心していたのだが……。

「藍？」

「うん？　やっと、謝る気になってくれたかな」

記憶の引き揚げを終えたのか、美夏がはまだ体操着姿の居住まいを正して、藍に視線を向けた。

藍は『おし、話を聞いてやろう』と、机に突っ伏していた体制から、椅子の背もたれに体を預けた、どこか偉そうに踏ん返り返った態度で美夏の言葉を待つ。

しかし、出てきた答えは……。

「ごめん、ちょっと私には何がいけないのか分からないよ……」
「はぁ!？」

本当にすまなそうにしながら発せられた、彼女の信じられない言葉に。藍が思わず驚きの声をあげてしまう。

危うく、椅子から転げ落ちそうなぐらいだった。

「そ、そんなに驚く事なの？」

キョトンと、こちらのリアクションに戸惑う美夏。

そんな彼女に、藍はこちらがキョトンとしたいわと、心の中でツッコミを入れながら。

「だって、どう考えたって私が見てきたどの兄妹よりもスキンシップというか、接し方が悪いけど異常なんだよ? 公衆の面前で飛び付いたり、お兄さんが他の先輩達と話している最中に、また飛び込んだり……終いには、さっきも言ったけど、他の女子生徒を殺しかねない眼をしてたんだよ?」

「えゝそんなの藍の気のせいじゃないの?」

「違う! 絶対に違う!! だってあたし、証拠に写メも撮ったもん!」

そう言いながら、藍は美夏同様、いまだ着ていた体操着の短パンのポケットから、自身のタッチパネル式の携帯電話を取り出した。

「ほら、見てみなよ!」

取り出したタッチパネル式の携帯電話を、手馴れた様子で操作しながら、藍はすぐに証拠である写真を美夏に見せた。

向けられたディスプレイを、『まさか、そんなことは無いでしょ』といった態度で確認した美夏は。

「……嘘」

あまりの事に、そう呟く事しか出来なかった。

藍が、こちらにかざしたディスプレイに写っていたのは、能面の様に表情を凍らせた状態で、その普段はハッキリと見開かれた可愛い、長い睫毛がチャームポイントの瞳には全くの精気が感じられない、日本古来のホラー映画を髣髴とさせる、自身の色白な顔で

あった。

>i32260—2379<

怖い、というより信じられない……。

この写真を見せられた美夏は、自身がしていた表情に自ら恐怖した……。

そこでふと、写真を見せられていた美夏が気付く。

「あれ？　これ、光の反射じゃない……よね？」

「え？」

美夏のどこか震えた様子の口調に、藍が向けていたディスプレイを、自身に向け直す。

だが戻したものの、目の前の友人が正直何に怯えているのか理解できていなかった藍は、暫くディスプレイと睨めっこを続けていたのだが。

「……なに？　この丸く光ってるのは？」

藍の表情が、気味の悪いものでも見たというふうに変む。

二人が見たもの……それは、写真に写っていた美夏のすぐ傍にあった、白く丸い発光体。

始めはただディスプレイが光を反射させているだけかと思っていた。だが、よく見てみると、角度をどんなに変えようと、写真に写っている白い発光体は消えやしない……。

流石に気味が悪いと思ったのか、藍はすぐさまその写真のデータを消去する。

「何だったんだろう……多分、ただの偶然だったと思うんだけど」自身が写っていた写真に、謎の現象が起きていた事に、気持ちの悪い思いを感じた美夏は。まるで自らに訴えかけるように推測を述べた。

「そ、そうだよ！　ただ単に、光が変な感じで写り込んでただけだって、きつとそうだって！」

こちら、この不思議な現象を偶然で片付けたいのか。誤魔化すように、わざとらしい笑みを浮かべている……ただ、その笑みはどこか引きつった様子であったが。

一刻も早く、こんな訳の分からない事は忘れたい。

そう考えた二人は、無理やりの話題転換を試みた。

「えっと……あ！　そういえば美夏の身体測定の結果って、結局どんな感じだったの？　あたし、ウエストの事しか聞こえなかったからさ！」

「そ、そうね！　えーと、その……こ、ここじゃあ言いづらいから、耳貸してくれるかな？」

藍の思い出したかのような言葉に、美夏が恥ずかしそうにしながら周りを見回した後。椅子から腰を上げて、藍の耳元に口を近づけた。

普段なら、どんなに嬉しい結果が出ていたとしても、こんな軽々しく情報を晒すような事はしないのだが。おそらく、今しがたの気味の悪い雰囲気、早く払拭したかったであろう。

だからこそ、藍の言葉通りに、自身のスリーサイズを小声で伝えたのだが……。

「……なんだけど。うん？　どうしたの？」

伝え終え、相手の耳から口をゆっくりと離れた瞬間。

なにやら藍の様子が不穏なものへと変わっていくのが、美夏にも確認が出来た。

具体的に言えば、彫りの深い目は影に隠れ、机に付いた両手の手の甲には力が入っているのか、数本の血管の筋が浮き出ている……更には、その女性にしては筋肉質であるが、意外と華奢な印象もある両肩がプルプルと、何かに打ちひしがれている様に震えている。

何事か……と、美夏が疑問に思った刹那。

「だああああッ！！！！！」

「きゃッ!？」

突然、藍が狂ったように……いや、狂った。

座っていた席から怒涛の勢いで立ち上がり、一つ下の段の美夏だけではなく、教室中のクラスメイト達すら驚かす大声を鳴り響かせた藍。

周囲からは、何事かといった視線を浴びせられる……が、今の藍にそんな事を気にする余裕は無かった。

「ほ、本当にどうしたの!?!」

「うるさい!! この非国民め!!」

「非国民!?!」

「あたしはね、このJapanという国を、侘び寂のある本当に謙虚で美しい国だと今まで信じて来たんだ!! だけどね、美夏。アタの体は、その古き良き侘び寂の精神を忘れた、非国民以外の何者でもない!! 返せ! あたしの好きだったJapanを返せ!!」

もはや涙目になって、美夏に指を突きつけながら、己が思いをぶちまける藍。どうやら相当、彼我の戦力差が絶望的であったのであろう。

それに、少しの間、訳が分からないといったふうに引いていたものの。

ここまで言われるいわれも無いと、美夏が反論しようと口を開こうとすると……。

『そうよ! 桐嶋さんは、もう少し“無意識な主張”を控えるべきだよ!!!』

『持っている者と持たざる者の差が、どれだけのものか知るべき!!』

『大体、トップに比べて、あのアンダーは羨ま……いや、反則だと思っ!!!』

『桐嶋さんのスタイルは、“校則で規制すべきレベル”!! そうしないと、私達の立場が……』

周囲のクラスメイト達から、悲痛とも称せる格差の撤廃運動が起こり始めた。主に、健康診断の際に保健室にいた女子達から。

そのあまりの勢いに、流石に当たり障りの無い付き合いが得意な美夏でも気圧されてしまう。

一体、何が起こっているのかと、突然の事だったために思考が混乱してしまふ美夏。

しかし、尚も彼女達の格差撤廃運動は怒涛の勢いを見せる。

『桐嶋さん！　どうやったら、そこまでのプロポーションになれるのか、私達に情報を開示して！！　でないと、あまりにも……』

『泣かないで！　泣いたら、私達は一生、この格差に屈しなければならぬのよ！！　今は最後まで立ち続けて、勝利を？ぎ取るの！』
何をどうすれば勝利を？ぎ取れる事になるのか？

今の彼女達に、そんな事は些細な疑問の様で。

既に美夏の席の周りには、無数の血の涙————に見えるだけ————を流した女子達が集まっていた。

「ちょ、ちよつと。皆、落ち着いて……」

もはや苦笑いどころか、本当に困った表情をしながら彼女達を宥めようとする美夏だった。

「落ち着いてなんかいられる訳が無い！！　大体、いくら高校生だからといって、まだ中学から卒業したばかりだっていうのに、どうしてそんなに立派に育ってしまったんだ！？　この学園での最初の友人から御願いだ！　どうやったら、そんなになれるんだい！？」

自身の席の後ろから、もはや言葉遣いがグチャグチャになり始めて来た、学園での最初の友人からの涙混じりの悲鳴が耳に届いた。

それに連られるかの様に、他方向からも、また同じような言葉が飛んでくる。

一体、この状況は、どうすれば収まるのか……今の美夏には、全くといって良いほどに手立てが無かった。

しかし、そこで美夏がふと、何かを悟り始めた……。

なぜ、体の発育が良いだけで、ここまで言われなくてはならないのか———

なぜ、皆にもそれぞれ魅力的な部分があるのに、そこばかりに拘

るのか――

大体、この体を自由にしているのは、敬愛する兄だけなのに――

そうだ、兄だけなのだ……なのになぜ、皆が皆、自分が負けたみたいと言っているのか？

私はもともと、兄以外の異性には興味も無いし、勝負をする気もないのに……。

そう、はなっから勝負をする気も無いのだ……。

なのに、なぜ？

あまりに不条理な立場に立たされてしまった美夏は、これらの思考が一気に脳裏を過ぎった瞬間。

バンッ！！――「落ち着いてって言ってるじゃない！！！！」

自身の机を両掌で思いつき叩き、怒気の混じった口調で、騒ぐ皆を一瞬で黙らせた。

ちなみに、この間中ずっと男子達は、関わり合いになりたくない和无視を決め込んでいた者と。もしかしたら、うっかり美夏のスリ―サイズが聞けるかもしれないと、聞く耳を立てていた者の二種類に分けられていた。

また、聞く耳を立てていた者に至っては、美夏が机を思いつき叩いた瞬間、ビクンと体を跳ねさせていた。

そんな外野の状況など知らない美夏は、先程悟った事を踏まえながらの反論を静かに開始する。

「皆が言いたい事は分かるには分かるけど、それは私にはどうしようもない事なの……聞かれても私は、これまで真剣に打ち込んだできた新体操以外、人と違った事をした事が無いから何も言えないし知らない」

シンと静まり返った教室内で、美夏の真剣な言葉が続けられる……内容は、この際どっかに置いておく事にする。

「それに、どうして皆、そんなに自分を下に見ているの？ 私から見れば、皆だって其々魅力的な部分があるし、十分に可愛いと思うよ？」

この美夏の真心からの言葉に、クラス中の男子達がウンウンと頷く……。

実際、確かにこの一年A組の女子レベルは高い。

それは美夏を筆頭に、藍や他の女子生徒達を見ても、誰しもが認める事であろう。

おそらく、あと一瞬間もすれば一学年中に広まり、様子を見に来る男子生徒たちも現れる筈だ。

そして何より、美夏の全く嫌味でない真摯な声音が、クラス中の生徒達に、それを認識させるだけの説得力を生んでいた。

美夏の表情に、少しの変化が現れた……。

これまで少しかだけ怒っていた表情から、どこかいつも通りの柔らかい表情に変わっていたのだ。

多分、皆がようやく自分の話を聞いてくれて、安心して始めたのであろう。

だが、ここからが本題なのだ。

これを言ってしまったえば、まだ入学二日目であつたが、そろそろ鬱陶しくなってきた男子達の浮ついた誘いを遠ざける事が出来るかもしれない。

そして、彼女達の負け犬根性も、元に戻せるかもしれない。

そう考えた美夏は、表情を柔らかいものから真剣なものへと変え、口をゆっくりと開いた。

「大体、立場とか格差とか、屈しなきゃならないとか……皆、ちょっと勘違いしてるよ」

この意味深な言葉に、教室中の皆が頭に“？”を浮かべ始める。

だが、美夏は止めようとはしない。

これは、色々と面倒が起きる前に、皆に向けてハッキリとさせておかねばならない事だからだ。

ハッキリさせておけば、自身の知らないところで変な嫉妬だとかを買わずに済むし。なにより、美夏自身、ここでハッキリと宣言しておきたいのだ。

故に、彼女は微妙に本音を言ってしまったては拙いところはオブラートに包んで、その言葉を口にする。

私、この学園にちゃんと好きな人いるから。

だから、その人以外見る気は無いもの――

瞬間、教室中の男子が言い知れぬ危機感にざわめき立ち。女子達は得意というより大好物な恋話が突然舞い込んできた事に、さっきまでの血走った雰囲気など何処吹く風で、嬉々とした表情をしながら、ある意味爆弾発言をした美夏に先を促そうと言い寄ってきた。

『え！ え！？ ホントに？ 誰なの！？ 同級生？ それとも先輩で！？』

『どんな人？ ねえ、他には絶対に言わないから！』

『芸能人でいえば、誰に似た感じ？ それだけでも良いから教えてよ！ 自分でいったんならさ〜♪』

本当に、さっきまでの空気は何だったのか？

もはや、クラス中の恋に恋する“才能ある”乙女達の中に。同じく恋をしている美夏を敵視している者などいなかった。

その様子に目の前で当てられている美夏は、やっぱり女の子は恋愛をしなきゃダメな生き物なのだと、謎の考えに至っていた……が、話を続けなければ、また同じような轍を踏むそうだったので、さっきとは違った意味で迫り来る彼女達に、気持ちの面で向き直った。

「えっと……じゃあ、絶対に他のクラスとかに漏らさないって約束するなら、学年だけは教えるよ」

瞬間、周囲でこちらを囲んでいた女子達が。まるでバリケードの様に固まり始め、美夏の声に耳を傾けた……どうやら、開示される

情報が先輩か同級生だけでも、盛り上がれば良いといった感じのようだ。

その様子を確認した美夏は、座った体勢から身を屈めて、なるべく外に声が漏れないよう、ヒソヒソとした声音で口を開いた。

「学年は一つ上……『もう一声』……それで、クラスはABCの内どれか『もう一声！ でないと、また騒ぐよ？』……じゃあ名前とか以外なら聞くけど？」

一年A組の女子達は、奇跡とも言えるチームワークで。これらの耳打ちにも似た小声でのやり取りを、皆に確りと共有させていた。

『じゃあ、どんな感じっていうか、どんな雰囲気の人かってだけでも教えてよ？』

「そうだね……背は私より少し高いぐらいだけど、かなり強そうな感じの人かな。だけど、それでいて優しそうな雰囲気がある人」

正直、これだけの情報で何が特定できると言うわけでもない。

だが、彼女達は皆一様に嬉しそうな表情で『頑張っ』たとか『誰か分かったなら、応援するよ』だとか、暖かい声援を、好きな人がいると公言した美夏に送っていた。

この時、美夏は。

このクラスの女子達はもしかしたら、乗りだけで生きているのかもしれないと、本気で思ったとか。

しかし、そんなクラスの女子達が騒いでいる中。美夏の席の後ろに座っていた木下藍は、どこか考えに耽っているような表情をしていた。

（美夏より背が少し高く、かなり強そうな感じの人って……）

もしかして……と、考えが浮かびそうになるも、藍はそれを胸中で頭を振りながら否定する。

まさか、そんな事はあるわけが無い。

いくらなんでも、常識を一応は弁えている彼女が、そんな事を考えているわけが無い。

“どんなに仲が良さそうでも”、それだけは無い……。

これらの否定は、藍の思考の中だけで繰り返される、決して外には漏れないもの……。

故に、この時の藍は、なんの確証も得ぬまま、巡らせていた思考を一旦止めるのであった。



全学年の健康診断も、何事も無く無事に終わり。

現在は様々な生徒達が部活や委員会活動、または帰宅と……それぞれの放課後を過ごす時間帯となっていた。

所々から聞こえる、学園の時間から開放された生徒達の会話。

そのどれもが、どこか嬉しさを帯びたものであり。また部活動に向かう者達からも、嫌々といった声音ではあったが、本質はやっとな好きな事に取り組める時間が来たといった様な気持ちが伝わってくるものであった。

そんな中を、部活の仲間達には『呼び出しをくらったから少し遅れる』とだけ伝えていた、ラグビー部所属の桐嶋竜蔵が歩いていく歩き、到着した場所は本校舎の四階……その屋上へと出られる扉の前。

正確には、四階の階層から一つ上がった所にある、薄暗い空間。さっきまで聞こえていた生徒達の活気が、不思議と耳から遠のいていく。

だが竜蔵の表情には変化は見られない……ずっと、ここに来るまでと同じ、少々眉間に皺のよった機嫌が悪そうな仏頂面だ。

なぜかと言われれば、昨日の脅迫とも取れる文章が書かれた、一枚の紙切れが原因であろう。

内容は、来なければ昨日、竜蔵のプライベートで起こった事や、執行部の事をバラすといったもの。

正直、昨日の Pasta 専門店で出来事も誰にも知られたくは無いが、それより執行部の事を外部にバラすといった内容の方が、竜蔵

には少しだけ看過できないものであった。

二橋学園の執行部……まだ昨日までの竜蔵は、名目上“手伝い”といった立場に無理やり就かされていただけに過ぎないが、その存在がどれだけ重要なのか、一応は理解できている。

執行部の重要性。

それは、この学園都市という街には“警察が存在していない”という事に起因している……いや、正確には警察官・自衛官・消防隊員などを学生のうちから目指している者達が通う専門学校があり、それらが実習・研修科目として、街の至る所に設置された交番を使って、警察に似たような治安維持活動はしているのだが。

学園都市の執行部とは、これらの活動とは違ったものを重点的に担当しているのだ。

それは、この街に来る外部からの脅威への対応……もつとハッキリと言ってしまうえば、学園都市の創設者である二橋家に連なる名家に対して、様々な仕事を弄してくる相手に、学園内で対応・解決していく組織である。

この様々な仕事を弄される二橋家や、他の名家とは一体のどのようなものなのか？

それ自体は竜蔵は把握していない……が、何故か竜蔵の所属する日本最大の勢力と門下生を誇る空手団体“真道会館”しんどうかいかんの館長や。日本だけではなく世界からも注目されている格闘技団体『JUDGE』を取り仕切っている人物から、直接に『彼らの言うとおり、執行部の活動に参加しておけ』と指示を出されているのだ。

いくら竜蔵でも、自身が所属する団体のトップから指示を出されては断る事は出来ない……それに、これだけの……格闘技という限られた枠ではあるが……大きな勢力が、参加しておくと推してくるのだ。ただの金持ちな家柄という訳でもなさそうだと、竜蔵は考えている。

また、竜蔵がこれまで執行部の“手伝い”として割り当てられていた仕事も。仕事を弄してくる相手が、よく陽動として使う街でチ

ームを組んでいるチンピラなどが相手だったのだ。所詮は手先で捨て駒として利用されていた者達、情報を吐かせようにも、出来ない事を竜蔵は既に学んでいる。

これらの事を踏まえて言えば、竜蔵は実は執行部の事を良くは理解していない……が、その“手伝い”として使っている者にすら情報を与えてくれない事から、影に包まれた組織、悪く言えば碌な組織でない事は理解しているつもりだ。

後は、この執行部という胡散臭くて碌でも無さそうな組織では、“暴力”といった行為が“プロの格闘家”でもある竜蔵でも、何の問題も無く許されてしまうという危ない傾向もあると言う事だけだろうか。

故に、限られた知識ではあるが、竜蔵はこのようなきな臭いにも程がある組織の公表を良しとはしない。

もし公表されてしまったら、そこに所属させられた竜蔵自身、色々と立場的に拙いものがあるから、という理由もあるが――

そして現在。

竜蔵は、そんな学園でも全くといっていいほど知られていない組織の人間から、直接呼び出しを受けている。

今までは二橋学園の生徒会長である、二橋姫樹からの命令もといお願いで色々とやり取りはしていたが。執行部のメンバーと直接顔を会わすのは今回が初めてのことだ。

また、昨日胸ポケットに入れられていた紙切れに書かれた、“忍者”という既に廃れてしまった名称が、竜蔵に更なる警戒……ではなく、懐疑心を与えていた。

だが、これから学園でもきな臭い組織の相手と対面するのだ、警戒はし過ぎても問題にはならないだろう。

そう考えた竜蔵は、慎重に……いや、普段通り何も考えずに、目の前の鉄製扉のドアノブを回した。

瞬間、開かれた扉の隙間から、屋上特有の強い風が入り込んでく

る。

無風の状態から、突然全身にちよつとした圧力を感じるほどの風を浴びた竜蔵であったが。少しでも目を細めるといふ行為以外、特に何もリアクションは取らなかった。

そして、竜蔵がいた薄暗い空間と屋上を仕切っていた鉄製扉が、完全に開かれる。

鉄製扉を開いた竜蔵の視界には、まだ昼が少し過ぎた辺りの日中の日差しが照りつけた、屋上の風景が広がっていた。

特に何の変哲もない、大型の給水タンクと空調装置であるコンプレッサー以外、何も置いていない、寂しくもどこか落ち着けそうな場所。それが、二橋学園の屋上だ。

周囲の囲いは背の高いフェンスで仕切られている……そして、そこに一人の女子生徒の姿があった。

女子生徒は、屋上へと出てきた竜蔵の正面に位置するフェンスの前で、こちらを向きながら静かに立っている。

屋上風に吹かれ、揺られる彼女の黒髪であったが。当の彼女自身が、それを気にした様子は見せず、ただ風に吹かれるままに長い三つ編みの黒髪を揺らしている。

特徴的な大きな丸眼鏡や、少し控えめな背丈に華奢な体つき……そこだけ見れば、ただの目立ちそうにない“普通っぽい”女子高生で済ませられるのだが。

どうやら、竜蔵の目には違った少々印象に映っている様であった。（良い立ち方だな……重心が確りと足の裏が安定した中心になっている）

もはや職業病に近い観察眼。

竜蔵は彼女の立ち姿を見た瞬間に、そんなところから見始めた……。すると、向こうもそんな竜蔵に気付いていた様で。

「こんにちわ。こうやって二人で話すのは、初めてですね」

風に揺られていた黒髪を押さえながら、眼鏡越しにこちらに視線を向けてくる三つ編み少女。

彼女は確か、以前入学式後に校門前で、生徒会長の姫樹の後ろに控えていた生徒会メンバーの一人だ。

名前は、木佐貫千代女といったか……竜蔵は彼女の容姿や声を確認すると、記憶の中から彼女について知っているだけの情報を引っ張り出していった。

「アンタが？」

記憶を引っ張り出した竜蔵の短い問い。

だが、どうやらこれだけで通じた様で。

「はい、昨日はお楽しみだったみたいです」

本来なら皮肉混じりの微笑みで、竜蔵をからかえる様な台詞なのだが。彼女の顔に、表情という表情はなく、全くの興味を感じさせない無表情であった。

「人のプライベートを覗いておいて、なんの悪びれも無しか……」

「ええ、私は良く趣味が悪いと言われるので」

「自分で言うかね、普通」

他愛の無い会話を続けながら、竜蔵は屋上の地面を歩き、彼女の前まで来た。

間合いにして、約4歩分の距離。

あと一歩進めば、まあギリギリ仕掛けられる程度の距離だが、竜蔵はそれ以上の歩を進めなかった。

それに、始めて彼女が感心したような表情をする。

「流石です、やはり気付きましたか」

抑揚の無い賞賛に、竜蔵は鬱陶しそうにしながら。

「よしてくれ。こんなので褒められても、何の自慢にもならないから」

「いえ、相手が隠している手を感じて察知し、それを警戒しながら、なるべく安全な間合いで進む足を止めておく……普通の人間では、こうはいきませんから」

「そうか？　こういう事は、結構その辺のチンピラでもたまに出来る事だぞ？」

「路上^{リアル}な実戦で得た感、ということですか。これは、私達武術に精通する人間とは違ったものですね。素直に興味深いです」

感心……しているのだろうか？

だが、彼女。

木佐貫千代女は、竜蔵と対面しながらも、制服であるブレザーの懷から、一本の“クナイ”を取り出すと。そのまま自身と竜蔵が立っている、ちょうど中間辺りに、それを放り投げた。

簡単に得物である——物珍し過ぎて、別の意味で驚いたが——
——“クナイ”を捨てた彼女を見て。

竜蔵はその行動から、おそらく自分は試されたのであろうと当たりを付けていた。

自身よりも遥かに弱そうな相手に、それをされたという苛立ちを覚えながら。

「すみません。やはりお気に触りましたか」

あまり気にしては無さそうな物言い……だが竜蔵は、苛立ちこそ覚えてはいたものの、これを無視する。

「俺も待たせてる身だから、単刀直入に聞くけど。何の用だ？　いや、そういうば先輩だったな。何の用ですか？」

「今更、私の事を先輩と見なくても良いのですよ？」

「分かった、なら早く教えろよ。こっちも忙しいんだ」

先の冷静な危機探知や状況判断能力を、自然と披露していた者とは思えない、どこか落ち着きの無い言動。

だが、相手方の木佐貫も、竜蔵がそういった男である事は理解しているようで。

「そうですね、こういった事は、やはり早めに済ませた方が良いでしょうし」

「……」

もはや聞きの体勢に入ってしまった竜蔵に、少しだけ微笑みなが

ら、木佐貫は本題に入った。

「アナタの言うとおり、単刀直入に申します……まあ、もともとはアナタの正式な執行部入部に、歓迎を込めた挨拶をするという事が用事でもあったのですが」

「……」

「今のアナタの感覚や立ち居振る舞いを見て、事情が変わりました」
相手の言葉を聴いてはいるが、どこか不機嫌な表情の竜蔵に対して、木佐貫千代女は一拍の間を置いた後に……。

私と子作りをしませんか？——「ブーッ!？」

そんな、うら若き、花も恥らう女子高生が直接口にするとは俄かに信じ難い爆弾発言を、目の前の竜蔵にしたのだった……。

同時に、この場にはいない竜蔵の妹が、一瞬だけ言い知れぬ悪寒を感じていたのは、言うまでも無い。

経験の差

私と子作りをしませんか？——「ブーッ!？」

あまりに率直、あまりに突拍子も無くストレートな表現で発せられた言葉に。

屋上風が微妙に鬱陶しい、この場で竜蔵は思わず吹き出してしまう……。

結構、先程まで彼なりに真面目に凄む、というより威圧しながら急かしていただけに、これは少し情けない反応になってしまった。が、いきなり何の脈絡も無く、こんな事を言われてしまえば、誰だって吹き出すというもの。

「な、何言い出すんだよ！ お前!!」

狼狽する自身を隠す事も無く、とんでもない爆弾発言をした相手——木佐貫千代女きさぬきちよめに声を張り上げる竜蔵。

しかし、当の本人は全く気にした様子も見せずに。

「だから、私と子作りを……」

「分かってるよ！ 俺が聞きたいのは、どうしてさっきまでの流れで、そこに行き着くのかだ!？」

頭のネジが、一本どころか全て吹き飛んでいるのではないかと口にしそうになるも、それは流石に自重した。

「流れも何も、あれを含めたのが、今回の私の目的です」

「えー……」

しれっと言う木佐貫、もはや反応するのも馬鹿らしくなった竜蔵。だが、彼女はそんな竜蔵など放っておいて、話を進めてしまう。

「執行部への正式入部など、もともと会長が計画していた事です。私にとってはあまり関係の無いものなのです」

初耳だが、なんとなくそれは理解していた……。

もともと、竜蔵が執行部の手伝いをやらされていた理由は、彼自身が起こした問題による罰だったのだが。最初に『お咎め無しの代わり』として強制させられた時から、薄々こうなるのではないかと感じていたのだ。

故に、ここには驚きはしなかったが。

「私に関係……というより私の家、木佐貫家に大きく関わる事が。今しがた私がアナタに尋ねた、“子作り”という訳なのですが……ついて来れていますか？」

「いや、全然……てか、ついて行く気も無い」

「そうですか」

もう何かなんやら分からなくなったと、考える事、話を聴く事すらも放棄し始めた竜蔵に。

木佐貫は、どこか寂しそうな声音で相槌を打つ。

だが、どうやら彼女には引けない理由があるようで。

「でしたら、アナタはそのままいてください」

「？」

言いながら、木佐貫は竜蔵の傍まで歩み寄っていく。

目の前で足を止めた木佐貫は、竜蔵の身長よりも10?以上小さくて華奢な体型だった。

しかし、優美な曲線を描く背筋や、竜蔵が第一印象で感じた、軸の確りした立ち方が、彼女の存在感を外見以上に高めている。

心なしか、彼女の方から竜蔵の鼻孔に甘い香りが、風に乗って流れてきていた。

どうやら、丸眼鏡に三つ編みといった地味な外見の割りに、女性らしい所には氣遣っているようであった。

すると、目の前でこちらに視線を合わせていた木佐貫が、おもむろに膝を折り、身を屈める……。

それも、“竜蔵の社会の窓を開けながら”――――

「おい」

「こう見えても、私は“床上手”で有名なのです。必ずやアナタを

満足させた上で、目的を果たさせてもらいますので、暫くの間、大人しく……」

何やら開けた社会の窓に、木佐貫が手を突っ込もうとしたところで、竜蔵が彼女の頭を上から掴んで引き離す。

あ……と残念そうにポツリと漏らしながら、頭を竜蔵に掴まれた木佐貫。

それを、無表情のまま見下ろす竜蔵。

「どうかしましたか？　もしや、こういった事には興味が無いと？」

「興味が有る無いの前に、ありえないだろ？　なあ？　いきなり屋上で人の社会の窓開くとか」

「いえ、私独自の調べでは。こういった誰もいない屋上で、男女が二人になった場合は。大抵が“合体”するという記録が……」

「どこでどう調べれば、そんな所に行きつくんだ？　ド田舎の Yankee でも無しに、普通はそうはいかないぞ？　てか、なんだ？　お前にとって、屋上ってのはラブホテルと一緒にみたいなものなのか？」

「おやおや、社会の窓は開けても、どうやら心の窓は……」

「上手くもねえし、勝手に開いたのはそっちだろ」

怒鳴りたい気持ちを抑えながら、先程から謎の行動しかしてこない木佐貫の頭を、竜蔵は放した。

すると、膝を曲げ屈んでいた状態から、ペタンと後ろに尻餅を付いてしまう木佐貫。

同時に、何かのチャンスだと感じたのか？

わざとらしく脚を崩し、上から見下ろしてくる竜蔵に履いているスカートの中身を見せ付ける。

しかし、竜蔵はそれを冷めた目で見下ろす。

「これも効果が無いと……ふむ。ここまで私の“セックスアピール”が通じないとなると。もしやアナタは……」

「そこまであざといパンチラじゃあ、誰だって冷めた目で見るわ。大体、さっきからなんなんだ？　お前、本当に大丈夫か？」

側頭部を右の人差し指でトントンと叩くジェスチャーで、相手の

正気を疑う竜蔵。

しかし、木佐貫にはどこも堪えたところが無く。

「同性愛者という可能性を否定したとなると……もしや！ 私自身に、桐嶋さんを欲情させる魅力が足りないと！？」

世紀の大発見でもしたかのように、一人で盛り上がり始める彼女に、竜蔵は逆に冷静な表情で、うんざりとする。

一体、目の前の執行部を名乗る女は、何がしたいのか？

まさか、本当にナニがしたいだけなのか？

なら、据え膳食わぬは男の恥として、今から頂いても良いかもしれない。

だが生憎と、竜蔵はそういった軽率な行動を取る人間ではないのだ。

「なあ？ いい加減、ふざけるのは止めてくれないか？ こっちだって、部活の連中に遅れるって断ってまで来てるんだぞ？ 本題に早く入ってくれ、頼むから」

心の底から早くしてくれと……まるで懇願するかのように、頭をボリボリと掻きながら言うが。

どうやら、この懇願は相手にとっては別に意味を成さなかった様で。

「いえ、ですから、私の目的は執行部としての挨拶や歓迎などではなく。アナタとの子作りですと、先程に言っただけですが？」

「それが意味分からねえって言ってんだろ！？ ちゃんと伝わってるのか俺の話は？」

しれっと当然の如く言う彼女に、竜蔵は遂に怒鳴り声を上げてしまう。

普通の女性ならば、竜蔵の様な風貌の男に怒鳴られれば、身動きの一つでもする筈なのだが……そういった可愛らしい動きは一切見られない。

むしろ、冷静な眼差しで、こちらを見上げているだけだ。

その様子に、竜蔵はまともに取り合うのも馬鹿馬鹿しく思ったの

か。

制服の胸ポケットから、昨日渡された一枚の紙を取り出す。

「はあ……とりあえず、ここに書かれた通り、俺はちゃんと屋上に来たんだ。約束は守ってくれるんだな？」

取り出した紙を広げながら、地面に座っている相手に書かれている文章を見せる竜蔵。

「ええ、それはもちろん。というより、もともと執行部の情報を表沙汰にするつもりはありません。してしまったのなら、私が二橋家の方々に消されてしまいますからね……おっと、今のは他の人に漏らさないでくださいね？」

わざとらしい……いや、絶対にわざとだと分かる彼女の仕草に、竜蔵は再びゲンナリとする。

知っていてもしょうがない事だが、知ってしまったては拙い感じの情報……。

二橋家ということは、あの生徒会長、二橋姫樹の実家の事であろう。

だが、ここでその様なことを追求しても、仕方の無い事は理解している。

そう考えた竜蔵は、相手に見せていた紙を、その辺に捨てると。もう用はないと言外に語りながら、彼女に背を向けた。

「だったら、俺は部活に戻るぞ？ アンタの目的とやらは、俺を当たってくれ。俺はパスだよ」

相手に背を向けながら、右手をフラフラと上げて揺らす。

そしてそのまま、竜蔵は屋上から出るために、歩を進め始めた……が。

そう急がないで下さい、まだアナタにはいてもらわないと困ります——「ッ!？」

突然、自身が振り返ったことで、後ろにいた筈の木佐貫千代女がいつ移動したのか？　いつ、こちらに振り返っていたのか？　それすらも、分からないぐらいの動きで、竜蔵の目の前に立ち塞がっていた。

彼女の佇まいに、一切の乱れは感じられない。

という事は、今の現象は彼女にとって、ごく当たり前の事だったのか？

様々な推測が頭の中で駆け巡るが、それよりも早く、竜蔵は彼女との間合いを本能としか表せられない反応速度で取っていた。

距離にして、さっきよりかは近い3歩半。

その気になれば、中段蹴り（ミドルキック）を、ステップ込みで蹴り込める距離だ。

だが、まだ竜蔵は相手に危害を加えようとも、そのために構えを取ろうともしていない。

ただの自然体で、また木佐貫と向きあっていた。

「良い反応ですが、とりあえず、まだ私の話し……もとい、こちらの用件は終わってはいません」

「……」

先程と変わらぬ、冷静な声音に竜蔵は沈黙で帰す。

どうやら自然体ではあるが、完全に警戒し始めてしまったようであった。

お前は自然界に住む動物か、というツツコミが、木佐貫と喉下まで這い上がってきていたが、彼女はそんなキャラではないため、あえなく消沈していた。

「まあ、用件とは言っても、先程の様な性交渉をするつもりはありませんので……（いずれは、必ず“して”もらいますが）」

最後のほうは聞き取れなかったが、どうやらもう、子作りだとかふざけた事は抜かさないらしい。

それを信じた竜蔵であったが、まだ警戒心を解こうとはしない。まず、プロでもある自身の前に、全く持って確認できないほどの

入りで現れたのだ。

警戒をするなという方が無理な話だ。

だが、そんな竜蔵などは他所に、木佐貫は徐に屋上の出入り口の方へと視線を向けた。

「そろそろ出てきたらどうですか！ さっきから恥ずかしがって出て来れないのは丸分かりですよ！」

どこかやる気を感じられない、間延びした呼びかけをする木佐貫。おそらく、この出入り口である鉄扉の向こう側にも聞こえるように、彼女なりに声を張っているのだろうが……いかんせん、やはりどこか覇気に欠けるところがある。

しかし、どうやら鉄扉の向こうには声が届いていたようで。

ギィ……。

屋上風を押しのかけて、屋上の出入り口である鉄扉が開かれる。

しかし、開かれた部分は僅かな隙間だけ。

まだ、扉を開けた人物は確認できない。

「そんなに心配しなくても、別に“行為に及んでいる訳ではないですし”。彼との交渉も決裂してしまったので、早く出てきてください」

まるで相手を諭すように、扉の向こう側へと声を掛け続ける木佐貫。

すると、彼女の説得が功を奏したのか、重い鉄扉がゆっくりと開かれた。

「お前は……」

重い鉄扉を開いて出てきた人物に、竜蔵は思わず声を漏らしてしまふ……。

「これから桐嶋さんには、彼女と闘って頂きます。いわゆる、実技試験の様な感じですね。私達、執行部からの腕試しという訳です」

竜蔵と扉から出てきた人物の視線の邪魔にならないように、横に

身を引きながら、木佐貫が説明をする。

竜蔵の視線の先……そこには、開いたドアノブを放したばかりの、木刀を持った一人の女子生徒が立っていた。

昼過ぎの日差しを煌びやかに反射する、黒曜石を思わせる長く真っ直ぐな黒髪に。研ぎ澄まされた刃物の印象を持つ、切れ長な目……細く整った輪郭や、透き通るような白い肌。

また、体型も華奢に見えるが、なかなか凹凸の有る、スレンダーかつ女性的な膨らみも確りと持った、モデルの様な体型なのだが。それよりも、竜蔵には彼女の出で立ち、とりわけ木佐貫と同じように安定した背筋や重心に目を奪われていた。

正直、かなりの美人……竜蔵は彼女を見た瞬間、胸中でそう呟かざる負えなかった。

しかし、竜蔵は彼女の事を別に知らなかったわけではない。

「冴島刀子か……まさか、二年で一番有名な女子が、執行部に関わってたなんてな。意外通り越して、ビックリだわ」

竜蔵に名を呼ばれた女子生徒、冴島刀子は。

そんな意外そうな声音で、こちらを見ている竜蔵に、同じく視線を向けながら。

屋上のコンクリートの地面を、一步一步、静かに、されど優雅に歩んでいく。

その間も、一切の軸のブレを感じさせない……明らかに、意識をした歩き方をしていると、竜蔵は当たりを付けていた。

「まあ彼女は私と同じく、二橋家に仕える分家の一つで、冴島家の長女ですから。当たり前と言えば当たり前なんですけどね。知らなかったのなら仕方ないですが」

冴島と木佐貫を挟んで向き合う中。竜蔵はずっと、彼女の目に視線を向け続けていた。

（こう見ると、抜き身の刀みてえな女だな……）

冴島刀子という女性に対して、竜蔵が浮かべた第一印象がこれだ。事実、彼女が醸し出す、独特な張り詰めた雰囲気は、どこか日本

刀の様な魅惑的な印象がある。

そう考えると、竜蔵が思い浮かべた第一印象は、間違いではないのかもしれない。

だが、竜蔵が彼女の目を見続けていると。突然、彼女が顔を赤らめながら、恥ずかしそうに視線を外し始めた。

「うん？　どうかしたのですか？」

それに、不思議そうに反応する木佐貫。

竜蔵もまた、（なんだ？）と疑問に思っていたのだが……。

「いえ、その……なんと言いますか」

言いながら、ゆっくりと原因であるものに指を示す冴島。

二人は、その今にも爆発してしまいそうな程に恥ずかしがっている彼女が指し示した場所に、目を向ける。

そこは、竜蔵の下半身……とりわけ、先程から開きっぱなしであった社会の窓であった。

「あ、すみません。閉めるのを忘れていました」

開けっ放しの社会の窓を確認した木佐貫は、まるで何事も無かったかのように竜蔵のズボンのファスナーを上げる。

まるで少しだけ閉め忘れていた窓を、自分が一番最初に気付いたから閉めますといった動きであった。

「おい」

「はい、なんででしょうか？」

冴島に指摘された部分を直し、再び横に身を引こうとしていた彼女に。竜蔵があまり抑揚の無い低い声音で、彼女を呼び止めた。

心なしか、眉間にかんりの皺が寄っている。

「さっきから、なんで俺の股間を、そうやって平気で触れるわけ？」

「おや？　おかしいですね……男性の方は、よっぽどの容姿をしていない限り、異性に股間を弄られて嫌な思いはしないと認識していたのですが」

「……」

おかしいのはアンタだと、思いっきりツツコミを入れたところ

であつたが。不思議と、竜蔵は彼女に冷めた視線しか送れなかった……相当、彼女の奇行に参っているのであろう。

すると、これまで黙っていた冴島が、ようやく真っ赤だった顔を治して口を開いた。

「そ、それで千代女さん。用件の方は、本当にもう良いのですね？」
木佐貫の用件……端的に言えば、竜蔵との子作りを、この場で始めようとした、あの奇行。

どうやら冴島は、事前にその事を知らされていなかったのか。消え入りそうな声で、しれっとした表情の木佐貫に尋ねた。

「ええ、どうやら桐嶋さんは、私では不服の様子でしたので“今日のところ”は引き下がる事にします」

「貴様！ 千代女さんの、どこが不服だと言うのだ！」
「えー」

木佐貫の答えを聞いた瞬間、冴島の表情が一気に強張り、竜蔵に木刀の切っ先を向け始めた。

もしかしたら、ただの悪乗りなのではないかと疑うほどの変わり身の早さに、竜蔵は今回何度目か分からない、うんざりとした表情と声を漏らす。

「落ち着いてください、刀子さん。私は別に気にしていませんから」
まあまあと、相手を宥めようとする木佐貫。

その表情は、どこか楽しげに見えた……絶対に、冴島刀子という人物の反応を予測しての発言だったと、この木佐貫の対応を通して、竜蔵は当たりを付けていた。

だがまあ、そろそろ話を付けなくては、竜蔵も部活に行けなくなってくる可能性が有る。

故に竜蔵は、この流れる空気を無視して、話をさっさと進める事にした。

「あ……何でも良いけど、冴島さん？ 俺と“やりたい”の？
だったら、早くしてくれ。俺にも部活があるんだ」

やりたいのかと聞いてはいるが、既に構え……というより、冴島

に向けている視線に、明確な圧力が籠プレッシャーっている竜蔵。

それに気付いたのか、冴島の方も、持っていた木刀を、両手で持ち、右足を前にした正眼の構えを取った。

二人の雰囲気の変化を感じ取った木佐貫が。彼らが形成し始めた間合いから、静かに外れていく。

さっきまでの空気が嘘の様に、屋上に吹く風だけが、この場の音を支配していた。

切っ先を竜蔵の喉下に向けた、正眼の構えを取っている冴島に対して。

竜蔵は、今にもポケットに手でも突っ込んでしまいかねない、自然体で相対している……ただし、体に通った軸や、相手の眉間を射抜くような視線が、ただの自然体でない事を物語っている。

すると、冴島が、この硬直状態を和らげるかのように、正眼の切っ先を、ゆらりと地面に斜めで向け始めた。

下段……いや、そこから更に木刀が流れるように移動し。前足だった右が下がり、今度は左足を前に置いた、木刀を立てるように横で構えた、“八相”を取り始める。

真っ直ぐに伸ばされた背筋に、スカートのお陰で露出している、スラリとした長い脚が、異性である竜蔵の目を奪わせる……が、それと同時に、沈み過ぎず、浮き過ぎずの重心と、油断の無い研ぎ澄まされた緊張感が、彼女をただの女だと思わせない警戒心を抱かせていた。

間合いは半歩分開いたが、辺りの空気を張り詰めさせる緊迫感は、更に上がった様な気がする。

だが、それでも構えという構えを取ろうとしない竜蔵に、ようやく冴島が口を開いた。

「どうした？ 早くやろうと言ったのは、君の方からだろう」

静かに、凜とした姿勢で“八相”の構えを取る冴島から発せられた、挑発とも取れる言葉に竜蔵は。

「……ふん」

一度、軽く鼻で溜息を付いた後……。

「？」

突然、保っていた緊張感を、自ら解き、軸や重心も意識していた自然体すらも、同時に解いてしまった。

これに、訝しげな視線を向ける冴島……。

そして更に、竜蔵の不可解な行動が続く。

（おや？）

「……何の真似かな？」

なんと、竜蔵が冴島と形成していた間合いから、何の躊躇も無く出て。後ろのフェンスのところまで、勝手に歩いて行ってしまった。フェンスの前に来ると、竜蔵は上着のブレザーを脱ぎながら、再び冴島の方に振り返った。

竜蔵の視線の先で冴島は、先程まで取っていた構えを、一度解いていた。

その様子を見て、ようやく竜蔵が口を開く。

「ほら、こっちまで来いよ。ここなら、俺はバックステップも取らないし、馬鹿みたいに逃げ出す事も無いぞ？」

屋上のグリーンのフェンスを背にしながら、竜蔵は冴島に向けて、挑発とも取れる言葉を投げかける。

瞬間、冴島の眉間が歪むが、すぐにその怒気は抑え込められた。

「……ふん、なら、君の希望通りにしてあげよう」

一拍の間を置いた後、冴島は竜蔵の言葉通りに歩を進め始めた。油断無く、いつでも反応出来るように脱力された、武術的な歩行は、まさに歩く刃物と行っても過言ではなかったが……この場に、その程度の事で驚く者など一人も存在しなかった。

出来て当たり前……警戒して当たり前。

この三人だけの光景を見ると、おのずとそのような考えを感じ取れる。

それ程に、実戦というやり直しが効かない舞台を、この場にいる者達は理解しているのであろう。

そして再び、冴島が左足と左肩を前に出した真半身の構え“八相”を、竜蔵との間合い三步半付近で取り始めた。

今度は、竜蔵の言葉どおり。彼の後ろには、屋上からの落下を防ぐための、背の高いグリーンのフェンスが威を構えていて。冴島の木刀からの逃げ道を限定させていた。

外見は、完全に竜蔵の不利……だが、それでも竜蔵は構えという構えを取ろうとはしない。

何か特別な事をしていると言えば、左手に持っている脱ぎたてのブレザーを、いまだに持っている事だけだろうか。

冴島が、ジリ……と、ミリ単位で間合いを詰め始めた。

しかし、それでも自然体で立っている竜蔵に動きは見られない。ただただ、こちらに迫ってくる相手と、視線を合わせ続けているだけだ。

また、ジリ……と、冴島が屋上の地面を摺り足で削る。

彼女が竜蔵との間合いを詰める度に、その時が来る感覚が、どんどんと強まっていく。

あと、確実に相手に打ち込める距離まで、半歩ぐらいか。

次第に、冴島の左頬を、一筋の汗が流れ始める。

間合いを詰めている、圧力を積極的にかけているのは、彼女の筈だ。

だが、対する竜蔵には、何の変化も見られない。むしろ、涼しい顔で、相手が来るのを待っている様に見える。

一体、目の前の男は何を考えているのか……？

次第に、冴島の頭を、この思考が支配し始めてきた。

予想するに、おそらく左手に持っている、脱いだブレザーを、こちらの注意を引き付ける為に投げてくるのであろう。

そして、自身がそれに気を取られ、動きを止めている間に仕掛けてくる。

随分と古典的な手を……そう胸中で冷笑混じりに呟いた冴島は、再び間合いをギリギリと詰め始める。

確かに、木刀だろうが一刀で仕留めてみせる……。

それが、我が剣術なのだから。

絶対の自信を胸に持ちながら、遂に冴島の詰めが止まった。

気付けば、竜蔵との間合いは既に二歩半。

やろうと思えば、素手の竜蔵でも仕掛けられる距離だ。

そんな攻撃が飛び交っていても不思議ではない間合いで、二人は再び静止する……。

既に、緊張感なるものは限界にまで高まっていた。

冴島が持つ木刀に、彼女の意味が通い始める。

今、竜蔵の目には、彼女が木刀を“体の一部”として認識したのが、感覚として捉えられた。

道具に使われるのではなく、使うのでもなく。

道具という概念すらも否定し、それを自身の腕の延長線上と認識する考え方。

似ていると、竜蔵は素直に思った……が、その瞬間であった。

「ふッ！」

突然、冴島が、これまでの沈黙や緊張感すらも切り裂く様に、竜蔵へと間合いを一気に詰め始めた。

奥足を蹴り出し、前足でその全身の勢いを受け止めた動作……。

次に来るのは————そこで、遂に竜蔵も動いた。

竜蔵は間合いを一気に詰めた冴島に、持っていたブレザーを投げつける。

冴島の視界が、竜蔵の肩幅のために特注されたブレザーに占領される……が、それもほんの一瞬の事で。

(やはり！)

予めブレザーを視界塞ぎのために使ってくるであろうと予測していた冴島は。意識を空中で広がっているブレザーに向けるのではなく。

ブレザーに便乗して突っ込んでくるであろう竜蔵の側面を取ろうと、そのままの構えで体を右にずらした。

既に木刀も、“八相”の構えの状態で、腰だめに寝かせてある。後は、脱力された全身の力を使って、軸をぶらさずに木刀を逆袈裟斬りで振り抜くだけだ。

しかし、冴島の予想は完全に裏切られた。

「なッ!？」

投げられたブレザーが通り過ぎ、竜蔵への視線を再び向けると。

そこには、こちらがブレザーから見て、左に動くであろうことを予測していた竜蔵が。“元の位置”から動いていないまま立っている姿があった……それも、これから前蹴りを蹴り出す為に、左足の腿を上げている状態で――――

この事実で急いで反応した冴島が、腰だめに寝かせていた木刀を、右から斜め上へ振り抜こうと、腰よりも腹を意識した回転で動かそうとする……が。

「シッ!」

「ッ!？」

短い息の吐き出しと共に蹴り出された、竜蔵の左前蹴りが。冴島が両手で持っていた木刀の柄頭に直撃する。

背中を反り、腹と股関節を前に出した、体重の乗った前蹴りの爪先が襲った事により。冴島が握っていた、振り抜く寸前だった木刀が、思わずすっぽ抜けてしまう……。

また、既に木刀を振り抜こうと冴島は動いていたために。突然前に蹴り出された、竜蔵の左足の靴底に、木刀がすっぽ抜けてしまっていたために、何も持っていない両手を激突させてしまう。

しかし、この次の行動は、冴島の方が早かった。

（得物が無いのならッ!！）

木刀を飛ばされた事など、一切気にしないかのように再び地面を

蹴り出し。前蹴りを蹴った左足を引いている最中の、竜蔵の懐へと彼女は突貫した。

しかし、後手に回ったとしても、この土俵は、完全に竜蔵のものであった。

相手の飛び出しを確認すると同時に、竜蔵は左足を一瞬の動作で、体勢が前屈みになるくらいに“必要以上に引いた”。

「ッ!？」

突然、冴島の視界から竜蔵が下へと消えた。

だが、気付いたときにはもう遅い——

ドンッ!——「ふぐッ!？」

竜蔵が飛び出してくる彼女を迎え撃つために、前に出していた右肩が。

ピンポイントで相手の腹部を捉えた……。

刹那に冴島の口から、一気に空気が吐き出される。

それを見越していたかのように、冴島の腹部に右肩をめり込ませた竜蔵が、地面を脚で“掻き始める”。

タックル——それも、出てきた相手を迎撃するための、総合やラグビーでは当たり前の技術。

竜蔵の太く鍛え上げられた両腕と、丸みを帯びるくらいに頑強な右肩に抱え上げられた冴島の体は。彼女の腹部を基点として、“くの字”に折れ曲がっていた。

既に、もとの飛び出した地点から、カチ上げられるようなタックルで完全に後ろへと押し込まれている。

脚も、地面には着いていない……これでは、抵抗も何も出来ない。出来るとすれば、竜蔵の背中のワイシャツを、必死に掴み続ける事だけか……。

この後の展開は、なんとなく一瞬のうちに理解できた。おそらく、このまま自分は、地面に背中や後頭部を叩き付けられ

るであろう。

視界が、信じられないぐらいのスピードで流れる。

（落とされるッ！！）

直後に訪れる、未体験の衝撃に覚悟を決めた冴島であったが……。ピタッと、その落下の勢いは止まってしまった。

「……え？」

あまりに突然訪れた、助かったという気持ちに、彼女の思考は一瞬停止する。

竜蔵の背中のワイシャツを掴みながら、抱きかかえられた状態で、何が起こったのか、理解出来ないといった表情をしている冴島。

しかし、そんな彼女を無視するかのように。竜蔵が抱きかかえていた彼女を、ゆっくりと地面に下ろした。

浮いていた足元が、屋上のコンクリートに確りと下ろされる。

同時に、冴島は竜蔵の背中から手を放した。

彼女の腰に回していた腕を、何の躊躇いも無く開放する竜蔵は。そのまま状況が飲み込めていない彼女と、再び視線を合わせた。だが、その視線はさっきまでの圧力を感じさせるものではない。むしろ心配そうに、すまなかったと言外に語っているような目であった。

「すまない、やり過ぎた」

言外だけではなく、口にも出して、タックルから開放した相手を見る彼の目には、なんの嫌味も感じられない。

しかし、まだ状況を飲み込めていない冴島は、その言葉に反応できないでいた。

すると、彼女の後ろから、今回の闘いの立会人代わりであった、木佐貫が口を開いた。

「刀子さん、どうやらアナタの負けみたいです」

木佐貫の率直な……容赦の無い宣言に、ようやく意識を思考の世

界から戻したのか。

震えるような声音で、冴島が声を発し始めた。

「私が……負けた？」

「ええ、それは綺麗な負けっぷりでしたよ？ 怪我らしい怪我也特に無いという、本当に見事な負け方でした」

冷静に勝敗を決める木佐貫に、冴島がもともと鋭かった切れ長の目を強張らせながら振り返る。

「そんな！ 私は認めません！！ だって、私はまだ立っていますし、意識も確りとしているのですよ！！？ これは真剣勝負じゃ……」

「真剣勝負なら、アナタは既に、この世にはいないのではないですか？」

「ッ！？」

彼女の言葉を遮るように、木佐貫が抑揚の無い声音で話を続ける……。

「真剣勝負だと、もともと彼が認識していたのなら。アナタは今のタックルで、このコンクリートの地面に叩きつけられ、意識を失っていたのでは？」

屋上の地面を、足裏で叩きながら、木佐貫は厳しい視線を冴島に眼鏡越しで向ける。

「意識を一瞬でも失った……そんな事が、真剣勝負の世界で起こったのなら、アナタは何回死んでいると思うのですか？ それにもし、叩きつけられたとしても、アナタが舌を噛み、意識を保っていたとしましょう。その先、何が起こるのか？ 彼が、どんな行動に出るのか……想像するのも馬鹿らしいと感じないのですか？」

説教……というより、負けを認めない彼女を咎める様な、木佐貫の言動。

そして冴島は、その頭に血が上った自身でも理解できてしまうほどの、もっともな言葉に。ただただ無言で悔しそうに、拳を握り締めるしかなかった。

ギリギリと、彼女の奥歯を噛み締める音や、拳を握り締める音が、

竜蔵にも聞こえてくる気がした。

故に竜蔵が、そこまで言う事じゃないのではと、口を挟もうとする。

「桐嶋さん、アナタは黙っていてください。これは、私と未熟な彼女の問題です」

「いや、俺はまだ喋って無い『黙っていてください』ぞ?」

有無を言わさぬ木佐貫の声音。

それに思わず、当事者であった筈の竜蔵が口ごもってしまう……。黙った竜蔵を確認すると、木佐貫は更に冴島に強い視線を送った。「大体、もしこの場がアナタと彼の二人だけの空間だったら。タツクルで地面に組み伏せられたアナタは、彼に何をされるのか分かっているのですか?」

「……?」

突然、例え話をし始めた木佐貫に、冴島が恐る恐るといった感じで首を傾げる。

どうでも良いが、背の高い彼女が悔しそうにしながら、背の低い先輩に咎められている光景が。どうにも竜蔵の視点からしたら、緊張感の欠けるものであった。

「周りには誰もいない、助けを呼ぼうにも、アナタの武術家としての“無駄なプライド”が、それを許さない……。なら、考えられる結末は一つだけです」

刀子さんの肢体に興奮した彼が、アナタを欲望のままに犯しつくすでしょう――

「ちよおおおっと待とうかあ!!　なあ!？」

もはやツツコミどころしかない……。いや、ツツコミざる負えない状況に、竜蔵が後ろから木佐貫の肩をガシリと掴んだ。

ちなみに、冴島は突然の彼女の発言に、顔を真っ赤にさせ、竜蔵の事を変質者でも見る目で睨みつけていた。

「なんですか？　まだ、私と彼女の話しは……」

「話しものにも、かなり可笑しい方向に飛んでたな！　ええッ！？」
肩を掴んだ彼女を振り向かせずに、背中に向けて凄む竜蔵。

だが、どんなに竜蔵が掴んでいる肩に圧力をかけたとしても、彼女の表情には変化が見られない。

これは、握力を思いっきり入れるべきかとも考えたが、相手が一応は女性ということで、竜蔵はそれを自重した。

「俺はどんな状況だろうが、さっきと同じ行動で事を穏便に済ませるつもりだったんだぞ？　それがどうして、ソイツに危害を加えるとかいう話になるんだ？　確かに、思った以上に強そうだったから、ちょっとやり過ぎちゃったけどさ？　流石に、そんな事は絶対にしないと思うぞ？」

強い口調で、完全にさっき木佐貫が言った事を否定する竜蔵。

しかし、当の木佐貫は、これまで通りのしれっとした態度で。

「なら、あの刀子さんの見事な体を、ジックリ見てみてください」
「は？」

あまりに堂々とした感じだったので、竜蔵は木佐貫の言葉どおり、目の前で顔を真っ赤にさせている冴島の体に視線を向けてしまった……。

スラリと優美な曲線を描いた美脚に、キュッと締まった、柳腰と称しても過言ではない、くびれのある腰つき。そして、それに逆らうかのように、存在を強調させている、制服越しからでも分かるほどの、張りの有る形のいい胸……極め付けに、彼女の白い肌と柔らかそうな唇が、異性である竜蔵の劣情をそそらせていた。

思わずマジマジと見てしまう、彼女の完璧な肢体に、竜蔵は意識すらも釘付けにされてしまう。

対峙している最中は、全く気にもしなかったが。こうして見ると、やはり校内でも才色兼備と有名になるのも頷けるし、タツクルした際に密着した、意外に柔らかかった感触が甦ってくる。

すると、その竜蔵の視線に気付いたのか。

冴島は、まるで身を守るかのように、両手で胸を隠しながら、竜蔵と木佐貫からバババツと距離を取った。

「な、何を破廉恥な目で、私を見ているのだ!？」

「……はッ!？」

実は結構鈍感な部類に入る彼女にすら、いやらしい目で見ていると看破されてしまった竜蔵は。

何かからの支配から覚醒したかのような表情で、意識を取り戻した。その光景を、客観的な立場から見ていた木佐貫は。意地悪な微笑みを浮かべながら、後ろにいる竜蔵に、首だけ回して振り向いた。

「でしょ？」

たった一言の、簡単な言葉。

だが今の竜蔵には、たったそれだけで彼女が何を言いたいのかを理解できてしまっていた。

「……いや、まあ確かに、魅力的な体だと認めるが。俺は絶対に、そんな事はしない」

「おやおや、さっきよりも、声に自信が感じられませんね」

「そ、そんな事はないぞ!？」 俺は、絶対にソイツを襲いなんかしない!！」

「本当に言い切れるのですか？ 地面に力づくで組み伏せた彼女のブレザーやワイシャツを、力任せに破き。下着を剥ぎ、スカートも剥ぎ。そして本能のままに、彼女の体を貪るため、唇も奪う……更に」

「ち、千代女さん!？」

迫真の語り口調に、思わず竜蔵ではなく、本人である冴島が。

これまた例外なく、耳まで真っ赤にさせた状態で、割って入ってきた。

「おや？ どうしたのですか刀子さん？ 私はまだ、彼から事の真意を……」

「聞かなくて良いです!! 本当に、やめてください! お願いします!！」

もはや涙目になりながら千代女に、これ以上の暴走は止めてくれと懇願し始めた冴島。

当たり前だ……目の前で、自分が暴行を受けているという設定の話しを、大真面目で異性にされているのだから。

普通の感性を持った女性ならば、冴島のように止めてくれと懇願せざる負えない。

そんな彼女の反応に、なぜか千代女は残念そうにしながら。

「……そうですか、幼少の頃より知っている刀子さんが、そこまで言うのです。まだアナタにも、言う事は色々ありますが、今回のところは、これで済ますとしましょう」

助かったのか？ それとも、良いように遊ばれてしまったのか？ 判断の付かない冴島であったが、とりあえずはホッと一息を付くのであった。



木佐貫千代女という、ちょっと独特な感性を持った女性に振り回された二人は。

現在、さっきとは違った落ち着いた表情で、確りとお互いに向き合いながら対峙していた。

ちなみに、この二人を振り回したという当の本人は。場をかき回すのを、ようやく自重したのか。

二人の様子を、静かに傍で見守っていた。

「その……さっきの闘いでは、取り乱してすまなかった。あれは、確かに私の負けだ。認めるよ、君の実力を」

気まづげに、対峙している竜蔵に腕試しの結果を告げる冴島刀子……。

普段、学園内では凛々しい雰囲気と、異性すら魅了する容姿で有名な彼女にとって。

この視線すら、まともに合わせられない仕草は、とてもレアなも

のであった……が。

対面している竜蔵には、特には関係ないらしく。

「いや、俺自身、手加減が出来ない部分があったし。もう少し、ハッキリとした勝負の付け方もあった筈だから、そんなに気にしないで良いと思うぞ？」

かなり真面目に闘った相手に対して、失礼な物言いであるが。

当の本人が、それを本気で言っているために、不思議と嫌味には感じられなかった。

しかし、感じられなかったとしても。負けた本人にとっては、とても屈辱的な事には代わりが無い。

故に、一瞬冴島の目が陰しくなるも、それを彼女は自ら頭を横に振る事によって、感情を治めた。

「……それだけ、私と君の間には差が有るという事なのであろう。今は、その言葉を胸に刻んでおくよ。後々、確りと返すために」

自ら感情を治めた冴島の表情には、どこか晴れやかなものが感じられた。

おそらく、気持ちに次に確りと切り替えられたのであろう。

それを見て、竜蔵は短く「そうか」とだけ返した。

二人のやり取りが、ひと段落した所で、木佐貫が口を開いた。

「確かに、刀子さんと桐嶋さんの実力には差があります……ですが、それは多少です」

「？」

「さっきの勝負では、桐嶋さんの奇策に、刀子さんが引かなかった形で勝敗が決しました。これは、完全に“経験の差”と言えるでしょう。それも、稽古や真剣同士などという事ではなく。どんな事でも、勝った者が正しいとされる、路上^{リアル}での経験です」

「路上^{リアル}での経験……ですか？」

「はい」

木佐貫の至って真面目なアドバイスに、冴島は教え子の様に視線を彼女に向けていた。

すると、冴島と竜蔵にも視線を向けられていた彼女は、突然、何かを提案するかのように、右手の人差し指を立て始めた。

「ですので、ここで私からの指令です」

木佐貫千代女という、二橋学園では数少ない執行部の中で、一番上の学年に籍を置いていた彼女からの指令……つまり、執行部からの直接的な命令という事。

それを理解していた冴島は、彼女に向けて居住まいを正す。

それをまだ理解していない竜蔵は、ただ突っ立ったまま、彼女と冴島のやり取りをボクッと眺めていた。

「明日から開始する、桐嶋さんの執行部正式メンバーとしての初仕事に。刀子さん、アナタも同行してあげてください」

「同行というと、バディという事ですか？」

聞き返す冴島に、明日から初仕事がある事を初めて知って、目を見開いている竜蔵。

そんな二人の様子を、軽く一瞥した後、木佐貫が言葉を続けた。

「ええ、今までの刀子さんの仕事は、路上……いえ、ストリートな内容のものではなく、どちらかというと隠密に近いものでした。です、これまではラフな闘いではなく、精密さを問われる、必中必殺の闘いを経験して来ていたという事です」

「つまり、私は彼と同行して、そのラフな闘いを学んでくれば良いのですか？」

「その通りです。また、もちろん彼の初仕事のサポートにも回ってもらいますので、明日は頑張ってくださいね」

「はい、了解しました」

勝手に進められる会話、勝手に進められる初仕事とかいう厄介事……。

竜蔵は、それらに異を唱えようと、ようやく会話に割って入ろうとしたのだが。

「ちょ……っ」

「あ、それと桐嶋さんに拒否権は存在しませんから、あしからず」

「ちょッ!? いや、それは酷すぎるだろ!」

とても理不尽な遮りに、思わず竜蔵が声を張り上げる。

しかし、当の木佐貫は、さも当然かの様に。

「アナタが去年に起こした問題や、昨日の“妹さん”とのプライベートなニャンニャン……それら諸々を、世間に公表されたいのですか?」

「ぐッ!？」

「妹さんとのニャンニャン……? 私には聞きなれない言葉だが……それは一体、どういう意味なのだ?」

木佐貫に脅迫というより、弱みを突きつけられた竜蔵は、思わず口ごもってしまう。

冴島は、本気で意味が分かっていないのか、竜蔵に対して、知らない事が恥ずかしそうに尋ねてくる。

そんな光景に一瞬、悪戯心を擦られた木佐貫であったが。

そろそろ時間的にも、色々と圧し始めていたので、それは自重する事にした。

「まあ、そんな事を私がしなくとも。桐嶋さんは、どちらにしても、明日から取り掛かる初仕事には絶対に参加しなくてはならない理由があるのですけどね?」

「絶対に参加しなくちゃならない理由? なんだ、それは?」

気になる言葉を発した彼女に、竜蔵は訝しげな視線を向ける……。

しかし、次に彼女から発せられる情報に、竜蔵の表情は驚きと、怒気に染まる事になる。

それは、竜蔵にとって絶対に守らなくてはならない者に関係する、一番許せない事。

「アナタの妹さん、桐嶋美夏さんが———」

何者かに狙われている様です———

経験の差（後書き）

次回から、本格的に本章の話が進みます。

なるべく、テンポ良くという目標を掲げていきますので。

描写不足があるかもしれませんが、そういった場合は、なるべくご指摘下さい。

直せる範囲で、直して行きたいと考えています。
ではノシ

執行部のお仕事（1）（前書き）

今回から、このサブタイが続きます。

執行部のお仕事（1）

健康診断から、翌日の朝。

昨日の放課後、正式な執行部としての仕事を受けた桐嶋竜蔵と、バディとなった冴島刀子は。

学園の生徒会長室内で、長机を間に挟み、何も書かれていないホワイトボードを背に、パイプ椅子に座る二橋姫樹の前に並んでいた。

「さて、まずは桐嶋君……二橋学園執行部への正式入部についてなのだけど」

まだ大半の生徒達が登校してくるには30分ぐらい早い、朝の生徒会室は。

外からの外気を入れないために、カーテンこそは閉められていないものの、窓は完全に閉め切られており。そこから日の光が、空気中に舞っている少々の埃を反射させながら部屋の中に差し込んでいた。

会長である姫樹が現在、両肘を預けている長机の他に、同じ形の机が竜蔵と冴島の左隣・右隣に並べられている……つまり“コの字型”に並べられた机の内側に、二人は姫樹を前にして立っているという事だ。

「取り合えず、この書類に目を通してから、自筆のサインをして頂戴♪」

言いながら、姫樹は自身の机に置かれていた一枚の紙を手に取り、座ったまま竜蔵に差し出した。

いつも通りの朗らかな微笑み……だが、窓から入ってくる日の光を背にし、優美に整った顔立ちの彼女から、その微笑が向けられたのなら。それは、どこか慈愛に満ちた、人の心に直接暖かさを送り

込んでくる、女神の微笑みに感じられるだろう。

だが、竜蔵の視点^{レジョン}からは、全く持って違った印象が彼女からは発せられていた。

柔和な雰囲気……いや、竜蔵は彼女の強かさ。機を見て敏なりという言葉を体現し、一年の頃に問題を起こした自身を、この執行部という暴力すらも隠蔽される胡散臭い組織にぶち込んだ時の事を知っている。

こちらを優しく迎えようとする、書類を持った細く美しい手……いや、竜蔵は彼女の狡賢さ。こちらが執行部の手伝いを断っている際に、どんと周りの外堀から逃げ道を塞いでいった事を知っている。

母性を感じさせる、豊かな胸や。包容力を感じさせる、栗色の緩いウェーブの掛かった長い髪が、異性である男性を魅了する……いや、竜蔵は彼女の包容力の恐ろしさ。こちらの心が弱っている時、その隙を突いて抱きとめ、男を持ち前の母性で包み込み“洗脳紛い”の事をしようとしていたのを、竜蔵は知っている。というより、被害にあった。

故に、これらの事から竜蔵は。

目の前で、早く一緒になろうとでも言うかのように、執行部の書類をヒラヒラとさせている姫樹の事が、とても胡散臭く、背後からは一度飲み込まれたら逃れられない瘴気を発している狡猾な女性にしか見えていなかった……。

だが、ここ、生徒会室に來た時点で、逃げ場が既に無いのも事実……。

もし逃げたのならば、昨日の屋上での出来事を、ある事無いこと脚色されて、お日様の下を歩けない立場に立たされるかもしれない。そう考えると、普通の人なら余計に関わり合いになりたくないと感じるだろうが……。

「ペン貸してくれます？ 全部教室に置いて来ちゃったんで」

「ええ、どうぞ♪」

竜蔵には、全く持って迷う事の無い事であった。大体、ここまで事が進められていた場合。目の前の生徒会長が、こちらを逃がす筈が無い。

既に、外堀は埋められていると考えるのが妥当であろう。

物理的な面では……スライド式の出入り口に目をやれば、モザイクガラスから、人の頭の様な影が二・三見受けられる。

心理的な面で見れば、昨日、木佐貫千代女きさぬき ちよめから伝えられた情報が、竜蔵を今回の件から離れさせないようにしていた。

「……規約って、これだけなんすか？」

姫樹から書類を受け取り、机の上に置いてから、借りたボールペンで記入を始めようとすると。

竜蔵が、不思議そうに姫樹に向かって聞いた。

書類に書かれた項目……。

それは、規約条項に、自筆で名前を記入する欄……のみ。

しかも、規約条項には二項目しか記載されていない。

一つ———自身が執行部であること、また執行部の存在を他者に伝える・仄めかす事自体を禁ずる。

二つ———関わった案件の全てに対して、守秘義務が発生する。

たったのこれだけ。

竜蔵の所属する二つの団体から、強く入る事を勧められ。殆どの一般生徒や都市に住んでいる住民にすら存在を知られていない組織の規約条項が、たったのこれだけ……。

当然の疑問と質問に、姫樹が至って真面目な声音で答えた。

「もともと、学園都市からの指示で各々の学校で作られる執行部には、ちゃんと都市から提示されている規約条項もあるのだけれど……大抵が、一般常識と差して変わらないの。それに、規約条項が各々の学校や学園で、専用のものであるから、他所も同じような感じなのよ。だからウチも、その程度の事しか書いて無いの」

「……」

その説明に、竜蔵が片眉を吊り上げる。

「他校でも、こんなのが有るって事に驚きましたけど。それよりも、普通に都市から提示されてる規約も見せてくださいよ？」

「……ちっ」

当たり前の事を確認しようとした竜蔵は、そこで信じ難いものを聞いた。

「……舌打ちしましたよね？」

「なんの事かしら〜♪」

「いや、いま絶対に“ちっ”て言いましたよね？」

「会長が、そんな下品な事をする訳がないでしょ〜♪」

右頬に右手を添え、本当に“なんの事かしら”と、一切崩れる様子の無い微笑みを浮かべながら白を切る姫樹。

どう考えても、どう遡ってみても、あれは彼女から発せられた舌打ち。

その確信を持って、竜蔵は姫樹に迫及しようとしたのだが。

「……うん？」

竜蔵の視線の先で、なにやら姫樹が。

こちらとは違う方向に、微笑みで閉ざされた、無言の圧力が込められた視線を向けていた。

それに何だと、追ってみると……。

プレッシャー

そこには、姫樹の無言の圧力に冷や汗を掻きながら、目を泳がせ

ている、普段なら凜とした雰囲気か女性としての魅力を引き立たせている冴島刀子がいた。

立ち姿は、正に直立不動……一切のぶれすら感じさせない、見事な硬直状態。

蛇に睨まれた蛙とは、こういう事だったのかと、竜蔵は理解した。すると、そんな冴島が、震える口調で竜蔵に口を開いた。

「き、桐嶋君？」

「……」

冴島の問いかけに、竜蔵は視線を向ける事で返す。

「い、今のは私なんだ……だから、会長がしたのではない。そ、その気に障ったのなら……」

「いや、それは無いだろう」

もはや裏返った声で、どう考えても罪を被ろうとしている冴島に、竜蔵が冷静に返す。

しかし、尚も冴島の可哀想な姫樹に対してのフォローは続く。

「そんな事はあるものか！ 舌打ちをしたのは、この私だ……」

「じゃあ、何に舌打ちしたんだよ？」

「そ、それはだな……そう！ 虫が飛んでいたんだ！ 私の顔の周りで……だ、だから」

「もう無理しなくて良いつて。会長が恐いのは、俺も同じだからさ」

「あら♪ なぜ、いつの間にかに私が悪役になっているのかしら？」
見てもらえない。

昨日、結果的には一刀も振るわせずに勝った相手だが。

その立ち姿や、醸し出す空気……更に言えば、くもりや穢れ一つ無い出で立ちからは考えられない、鋭く洗練された威圧感を放っていた者が。こうも情けなくしている様に、竜蔵は無意識の内に耐えられないと感じていた。

故に、昨日の敵は今日の何々といった精神の下、自分なりに助け舟を出したのだが……。

当の本人に、全くもって罪の色は見られない。

「事実じゃないですか。大体、俺が音の方向を聞き間違えると思いますか？」

言いながら、自身の耳たぶを、片手で弾くジェスチャーを取る。それを見て、姫樹は“はあ”と溜息を付きながら。

「それもそうね。ちよつとした戯れのつもりだったのだけれど、ごめんなさいね、刀子さん？」

「は、はい……私は気にしておりませんので」

仕方が無いといった雰囲気を感じそうともしていなかったが、意外にすんなりと冴島に謝罪をする姫樹。

だが、どうにも冴島は姫樹に話し掛けられる度に、緊張した様子でいる。

昨日、木佐貫に聞いた話では、確かこの二人は本家と分家といった、一般人である自分には良く判らない関係上にあるらしいと、竜蔵は思い出していた。

だからだろうか、胸中で首を捻るも、そういった世界には全くの無知な竜蔵には、何も浮かばない。

仕方なしに、その思考を切り上げると。竜蔵は本題の、自身の話題へと再び軌道修正を計った。

「とりあえず、都市から出されてる方の規約を見せてくださいよ」

「まあ、別に構わないのだけれど……意外ね、桐嶋君が、そこまで書類に対して慎重だなんて」

「工作上、よく契約書とかにサインを書かされますからね。自分でチェックするのは普通ですよ。逆に、しなかった場合、大抵ろくな事にならないですから」

「あらあら、いっちょ前に確り者ぶって……去年のアナタからは、考えられない言葉ね♪」

姫樹は、そんな事を口にしながらも。

自身が座っていたパイプ椅子の横に置かれた、学校指定の鞆から、冊子になっている程の紙の束を取り出した。

ドンっと、思わず効果音を点けたくなくなってしまいうぐらいに分厚い

紙の束……もとい冊子は、竜蔵に口端を吊り上げさせた苦笑いを浮かばせる。

「はい、これが都市から提示されている規約条項が全文書かれた冊子よ。好きに目を通して頂戴♪」

「お、おおう……」

その紙束の量は、パツと見で200はあるのではないかと感じるぐらいで。

流石に、プロの格闘家として契約などには慣れている竜蔵でも、この量に呻き声を出してしまう。

「ちなみに、表紙と最初の目次以外、全部が規約についてだから。一つの見落としてもなく読むには、流石に朝の授業には間に合わないんじゃないかしら♪」

楽しそうに微笑みながら、竜蔵に弾んだ声音で言う姫樹。

その笑顔……正に女神の如し慈悲深さ。

ただし、内側は悪戯に成功した子悪魔の様な高笑いを上げていた。

「まさか、これを見越して、わざと舌打ちを……？」

「さあ？ ただ言えるのは、確かに“この中に”、私が“アナタを手に入れるための手段”が入っているのは間違いないという事だよ」

ニヤリと、普段は笑顔で閉じている目を薄く開けながら、こちらに薄気味悪い微笑みを向けてくる。

恐い……まさに猛獣が獲物を前で、舌なめずりをしているかの様な危機感。

今度は、冴島ではなく、竜蔵の額に冷や汗が流れ始めた。

自身が先程、直感で浮かべたのは、ただこちらに嫌がらせをするために、デカイ冊子を読ませるよう誘導させたという事……だが実際に、読まなければ、もしかしたら自身が、目の前の腹黒い強かな女の手駒になってしまうという、部活や校外で活動している身としては何としても避けたい罠。

謀ったな！ とまでは言わないが、何も、ただこちらに冊子を読

ませたいがために、ここまでするだろうか、竜蔵はゲンナリとした――

視線や向けられる微笑は恐い……それはもう、冷や汗ものだ。

だが、込められている真意は、実は有る程度理解できている。

「はあ……あんまり、俺を見くびらないで下さい。いわれなくても、ちゃんと読むようにはなりましたから」

「あら？」

竜蔵の反応に、意外なものを見た、姫樹が驚いた表情をする。

「もしかして、私が何をアナタに言いたかったのかが理解できたの？」

「そりゃあね……去年から今まで、だいぶ色んな方面で矯正されましたから。お陰で、色々と助かってますよ」

疲れたような声音で、パイプ椅子に座っている姫樹の前に置いてある冊子を手に取る。

そしてそのまま、パラパラと冊子の頁を流すように捲り始めた。

「男子三日会わざれば何とやら……前は、一切こういう事には注意を向ける様な子じゃなかったのに。会長、桐嶋君が成長してくれて、とても嬉しいわ♪」

感慨に耽る……というより、妙に大げさな芝居がかった仕草で、

竜蔵に“飛び込んでおいで”と両手を広げる姫樹。

それは、学園の男子生徒が、いくら憧れても辿り着けない、二橋姫樹という慈愛に満ちた女神の懷。

もし、これが他の男子生徒だったのなら、大半が誘惑に負けて飛び込んでいたところであろう。

だが、当の竜蔵は。

「なるほどねえ……確かに、一般常識みたいなのはっかだわ」

パラパラと流し読みしている冊子に、目を向けたままであった。

面白くない……この様子に、微妙にカチンときた姫樹は、少々眉間を歪める。

だが、そんな表情も、彼女の本性を知らない者にとっては、あま

り恐くは感じない。

むしろ愛らしく思えるぐらいだ。

だが彼女自身が、今の竜蔵を見て多少の不機嫌を覚えたのは事実だ。

故に、姫樹が意地悪次いでに、今後、彼には内緒の勧めようとしていた、ある事について口を開いた。

「ねえ、読みながらで良いから、ちょっと話をしてもいいかしら？」

「……どうぞ」

姫樹の言う通りに、冊子に視線を向けたままで、静かに答える。

その様子を一瞥した後、姫樹は心底楽しそうな笑みを浮かべながら、いまだ凜とした佇まいで立っている冴島に視線を向けた。

「昨日、千代女に子作りを申し込まれたんですって？」

「ぶッ!？」

まるで世間話でもするかのように、昨日の事を話題に出された竜蔵は、思わず吹き出してしまう。

なぜか姫樹に視線を向けられたままの冴島は、頬を少しだけ赤らめ、恥ずかしそうに視線を伏せた。

「でも断られたって、昨日の夜に千代女から連絡が来たから。我が学園の屋上で、そんな行為が行なわれなかったって事は安心したのだけだ」

「……何が言いたいんですか？」

「いえねえ……私としては、小さな頃から幼馴染として知っている千代女の、何がいけなかったのか気になって————桐嶋君は知らないかもしれないけど、彼女、普段はわざと地味な格好をしてるから、脱いだりしたら凄いのよ？ それに、あれでも見れば整ったスタイルをしてるって、アナタの目なら分かるでしょ？」

心底分らないといった声音で、視線をこちらには向けたがらない竜蔵に問いかける……だが、当の彼女はなぜか、視線をまだ冴島

に向けたままだ。

竜蔵は、その問いかけに当たり前といった様子で答えた。

「そりゃ、やらせてくれるって言うんなら、やりたいのが俺ですけど……いくらなんでも、いきなり面と向かって子作りをしようって、事務的に言ってくる人とやる気はないですよ」

「そう……意外に、軽率な事はしないと。だけど、もしそれが刀子さんだったらどうしてたかしら？」

「「ぶッ!？」」

その続く問いかけに、今度は竜蔵と冴島の二人が同時に吹き出した……ちなみに、冴島は吹き出しでも、どこか下品には感じられない、小さく控えめなものであった。

「刀子さんは、何を驚いてるのかしら？」

「な、何をではありません!？　いきなり、何を言い出すのですか!?!」

「何って……刀子さんも、一応は耳にしているのでしょうか？　私達の家々には、本家だろうが分家だろうが、優れた遺伝子を持つ者と、いずれは交じ合わねばならない決まりがある事を」

「そ、それと今のが、どうして関係するのです!？」

二人……いや、冴島が一方的に憤慨する中。

竜蔵は、これはどういった会話なんだ?——と、頭の上に“?”を浮かべていた。

「どう関係するって……それは昨日、桐嶋君と闘ったアナタの方が理解しているのではなくて?」

冷静さを失い、もはや顔を真っ赤にして声を張る冴島を相手に。

姫樹は至って冷静な声音で向き合っていた。

「日本古来より続くといわれる、二橋を中心とした六ろくしん苳に数えられる家の者達は……」

「姫樹さん!？」

しかし何やら竜蔵にとって、訳の分からない方向へと会話が進んでいく途中。

突然、冴島が驚いたように、姫樹の言葉を遮った。

これまでの直立不動が、既に嘘の様に崩れ去っている……どうやら、相当焦っている様であった。

が、当の姫樹は至って涼しげな表情で、いつも通りに微笑んでいる。

そんな姫樹に、冴島が咎めるような視線を向ける。

「アナタは何を急に……」

「あら？ 私は私の判断で、別に構わないと思ったから、話そうとしたまでだけど？」

「……」

傍目から見れば、冴島が何に対して怒っているのか……発端となった言葉は理解できるが、明確な理由が理解できない。

故に、竜蔵は、この生徒会室内で、二人の。いや、冴島が一方的に姫樹を睨んでいる姿を、何ともなしに眺め続ける。

すると、暫くしてから、姫樹がゆっくりと口を開いた。

「……はいはい、今日のところは、私が引きましょう。こうなると、刀子“ちゃん”は頑固でちゅからね♪」

「なッ!？」

身を引くと言いつつ、相手に悪戯な笑みを浮かべながら、何やら赤ちゃん言葉で子ども扱いし始める姫樹。

それに、顔を真っ赤にさせながらビクツと反応する冴島刀子という、いつもは凜とした涼やかな空気を纏っている女子生徒。

この光景に……いや、明確に言えば、二橋姫樹という、豊かな母性を感じさせる女性から出た赤ちゃん言葉に、竜蔵は一瞬、不覚にも嬉しい方の反応を示してしまった。

それに気付いたのか、姫樹が竜蔵に意外といった表情を向ける……ちなみに、顔を真っ赤にさせた後、必死の形相で反論し始めていた冴島は、完全にスルーされていた。

「あらあら♪ 桐嶋君は、こういった口調が好きなのね？」

「違いますよ……」

「そう……なら、さっき私が言った様に、刀子さんはどうかしら？」
「あゝ……もうそろそろ時間なんで、俺は教室に戻っていいっすか？」

あからさまに姫樹の話題戻しを、面倒臭そうに流す竜蔵。

その様子を、ちよつとだけ詰まらなそうな顔をしながら、姫樹が見ていた。

だが、確かに竜蔵の言うとおり時間も迫っている。

故に姫樹は、この少々脱線気味であった場の空気を軌道修正し、改めて竜蔵に内緒で勧めようとしていた事の本題に入る事にした。

「そう言えば、私から、アナタに頼みたい事があったのよね」

本来なら、さっき竜蔵が規約の書かれた冊子を流し読みしている最中に、問いかける筈であった事。

既に竜蔵は、その冊子がある程度読み終え、その辺の机の上に放置していた。

それほど、色々と話を脱線させるのを楽しんでいたのかと、姫樹は一瞬だけ自身を咎めようとしたが……考えてみれば、今の直ぐにでも教室に戻らなくてはいけないというタイミングは。一番この話題を振るのには適していたのかもしれないと思いなおした。

「頼みたい事っすか？」

「ええ、時間も無いから、後からで良いのだけれど」

「はい、どうぞ？」

「アナタの妹さん……桐嶋美夏きりしま みなつさんを、生徒会に迎え入れたいのだけど」

手伝ってくれるかしら？———

◇

「失礼しました」

生徒会室の窓とホワイトボードを背にした姫樹が、いつも通りの微笑みを浮かべながら手を振る中。

冴島刀子が、深々と背筋の通った一礼をした後、生徒会室のドアを閉めた。

ドアを閉めた後、すぐに後ろへと振り返る。

そこには、昨日、色々と変な事を真面目な顔で行なおうとしていた、木佐貫千代女と、さっきまで共に生徒会室にいた竜蔵が。朝の日差しが差し込んでくる廊下の窓のすぐ傍で、互いに向き合っていた。

二人の表情には、なんら特別な色は見られない。

ただただ、其々が普段している、いつも通りの何も無い表情だ。

「さっきまで、ここに何人か人影が見えたんだけど？」

ここ……とは、いま竜蔵・冴島・木佐貫の三人が立っている廊下の事。

まだ、登校時間までには余裕が有るため、とても静かな空間だ。

「はい、私の他にあと二人、生徒会のメンバーがいましたが。その二人は、今しがた私が教室に帰しました。彼らは執行部の存在こそ知ってはいても、具体的な活動内容までは認知していませんから……知る必要も無いことですしね」

別に、気にする事もないですよという声音で、竜蔵の問いかけに返す木佐貫。

すると、木佐貫が冴島の方に、軽く視線を向けた。

冴島は、その視線の意味を察知すると、ゆっくりと瞼を下ろし、何やら周囲に向けて集中し始めた。

そして、5秒もしないうちに、冴島が下ろしていた瞼を上げる。

「大丈夫です、周囲には、私達と会長以外に気配はありません」

「分かりました、ありがとうございます」

問題はない、と告げる冴島に、目礼をすると、木佐貫は再び竜蔵と向き直った。

「では、今日の午後から始める執行部の活動について説明しましょうか」

「だな」

相手は先輩にも関わらず、これまでの印象から敬語を全く使わない竜蔵に、木佐貫は何も言わずに話を続けた。

「今日やる事は、まあ簡単に言ってしまうえば聞き込みですね。それも、完全に自分達の足で行なってもらいます」

理由は二つと、指で竜蔵に示しながら。

「まず、昨日説明した正体不明の相手に“こちらが探しているのを臭わせる”のが一つ目の理由です。これは、本来ならアナタ達だけで進める筈だった事件に、私が手助け出来るようになった事で可能になりました。出来るだけ臭わせまくって、犯人を焦らす、または迂闊に動けなくしてください。なるだけ早く、犯人がどうやって犯行に及んでいたか？ どこにいるのかなどを特定してみせますので、その自信に満ちた……というより、やれて当然といった口調に、竜蔵は小声で漏らすように「頼もしいね」と呟いた。

すると、目ざとく木佐貫が食いつく。

「でしょうか？ ならば、これ程に頼もしい女を手に入れたとは思いませんか？ 思いますよね？」

「自分を安売りするような女は信用できないから、まずはそこをどうにかしろ」

「……残念です」

話が脱線したところで、傍に控えていた冴島が「こほん」と小さく咳払いをする。

それに反応した木佐貫が「では、二つ目の理由は……」と、説明の方を再開した。

「アナタと刀子さんの距離を縮め……『木佐貫先輩？』」

再開した途端、どう考えてもふざけようとした所を、再び冴島に冷たい声音で咎められる。

しかし、木佐貫に氣にした様子はない。

ただ淡々と、言われたとおりに軌道修正を計った。

「ぶっちゃけ、アナタに執行部の動き方を教えるのと、刀子さんに武術的な成長を促す事の二つにあります。おそらく、相手方も、アナタ達が嗅ぎ回っているという情報を掴めば、何らかのアクションを起こす可能性があるので、その時に……といった感じです」

昨日の腕試しと銘打たれた闘いで、冴島は竜蔵の奇策の前に、何も出来ずに終るといふ結果に沈んでしまった。

それは確かに、竜蔵の実力も相まって可能だった奇策なのだが。実際に、ただの一刀も木刀を振れずに負けてしまったという事は、冴島ひいては、木佐貫にとっても無視できない事だったらしく。

今まで闘ってきた世界だけではなく、他の世界も見て学べという事を、昨日の時点で木佐貫は冴島に言っていたのだった。

しかし、竜蔵自身の意見は少々違う様で。

「俺は別に構わないけど……ホントに、“こっちの戦い方”なんて必要なのか？ 俺的には、そのままでも十分だと思うし。むしろ、今のままの戦い方を伸ばした方が良いと思うんだけど？」

その問いに答えたのは、傍に控えていた冴島自身であった。

「確かに、それも一つの考えだ……だが、現に昨日、私は君に完敗している。その事実から目を背ける事は出来ない」

「いや、だから昨日は、あの後に言っただろ？ 無傷で終わらせるのは、あの方法しか無かったって。実際、普通にやってたら、多分、俺も危なかったと思うぞ」

「だが結果は結果だ、受け入れない限り、私に成長は無い。それに、相対した時点で、そういった考えを相手から消せなかったという事が、既に私の未熟を示している」

だから、君が何と言おうと、考えを変えるつもりは無い————強い意志……そこから計り知れない程の向上心すら感じさせる、

刀の様な妖艶さと魅力を持った、切れ長の目。

それを真っ直ぐに向けられてしまった竜蔵は、「はあ」と呆れたような溜息を吐きながら。

「頭固いね……」

「なんとでも言えば良い」

「だけど、そういうのは嫌いじゃない……俺も同じ様な人間だし？」

達観した様な声音だったが、真剣な表情をする冴島に、仕方が無いといった笑みを竜蔵は浮かべた。

笑みを向けられた冴島は、一瞬間を喰らった顔をするも、直ぐにこわくてき蠱惑的な微笑みを返した。

そんな二人の様子を見て、木佐貫が抑揚の無い声音で、面白くないといったふうに出した。

「やはり桐嶋さんは、冴島さんの様な女性に欲情するんですね。私に向けるものとは違った感情が感じられます」

瞬間、冴島の顔が爆発したのかと錯覚する程に、一気に真っ赤に染まってしまった。

対する竜蔵は、何を馬鹿なことをといった声音で口を開いた。

「当たり前だろ？ 実際、誰が見ても同じだと思うし。他を見ても中々いないと思うぞ？ こんな美人」

「それは、アナタの妹さんと比べても、という事でしょうか？」

「……」

「そこで迷うから、他の方々からシスコンと言われてしまうのですよ？」

「……ほっといてくれ」

なぜ、木佐貫が自身の周りの事を知っているのか？

それはさて置いて、竜蔵はこの時、本気で自身の無意識下での家族贔屓を治そうと考えたのだった……決して、シスコンではない。

するとそこで、顔を真っ赤にさせた状態のままの冴島が、話題を変える、もしくは本題を進めるために、視線を二人に向けなおした。

「そ、そういえば！ 桐嶋君は、さっきの規約条項の冊子を流し読みしていたが、内容は確りと頭に入っているのか？」

話題を転換しようとしたのは分かるが、どう考えても焦っているのが分かる、声が裏返った様子の彼女に。二人は一瞬、笑いを堪えた。

堪え終えた竜蔵が、冴島の問いかけに答える。

「いや、また後で見に来る。流石に、そんな早く読めないって、あんなの」

「そうか……なら、外に出る前に、またここに寄らないといけないな」

必死に、真っ赤になっていた感情を抑えながら。

なにやら、その細顎に指を添えて考え込む仕草を取る冴島……妙に様になっている。

「だな。さっきのは会長の冗談だって信じたんだけど、もしマジだったら笑えないからな……」

実際、心の隅で所詮、学校・学園関係の機関が出した規約と、舐めている竜蔵ではあったが。それがもし、法的以前に、何らかの拙い拘束力を持っていない場合を否定は出来ない彼は、一応の警戒を込めて、冴島の提案に賛同する。

「では、そろそろ他の生徒達が登校してくる時間帯なので、一旦解散するとしましょうか」

二人の様子を見て、そろそろ頃合だと感じた、木佐貫が発した解散の言葉に。

竜蔵と冴島の二人が、無言で頷いた……。

執行部のお仕事（1）（後書き）

感想とか欲しいっす。

生意気かもしれませんが、反応が有るのと無いのでは、だいぶモチベーションが違いますから。

あと、台詞と地の分は、一行空けた方がいいですか？
読みづらいといった方がいらっしゃるなら、遠慮なく申してください。
さい。

なるだけ、今度から意識して書きますから。

執行部のお仕事（2） 兄を追え！！（前書き）

今回、ちょっと辻褄が合っているのか心配です。
何分、今日ぐらいしか、他に書ける日が無かったもので……。

執行部のお仕事(2) 兄を追え!!

(さて、今日から本格的に部活か〜!)

二橋学園のとある廊下で、そんな事を胸内で嬉しそうに叫びながら歩を進めている女子生徒。

少し赤茶のボーイッシュなショートヘアと、長身にも関わらず均整の取れていたスマートな体型をしている、活発そうな顔立ちが特徴的な女子生徒――――きのしたあい木下藍は。

入学から三日目。

一年A組のクラスで、明日の体力測定の説明や、前期に使用する教科書の説明、部活の入部申請書などの説明を、退屈そうに聞き流した後。

特待生として入部した、女子バスケットボール部へ言葉どおり本格的に参加するため、意気揚々と、その部活動の部室へと向かっていた。

辺りには余裕を持っている彼女とは違って。他の一年の生徒達が、新しい先輩達に変な印象を持たせぬよう、遅刻厳禁とばかりに駆け足で部活動へと向かっている最中で。

(でもまあ……こんな風に新一年生を焦らせる辺り、結構どこも上下関係が厳しそうだよね)

それを眺めていた藍が、ちょっと嫌そうな表情で、肩を下ろしていた。

もともと、彼女は上下関係というものが苦手だ。

苦手といっても、ある程度は普通に接せられるし、先輩などに気に入られる素養もある。

では、どうして苦手なのか?

それは上下関係というよりも、今の藍が見ている光景に原因があ

る。

簡単に言ってしまうえば、皆が皆、先輩などとの上下関係を気にし過ぎていて、傍から見たら窮屈でならないからだ。

もう少し、肩の力を抜いて、先輩と接せられないものなのか？

先輩も、緊張した後輩よりも、少し砕けた後輩の方が、色々と気を遣わなくて良いのではないか？

藍は常々、そういった事を、日本の部活動を通じて感じてきていた……。

まあ最近では、こういう事は人それぞれで、個性が集団を成すときはバランスが大事と考え始めているので、そこまでは気にしなくなつて来てはいるが――――

そこでふと、周囲に視線を流していた藍が、何かに気付く。

いや、何かというよりは、思春期・浮いた話が好きな女子にとつては、見過ごせない光景。

（あれって、美夏のお兄さん？）

藍の視線の先には、なにやら一人の男子生徒……桐嶋竜蔵が歩いている姿があった。

確かに彼は、人の目を集めるほどの見事な肉体をしている……が、別に筋骨隆々の男が歩いている姿など、気にする事もない。

だが、ここは一学年の教室が構える階層。そこに、第二学年の間がいるだけでも、少し不思議な風景なのだが……もちろん、藍にとって見過ごせないのは、そんなところではない。

（隣に歩いている人、誰だろう……？）

藍の好奇心を惹きつけたのは、竜蔵の歩調に合わせて隣を歩いている、黒髪の女子生徒。

その女子生徒は、隣を歩く竜蔵と差して背は変わらず。腰まで伸びた長く艶やかな黒髪を、美しい歩法のたびに揺らしながら、藍だけではなく周囲の目も独占している……。

見えるのは後姿だけ。

しかし、それだけでも彼女が非凡な容姿をしている事が確信できる、不思議な空気が感じられた。

現に、彼女が他の男子生徒を通り過ぎる度に。一年の男子生徒達は、顔を赤らめながら、その女性の事を眼だけで追っていた……人を魅了するとは、こういう事なのかと、藍が妙に納得してしまう光景であった。

そんな光景を目の当たりにしていると、ふと自分が、いつの間にかに足を止めていた事に気付いた。

また藍が気付くと同時に、竜蔵と謎の美女は、この階層……本校舎四階の一番隅にある、とある部屋へと姿を消していった。

二人が部屋に入ると共に発せられた、ドアの閉まる音で、この廊下に広まっていた空気が、一瞬にして霧散する。

藍がそこで、ハッと我を取り戻したかのように、竜蔵と共に消えていった女生徒に固定していた視線を元に戻した。

周囲では、藍と同じように目を奪われていた者達が、先程同様、部活へと向かうために意識を戻していた。

(すごい美人だったな〜もう空気が違うっていうか……)

先の女性から発せられていた、こわくてき蠱惑的な空気の余韻から目を覚ました藍であったが。

それでも、胸中で感慨そうに呟かざる負えなかった……それほど、この空間で一際目立つ存在感を持っていたのであろう。

これほどの空気は、あの新しく出来た友人でも、作れるかどうか分からない……おそらく、容姿だけなら引けを取らないかもしれないが。

だがここで、藍は重大な事に気が付く。

(あれ? でも、いま二人が入った部屋って、確か一般生徒が使えない教員用のP Cルームだった筈じゃ……って、まさか!?)

瞬間、藍の顔面が着火した様に真っ赤に染まる。

上級生である友人の兄が、わざわざ下級生だけがいる階層に足を運び。あまつさえ、かなりの美人を、一般生徒が出入りできない、

教員用の部屋へと連れ込んでいた……更に言えば、その部屋は常に明かりが灯っておらず、担任の話から、教員ですら使用していない無人の部屋だと聞く。

色々考え付いた事はあるが、どうしても思考が一点にしか向こうとしてくれない。

思春期の少年・少女が、殆ど誰も使っていない学園の一室に、一緒に消えていく……しかも課外活動の時間に。

あわわわわと、声にならない焦りと、外に出してはならない妄想が、藍の頭の中を駆け巡る。

そして気がついた時には、何故か藍の手元に、学園指定の鞆に入られていたタッチパネル式の携帯電話が握られていた……。

こうなってしまうては、自己の思考を制御出来なくなってしまう人間の行動は止まらない。

藍のタッチパネル式の携帯電話のディスプレイは、既にメール画面に切り替えられている。

そして、その宛名には桐嶋美夏きりしま みなつという、彼女の友人の名前が入られていた。



普段は全く使われていない教員用のPCLーム……。

だが、天井に埋め込み式の蛍光灯が点灯されていない、この暗幕すら閉められた薄暗い空間には、一箇所だけ、稼動しているPCの明かりが灯っていた。

数あるホワイトのデスクが並べられている所の、丁度真ん中辺りを照らしている明かり。

そこに、部屋へと入ってきたばかりの二人は視線を向ける。

「遅かったですね、もう既に纏まっていますよ」

すると、この部屋で唯一稼動しているP Cの前に座っている女子生徒が。

振り向きもせずに、入ってきた二人……桐嶋竜蔵と冴島刀子の二人を言葉だけで出迎える。

「すみません、少々、私のクラスの方で……」

「いいえ、分かっています。どうせ、アナタを迎えに来た桐嶋さんに、クラスの殿方達が群がったのでしょう」

「女子も、だけどな……」

他愛のない会話をしながらも、二人は部屋の中央に座っている女子生徒のもとへと、ゆったりとした何の警戒もしていない足取りで近づいていく……若干、なぜか竜蔵の声音が疲れているものに聞き取れたが。

そして、とりあえず二人が、先程からP Cの前でキーを叩いている女子生徒の後ろへと立ったところで。

「さて、早速ですが、お二人にはこれを見てもらいます」

と言って、P Cの前で椅子に座っていた人物が。

そのかけている丸眼鏡で、ディスプレイの明かりを反射させながら、P Cの前から横へと身をどけた。

同時に、竜蔵と冴島の二人の顔が、ディスプレイの明かりに下から照らされる。

しかし、そんな事など、二人は気にしない……。

それよりも、見るようにと言われた画面に表示されていたものに、一気に表情を強張らせていた。

「これは……」

「悪質だな」

二人が目の前にしている、P Cの画面に映されているもの……。

それは、何やらピンク色の怪しい背景を背に張られた、数々の写真画像集。

二人が顔を強張らせたのは、その画像集の“内容”だ。
表示されているページのサイトには、こう題名として書かれている……。

『女子高生丸秘盗撮画像館』———

名前どおり、貼られている数々の画像には、各校の指定された制服を着用した少女達が、至って自然な姿で映し出されていた。

中には、かなり至近距離で撮ったと思われる画像まである。

また、其々の画像の下には、まるで写真展の様に、二人の眉間を歪めるに値する題名が表示されていた。

「このサイトは、一昨日。つまり本校の入学式が終った後、すぐに設立されたものの様です……見つけるのには、あまり苦労はしませんでした。サイト入り口に表示されているカウンターを見る限り、まだそれほど人は入っていないようですね」

画面に視線を落としていた二人に、この部屋で先んじて調べ物をしていた女子生徒……木佐貫千代女（かさいぬちよめ）が、マウスに手を乗せながら説明を始めた。

「そして、お二人……というより、桐嶋さんに見てもらいたいのは、この下です」

言いながら、木佐貫は手を乗せているマウスを使って、画面を下へとスクロールしていく……。

すると、彼女が竜蔵に見てもらいたいと言っていたものが、すぐに見つかった。

「この写真に写っている人物……」

その写真を一度見た瞬間、暫く信じられないといった表情をしていた竜蔵が、説明をする木佐貫を無視しながら。PCが置かれているデスクの上を握り締めた拳でぶっくら棒に殴りつける。

ガンッ！！———と、机の上に設置されていた物が、一瞬浮き上るほどの衝撃。

竜蔵のゴツゴツとした、拳風で変容している拳で殴りつけられた机の表面には、若干の蜘蛛の巣状のひびが入っていた。

「なんだ……これ？」

怒りに震えた声音……また強張ったのは目だけではなく、額にも怒気を露にさせる筋と血管が浮き彫りになっていた。

拳を握り締めた右腕の前腕には、既に無数の血管の道と筋肉の亀裂が頑強に張られている。

もはや前のめりになりながら、画面を睨みつける竜蔵……。

その視線の先には。

「なんで、美夏が撮られてんだよ……」

自身の妹、桐嶋美夏のカメラを全く意識していない姿が、画像のフレーム内で映し出されていた。

幸い、盗撮などで良く見られる、スカートの中の写真などの存在は見受けられない……だが、それよりも昨日の体操着姿だったりだとか、桜並木を散ゆく花びらと共に歩いている姿だったりだとか。明らかに、撮られている事に気付かれていない姿が、このサイト内には無数に存在していた。

「物に当たるのはよしてください……と、言いたいところですが。こればかりは、お気持ちもお察します」

「おい！　どういう事だよ！！　なんでうちの妹の写真が、こんな変なサイトに載せられてんだ！？」

眉間や米神にまで薄く血管が浮き出ている、怒気に染められた視線を。

今度は横に身を引きながら椅子に座っていた、木佐貫の方へと向ける。

しかし、妹の写真を明らかに如何わしいサイトに無断で載せられ怒る竜蔵とは対照的に、木佐貫の方は至って冷静だった。

「昨日、私が言った“妹さんが、何者かに狙われている”という言葉

葉は、これが原因です。桐嶋さん、怒るのも分かりますが、今は相手が誰なのかも分からない状態なのです、一旦落ち着きましょう。落ち着かないと、これ以上の説明はしませんよ？」

「……くそッ！」

木佐貫の宥めるといふより、むしろ咎めている様な言葉に、竜蔵は悪態を付きながらも理解し、居住まいを正してから向き直った。

「……それで、どうして、こんなサイトにうちの妹が？」

「はい。これは桐嶋さんの妹さんだけの話ではなく、基本的にサイト内では、今年の新一年生をターゲットに扱っている様なのです」

「新一年生を？」

「はい、それも本校だけではなく、第一区内全ての学校・学園で行なわれている様なのです」

「第一区内全て……となると、相手は集団という事でしょうか？」

竜蔵が落ち着いたところで、ようやく本題へと入った説明に、冴島が参加し始める。

それに、木佐貫は静かに頷きながら。

「確証はないですが……ただ、これだけ近くで撮影されているのです、内部の犯行と見て間違いないでしょう。が……」

「が、て……どう考えても、こんだけ人の顔の近くで撮ってる写真もあるんだ、学園内の誰かが犯人なんじゃないのか？」

外見自体は落ち着いてはいるものの、見るものが見れば、落ち着きのない乱れ方をしている、竜蔵の周囲を漂う空気……木佐貫は、それを意図的に見逃しつつ、竜蔵の疑問に答えた。

「最近、学園都市内の機械工学系の大学から、超小型の自立飛行偵察機なるものが発表されたばかりなのを、桐嶋さんはご存知ですか？」

「……ああ、あのハエや蚊よりも静かに飛べるってやつだろ？」

木佐貫の知っていて当然という問いに、竜蔵は一拍の間を空けながら答える。

どうやら、若干曖昧な記憶だったらしく、この程度の情報しか頭

から引き出せない様であった。

それを見かねた冴島が、出来る限りの補足を入れる。

「確か、虫の様な複雑な飛行は出来ない代わりに。エアーなどを外気と循環させながら噴出して、空中を漂い続けられる程の小ささと軽さを備えた。将来、医学や災害救助でも活躍出来るかも知れない現代の画期的な発明……大きさは一ミリから二ミリ程度で、内部にエアーの循環器の他に簡易的な撮影機器、それで撮影した画像を他所に送るための送信装置があるという話だ」

冴島の補足に、竜蔵は「へー」と呆けた表情をするも、次には木佐貫のほうへと視線を戻していた。

「で？ その自立飛行偵察機とやらが、もしかしたら使われているかもしれないって事なのか？」

「はい、あまり考えられない事ですが。ここまで近くで、何枚もの写真が収められている事と、时期的な問題から、その可能性も捨てきれないので」

「だとすると、絞込みの時点で、だいぶ難しくなってくるな……」

これまでの説明から、少々難しげに考え込む竜蔵。

だが、それを木佐貫が付け足す。

「ですが、これはあくまで可能性です……それに、いくら自立飛行型といっても、まだ試作段階。しかも、一応出来上がったというレベルの話です。使ったとしても、撮影したデータの送信に関しては、結構近い距離でないと、まだ使えないといった物ですしね」

「そうか……」

あくまで可能性……竜蔵は、この木佐貫の説明に少しだけ疑問を覚えた。

暗い室内の中で、唯一稼動しているPCのディスプレイに映し出された、妹の盗撮写真。

如何わしい内容のものは取られていないものの、ほぼ……というより、完全なオフショットで写真に収められている事から、妹は撮影者に全く気付いていないという事になる。

だとすると、どうやって撮影したのか？

写真の背景を見ると、どう考えても隠れる場所のない所からでも、美夏の写真を撮っている。

これは、普通の人間に可能な業なのか？

そう考えていた竜蔵に、木佐貫が「気付きましたか？」と、若干嬉しそうに尋ねてきた。

「何にだ？」

「もちろん、この写真の違和感です」

「それは、まあ……正直言って、素人の俺から見ても、この距離からアイツに気付かれずに撮るなんて不可能な話だからな」

「ええ、その通りです。普通の人間なら、これ程の距離・角度で写真を撮られれば、何かしらに気付くはずですからね」

木佐貫の言うとおり、サイトに載せてある盗撮写真の数々には、どう考えても、普通の人間の視点から撮れないものも存在している。つまり……と、今回、事前に調べをまわしていた木佐貫が、結論付ける。

「撮影者は確実に、最近発表された、自立飛行偵察機を使用していると言えるのです」

確かに、これ程までの写真を見せられれば、その考えに行き着くしかない。

しかし、ほぼ出来上がったばかりの試作段階だと、彼女は言った筈だ。

それに疑問を持った冴島が、木佐貫に不思議そうな目を向けた。

「ですが、そうなると、内部の犯行という可能性が強くなるのでは？」

当たり前の質問に、木佐貫が特に気にした様子も無く答えた。

「ええ、おそらくはと言いたいところですけど。流石に、安易に答えを出すのも拙かったので、私も昨日から色々と考えましたよ……いくらんでも、盗撮程度に最新鋭機を使うのか？ だとか。使ったとしても、どんなメリットが？ だとか……正直、考えるのも馬鹿

らしく思えるぐらいに」

言いながら、おもむろに木佐貫が椅子から立ち上がり、ディスプレイの前を陣取っていた竜蔵を片手でどけ、今度は自身がディスプレイの前に立ち、マウスを操作し始めた。

すると、どんどんと下へと移動していく画面に、竜蔵と冴島も視線を集中させる。

「ですが、このサイトの法則というより、趣向について考えた瞬間に、吹っ切れたんですよ」

「吹っ切れた？」

竜蔵が訝しげな声音を、木佐貫の背中に向けて発する。

同時に、下へとスクロールしていた画面がピタリと止まり、木佐貫もディスプレイから二人へと振り返った。

「ええ、このサイトをダラダラと眺めていれば、サルでも気付きます」

確信が込められた口調と、眼鏡越しの瞳。

「最初こそは、色んな趣味の女子生徒達が写真に収められていました。ですが、それが次第に一人の女子生徒へとUPされる写真の枚数が集中していくのです」

「それって……まさかッ!？」

「そのまさかです。言っただでしょう、桐嶋さんの妹さんが、誰かに狙われていると」

木佐貫の言いたい事に気付いた竜蔵が、驚愕を覚えて目を見開く。確かに彼女は言った、これはあくまで可能性だと……だが犯人、いや、サイトの運営者のUP画像では、他校の生徒も被害にあっていた筈なのに、次第に趣向が固定されていく事や。その収められた写真の数々が、どう考えても人が相手にバレーに撮れる物では無い事。

これらを考えていくに、次第に馬鹿らしい結論にしか到達できなくなってくる。

そう……。

「桐嶋さんの妹さんは、最新鋭機を使った盗撮……または、ストーリーの被害を、現在進行形で受けているのです」



（なんなのよ！ なんなのよ、なんなのよ！！）

焦燥と怒り、更には嫉妬心を身に纏いながら、一人の少女が本校舎の階段を駆け上がったいく。

階段を軽やかに、体重を感じさせないステップと共に上り、疾走していく様は、正に風の如しと称しても過言ではない。

証拠に、先程まで帰宅する途中であったため、再び一階から上り始めたばかりなのだが、既に二十秒と経たずに三階まで駆け上がっていた。

少女の手には、学園の指定校推薦を貰ったと同時に、母から買ってもらったタッチパネル式の携帯電話が握られている……。

そしてふと気がつけば、ものの三十秒と掛からずに、少女は本校舎の階段を四階まで上りきっていた。

だが流石に、このペースには無理があったのか？

肩で息をし、額には少量の汗が浮き出していた。

しかし少女は止まらない。

怒気の籠った、ズンズンという音が聞こえてきそうな歩調で、足を目的地へと進ませていく。

周囲には、既に四階に教室を構えている、他の一学年の姿は見られない。

おそらく、皆、部活か帰宅か、どちらかの徒に着いたのであろう。本来なら、少女自身、既にこの静かな階層には用は無い筈なのだが。

今は、とてもとても、少女にとって重大な事件が、この階層で起きていると、先程友人から連絡があったのだ……それはもう、場合によっては、慈悲すら見せずに殺人を犯さなければならぬ程の、

重大な出来事。

少女が、その女性らしい膨らみを持ちつつも、しなやかかつ華奢な細さが印象的な体から禍々しい殺気を放ちながら、歩を進めていると。

目的地である“教員用のP C ルーム”の前へと辿り着いた。

その扉の前で、一旦少女は乱れていた息を整える……焦っているのは、ベストなコンディションで、泥棒猫を確実に仕留められないかもしれないからだ。

少女の年齢にしては豊かな胸が、膨らんだり縮んだりを三回ほど繰り返すと。いつのまにか、乱れていた呼吸に落ち着きを取り戻されていた。

それを確認すると、少女は、その細く美しい手で、目の前の扉を勢い良く開く。

あまりに勢い良く開いてしまったために、スライド式のドアが、耳に衝撃が来るほどの音を立てながら、縁に衝突した……また、全身を使って開いたために、少女のきめ細かな長い黒髪が、サラサラと揺れ動いていた。

ドアの先に広がっていた光景は、暗幕すら閉じられた、真っ暗なP C ルーム。

そこには、ここまで全力で駆けつけてきた少女……桐嶋美夏が考えていた人物どころか、殺害する予定であったビツ〇も、人っ子一人いない。

どうということ？——と、美夏が首を捻っていると。突然、彼女が手に持っていた携帯電話がブルブルと小刻みに揺れ始めた。

マナーモードにしてあった携帯電話に、どうやら着信があったようだ。

美夏はそれにすぐ反応し、タッチパネルの操作を手馴れた手つきで進めながら、届いたメールを開き確認した。

そこに、書かれていた内容は——

『いま、部室棟の三階から、アンタのお兄さんと知らない女子生徒が、校門から出て行ったのが見えたけど？ やっぱり、お兄さんって彼女いたの？』

美夏はP Cルームから踵を返し、再び怒涛の追走劇を開始した。

執行部のお仕事（2） 兄を追え！！（後書き）

プロットはありますので、書き上げること自体は苦ではありません。
ん。

ただ、やはり辻褄が合っているのかが心配です。

執行部のお仕事（3） 聞き込み開始（前書き）

皆さんお待ちせしました。

教育実習から帰ってきたばかりのゲレゲレです。

今回はリハビリがてら、本来ならもう一場面書くところを省略した、短いものとなっております。

次回には、ちゃんと書かなかった場面も入れたのを書くので、ご安心を？

では、どうぞ。

執行部のお仕事（3） 聞き込み開始

「こんにちわ！　こんにちわ！」

部室棟の三階。

その通路で、他の女子達と比べても一際背の高い女子生徒、木下藍が壁際に身を避けながら、女子バスケ部の部室へと向かっている先輩達が目の前を通過する度に、片っ端から頭を下げていた。

これは、藍の他にもいる新一年生達も同様で、部室棟三階の通路は女子バスケ部の新一年生による、一種の花道の様な情景を成していた。

そして再び、一人の女子バスケ部の先輩が、壁際で出迎えるように立っている藍たち新一年生の目の前を横切っていく。

「こんにちわ！」

「こんにちわ！」

「こんにちわ！」

……。

…。

一人の人間が歩を進めるたびに、次の一年生、次の一年生と、順々に頭を下げていくため、その光景はさながらウェーブが巻き起こっている様であった。

それが何度も繰り返され、そろそろ藍も面倒になってきた頃、一人の先輩だと思われる女子生徒が、部室棟の階段から三階の通路へと入ってきた。

本来なら先輩は先輩と、制服の左胸に着いている色着きラインの刺繍で分かるのだが……どうにも藍は、この女子生徒を先輩という

よりも年上だとは思えなかった。
なぜかと、問われれば……。

「あ、あうう……」

部室棟の階段から、開きっぱなしの両開きの扉を潜ったと思えば、一年生の中でも入り口側の最前列に立っている藍の事を見た瞬間に、突然オドオドとした様子でまるで小動物の様に、藍が立っている壁際とは逆側の壁に身を寄せ始めたからだ。

その姿は、まさに天敵に逃げ場を塞がれた小動物のようで……。

（なにやってんだろう、あの先輩……）

と、先程から繰り返し返してきた挨拶を、例外なくかまそうとしていた藍に、訳が分からないといった表情をさせるには十分なものであった。

反対の壁際にへばり付いている先輩の女子生徒は、癖毛の目立つ金色のセミロングの髪を、軽く七三に分けた髪型をしていて、確りと見開かれた吊り眼が特徴的な、活発そうで整った顔立ちをしている。

また、その吊り眼の視力が悪いのか、フレームの無い、ちょっとお洒落な眼鏡を掛けていた。

体格は華奢というより、女性である藍ですら、少し力を入れて抱いたら壊れてしまいそうな……そんなか弱い印象を持たせるもので、身長もそれほど高くは無く、むしろ小さい。

この女子生徒を一言で表すのなら、“妙に保護してあげたくなる娘”と誰しもが思い浮かべるであろう。

それは後輩であり、同性でもある藍も例外ではなかった。

しかし思い浮かべたとしても、相手は絶対の上下関係にある先輩だ。

口に出すなんて、もっての他……。

故に、藍は怯える様に反対の壁際に張り付いている先輩に対して、

これまでと例外なく、完璧な「こんにちわっす!!」——を繰り出したのだが。

「ひい!？」

逆に、更に怯えさせてしまい。

仕舞には元来た階段のほうへと、先輩を逃がしてしまった。

その際、あけっぱなしになっている両開きの扉の縁に、あまりにも怯え・焦りすぎな小動物な先輩が足を引っ掛けたのは言うまでも無い。

ドテンッ!——「いたあ!？」と、体の正面からコンクリートの地面に衝突する小動物な先輩もとい、小動物先輩。

幸い、体の正面とは言っても、顔面からの衝突は避けられたので、かけていた眼鏡の損傷は無かったが、後輩達が立ち並ぶ、この三階の空間で見事なこけっぷりを披露した事は、どうしようもないぐらいに情け無い光景であった。

自身の挨拶で、ここまでの反応が返ってきた事に驚いていた藍であったが、すぐにうつ伏せの体勢で、こけたままの小動物先輩に駆け寄ろうとした……が、

「うう……くそう」

(あ、一人で立てるんだ……)

あまりにも失礼な事だが、ヨロヨロと立ち上がる小動物先輩の後姿を見れば、誰だってそう呟いてしまうであろう。

この場合、呟きそうだったのを、口内で留めた藍を褒めるべきだ。すると、背を向けたまま立ち上がった小動物先輩が一度、自身を落ち着かせるためなのか?

ゆっくりと深呼吸をした後、藍たち後輩が立ち並んでいる方へと改めて振り返った。

振り返った姿は、制服越しでは有るか無いか判断しかねる胸を堂々と張った。

心なしか、どこか誇らしいもので……。

(あ、こっちに来た)

小動物先輩の歩みは、さっきまでの弱気な雰囲気は感じられず、むしろ“先輩だぞ、偉いんだぞ”とばかりに自信に満ちた気迫が感じられた。

そして、再び他の新一年生同様、困惑している長身の女子生徒、木下藍の前を横切ろうと……。

「あ、ああああ……」

「？」

いや、横切れず、後一步の所で“藍の前にすら立てなかった”。見れば、ガクガクと体を震わせている……というより、藍の方に、涙目の視線を向けてきている。

二人の光景は、小動物先輩の背の小ささと、藍の女性にしては、かなり高い身長が相まって。

さながら、“巨人に睨まれた小人”の様な情景をなしていた。

デカイ……そして小さい。

周囲にいる他の新一年生達も、二人の様子を交互に伺っていた。すると……。

「わ、私は……！」

「は、はい？」

突然、震える声音で、小動物先輩が藍に対して、何かを訴えかけてきた。

だが、私はの後に、言葉が続いてくれない……。

強気に出ようとしているのは分かるのだが、どうにも口がパクパクと動いているだけだ。

流石にサバサバした性格な藍も、これには戸惑う以外に無い。

しかし尚も、小動物先輩の勇ましい……いや、傍から見れば微笑ましい威勢は続く。

「わわわわ私は！　せ、せせせ先輩な……なんだぞ！？」

左肩に掛けている、エナメルバックの肩掛けを両手で握り締めながら。

“言っちゃった”と言わんばかりに、涙目の眼を、眼鏡越しで藍

に向ける小動物先輩。

正直、藍は一瞬だけ、この時の小動物先輩の事を可愛いと思ってしまった。

「は、はあ……？」

色んな意味で狼狽しそうな藍に、言ってやった小動物先輩は、絶望的な身長差を前にしても、ようやく震えて動かせなかった足を、自由に動かせるようになっていた。

しかし、動かせたとしても、小刻みに震えている事には変わりはない。

「せ、せせ先輩を、そんなにみ、見下ろすなんて……！」

「見下ろす……ですか？」

「そ、そうだ！ し、しし失礼だりょっ！」

精一杯の虚勢を張りつつ、藍の目の前に立った小動物先輩であったが、あまりの緊張のためか、思わず嚙んでしまった。

それに、新一年生全員が、胸中で『あ、いま嚙んだ』と反応する。また、これによって自分が満足する威厳を示せたと思い込んだのか？

ふふん……と、意気揚々に鼻を吹く小動物先輩。

だが、腰は引けたままだ。

ついでに足も震えたままだ。

「いや、見下ろすもなにも……」

「な、なななんだ！？ せ、せせ先輩に意見をしゅ、するとか！？」

やたら無理をしながら、長身の藍に突っかかってくる小動物先輩であったが――――

「はいはい、後輩が出来て嬉しいのね」

「にゃ!？」

突然、小動物先輩が後ろから頭頂部を鷲づかみにされてしまった。

大きな手……浅黒い肌ながらも、綺麗な指先は、おそらく女性のもの。

これまで、小動物先輩に視線を落としていた藍が、そこで初めて視線を従来の位置へと戻した。

そこには、高一女子にして175?を越える自身と同じぐらいの高さを持った、ベリーショート的茶髪と少し垂れたアーモンド形の瞳が印象的な、女子バスケット部の先輩が立っていた。

この人は!?!?!と、藍は目を見開く。

瞬間。

『こ、こんにちわッ!!』

これまで、藍と小動物先輩の二人の様子を静観していた新一年生全員が、一斉に頭を下げた……それは、この大きな女子生徒の立ち居地などお構いなく、通路の奥に立っていた新一年生も例外なくだ。すると、その一斉の挨拶に答えるように、妙に凛々しくも強気な顔立ちをした先輩が、女性にしてはハスキーな声音で口を開いた。

「うい! 初めまして、新一年生ども!」

屈託の無い、心から清々しいと思える笑顔で、新一年生達を歓迎する大きな先輩。

目の前に立たれていた藍も、皆に少しだけ遅れて「こんにちわ」という挨拶をした。

そんな藍に、いまだ小動物先輩の頭を鷲づかみにしたままの先輩が視線を向ける。

「お前が、“あの”木下藍ね……なるほど、こりやあウチの顧問が必死こく訳だ」

下げていた頭を上げ、視線を合わせた藍に、いきなり一人で納得し始める先輩。

「俺は、この女バスのキャプテン、五十嵐真樹!^{いがらし まき} これからよろしくな、スーパールーキー?」

言いながら、五十嵐と名乗った女子バスケット部のキャプテンが、直立の姿勢でいる藍に、その女性にしては大きな右手を差し出した。

握手——古今東西、決して悪い意味には取られない、共通の儀礼の様なもの。

藍は、その差し出された右手を、恐縮といった様子で手に取った……。
すると。

強ッ!? ——

五十嵐の右手を手を取った瞬間、握り返してきた彼女の握力に、思わず藍が胸中で驚きの声を上げる。

決して、わざと強く握られたわけではない……それは、ニコやかに邪気の無い表情を向けてくる、相手の目を見れば分かる事。

それなのに、この握られた右手の骨が、全てくっ付けられてしま
いそうな程の力。

「よ、よろしくお願いします……」

藍は、素直に目の前の五十嵐と、自身のバスケでの実力差を、この握手一つで実感していた。

何がスーパールキーだ……この女性ひとに比べれば、あたしなんて。右手同士でなされた握手を見つめながら、藍がそう考えていると。
「そう緊張するな。俺たちはこれから同じチームで闘うんだから。な？」

言いながら、五十嵐が小動物先輩の頭を驚づかみにしていた左手を離し、そのまま藍の右肩に乗せた。

これまた大きく、それでいて優しい暖かみを持った掌だった。それに、藍の緊張が不思議と解れてきた……本当に不思議と、だ。
「は、はい！」

藍が力強く返事を返すと、五十嵐が「うん、その活きだ!」と頷いた。

二人の長身な女子生徒が、そうしていると。

「うん？ あれ、竜蔵じゃん」

唐突に、二人の下で小動物先輩が、何かに気付いた様に声を発し始めた。

瞬間……。

「え、うそ！？」

これまで、男勝りな雰囲気だった五十嵐の様子が、一瞬にして様変わりした。

どんな風にと聞かれれば、それは乙女の様にとしか言いようが無い変わりようであった。

「ど、どこだ！？ 御来屋！ 桐嶋君は、どこに居るんだ！？」

既に藍との握手は放され、五十嵐はこの三階通路から外の光景に目を向けていた。

手すりに両手を置きながら、身を乗り出しそうな勢いで外を探す彼女の姿は、さっきまでのイメージからは想像が出来ないものであった。

すると、この状況を作り出した本人、小動物先輩改め、女子バスケ部二年、御来屋鳴子みくりやなるこが、背伸びをしながら手すりに手を添え、三階から見える外の風景の、ある一箇所を指差した。

「ほら、あそこですよ五十嵐先輩」

その指し示された場所とは、ちょうど学園の正門辺り……。

そこに五十嵐と、何事か分からないといった表情をしている藍が、視線を向けた。

（あ、お兄さんじゃん……って、あの隣を歩いてる女性ひとって！？）

瞬間、この部室棟に来る前同様。

彼女の表情が、一瞬にして朱色に染まる。

ここに来る前、一年生の階層である四階の廊下で見た光景と、浮かんできた邪推がフラッシュバックしてきたからだ。

「い、いた！」

しかし、そんな藍を放っておいて、五十嵐は桜や他の建物などが

目立つ校門前を歩いている、竜蔵と冴島の二人を発見する。

「鳴子の言ったとおりでしょ？」

「あ、ああ……だが」

鳴子が首を傾げながら、微笑を浮かべた表情を五十嵐に向ける……。

しかし、とうの五十嵐の表情は、先程とは違って、嬉々としたものではなく、むしろ陰りが掛かって見えていた。

五十嵐が、手を置いていた手すりを、ギュッと掴む。

「隣に歩いている女子は、誰なんだ……」

柔らかい唇を噛み、目を薄っすらと潤ませながら、五十嵐は悔しそうに声を漏らす。

その姿に、またしてもいつの間にか、ブレザーのポケットから自身の携帯電話を取り出していた藍が。これまた気付かぬうちに、携帯電話でメールを打っていた。

というより、なぜ自分は、こういった場面に直面すると携帯電話を取り出すのか？——と、自問自答をしようとするも、どうにも頭が回らない。

むしろ、頭を回そうとする度に、さっきから浮かびっぱなしの、

如何わしい妄想が藍の頭を駆け巡ってしまう。

これが思春期かと、うんざりしそうになるも、どうにも出来ない藍であった……。



「で、とりあえずは、どこから回るんだ？」

「千代女さんからは、既に被害にあっている他校の生徒達を当たるように言われているから。まずは、そちらからだろう」

学園の正門を抜け、既に学園専用のバスの座席に腰を下ろしている二人は、互いに一切の視線を合わせることも無く、事務的な抑揚

の無さで、今後取る行動の確認を行っていた。

二人は共に学園指定の制服姿に、同じく鞆を持っただけの、そこから辺にいる帰宅部と変わらない格好をしているが（冴島は、木刀の入った竹刀袋を膝に寝かせている）……醸し出している、常人とは違った雰囲気は、一目見ただけで只者ではない事を指している。

座っている座席は、バスの一番後ろで窓際に竜蔵、一つ間を空けたところに冴島といった位置関係であった。

「は……面倒だねえ、そりゃ。今日の残りの間に、一区を回ってことだろ？ それ？」

窓の外に視線を向けながら、本当にダルそうな声音を吐く竜蔵。それに、冴島は特に気にした様子も無く。

「明日に持ち込んで、また部活を休むよりかはマシとは思わないのか？ まあ、私には関係の無い話だが」

「そうだな、そう考えれば少しはマシかもしれない……」

昨日今日と、竜蔵は執行部関係の用事で既に二日連続で部活であるラグビー部を休んでいる（支部長を務めている道場の方は、確りとなしている様であった）。

これは新一年生を迎える、この時期にとって重大な損失だといえる。

まず、初っ端の顔合わせや、名前を覚える、交流を軽くでも良いから取って、今後につなげるといった。チームという集団を主とする競技にとって、重要なファーストコンタクトを取りこぼすのは、二年に上がったばかりの先輩としては痛いところなのだ。

更に、竜蔵には気掛かりがあった……。

そう、入学式直後に、色々とあって勧誘した一年生の結果を、まだ見届けていないのだ。

自らが指し示した事だけあって、こればかりは自身の目で、早く確かめなければいけない。

故に、竜蔵は早くこの執行部の仕事を終らせようと、ここで改めて決心をする――――

「しかし、部活の話になるが。あ……冴島さんが、剣道部所属じゃないことには驚いたわ」

窓に視線を向けつつ、相手の呼び方に困りながらも会話を続けようとする竜蔵。

ちなみに、このバス内には、既に二橋の生徒達は竜蔵と冴島以外には、数人しか見受けられない。

PCルームでの話しのお陰で、彼らとはバスに乗車する時間帯がズレたのであろう帰宅部。

だからこそ、この静かな空間に耐えかねた竜蔵は、一つ空けた隣に座っている彼女と会話を続けようとしていたのだが……。

「刀子で良い。部活の件なら、私はただの助っ人として出ただけの事……勝手に勘違いをしているのは、そちらの方だ」

「なら俺も竜蔵で良い。普通、剣道でインハイ優勝したら、誰だって部活に所属してるって思うだろう？」

「それなら、君にだって言える事であろう？ ラグビー部に所属しながら、プロの格闘家として公の場に出ているのだから」

「俺の場合は、学校とは違った所でやってるから違うだろう？」

「私だって、学園とは違う場所で剣術を磨いている」

会話が妙に続いているように感じられるが、実情、二人は全く視線を合わせなければ、声音に抑揚を持たすという事すらしていない……それはもう、某ゲームで伝説的な棒演技を演じた金城○の様に。

しかし、そんな二人とは違って、周囲の数少ない視線からは、色々複雑な感情が送られてくる。

まあ、これも当たり前と言えば当たり前か……。

何故なら、二橋学園に所属していれば、必ずと言って良いほどに全生徒が名前を知っていると言われる二人の男女が、一つ席を空けているとはいえ隣同士で座っているのだ。これの異常さが分からないのなら、学園ではもぐりと言われても仕方が無い。

（埒があかないな……話題を変えるか？）

だが、当の本人達は、そんな周囲の視線など構いやしない。

竜蔵が、これから仕事をするということで、コミュニケーションを確り取っておこうと勤しんでいると。

「無駄な会話は止めよう……これから、もしかしたら荒事に遭遇するかもしれないのだ。今のうちから、軽い気構えでも組んでいたほうが、より建設的だ」

冴島が、そんな竜蔵の努力を塵にする様な事を口にし始めた。

すると、竜蔵はそれに異を唱える。

「無駄に構えたって、固くなるだけだぞ？　もっと気楽にいけよ、そっちの方が柔らかくて良い」

「私から見れば、君は樂觀視しすぎだ。確かに脱力とは、全てにおいて必要だが。君の場合、それは脱力ではない。ただの油断だ……今なら、私でも君を倒せる自信があるぞ？」

瞬間、冴島が膝に寝かせていた竹刀袋に手をかけ、竜蔵に視線は向けずに威圧感プレッシャーのみを送り始めた……心なしか、彼女の居住まいや、刀の様に妖艶な瞳が、更に研ぎ澄まされたように感じる。

が、とうの竜蔵と言えば……。

「無理無理。常識を一応は弁えてる人間だったら、こんなところで仕掛けられる筈ないじゃん」

へらへらと笑いながら、窓際の肘掛にかけていた右腕を、無い無いと振る。

しかし、一向に視線は向けないままだ……外の流れる風景だけ、先程から竜蔵は見ている。

「……確かに、そうだな」

言いながら、竜蔵の言葉を聞いた冴島が、固め始めていた闘気と威圧感を収めた。

やはり、本気ではなかった様だ……が。

一つだけ言っておく事があるとでも言うかのように、冴島が言葉を続けた。

「だが、これから君が直面する世界には。今の状況でもお構いなし

に切りかかってくる者もいる……別に流儀を貫くのも良いが、気をつけることだな」

「はいはい、心配してくれて、どうもありがとう御座いますよ」

一応、竜蔵のための忠告として告げたのだが、どうにも彼は不真面目な様で、聞く耳を持つとはしない。

そんな相手の態度に、冴島は“ふん”と鼻で短い溜息を付く。

そろそろ、一つ目の目的地へとバスが到着する頃だ……。

◇

美夏は焦っていた……それはもう、かなり焦っていた。

どれぐらいと聞かれれば、世界一不幸な男が、クリスマスに疎遠になった妻と、何事も無く寄りを戻してしまうぐらいに……いや、少々分かり辛い。

もっと正確に、分かりやすく説明すれば、相手の現在地が分かる携帯機器のアプリで、目的である兄の動向を探ってみた時。

向かっている先に、よく第一区や二区のカップルが利用していると噂のラブなホテルがあるから、焦っていた。

なぜ、そんな情報を美夏のような、兄以外の異性は眼中に無い15歳超絶ブラコン娘が知り得ていたかと言えば……いざという時に、という理由でだ。

そんな時が、いずれは来るのだろうか？

いや、こればかりは神すらも知らぬ……という内容の話だ。

話は少しだけ脱線したが美夏は現在、バスに乗って学園から遠のいていく兄と謎の女を追うために、同じく同じ駅行きのバスに、一本遅れる形で乗車していた。

なぜ、乗っているバスの行き先すらも分かったのか？

それは、先も言ったように、相手の行き先が表示されるアプリを使って、どこの学園専用のバス停で待っていたのかを、目視で判断していたからだ。

つまり、携帯機器のディスプレイに表示された地図に浮かび上がった、兄のアイコンの微妙なズレをヒントに、待っていたバスのバス停を割り出したという事だ。

ちなみに、これは藍から二人が正門を出たと連絡が来た瞬間から行なっていた事で、走りながらの作業になっていたのだが……何事も器用にかつ完璧にこなす、この無駄にハイスペックな妹には、造作も無い事であった様だ。

証拠に、さっきまで走り回っていた筈の彼女は、涼やかな顔をしながら、居住まい良くバスの最後尾の席に座っている……。

しかし、内面は先に説明したとおり、焦りに焦っているために。下手に今、彼女を家族や親しい間柄の人間以外の者が刺激しようものなら、その者には“死”あるのみなのかもしれない。

暫くバスに揺られていると、美夏が手に持っているタッチパネル式の携帯機器の画面に、二つ先の駅で兄のアイコンが、本来のバスの進行方向とは、違う方向に移動し始めたのが確認できた。

降りた——

そうと分かれば、美夏も兄と同じ駅で降りるだけだ。

すると次第に、沸々と燃え上がるものが、美夏の胸中に芽生え始めた……。

それは何なのか？

いや、聞くまでも無い……邪魔者を殺せ、兄を誑かす売女（ビツ○）を根絶やしにしろ。

今、彼女の胸中を支配しているのは、そんな狂気とも呼べる荒々しい感情だけだ。

◇

今回の事件の鍵とも呼べる人物、または自身の妹に追われている

とは、一切考えてもない竜蔵は現在。

二橋学園から、バスで大体15分程の距離にある、お隣の学校。

東野台大学付属高等学校の近くまで来ていた。

ここは竜蔵達が普段通っている、二橋学園とは違って、大学と高校が一緒になっている学校なので、敷地もそれなりに広い……だがまあ、二橋学園の場合、それ単体で、そんじょそこの大学よりも敷地があるので。東野台大学付属高等学校がいくら高・大と一緒になっている、広さの面積では到底勝ちようも無いのだが……。

周囲は桜の木が咲き乱れる、春特有の風流な情景をなしていた……が。

竜蔵は目の前に広がる、なんとも面倒臭そうな地形にうんざりとした表情をしていた。

「これを登るのね……馬鹿じゃねえの？」

「なにを文句を垂れているのだ？ 急ぐぞ」

桐嶋竜蔵と、その前を進むさへじま刃島刀子の目の前に広がる地形。

それは、正門自体は平地にあるものの、学校自体は山の頂上にあるという、長い坂道を歩く事を約束された面倒臭い光景であった。

確かに山自体は桜の木の色や、他の木々の色が入り乱れて、とても綺麗なものであったが、竜蔵はどうして先程のバスは、ここも登ってくれなかったのかと溜息を吐く。

しかし、今回の事件についての情報収集や、木佐貫きひめき千代女ちよめから言われた陽動を効果的に進めるには、この山を登って、東野台大学付属高等学校へと向かわねばならない。

そう考えた竜蔵は、なんとも気の進まない足取りであったが、ゆっくりと先に立っている刃島のもとへと、坂道を上りながら近づいていった。

長い坂道を歩き続けて数十分、二人はようやく東野台の校舎を目の前にしていた。

来る途中、幾度と無く、東野台の高校生や大学生の男から、他校の制服を着ている冴島にアプローチがかけられていたが、それは隣を歩いていた竜蔵の存在によって、これまた幾度と無く消沈していた。

だが別に、竜蔵はただ彼女の隣を歩きながら、東野台の山一つを学校の敷地として使用している、珍しい立地条件のもと建てられている施設の数々に視線を向けていただけで、別段、来る男に対してはシカトしていただけたのだが……。

どうやら、その制服越しからでも確認できる肉体の造形や、隠そうにも隠し切れない眼力が、勝手に近づいてきた男を退けていた様だ。

「で、これからどうするんだ？」

「まずは君の妹さんと同じ被害者である、ここの学校の生徒を探す。それもあるべく目立つ様にだ」

しかし、二人にとって、これまでの坂道での行程など気に触るものでもなかったようで、既に当初の目的へと意識を向けていた。

東野台大学付属高等学校の校舎は、少し歴史の感じられる煉瓦調の作りながらも、様々な修繕や改装が行なわれていたためか、どこか独特な現代感を醸し出す、少し独創的な建物で、初めて見る者にとっては、だいぶ不思議がられる造形をしていた。

また校舎を取り囲む敷地も、様々な植物や木々が確りと手入れをされた状態で並んでいて、アスファルトのような単調な色に緑の飾り付けをしている。

そして現在の時刻が、各部活動の活動時間であったため、校舎内や敷地、または竜蔵と冴島の後ろや横を、東野台の生徒達が忙しく走ったり歩いたり動き回っていた。

「目立つ様にね……なんか具体的な指示とかは無いのか？」

「こういった事は自分で考えることだ」

「だとすると、ワザと人に聞き込みまくるとか？」

「それも一つの手だろうな。ここの生徒達に私達が被害者の女子生

徒を探し回っているという情報が流れれば、おのずと犯人の方へと、その情報が流れるかもしれないからな」

「はあ……時間が掛かりそうだな、それ」

自らが思いついた、誰でも考え付きそうな案であったが、竜蔵は今日何度目か分からない、面倒臭そうな溜息を盛大についた。

こうしている間に、今も妹を狙った盗撮写真がネット上に公開されてしまっているかもしれない。

そういった無意識の焦りが、竜蔵に時間を気にさせていた。

「仕方ないだろう、もともと私達がすべき事は、今も学園で犯人の妨害や割り出しをしている木佐貫先輩の時間稼ぎなのだから。機械に疎い私達が、とやかく言える事ではない」

「まあ分かっちゃいるけどな……だけど待てな？　いくら俺が機械に疎いといっても、“お前程ではない”からな？」

「ッ!？」

お前とは違う……それを妙に強調して発した、冴島の隣に立っている竜蔵の言葉に、彼女は無言で顔を真っ赤にさせてしまう。

その様子は、普段の凜々しい彼女からは考えられない面白いものであったが、竜蔵は眼すら向けぬまま、歩を東野台の校舎へと進め始めてしまう。

だが、そんな竜蔵の背中に、顔を真っ赤にさせたままの冴島が、異議ありとばかりに口を開いた。

「べ、別にあれは仕方が無いだろう!!　今まで、ああいった物には関わりが無かったのだから!!」

そんな彼女の異議の主張に、竜蔵は特に気にした様子も無く……。「それでも“わ、私が触ったら壊れやしないか!?”なんて、真顔で聞く奴なんて、さっきまでいないと思ってたよ……マジで」

「ッ!？」

振り向きもせずに竜蔵から発せられた、さっきバス内で起きた出来事に、冴島は再び黙りこくってしまう……。

実は先程、この地域へと来る途中のバス内で、竜蔵が暇だからと

冴島にスマートフォンアプリをやらせようとした一コマがあったのだ。

そこで、もともと携帯電話“すら”持っていなかった冴島は、突然目の前に現れた最新機器に戸惑ってしまい――

『こ、この機械は何なのだ？』

『うん？ いや、スマホだけど？ 知らないのか？』

『いや……私は、こういった物には疎いのだ』

『ふーん。じゃあ、教えてやるから、ほれ』

『……な、なんだ？』

『これ使って軽いゲームするから、ほら、もてよ』

『い、いや……私はいい』

『なんでだよ？ 目的の場所まで、まだ時間かかるんだし暇だろ？』

『だ、だが……』

『物は試しだろ？ ほれ、やってみろよ』

『お、おおおい！！ 何を勝手に！？』

『そんな驚く事でもないだろ？ ちゃんと教えてやるから、落ち着

いて画面を見ろよ』

『だ、大丈夫なのか！？ し、知らないぞ！ わ、私が触ったら壊

れやしないか！？』

『……』

――という、現代人なら誰もが絶句しそうな一幕が、行きのバス内で起こっていたのだ。

この21世紀の現代社会で、花の高校二年生である女子生徒が、携帯電話すら持っていない事にも驚きだが、ここまで機械に対して疎い、もしくは恐怖心を抱いているのは、もはや天然記念物ものだと言えるのではないだろうか？

よく今日まで、そういった通信手段も無しに、都市の裏で動かなくては何らない執行部で活動が続けてきたなど、竜蔵は彼女の前を

歩きながら考える。

おそらく同じ学校で、しかも昔ながらに付き合いがありそうな木佐貫千代女や二橋姫樹が、かなりサポートをしていたのだろうと、竜蔵はすぐに考えに当たりを付けた。

だが、今回ばかりは、そういった甘えを出してもらっては困る。なぜなら、被害者の一人というより、すでに主な被害者に自身の妹がリストアップされているからだ。

そういった状況で、犯人もしくは有益な情報源が見つかり、もし二手に分かれる必要性が出てきてしまった場合、連絡に遅れが出るのは致命的な損失に繋がってしまう。

端的に言えば、妹に更なる危害が加えられてしまうかもしれない……。

これは後で、後ろでいまだ恥ずかしそうに、悔しそうに立ち止まっている彼女に、携帯電話の一つぐらい持たせないと拙いなど。

この時、危機感を覚えた竜蔵は考えていた……。

執行部のお仕事（4） 必然の遭遇、そして追走（前書き）

急いで書いたもので、チェックはしてません。

執行部のお仕事（４） 必然の遭遇、そして追走

東野台大学付属高等学校の敷地内で、竜蔵と刀子の二人は“なるべく目立ちながら聞き込みをしなくてはならない”。

なぜか？

それは犯人に対して現在、インターネット以外でのアプローチをかけ、敵は電子網の中ではなく現実の世界で動き回っていると認識させるためだ。

これが上手くいけば、二人とは違って学園の方でネットの世界を見張っている木佐貫が動きやすくなるし、同時に犯人の居場所も特定できる可能性が出てくるからだ。

実際には、相手がまだ複数なのか個人なのか特定できていないため、非常に賭けの部分が強くなるのだが、木佐貫自身が個人の可能性が高いとしているために、この方法を取っている。

だがそもそも、“なるべく目立ちながらの聞き込み”とは、ただ手当たり次第に聞き込みまくる以外にないのではないかと考え始めた竜蔵は……。

聞き込み開始から丁度20分後。

『うちの女子にちよっかい出しておいて、その態度なんなんだよ！』

『やめて翔くん！！ やめようよ！！』

『菜子は下がっててくれ！ 俺がコイツと話つけるから……』

「あゝ……メンドクせゝ」

「……はあ」

もういっそ別の方法で目立とうかと、当初の目的から挫折しようとしていた……。

場所はテニス部が練習していた、柵で囲われているテニスコートのすぐ横。

周りには、何事だと見に来たテニス部や、他の部活動の者達が野次馬として集まり始めていた。

そして、そんな人だからが出来た場所の中心で、竜蔵と刀子の目の前には何やら、いかにも高校生といった、眼にかかりそうなのに伸ばされた無造作な黒髪に、中肉中背の体格が特徴とも言えないが特徴的な男が、背に一人の小柄な女子生徒を庇いながら憤慨していた。

『おい聞いてんのか!？ お前に言っただよお前に!!』

『翔くん!』

特徴のない男が、面倒臭そうに後頭部をポリポリと掻いている竜蔵に向けて指をさす……背に庇われている小柄な女子生徒は、そんな竜蔵の態度を横目で見つつも、憤慨する男の袖を必死に引っ張り続けている。

ホントにどうしてこうなったと、この状況を第三者の立場として客観的に見ていた刀子は、本気で頭を抱えなくなる思いであった。

「どうしてくれるのだ、こんな面倒ごとを……」

「どうするもなにも、ただ“写真を見せて”、身に覚えがないか聞いただけじゃん」

言いながら竜蔵は先程、学園でPC相手に奮闘している木佐貫から送られてきたばかりの、東野台の生徒の写真が映し出された盗撮画像を、右手に持っていたスマートフォンで困ったように確認していた。

そう、原因はこれなのだ……。

「普通、いきなり自分にとって身に覚えのない写真を見せられれば、誰だって混乱をするだろうし、親しい間柄の者なら激昂するかもしれないと考えられないのか?」

咎めるような視線を困った様子の竜蔵に向けながら、刀子は両腕を胸の下で組む。

そのポーズは普段なら竜蔵ですら眼を釘付けにしてしまいそうな、妖艶な雰囲気漂うものであったが、生憎と、今の竜蔵には、そんな余裕はない……釣れたといえ、周囲を囲い始めた東野台の生徒達と、目の前の騒いでいる男女二人だけだ。

ただだと言っても、この場に居る竜蔵以外の全てを釘付けにしていた訳だが。

「いや、だから最初に前置きしておいたじゃん。“ちょっとゴメンね、今ある問題について色んな人に聞き回ってるんだけど” って……何がダメだったんだ？」

自らの左斜め前で、なぜ上手くいかなかったと頭を悩ます竜蔵に、刀子は再び「はぁ」という溜息を吐いた……腕を組みながら、男に對して呆れた表情をする彼女は、それだけでも絵になるものであった。

「その後、何の説明もなしに写真を見せたのが、いけなかったのではないか？」

「説明か……そうだな、確かにいきなり見せられれば、驚くどころか俺を疑うもんな。失敗した」

『おい！ なに勝手に話し進めてんだよ！！ こっちに眼だけでも向けるよ！！』

二人して、この舗装された道があるものの自然の木々に囲まれた、山の中に作られたテニスコートの横で起きている人だかりや騒ぎなど関係ないかの様に、反省会の様なものを開いている雰囲気。先程から竜蔵に對して怒りを示している男が、更に激昂し始めた。

当然だ。

おそらくは親しい間柄の、後ろに庇っている小柄な女子生徒のために怒っているのに、全く持って張本人二人に無視されているのだから。

故に、男はついに竜蔵の前へと怒気の籠った歩みで近づいてきてしまった。

小柄な女子生徒は、必死に彼のことを引っ張るも、力が足り無い

のか、ズルズルと引き摺られてしまっている……。

そうして、彼が竜蔵の前に立てば、二人の体格差が如実に確認できるようになっていた。

「なんだよ？ 別にちょっかいを出したわけじゃねえんだから良いだろう？」

『うッ……！？』

これまで怒りに任せた勢いで、色々と竜蔵に対して言っていた男であったが、目の前に立った瞬間、相手と自分の体格差や戦力差に、思わず身動きしてしまふ。

中肉中背の男は、竜蔵より大体3？ほど背が高いのだが……その胸板や、腕の太さ、首の太さ、果ては妙に強く威圧感を放ってくる竜蔵の眼力に、圧倒的に自身の実力が劣っている事を一瞬で悟ってしまったのだ。

見れば、目の前の男の拳は、そこら辺の一般人とは違う、ゴツゴツとしながらも丸みを帯びたもので、非常に硬い、鈍器の様な印象を持たせていた。

だが、男は引けない……引くつもりはない。

なぜなら後ろに庇っている小柄な異性は、自分が小さな頃から恋焦がれてきた、近所の幼馴染だからだ。

“才能の区画”と呼ばれる第一区内にある学校に通うと彼女が言ってきた時は、必死に特技であったテニスを練習し、中学の関東大会で優勝して、自身も第一区内の学校に入学できるように結果を残したぐらいなのだ……それはもう、彼女に対する思いは相当なものである。

そんな強い恋心を持った男は、目の前の漢おとしを見ながら考える。

もし、目の前の漢が、後ろで袖を引っ張っている彼女に危害を加えようとしていたのなら？

考えられる……なぜなら先程、彼女だって身に覚えの無い写真を持っていたのだから。

重度のストーカーかもしれない。

そうなった場合、後ろに庇っている何の抵抗手段もない彼女は、容易く目の前の漢に連れ去られ。その清く真っ白な柔肌を、強引に男の劣情を持って汚されてしまうであろう。

おそらく、これは相手のすぐ後ろに控えている、美人で常識人っぽい女性は止めやしない……なぜなら、どうみても目の前の男と同じような鋭い空気を身に纏っているからだ。

どう考えても、同じ種類の人間であろう。

これはやはり、小柄な幼馴染を守るのは自らしか居ないのではないか？

その考えに一瞬のうちに至ってしまった男は、ついに目の前の漢……竜蔵に対して、戦力差を顧みない行動に出してしまう。

男が取った行動……それは、竜蔵の襟首を取る行為。

つまり胸倉を掴んだのだ……。

が、それはすぐに無意味となってしまう。

何故なら竜蔵が、胸倉を掴んできていた男の右手の手首を、思いっきり左手で握り返していたからだ。

いつの間に……そういった疑問が浮かぶ前に、男の右手首に集中していた筋組織が圧迫され、血流が止まり、胸倉を掴んでいた右手が開かれてしまった。

『あ、ああああ……ッ!？』

声にならない呻き声……下手をすれば、手首に集中している細かい骨が、全て砕かれてしまうのではないかと感じてしまう程の握力。胸倉から手を放してしまった男は、あまりの痛みに膝を曲げ、苦痛に歪んだ表情のまま、地面に両膝をつけてしまう。

まるで右手の手首から先が無くなったと錯覚を起こしそうな痛み……。

しかしそれは、これまで庇っていた守るべき人によって、解放させられた。

『止めてください!! お願いします、翔くんを虐めないで!! 私なら、何だって言う事を聞きますから!!』

突然、痛みに膝を屈してしまった男の耳に入ってきた、聞き慣れた異性の悲痛な叫び。

顔を上げてみれば、守るべき人だった彼女が、目の前の屈強な他校の男に飛びつき、必死に自分を解放するよう懇願しているではないか……。

その様子に、他校の男は困った様な表情をしながら、こちらの右手首を握り潰そうとしていた左手を放してくれた。

途端に解放された男は、そのまま地面へと右手首を押さえながら頭を垂れてしまう。

『ああ！ 翔くん!!!』

自身の懇願が通った事もあったが、何よりも大切な人が解放された事によって、涙目の笑顔を浮かべながら、地面に頭を垂れてしまっている男へと向き直る小柄な彼女。

そんな様子に、当の竜蔵はと言うと……。

（あ、あれ……俺、別に悪い事してないよね？）

どう考えても、自身が悪者なこの状況に、訳が分からないと額に汗を浮かべていた。

しかし、いくら竜蔵が困り、焦っていたとしても事態は急速に進んでいく。

地面に右手首を押さえながら跪いている男を、身を挺して守る様に、小柄な女子生徒が、こちらに涙目の視線を向けた。

『あ、あの……翔くんを放してくれて、ありがとうございます』

「あ、ああ……（いや、別にすぐ放すつもりだったし）」

小柄な女性に涙目で見上げられ、困惑する竜蔵。

だがやはり、困惑する本人を放っておいて、女子生徒は話を進めてしまう……。

『……では、お約束通り、私を好きにしてください。翔くんには、もう何もしないで下さい』

消え入りそうな声で、搾り出されたその決意に満ちた感情は、彼女の本気を示していた……が、そんな事をされても、竜蔵自身にも

とからその気は無い。

だが、もう一度言おう……事態は本人を放っておいて、更に進んでいってしまう。

『な、菜子!?!』

頭を垂れ、跪いていた男が顔を上げる。

『大丈夫だよ、翔くんは私が守るから……恐くないから』

「あ、いや、別に俺は……」

なにやら悲壮感漂う雰囲気になってきた二人に、手を差し伸べようと竜蔵が近づくと。

『菜子に近づくな!?!』

突然、地面に跪いていた男が、目の前に立っていた彼女を押しつけ、反り上がる様にして竜蔵へと、その手首を痛めた右手の拳を突き出そうと――――

ガシャッ!?!――――「あ」――――は出来ず。

立ち上がりながら、こちらを殴ろうとしていたため、無防備にも晒されていた男の顎に向けて、竜蔵が“無意識”とも呼べる反応で、右の膝を合わせてしまったのだ。

ちなみに、男が突き出した右拳は、右膝を突き上げるため背筋を反っていた竜蔵には届かなかった。

基本に忠実な技は、攻防一体の形を生み出す……。

まさに竜蔵は、ここで無駄な技術を発揮してしまったのだ。

いくら無意識とはいえ、プロの右膝……それもカウンターで貫つてしまった男は、再び地面へと倒れこむ。

一瞬蹴り上げられた事で、頭を鞭打ちの様に弾かせながらも、直立の姿勢で、額から弾力性のある特殊なゴムの素材を使った地面に倒れた男は、先程とは違って、呻き声すら上げずに、意識も地面へと沈めていった。

『翔くん!?!』

その見事なまでのカウンターもそうだが、他校の生徒が、自分達の学校の生徒を伸した光景に、周りがどよめき立つ……。

これは拙いと感じた、これまで静観を決め込んでいた刀子が、まづったなと困惑していた竜蔵の肩を後ろから掴む。

それに振り返る竜蔵であったが、刀子はすぐに口を開いた。

「急いでここから出るぞ、面倒ごとになる前に！」

「ちッ！ 分かったよ！」

瞬間、二人は驚きの切り替えの早さで、この他校の生徒達が囲いを作っていた場所から抜け出し、東野台大学付属高等学校から脱出したのであった。



東野台のバス停へと到着した美夏が、まずは確認した事……。

それは当然、自身の兄が現在、どの辺をうろついているのかと持っていた携帯機器でGPSを確認する事だった。

位置的には山一つを学校の敷地としている、東野台大学付属高等学校にアイコンが表示されているのだが、どうやら走る様な速度で移動中らしい。

進行方向は、山から下りて、東野台大学付属高等学校の正門に向かっていている様だ。

これはもしかしたら、そこで張っていた方が賢明かもしれない。

そう考えた美夏は、すぐさま件の場所へと向かったのだが……。

(まづったわね……)

早速、問題にぶち当たっていた。

美夏の目の前には、東野台大学付属高等学校の平地に設置された正門があるのだが、それは既に正門の直ぐ横にある控え室にいる、警備員の手によって閉じられた後だったのだ。

おそらく、あの控え室には正門を自動的に閉じれる装置でもあるのだろう……でなければ、あんなに重そうなスライド式の門を、控え室にいるオッサン一人で閉じられるはずがない。

そんな事を、美夏は東野台大学付属高等学校の正門近くにある、不動産屋の建物の物陰で考えていた。

周囲には人通りがあまり無く、美夏の現在とっている、スパイ映画よろしくの壁に背を預けた格好も、誰の眼にも止められていない。もし人の通りが多い場であつたのなら、美夏という類稀な優美さを持っている女子高生は、こんな落ち着いたというより、変な行動は取っていない。

（あの門が閉められてるって事は、お兄ちゃん是他の出口から出てくる事になる……そうになったら、また追いかけるのに時間が掛っちゃう）

美夏はそこで、周辺に何か無いかと視線を巡らせ始める……。

店主が寝ている不動産屋の物陰の向こう側には、まだ開店時間には早い焼肉屋の閉じられたシャッターが目につき、隣にはパン屋だとかの飲食店が軒を連ねている。

そして視線を右上に移してみると、そこには東野台商店街と書かれた、入り口である大きな門が建っていた。

そう、ここは東野台大学付属高等学校の生徒達や、大学の学生たちが専門の研修やゼミの研究として開いている学生商店街なのだ。

しかし現在は、まだ飲食店の開店が見られていない……おそらく、店を開いている生徒や学生たちが、まだ到着していないのであろう。故に今、この商店街で開店している店といえば、美夏が物陰として利用している、不動産屋ぐらいのものであった。

だが、そんな事など美夏の知った事ではない。

美夏は再び、視線を東野台大学付属高等学校の正門へと、壁際から覗き見る様にして移した。

（だけど、どうしよう……GPS的に見れば、お兄ちゃんはおそらく、あの正門へと向かっている筈なんだけど。閉まっているのを見

たら、絶対に別の出入り口を探すだろうし……そうになると、山一つが敷地の、この学校の外周をグルグルと張りながら、お兄ちゃんの出現を待つしかなくなる。でも、それは無理ね。中から出てくるの人間を、ほとんど円に近い外周から張り続けるなんて、体力的にも難しいから)

閉じきられた東野台大学付属高等学校の正門を壁際から覗き見つつも、体育会系の気合理論を放棄する美夏……。

なら、どうすれば？

そう考えた美夏は、おもむろにGPSのアプリを起動している、自身のスマートフォンに目を向けた。

見れば、いまだ兄は正門の方へと山下りの最中だ。

あと大体、2分もしない内に正門の向こう側から現れるのでは無いかと思えるぐらいのGPSのアイコンの移動速度。

(ならどうする？ もう時間は無いし、きつとすぐにお兄ちゃんは私の前に現れる……あれ？)

その時、美夏は根本的な事に気がついた。

(……だったら、私が姿を見せれば良いじゃない！ そうすれば、お兄ちゃんは何で私が、こんな所にいるのか気になって止まってくれる筈！ 何を難しく考えてたんだろう……)

天啓を得たとばかりに、瞳を輝かせた後、再び閉じられた正門を壁際から覗き込む美夏。

なんで今まで、そんな簡単な事に気付けなかったのかと、不思議に感じつつも、自身の兄が閉じられた正門の向こう側から来るのが待ち遠しい彼女は。今にも、隠れている不動産屋の物陰から飛び出しそうな雰囲気醸し出していた。

だが、まだだ……右手に持っているスマートフォンのGPSアプリによれば、あと1分くらいで兄は山を下ってくる筈。

ここは落ち着いて、いかにも急いで追ってきたのではなく、たま鉢合わせた感じを演出しなければならぬ。

故に美夏は、すぐさま地面に置いていた鞆から手鏡を取り出すと、

髪やらなんやらの乱れが無いかチェックし始めた。

当然、普段から清潔かつ完璧な外見を心がけている彼女に、乱れなど存在せず、すぐさま取り出された手鏡は鞆へと仕舞われてしまう。

あと30秒……そろそろ、この物陰から出て、門の向こう側から現れる兄の迎える準備をする頃合だ。

タイミングを逃さないと、普段から注意している彼女は、地面に置いていた鞆を左肩に掛けると、何食わぬ顔で、これまで隠れていた不動産屋の物陰から出てきた。

それはもう、自然かつ優雅な足取りで、たまたま歩いていただけと言いつ訳が出来るほどの何喰わなさど堂々とした空気が漂っていた。

あと10秒……。

あと5秒……。

そして、その時は来た――――



速い……というレベルでは無いのかもしれない。

東野台大学付属高等学校の敷地内である、アスファルトで舗装された山道を下る刀子は、前を先導して走る男の背中を眺めながら、そんな事を考えていた。

力強い肉体の躍動、歩幅もさる事ながら、脚の回転数が並みではないのも、後ろから確認できる。

坂道の下りで、これ程までにバランスよく走れるのもそうだが、やはりそんな事よりも、この50mを5秒台で走りそうな勢いを、いつさい落すことなく先程から走り続けている事に驚きを受けるべきであろう。

中距離走が得意……そんな言葉だけでは納得が出来ない、目の前の男の走りは、それだけすぐ後ろを走っている刀子を驚かせるものであった。

だが、これに汗一つ、息一つ乱さずに付いて来ている刀子自身も、大概なものなのだが……。

「もうすぐ正門だろ!？」

「ああ、おそらく既に正門は閉じられているだろうが、今から他の出口を探すのは得策ではない。一気に飛び越えるぞ!!」

先導をする竜蔵は、坂道の緩やかなカーブを、内側から切り込みながら下っていく。

また、それに後ろから刀子が、長く艶やかな黒髪を揺らしながら、軽やかに付いて行く。

カーブが来ればインコースを攻め、直線なら一気に走りきる……先程から、周りを山の自然と人工の建造物で囲まれた東野台の敷地内を、こうやって二人は駆け抜けている。

荷物である鞆や、刀子に至っては袋に入れた木刀の重みなど、全く意に介していない走り。

「正門が閉じられてるって、どうして分かるんだ!？」

竜蔵は後ろを振り返らず、ただ大きな声で刀子に問いかける。

「問題が起これば、それを起こした張本人を、みすみす逃がすと思うか？」

その問いかけに、全く持って涼しい顔で答える刀子。

一般人なら、殆ど全力疾走と変わらないペースであるのに、彼女の声音に息遣いに、一切の乱れは見られない。

「あゝそうだよ! 俺のせいだよ! 仕方ないだろ、ほとんど反射みたいなものなんだから!!」

静かに、そして冷静に答えを返してきた刀子に、竜蔵は吹っ切れた様子で意識を正面へと向きなおした。

既に、目の前には正門までの直線道となる、平地の道が確認できる。

というより、確認した瞬間に、竜蔵はその平地へと足を踏み入れ、そして下りと変わらない速度で走り続けた……が。

「……うん?」

傾斜の無い平地のアスファルトへと、走るステージが変わった竜蔵の視線の先には、確かに今さっき刀子に言われた、閉じられた正門があった。

しかし、竜蔵が思わず眉間に皺を寄せてしまうほど、不思議な光景と感じてしまったものは、そこではない……。

それは正門の向こう側……東野台大学付属高等学校の敷地外。

そこに、一人の見知った人物が、春の風に自慢の黒髪を揺らしながら、何食わぬ顔で立っていた。

「おい！ あれはどういう事だ！？」

走り続ける竜蔵と同じく、平地へと入ってきた刀子が、声を荒げる。

「知らん！ とにかく逃げるんだろ、今は！！」

だが竜蔵は、刀子の質問に答える事もせず、少々スライド式のものにしては背の高い正門へと、更に走る速度を上げる。

大体、竜蔵自体、なぜ正門の向こう側に、彼女がいるのか皆目見当もつかない。

故に、竜蔵は刀子の質問には答えたくても答えられない。

すると、正門の向こう側にいる人物も、こちらに気付いたのか……どこか、とても嬉しそうな表情で、竜蔵に向けて手を振り始めた。

「あれ？ お兄ちゃん！！　なんで、こんな所にいるの～！」

とても嬉しそうな表情で、竜蔵に手を振るのは、妹の美夏……。

まさに件の人物として、今回の事件では重要人物なのではあるが……。

なぜ、彼女が“ここにいるのか”？

そんな妹の問いには、こちらが聞きたいと返したいところだが、今の竜蔵と刀子には、そんな余裕は無い。

走る速度を上げた事によって、重厚かつ堅牢な東野台の正門が一気に近くなる。

すると、ここで正門の横に建てられていた控え室で待機していた警備員が気付いたのか、イソイソと焦った様子で、四畳程度しかな

い建物から出てきた。

『こらー！！　その二人、止まりなさい！！』

なにやら伸縮可能な警棒を手に持ちながら、警備員の控え室から出てきた、制服を身に纏った中年の男性であったが、走り続ける二人は、その男性の言葉に聞く耳を持つとはしない。

むしろ、これから起こす行動のために、走るギアを更に一段階上げていた。

そして、まずは竜蔵が、正門の前に立ちただかろうとする警備員よりも先に――

「ふっ！！」　「ガン！！」――

重厚な正門へと飛び上がり、一度門の頂上付近に飛びついた後、背中と腕の筋肉を利用して身を門の向こう側へと一瞬で乗り出し、訳もなく東野台の敷地内から飛び出していった。

その流れるような壁越え、もとい門越えは、どこか猫の様な印象を持たせていたが……着地時の衝撃を消すために、両足で地に付いた後、膝のクッションを上手く使う姿は、やはり技術を持った人間の動きであった。

門を難無く越えた竜蔵は、すぐさま後ろへと振り返る。

「刀子！　早くしろ！！」

「分かっている！」

竜蔵の急かす声に、刀子はすぐに答えるが、既に警備員の男性が、正門の前に陣取ってしまった。

『一人は逃がしたが、君は残ってもらうよ！！』

警棒を右手に持ちながら、通せんぼの格好をする警備員の男性……。

しかし、それでも尚、刀子に焦りの表情も、驚きの表情も浮かぶ気配が無い……むしろ、走る速度を緩めずに突っ込んできている。

そして、警備員と刀子の間合いが、あと二歩半程度まで詰まった

とき。

刀子が“飛んだ”――

『は?』

あまりの行動に、呆けた声を出してしまった警備員の男性であったが、刀子の跳躍は、たとえば学校指定の鞆と、愛用の木刀を持っていたとしても、重みを感じさせない、優美なもので……。

長くも艶やかな黒髪を風に揺らし、制服のスカートも気にせず、空へと飛び上がった姿に、警備員の男性は見惚れ――『……白グシャ!!』

見惚れ、上を見上げてしまった事によって、見てはいけないものを見てしまった警備員の男性は、丁度真上に差し掛かった刀子の“踏み台”にされ、意識を混沌へと沈めていった……しかし、地に倒れ崩れる彼の表情は、年甲斐にも無く頬を染めた、幸せそうなものであった。

警備員の男性の顔面を、履いているローファーで踏み台にした刀子は、荒々しかった竜蔵の正門越えとは違って、全く門へと触れる音すら発せず、軽やかに、そして優雅に門の向こう側へと着地をした。

着地する時でさえ、荷物が弾む音以外しないのだから、かなりの身のこなしだと、刀子の門越えの一部始終を眺めていた竜蔵は感じた。

着地の際の衝撃を消すために、膝を曲げながら身を屈めていた刀子が、乱れた髪や荷物の位置を直しながら、ゆっくりと立ち上がった……。

「すごいな……けど、酷くないか?」

「うるさい!! さっさと次に行くのであろう!!」

随分と余裕そうに門を越えた刀子であったが、やはり花も恥らう年頃の女。

不可抗力とは言え、下着を見られてしまった事が恥ずかしかったのか、頬を朱色に染めていた。

すると、そんな門越えを果たしたばかりの二人に、何やら信じられないといった表情の美夏が歩み寄ってきた。

「お、お兄ちゃん？ その女は誰……？」

わなわなと、刀子にさす指を揺らしながら、震える声音で兄に尋ねる美夏……。

彼女自身、最初は知らない女と一緒に歩いているという兄の目撃情報を聞きつけて、これまで追ってきていたのだが……まず、それが事実であった事。

更には先程、その知らない女の“下の名前と思われる呼び名を兄が発していた事”に、超絶ブラコン娘である彼女の認識許容量は限界を迎えそうな状態だった。

すると、美夏の震えている問いかけに、これまで刀子に視線を向けていた竜蔵が振り返った。

「あ……それはな……なんというか」

美夏という、今回の重要人物であり自身の妹でもある存在に、竜蔵はどうやって、後ろに未だ頬を染めながら立っている刀子を紹介しようか、頭の中で思考を張り巡らせ始めた。

普通に説明をするか？

いや、それだと東野台からの警備員やら教職員やらの追っ手が来てしまう……そんな時間は無い。

なら美夏も連れて、ここから逃げるか？

いや、それも今行なっている事を考えると、拙い気がする。

だったら、いっそのこと執行部の存在を伝えて、どうしてここにいるか分からない美夏に帰るよう、強く言うべきか？

ダメだ……これに至っては、規約事項とやらに反してしまい、俺が会長の“物”になってしまう。

どう頭の中で思考を繰り返しても、もともと頭を使うよりも体を動かす事の方が得意な竜蔵には、これといった名案が浮かんでこな

い。

しかし、ここで竜蔵でもない、美夏でもない人物が、突然動きを見せた。

「何をしている！ 立ち止まっている時間は無いのだぞ！！」

「は？」

「え？」

この気まずいというより、どうしていいのやら分からない状況を打破したのは、先程まで下着を見られてしまった事によって頬を染めていた、冴島刀子であった。

彼女は、今回の事件の重要人物である美夏を放っておき、先に問題を起こしてしまった東野台大学付属高等学校から離れる事を選択したのだ。

故に、彼女は既に、東野台商店街の直線道路を、軽やかかつ、しなやかな走りで駆け抜けている。

「あ、待てよ！！！」

刀子の声に少し遅れて、竜蔵も再び脚を動かし、回転数の速い力強い走りを見せ始めた。

「え？ あ、ちょっと！！ お兄ちゃん！？」

美夏は二人の……というより、自身の最愛の兄が、こちらを放っておいて、他の女へと向かっていく姿が信じられなかったのか？

反応が若干遅れ、二人の逃走を見送る形となってしまった。

すると、前を走り出したばかりの兄が、美夏へと動きは止めずに振り返り……。

「事情は後で説明するから！！ とりあえず、お前は早く家に帰れ！！ 分かったな！？」

それだけ言って、前を先導する刀子と共に、何がなんだか分からないといった表情の美夏から、遠ざかっていってしまった……。

暫く、状況の整理のために冷静になろうとした美夏であったが。

（なに？ 今の……てか、あの女？）

頭を整理しようと、落ち着かせようとすればする程。

少し見ただけで、美夏でも綺麗な女性だと認めてしまう人物に対して、黒い感情が沸々と煮えたぎり始めてしまう……。

（お兄ちゃんに命令？ てか、明らかに下の名前で呼ばれてたよね？ なに？ なになに何なの？）

浮かんでくるのは、嫉妬心か、それとも殺意か……？

（生意気っていうか、許せないっていうか……お兄ちゃんに色目を使う売女（ビツ〇）は、もういなくなったと思ってたけど。やっぱり、湧き出てくるんだね……）

前は“鬼姫”おにひめとかいう女だったが、あれはもう違う学区の学校に通ってるから、心配無いと思っていた……。

（これはもう、私以外の女は危険分子だと思っていいのかな？ うん……今は、そんな、その他大勢じゃなくて、目先の糞女をどうすべきかだね）

既に、美夏の綺麗だった瞳には、他者が見れば引きずり込まれてしまいそうな深淵しか写っていない。

何を考えているのか分からない……いや、何をしでかすか分からないといった黒い雰囲気醸し出す美夏であったが。そんな姿すら彼女の蠱惑的な容姿により、他者が見れば見惚れてしまいそうな、神秘的な魅力を放っていた。

すると、すでに視界から消えてしまっていた兄達を追うために、美夏が制服のポケットに仕舞っていたスマートフォンを右手で取り出した。

そして、例に漏れずGPSのアプリを起動させ、兄がどこに逃げたのかを探り始めた。

地図上に表示されたアイコンが、東野台の商店街を既に抜けてしまっている事を告げていた。

なら、もうゆっくりと立ち止まっている暇は無い……。

そう考えた美夏は、スマートフォンのGPSアプリを起動させたまま、ゆっくりと、静かに歩を進め始めた。

最初は歩くような歩幅と速さであったが、次第にそれは早くなっ

ていき、アスファルトの路面を踏むテンポが上がっていく。

そして遂には、美夏の柔軟な肢体を駆使した、流れるような走りが、先を行く竜蔵たちを追走し始めていた……。

執行部のお仕事（5） 始まる事件（前書き）

今回も、急いでいるためチェックなしです。
すみません。

執行部のお仕事（5） 始まる事件

東野台大学付属高等学校から逃走を図り、一応無事に面倒事から逃れた二人は現在……。

「さて、次はどこだ？」

「本来なら、東野台の近くの学校に行く筈だったが……君が仕出した事によって、それも難しくなってしまうてな？」

「……いや、マジでゴメン」

第一区内で、東野台の地区に住む学生達が良く利用をする繁華街で、かなり遅めの昼食を取っている最中であつた。

二人がいる繁華街は、以前、竜蔵と美夏が入学式後に訪れた、二橋駅前隣の隣町に当たる場所で、第一区内にある学生が良く集まる街の一つなのだ。

良く集まる街といっても、学園都市の第一区内は、そこまで広い地域ではないため、こういった街は二橋駅前と、ここ“東野台駅前”にしか無い……。

しかし学区内にある学校数は、二橋学園や東野台大学付属高等学校を入れて12校ある。

そのため、こういった二つしかない繁華街には、連日学生達が押し寄せてくるのだ。

証拠に、周りを見渡しても制服・制服・制服だらけの、ある一定の趣味を持つ者達にとっては天国の様な光景が広がっていた……その代わり、カップルも多いため、現実を直視する事にもなるが。

また、先程から繁華街の説明ばかりしているが、二人が現在昼食を取っている場所は、学園都市外にもある、何の変哲もないハンバーガーショップの二階席だ。

二人は、その二階席の外を眺められる窓側で、二人用の席に向か

い合って座っている。

店内の内装は、ファーストフード店らしく、大人でも寛げそうな黒や赤などの壁紙に、そこまで明るくはない照明を使った、シックな雰囲気が漂ってはいるが……中に屯しているのは、その殆どが学生達なために、落ち着いた雰囲気は意味を成さず、少々騒がしい話し声が、其処彼処から聞こえてきていた。

「しかし聞き込みが、こんなに難しいものだなんて……」

対面に姿勢良く座る刀子から、嫌味の込められた視線を向けられた竜蔵は、ちよつとした話題転換を行なおうと、疲れた声音で先程までの聞き込みによる感想を述べた。

「ふん……まあ私も、そこまでこういった捜査活動はした事が無いからな。気持ちは分かるよ」

明らかな話題転換に、刀子は仕方ないと溜息を付きながら、竜蔵の言葉に同意を示した。

その刀子の様子に、竜蔵は意外そうな顔をしつつも。自身の前に置かれたトレイに乗っている、包装紙で包まれたテリヤキバーガーを手にとった。

「何を驚いた顔をしているのだ？」

竜蔵の表情に、刀子は不思議そうな声音で尋ねる。

「いや、てっきり、お前って、こういった事をするのが長いのかかって、俺は思ってたから」

言いながら、竜蔵はテリヤキバーガーを包んでいた包装紙を手馴れた様子で剥がしていく。

それを眺めつつ、刀子も自身の前に置かれていたフィレオフィッシュバーガーを手に取り、竜蔵と同じように包装紙を剥がしていた。

「別に……確かに私は、こういった事に関しては長いが。聞き込みの様な、情報というより、知略を使った行動は、あまり取った事がないのだ」

「……っていうと？」

包装紙を剥がした竜蔵は、そのまま一口、自身の口に片手で持っているテリヤキバーガーを運び、食す。

だが、対面に座る刀子は、包装紙を剥がすのに慣れていないのか？少々手間取った末、ようやくシツクリ来る剥がし方となり、竜蔵と同じようにフィレオフィッシュバーガーを、その小さな口で一口食した。

「むう、少ししょっぱいな……」

「まあ、こういったもんは、塩分がかなり高いからな、仕方ねえよ……っていうより、それが良いんだがな？」

「……連れてきてもらって悪いが、私には合いそうも無いな。一応、頼んだものは全部食べるが」

「味の濃い薄いは個人差だから、別に気にするなよ。それより、聞き込みはあまりした事が無いのか？」

ファーストフード特有の味が、どうやら刀子には合わなかったのか？

彼女は、その皺一つ無かった白い眉間を歪める。

しかし、そんな事よりも、竜蔵がテリヤキバーガー片手に話を進めた。

「そうだな、どちらかと言えば、私も荒事専門だったから、こういった行動は慣れていないのだ」

「荒事ね……それって、俺が今まで手伝いでやってきたのと、どう違うんだ？」

インテリア調の、少し小洒落た椅子に背を預けながら、大股開きで尋ねる竜蔵。

手伝い……それはもちろん、この事件に関与する前まで、竜蔵が立っていた執行部でのポジションの事だ。

なぜ、その様なことをしていたのかは、今は省くが。

大体、これまで竜蔵が執行部の手伝いとして行ってきた事は、本命の仕事の邪魔となる小事……つまり、雑魚を事前に散らしておく仕事の主たるものだったのだ。

それが、本命の仕事となると、どう変わるのか？

この時、竜蔵はただの興味本位で尋ねたのだが……。

「……正直、あまり話したくはないな」

気軽に行っている竜蔵の様子とは対照的に、刀子の表情が突然、神妙なものと変わった。

それを感じ取った竜蔵は、片手に持っていたテリヤキバーガーではなく、今度はトレイに乗っていた飲み物であるコーラを反対の手で取り、容器に刺さっているストローで一口飲んだ。

「そうか、なら別に話さなくて良いわ……いずれ、俺も知る事になるだろうし」

口に含んだコーラを飲んだ後、竜蔵から発せられた、特に気にした様子もない言葉に、刀子が驚いたように眼を見開く。

「知りたくないのか？」

当然の疑問……そう思って、刀子は竜蔵に投げかけた筈だったが。「知りたくない、と言えば嘘になるけど。逆に、そんなにしてまで知りたいかと聞かれれば、別に知りたくも無いと答える……そんなもんだろ？ 興味本位の事なんて」

「……確かに、そうではあるな」

“ふっ”と、軽く吹き出すような含み笑いをしたあと、刀子はどこか、不思議と納得した感覚で、目の前の男の言葉を受け入れた。

そんな何をしてもし絵になる、優美な容姿をしている彼女を目の前にしながらも、竜蔵はトレイに乗っていたポテトを数本摘み、それを一気に口に入れる。

口に含んだポテトを、噛んでいる音を鳴らさずに、行儀良く飲み込んだ後、竜蔵は話を続けた。

「それに、言いたくない事ってのは、人それぞれ必ずあるもんだ……だから、俺も深入りはしない様にしてる。面倒ごとというか、長ったらしい相談とかされても、困るしな」

どこか悟ったような、目の前の男の物言いに、刀子は思わず気になり、声を返してしまった。

「君にも、そういった言いたくない事があるのか？」

その問いに、竜蔵はこれといって、特別な反応は見せず。

「無いように見えるか？」

「まあ、少なくとも何かに思い悩んでいる様には見えないな」

「そうか……そう見えるか」

と、自然に目の前の刀子とやり取りをして、すぐ横の窓へと視線を移した。

外には、こちらの店と、向こう側のアパレルショップを分断するかの様に、広い片側三車線の道路が、異様な存在感を放っていた……が、学園都市には移動手段として車は主流ではないので、そこには普通に歩行者が歩いていた。

だがまあ、たまに自転車や大学生の車、学校・学園専用のバスが走ってくるため、別に歩行者天国という程のものでは無いのだが……。

（うん？）

しかし、そんな学生による歩行者の多い人込みを、二階の窓から眺めていた竜蔵の視線が、ある一点で固定されてしまう。

そこには、一人の女性が立っていた……それも、周囲から男女問わず視線を独占するほどの、可憐な容姿をした人物。

だが、竜蔵はその女性を知っていた……というより。

（美夏ッ！？）

身内で、しかも妹の美夏であった。

人込みの中、ただ立っているだけでも周りとは一線を画した優美さを誇っている妹が、こちらに無表情の視線を向けたまま、何やら右手に持っているスマートフォンを弄くっている。

すると、竜蔵の制服のズボンに入っていたスマートフォンが、マナーモードでの振動を伝えてきた。

着信……目覚ましではなく、おそらくメールの知らせ。

直感で竜蔵は判断すると、そのまま視線を窓の向こう側で、未だこちらを見ている美夏に固定したまま、どこか緊張した面持ちで、

ポケットから震えているスマホを取り出した。

やはり着信として着ていたのはメールで、竜蔵はそれを手馴れた手つきで操作しながら確認する。

その時、窓の向こう側で、ずっとこちらを見ていた妹が、背筋の凍るような微笑を浮かべたのを、竜蔵は一瞬だけ見たような気がした。

そして、届いたメールを開き、竜蔵が読んだとき。

彼の頬に、一筋の汗が流れるのを、目の前で見ていた刀子が不思議そうに眺めていた。

開いたメールに書かれていた内容……それは。

『ソコニイルオンナハダレ』

全てカタカナの文面……。

この文面を妹が使う時……竜蔵は、その意味をよく理解している。

というより、骨身に染みている。

(怒ってる……やばい、完全にキレてるよ、美夏の奴！)

そう、この全部カタカナで表示された文面を、妹が使うとき……それは、彼女が本気で怒っている事の表しなのだ。

竜蔵は、このメールを読んだとき、“バツ！”と勢い良く、視線を窓の外の美夏へと戻した。

すると、そこには既に……。

——— “妹の姿は無かった” ———

◇

自身の兄を、全文カタカナという文面で恐怖のどん底に陥れた美夏は。まるでファーストフード店の二階にいる兄から身を隠すように、近くにあったアパレルショップに身を潜めていた。

それも、ごく自然に目当ての服を探しているかの様に……。

しかし、内心は直ぐにでも兄達のいる、ファーストフード店に乗り込み、あの見知らぬ女を、いま手に持っている赤いワンピースの様にしたいと、沸々と黒い感情を煮えたぎらせている。

だが、それをしてしまうと、また逃げられてしまう可能性があるため、迂闊な行動は取れなかった。

何故なら、実は先程まで美夏は、竜蔵たちに走り負け、追跡を一時諦めていたからだ。

当初は、あの得体の知れない女が兄の足を引っ張り、簡単に追いつけると踏んでいたのだが。どうやら東野台で見せた尋常じゃない跳躍の様に、あの女も相当な運動能力を持っていたらしく、美夏では追いつけなかったのだ。

それに歯噛みをしながらも、渋々GPSで再び兄の追跡に戻った美夏であったが、さっきの光景を発見して、遂に我慢の限界を超えそうになってしまったのだ。

（許せない、あの女……お兄ちゃんと昼食を外で取れるなんて、どれだけ私が苦勞するイベントだと思ってるのよ？ たでさえ、一昨日の入学祝が久しぶりのイベントだったのに、あの女め）

外見上は、学校帰りに、自分に似合う服を楽しそうに探す可憐な美少女……。

しかし内面は、あのポツと出の女を、どう始末しようかと策略を練るヒットウーマン（殺し屋）といっても過言ではない。

すると、そんな隠された内面を見破れず、楽しそうな外見に騙された、一人の店員が美夏に営業スマイルで近づいてきた。

『よろしければ、試着なさいますか？』

こういった店に入っている限り仕方が無いが、鬱陶しいと思いつつも対応せざる負えない美夏は。店員に負けないくらい……という

より、圧勝してしまうほどの、小悪魔スマイルを内側を隠すために顔に貼り付けた。

「いえ、ちょっと色が気になったってだけです」

言いながら、持っていた赤いワンピースを元の場所へと掛ける美夏。

制服を着た女子高生にしては、垢抜けた仕草と、可憐さの中に、どこか大人びた雰囲気を持つ彼女に、アパレルショップの店員である女性は、思わず頬を染めて目の前に立っている同性を眺めてしまう。

流れるように、良く手入れの行き届いたストレートの黒髪……細く姿勢の良い腰つきに、スツと地面に真っ直ぐ伸ばされている長い美脚。また、それだけではなく、制服越しからでも分かるぐらいい形の良い胸が包容力を演出し、細く整った輪郭に、女性らしい可愛さと美しさを兼ね備えた顔立ちが、更に彼女の魅力を引き立てていた。

完璧……同性である身でありながら、そう眩かざる負えない容姿。そんな同性を間近で見た店員の女性は、（もしかして、モデルとかやってる娘なのかな？）と、勝手な当たりを付けていた。

しかし当の本人は、ショップの店員など一瞥した後、すぐに視線を外してしまった。

興味が無いのだ……ただ、それだけの理由だ。

だが店員は、その仕草も絵になるなと思いつつも、おそらくは“話かけるな”のサインだと相手の心理を察し、その場から静かに離れていった。

意外に、空気の読める店員だった様だ。

店員が去った後、美夏は再び、ショップの入り口付近の位置で、向かい側のファーストフード店二階の様子を探り始める。

まだ、二人は昼食を取っている最中のようなだ。

出来る事なら、今から乗り込んで妨害してやりたいところだが、先に言った通り、逃げられてしまつては元も子もないため、美夏は

二人が店内から出ようとする瞬間を待つ。

計画としてはこうだ……。

二人が二階席から出る——自身も動く——おそらく二人はゴミを捨てるために、少々時間をかけるだろう（どう見ても見知らぬ女は、ああいった店には慣れていない様子だったから）——その間に、向こう側の歩道まで走り、店の自動ドアの前で待ち伏せをする——二人がゴミ捨てを終え、店から出ようとした瞬間。（お兄ちゃんの腕に絡まってしまえば、もう逃げられない……そうなれば後は女の事を問いただし、いかに私がお兄ちゃんを愛し、そして愛されているのか突きつけてやれば、あれも大人しくなるでしょう）

パーフェクト 完璧……正に完璧な計画だ。パーフェクト

美夏があまりにも非の打ち所が無い計画だと、胸中で酔狂しそうになっていると。

「ッ!？」

突然、後ろから気味の悪い視線を感じたような気がした……故に、美夏が思考の世界から弾かれるようにして、後ろを振り返った。

しかし、そこには先程、話しかけてきたショップの店員や、数人の客しかいない。

気のせいか……と、頭を傾げそうになった美夏であったが。

フウウン——「?」

なにやら聞きなれない、小さな掃除機の起動音の様な音が、美夏の耳に入ってきた……が、それは本当に一瞬の出来事で、すぐに聞こえなくなってしまう。

モスキート音?

そんな事が真っ先に浮かんだが、どうにも音の種類が似た感じではなかった。

虫が飛んでいるというより、どこか機械的な音に感じたからだ。

何だったのだろうか、疑問に感じた美夏であったが、深く考えても分からないと、すぐに割り切ったため。その疑問は、すぐに頭の隅へと追いやってしまった……もしかしたら、ただの気のせいかもしれないと言い聞かせながら。

だが、ここで――――

（また、変な感じがする……）

先程感じた、気味の悪い視線と同じような、嫌な感覚が美夏を覆い始めた。

どこからだ、周りから不振がられない様に、視線を店中に彷徨わせる美夏であったが……。

（どこ？ この感じは、どこから来てるの？）

やはり、嫌な感覚を覚える視線の主は見つからない。

なぜ美夏がここまで、“視線”に対して敏感なのかと言えば。普段から、男性からの視線というものに慣れているという事もあるが……それよりも、実は美夏は、以前にストーカーの被害を二度受けた事があるのだ。

まあ、どれも同級生の男子が行っていた事で、当然、その二件とも兄に助けを頼み、解決してもらったのだが……度重なる被害で、自己防衛機能が発達したのか？

それによって美夏は、こういった背筋に嫌な感覚が走る視線には、非常に敏感になっていたのだ。

故に、感覚の察知に間違いはないと、美夏は自信を持って周囲に気を配れるのだが、やはり見つからない。

視線の相手は、どうやら非常に身を隠すのが上手い相手の様であった。

こういった場合、美夏は素直に近くにいる兄に助けを求めるのだが。今回は、そういった選択をするのは些か早計かもしれない。

なぜなら、もし助けを呼んだ場合、一緒にあの女も付いてきてしまう可能性があるからだ。

最悪の場合、あの女に恩というものを与えてしまうかもしれない

……。

それは非常に避けなければならない事だ。

理由は簡単……例えば恩を知らぬ存ぜぬで仇で返したとしよう。すると、もしあの女が兄と本当に親しい仲だった場合。美夏自身の悪評が、直接兄へと流れてしまう可能性が有るからだ。

逆に兄と、あの女が親しくなかった場合、そういった事は気にしないで恩を仇で返す気満々なのだが……その可能性は、二人だけでファーストフード店に入っているのを考えるに、低いと見ていいだろう。

だとすれば、この視線をどうする？

兄達のいる方向とは、反対側の、店の中央付近に意識を配る美夏は。上手く先程と同様に服を選ぶ振りをしながら、なんとか視線の主を探し出そうと、思考を張り巡らせる。

白を基調とした、清潔感の有る内装に、外からも中が見えるように壁の殆どがガラス張りになっている工夫が、とても現代的な印象を与えている店内には。現在、数名の店員と、8人の客が確認できる……その内、こういった気味の悪い視線を出せる男は、二人だけ。一人はレディース限定の品揃えに似つかわしくない風貌の、カジュアルな服装の男だが、どうやらコレは違うようだ……なぜなら、彼女連れで、先程から気持ち悪い程にイチヤイチャとバカップルぶりを発揮しているからだ——それでもまあ、自身の彼女よりも一線どころか、かなりの差を画している美夏には、何度か眼を奪われている様であったが。

なら、残るは一人……。

この店の店員で証の名札を着けた、背の低い男のみである。

背の低い男の店員は、先程から会計のレジで客を待っているだけののだが、どうにもチラチラと、美夏の方へと視線を向けてきている……。

(あ、目が合った……)

店内に視線を巡らせていた美夏と、店員の男の視線が合った。

しかし、それはすぐに外されてしまう……ショップの店員なら、服を選んでいる客の女性と目が合ったのなら、会釈なりなんりのアクションを取るはずだ。

だが、それは一切無く、店員は何事も無かったかのように視線を外したのだ。

怪しい……美夏の何だかよく判らないセンサーが、アイツは黒だと訴えかけてくる。

これは、一度店内を出たほうが良いのだろうか？

そう思い、美夏は手に持っていた服を、もとのラックに戻し、店の中心から踵を返し、店から出ようと出入り口へと歩き出した。

すると……（動いた！）

これまで、レジのカウンターから一切動こうとしなかった男の店員が、何やら従業員用の扉へと歩き出したのを、美夏は出入り口付近で一瞬だけ振り返って確認した。

休憩か、それとも別の何か……？

店員の男が、レジカウンターの向こう側にある従業員用の扉へ、どのような用事で向かっていったのかは分からないが。先程までの気味の悪い視線や、目が合ったときの仕草などを考えるに、多少の警戒はしておいた方が良さだろうと、美夏は店内から出ながら考えていた……。



妹から来た恐怖のメールについては、いま気にしても仕方が無い事……。

竜蔵にとっては、実際それでは済まないのだが。メールの内容どころか、彼の妹が窓の外にいた事すら気付いていない刀子にとっては、別に気にする必要も無い事に変わりは無い。

また、それよりも気になる事が、現在進行形で起きているために、竜蔵自身、妹から来たメールに気を取られている暇が無いのだ……。

「……ふん」

「気付いたか？」

「まあね、露骨過ぎるだろ」

竜蔵はそう言いながら、インテリア調の椅子の背もたれに、体重を面倒臭そうに預けた。

対面に座る刀子の表情は、先程までの和やかなものではなく、いつでも荒事を開始できるような、鋭くも凛々しいものへと変わっていた。

「さっきからか……客層がガラリと変わりやがった」

「釣れたと見ていいのかな？」

「多分、それで合ってると思う……けど、これは思ったよりも面倒になりそうだな」

二人は傍から見れば不自然な点など全く無い普段どおりのペースで、昼食であるトレイに乗った品を食していくが。その醸し出す雰囲気は、これまでのものとは違って、気の緩みなど全く無い、隙の無いものであった。

竜蔵は大口で残りを片付けていき、刀子は小さな口で少しずつ、上品に両手で持ったフィレオフィッシュを食べていく。

そして、竜蔵は自身が頼んだ全ての品を完食し、刀子も初めて食したファーストフードの味に戸惑いながらも、何とかそれらを完食し、ナプキンで口に付いた油を拭った後、苦味の薄いお茶で口を直していた。

周りからは、そんな二人を睨みつけるかのように、数十人の男女が異様な雰囲気で、それぞれの席に座っている……どう考えても、普通の客の仕草、空気ではない。

竜蔵と刀子が座るのは、二階へと上がる階段から最も離れた、窓際の席だ。

故に、この異様な客層へと変化してしまった二階の空間を、確り

と見渡せる位置にいる。

また、それは逆も然りで、ガラリと変わってしまった客層の視線は、窓際の二人へと集中していた。

「ざっと見て、男8人に女4人……」

「君は、どちらを選ぶ？」

だが、そんな視線を集中させられていたとしても、二人に焦りも恐怖も無い。

むしろ、睨んでくる連中全てを値踏みするかののように、二人で不敵な笑みを浮かべている。

好戦的な……それでいて、どこか落ち着いた雰囲気を持つ二人の居住まいは、座っている姿勢は対照的ではあるものの、やはり似ているものがあつた。

竜蔵はポキポキと、片手で器用に指の関節を鳴らして、拳という名の箱を整えていく……刀子は、後ろの壁に立て掛けていた、木刀の入った竹刀袋を静かに手に取り、ゆっくりと座っている膝の上に置いた。

「男だ」

「なら、私は女人が相手というわけか……」

短く役割分担を終えた後、竜蔵と刀子は各々立ち上がると同時に、椅子の下に置かれていた学校指定の鞆を肩に掛け、片手で包装紙などのゴミが乗った、机の上のトレイを手にとると。何事も無かったかの様に、それら昼食で出たゴミを、近くのゴミ箱で分別しながら捨て、この二階の空間から出ようとした……。

すると、そんな二人に合わせるかのように、二階の席で座っていた者達が一斉に立ち上がる。

二人は、その様子を振り返ることなく音だけで確認し、そのまま二階から一階へと下り、店の自動扉を出て、ファーストフード店を後にした。

そして同じく、先程まで二階に座っていた者達も、ゾロゾロと竜蔵と刀子の後をつけながら、店を出て行く。

「その脇道に入れ。確か、そこなら人通りも少ない、広い場所へと出られた筈だ」

学生達が行き交う、片側三車線ある大通りを歩きながら、刀子が隣にいる竜蔵に指示を出す。

しかし、竜蔵はこれに眉端を吊り上げる。

「広い場所でやるのか？ それはキツインじゃないか？」

多対一をやる場合、なるべく一対一の状況を作り出さねば、後ろからの襲撃も当然あるため危険だ。

それは、こういった世界を少しでも渡った事がある者なら、誰だって知りえている心得……。

竜蔵は、この考えの下、刀子の“広い場所でやる”という、少々無謀な提案に疑問を覚えたのだが。

「構わない……第一、私の得物は狭いところでは振り回しづらいからな」

「そうか、なら別にいいか」

多対一で、手っ取り早く一対一……もしくは、それに近い状況を作り出すには、狭い路地を選ぶのが最適といえる。だが、それは武器など無く、素手のみで闘うといった場合だけ有効な手段なのだ。

しかし、普通の神経をしている者なら、数十人いる相手に対していくら二人いるとて広い場所でやろうとは考えはしない。

そう考えた竜蔵は、すでに切れ長の、“刀の様な眼”を鋭く研ぎ澄ましている刀子に向けて、口を開こうとした……が。

「確かに、いくら二人とて、多勢に無勢の状況で広い場所を選択するのは愚考と言える」

「……だろうな」

口を開こうとした竜蔵よりも先に、刀子が前を見据え歩きながら、その考えを読んでいたかのように言葉を遮った。

竜蔵は、言葉を遮られた事など気にせず、前を見据えながら刀子の言葉を聞くことにした。

「しかし、今日の目的は陽動と、もう一つあった筈だな？」

「確かに、あったなそんなの」

今回の陽動を行なうと決めた際に、事前に木佐貫千代女きざぐぬめ ちよめから聞かされていた事。

それは、今回の聞き込みが犯人を焦らせる陽動である事と……そして、竜蔵に執行部での動き方を教え、刀子に武術的な成長を促すために、荒い闘いというものを経験させるといったもの。

改めて目的を思い出した竜蔵は、隣を歩く刀子と共に、人通りが多い大通りから脇道に入っていた。

同時に、刀子が竜蔵に視線を向け、楽しみといった声音で――――

「今日は勉強させてもらうよ？ “竜蔵”」

「見てて気持ちのいいものじゃないと思うが……まあ、勝手にしろよ」

脇道へと入ったあと、竜蔵は日中にしては薄暗く狭い裏道だと最初は思ったが。少し歩くと、目の前にコンクリートの建物と建物の間にポツカリとできた、都会の隙間の様な、正方形の広い空間へと出てきた。

なるほど……これは御あつらえ向きの場所だと、思わず声を漏らしそうになったが。

それは、後ろから聞こえてくる数十人の足音によって、口に出される事は無かった。

（さて……久しぶりに、真面目にやってみますかね）

今日は、これまでの手伝いとは違って、見学の者がいる。

故に、恥ずかしい姿は見せられないと……。

竜蔵は珍しく、こういった場面で真剣な顔つきになるのであった。

執行部のお仕事（6） 一方的な乱戦（前書き）

竜蔵無双。

そして、またチェック無し更新。

執行部のお仕事（6） 一方的な乱戦

二橋学園の本校舎四階にある、教員用のP Cルーム……。

本来なら、ここは学園の教員専用の部屋となっており、一般の生徒は立ち入れない場所とされているのだが。実際には、教員自体、ここではなく他の場所で研究などを行っているので、現状は“誰も使わない無駄なスペース”として学園関係者内では認知されている。

しかし、それなら何故、別の用途として利用しないのか？

その理由は、現在進行形で執行部の木佐貫千代女きさいぬき ちよめが行なっている、信じられない光景にある。

（おやおや、もう動くのですか……意外に、犯人の方も堪え性が無いようで）

胸中で今回の事件の犯人に対して、嘲笑を浮かべる木佐貫。

木佐貫が現在、彼女以外に誰もいないP Cルームの中心で行っている事……それは、学園都市第一区の警備システムの一部ジャック。もっと具体的に言ってしまうえば、第一区内にある全ての監視カメラにアクセスし、街の様子を、このP Cルーム内で伺っていたのだ。室内は外からの明かりを遮断するために、窓を暗幕で閉め、天井に埋め込み式の蛍光灯も明かりは灯されていない。故に、主だった明かりは、室内の正面に値する場所にある、壁に埋め込まれた大型のスクリーンのみである。

通常なら、この壁に埋め込まれたスクリーンは、教員達が会議やらプレゼンやらで使ったりする筈だったのだが、現在は執行部の人間以外に使っていない。

木佐貫は、そんなスクリーン全体に映し出された、第一区内の街の様子……とりわけ、今回の事件で重要となる“人物”が写っている監視カメラの映像を、丸眼鏡ごしに眺めていた。

（しかし動いたとしても、おそらく、これらは尖兵に当たる者達でしょう……どう考えても、本命ではないし、相手がこちらの様子を伺おうとしているとしか思えない。もしくは、戦力調査といったところでしょうか？）

キヤスタ付きの椅子に背を預け、腕を組みつつもスクリーンに視線を向けていた木佐貫は。そこで目の前に起動していたPCのマウスに、組んでいた腕から解いた右手を添えた。

そして、PCのディスプレイに表示されていた無数の動画の中から、数件の動画をクリックする。

どうでも良いが、ディスプレイにはかなりの動画が、小さな表示で同時に再生されているため、容量的に大丈夫なのかと心配してしまうが。起動しているPCは、部屋中にある他のPCと接続されていたため、演算機能が向上しているらしく、どうやらそういった心配は必要なかったようだ。

木佐貫が数件の動画をクリックすると、これまで正面にあるスクリーンには“竜蔵と刀子”などしか映っていなかったのが、今度は“美夏とそれを追う男”の映像も追加され。正面にあるスクリーンには、他のも合わせて合計で5件の監視カメラの映像が同時再生されるようになっていた。

（同時に仕掛けてきたのを考えるに、これは組織的な犯行と見ても良いのでしょうか……いえ、もしくは、ただその辺にいたチンピラや、知り合いを使ったのか。どちらにしても、まだ断定が出来ないのが口惜しいですね）

スクリーンに映し出された映像では、美夏が大通りとは違った裏路地を走り、追ってくる男を撒こうとしている光景や、竜蔵と刀子が、何やら数十人の男女のグループと話している光景が展開されていた。

どちらが危機的な状況かと考えれば、断然男に追われている美夏の方なのだが、それを眺めている木佐貫は至って冷静だ……。

（出来れば、刀子さんと桐嶋さんには、その中にいる何人かから情

報を聞き出して欲しいところですが……あまり期待しない様にしておきましょう。多分、全員黙らせてしまえばいいでしょう……そうなる、桐嶋さんの妹さんの方に期待すべきでしょうか？ 情報によれば、彼女も実は護身用として、そこそこお兄さんから教えを受けているという話です、身体能力的に考えれば、あの程度の小物、何の苦も無く倒せるはずでしょうからね）

一体どこから情報を仕入れているのか、とても気になるところであるが……。

そんなことよりも、ここで一人の人物が、この正面のスクリーンによる明かりしかない暗い部屋に、後ろの扉から入ってきた。

「あらあら、なんだか楽しそうな感じね♪」

朗らかな声音で、スクリーンを眺め続ける木佐貫の後ろから話しかけてきたのは、栗色の豊かな髪に、軽いウェーブのかかった、柔らかなような雰囲気特徴的な学園の生徒会長、二橋姫樹だ。

姫樹は、いつも通りの眼を閉じた和やかな微笑みを浮かべながら、部屋を中心へと歩を進める。

「会長、お疲れ様です」

これまで黙してキャスタ付きの椅子に座っていた木佐貫が立ち上がり、姫樹の方へと振り返ったと同時に彼女は一礼をする。

それに片手で答えながら、すぐに視線を戻すよう「はい、お疲れ様。でも、今は前を見ていて頂戴」と、木佐貫に柔らかに姫樹は返した。

木佐貫は、姫樹の言うとおりに、再び椅子に腰を下ろした後、スクリーンへと視点を固定した。

姫樹は、そんな彼女の隣に、胸下で腕を組みながら立つ……それにより、姫樹の豊満なバストが制服ごしで強調されるが。それを手放して喜ぶ者など、この場には生憎といなかった。

「現在、桐嶋さんと刀子さんには、陽動兼情報収集のため、外を周

っついて貰っていたのですが、どうやら早々に犯人が餌に食いついてくれたようで」

隣に、ただスクリーンを眺めながら立っているだけで、逸脱した存在感と安心感を与える姫樹を控えさせながら、木佐貫は状況の説明を始めた。

姫樹は、それを楽しそうにしながら、閉ざされた瞳のまま耳を傾けていた。

「なるほどね……それで、美夏さんの方は？」

「彼女は現在、陽動のお二人から離れる形で、他の者に追われています」

「大丈夫なの？」

「ええ、彼女は一応、中学の頃は新体操で実績を挙げ、この学園に首席で入学してきた程の能力を持った方です。別に問題は無いかと……それに、護身術は英才教育らしいですから」

「桐嶋君が教えているのかしら？」

「はい。実は彼女、中学の時に二回ほどストーカーの被害に遭っていたらしく、その時に桐嶋さんから色々と教えてもらっていた様です」

ストーカー……この言葉に、姫樹は一瞬嫌そうな顔をしつつも、すぐにいつも通りの微笑みへと表情を戻した。

「私も、何度か被害に遭ってるから分かるけど、あれは結構くるのよね……」

「そうですね、その時は私が対応しましたが、あれは出来れば一生縁の無いものだと思います」

「まあ、相手が好きな人だったら、逆に襲っちゃうかもしれないのだけれどね♪」

二人は、そんな世間話をする様なやり取りで、現在進行形で厄介事を担っている二人と、巻き込まれた形の美夏が映るスクリーンに視線を向け続けている。

「まあ、ストーカーの話はここまでにして、今は犯人の特定を急ぎ

たいので、少し作業に入ります」

「特定ね」

「？」

木佐貫が他愛の無い世間話から、本来の任務へと戻ろうとすると、姫樹が何やら意味深な微笑みを浮かべ始めた。

彼女は普段、常に瞳を閉じ、微笑を絶やさない人物なので、こういった声のトーンの変化や、表情の作り方で感情の変化を露にしている。

そういったことを良く知る木佐貫は、彼女の意味深な微笑みを敏感に感じ取り、視線をスクリーンから隣に立つ姫樹へと向けた。

視線を受けた姫樹は、スクリーンから目を放さないまま「これは、あくまで私の“勘”なのだけれどね」と、前置きをしながら話し始めた。

「多分、犯人は学園都市の人間では無いわ」

本人は“勘”といていたが、口調や声音自体は、どこか確信めいた印象がある。

いわゆる、リーダー……いや、統治者の資格と言うべきか？

そういった、人に信頼と行動力を生み出す“力”が、彼女の言葉には込められているのだ。

だからこそ、木佐貫も彼女の言葉には不思議と耳を傾ける――
――仮に、この言葉を他の者が吐こうものなら、木佐貫は一向に相手をする気など無かっただろう。

「都市外の人間が犯人ですか？ そうなると、少々厄介な事になりますか……」

姫樹の“勘”を真に受けた木佐貫は、考え込む様にスクリーンを見つめた。

「私の考えだと、今スクリーンに映っている小物達は、おそらくその辺で雇われた小遣い稼ぎに過ぎないわ……それも、“第十一区”以降の区画の人間ね。でなきゃ、中学時代や現在でも、“あっちの世界”では絶対の名前として君臨してる、桐嶋君に喧嘩なんか売ら

ないでしょ？」

「『第十一区』以降の区画ですか……『未知の区画』などと称されている、あの無法地帯の様な場所の住民達ですね」

木佐貫はスクリーンの動画はそのままに、PCの操作を行なうために、動画を表示しているウインドウを最小化し、何やらマウス操作を数回した後、キーボードを打ち始めた。

姫樹は、そんな木佐貫の様子など一瞥もせずに、状況が動きそうなスクリーンの動画を眺め続ける。

「まあ、無法地帯とはいっても普通に暮らしている人の方が多いし、ただ周りが勝手に、治安が悪いからというだけで付けた俗称なのだけれどね？　ただ、学園都市創設者の孫娘である、私ですら認知できない地域があるのは確かよ」

「それだけでも、十分に未知ですよ。会長が認知できていないという事は、一般人からしたら、殆ど近寄らないような場所です。気味が悪いと思うのは、仕方が無いことだと思いますが？」

「まあね、ただ、どんなに素性が分からない人たちが流れ着いていようと、人間は人間よ……それ以上のものなんて、出てくる筈は無いもの。恐れるどころか、何の心配もする必要は無いわ」

第十一区以降の区画に対して、そういつて断言する姫樹に、木佐貫は疑問を覚えた。

故に、木佐貫は作業を続けつつも、何の遠慮もなしに姫樹へと尋ねる。

「本当に、そうなのでしょうか？　第十一区以降の区画は、第一区から第十区までに籍を置く学生が問題を起こした場合、島流的な意味で送られる区画でもあります。全てを網羅していないにしても、会長なら何か知っているのでは？　それも、人以上の何かがある可能性も……」

何の遠慮も無しに尋ねられた姫樹であったが、昔からの付き合いとして、彼女が自身に対して、そこまでの抵抗を持っていない事は知っていたので、特に気を害す事も無く、普通の友人と話すかのよ

うな声音で答えた。

「さあ、どうかしらね♪ 第一、私がもし知っていたとして、何の問題があるのかしら？ 千代女は、何か問題でもあると思う？」

「……いえ、ありません」

「そう♪」

不服そう……という訳ではなく、答えてくれないのは最初から分かっていたかのような反応。

それに、姫樹はいつも通りの朗らかな微笑みを浮かべながら、短く相槌を打った。

二人の前に映し出されているスクリーンの映像では丁度、竜蔵と刀子が数十人の相手を前に、そろそろ荒事を始めようかとしている所であった。

（さて、一応、今回の目的でもある刀子さんの成長を促すための荒事です。確り見届ける事にしましょうか……）



「第十一区ね……じゃあ、俺が知ってる奴も、何人か居るのかな？」

さっきまで対峙しつつも、ペラペラと相手が喋ってくれた事を、竜蔵は何気なく吟味するが、特には何も出てこず、ただの感想だけをポロリと零した。

そのポロリと零した竜蔵の感想に、隣に立っていた刀子が意外そうに反応する。

「ほう、君にはああいった知り合いがいるのかい？」

「まあね……むしろ、そっちの方が多いかな」

「随分と余裕じゃねえか……たかが二人だけだったのによ」

狭く薄暗い裏路地を通り、辿り着いたコンクリートの建築物群の隙間に出来た、正方形の広い空間。

そんな、都会の空白部分で、竜蔵と刀子は計12人の男女を前にしながら、余裕を持った様子で佇んでいた。

12人の男女比率は8対4……そのうちの多い方である男の塊から、一人のリーダー格だと思われる体格の良い男が。すでに荷物を地面に置き、各々自由に気構えを組んでいる竜蔵と刀子の二人に、最大限の凄みを込めたメンチを切りながら近づいてきた。

「余裕で悪いか？ そっちだって、たかだか12だろ？」

集団のリーダー格だと思われる男は、まずは竜蔵の前に立ったのだが……身長差のせいで見下ろされながらも竜蔵は、片眉を吊り上げた何でも無いという表情で、男のメンチに答えた。

竜蔵の前に立つ男は、少々分厚いダウンジャケットや、裾が地面によって擦り切れているズボンを身に纏っているものの、そのだらしの無い服越しからでも分かるほどに筋肉が太く発達しており、脂肪も程よく乗っかっている……身長は大体180cmぐらいで、竜蔵よりも10？高い。

また、骨格も太いのか、広い肩幅に相まって、顎も頑丈そうに出ており、おそらくは“組み技系”か、それともそういったスポーツの経験者かと、竜蔵は相手を挑発しながらも分析していた。

竜蔵に明らかな挑発をされた男は、一瞬眉間に皺を寄せるも、すぐに表情をニヤけた笑みを浮かべたものに変えた。

「はっ……たかだか12つってもよ、中には俺みたいに格闘技経験者だっているんだぜ？」

やはり、何かをやっている者だったかと……隣で竹刀袋から木刀を抜き出した刀子は、別に気にする事も無く胸中で呟いた。

「見たところ、おめえらも何か齧ってるみたいだが……体格差って知ってるか？」

「ああ、俺は嫌っていうほど知ってるな」

「私も、まあ少なからずは理解している」

自身よりも背の低い竜蔵を、馬鹿にしたかのように指差しながら言った男であったが。二人はそれを、特に気にした様子も無く答えた。

ちなみに、竜蔵は両手を腰に当てた、どこか偉そうな格好ながら

も、立っている足は楽にしている姿勢で、刀子はすでに木刀を左の腰元に構えた、静かながらも直立の臨戦態勢を取っている。

しかし、男はこれらの二人の態度が気に入らなかったのか、ニヤついていた表情が強張り、どこか肉体に力みを感じられる雰囲気醸し出し始めた。

単に言えば、怒っているという事だ。

「だったら、話は早いな。おとなしく俺らにボコられろや、な？」

ついでに、そっちの女は今日一日、俺らに貸してもらうぜ？」

そう言いながら、男は木刀を静かに、そして脱力した様子で構えている刀子に下卑た視線を向ける。

その視線に、刀子は“刀”のように鋭くも妖艶な瞳を細めながら「俗物が……」と、小さく呟いた。

どうやら、相当気に触ったようで……隣に立っていた竜蔵も、その刀子の不機嫌な様子を感じ取っていた。

だが、刀子の機嫌が最悪に達しようとも、竜蔵には別段、変わった様子は見られない。

彼は、ただただ、目の前にいる集団を自信に満ちた空気を醸し出しながら見下していた。

「こいつを貸すって。いや、止めといった方がいいぞ？」

「はっ！ 何を言っただって、お前が黙ればこの程度の女。すぐに俺の“こいつ”で喘がせてやるよ！」

男は竜蔵の言葉に、右手の中指と手首だけを小刻みに動かすジェスチャーを示した。

これには竜蔵も（あゝ……そろそろ切れちゃうかな？）と、刀子の方を見たのだが……。

当の彼女は、頭に“？”が浮かんできそうな何とも言えない表情をしながら、男のジェスチャーを見つめていた。

ああ、こいつは相手の挑発すら理解してないな……と、竜蔵は刀子の俗世に対しての無知ぶりに呆れ混じりで驚いていた。

しかし、そんな事よりも、竜蔵は視線を目の前でこちらを見下

す男に向けた。

「まあ、終わった後の事は好きにしていいいから、それよりも……」

「は？」

「間合いだろ？」

パァァンッ！！———

刹那、この都会の隙間ともいえる広い空間に、竜蔵のローファーが履かれた右足の甲と、男の左頬が衝突する、破裂音に似た鋭くも生々しい打撃音が木霊した。

同時に、竜蔵が美しい弧を描きながら蹴り抜いた方向に、力無く崩れていく男……。

気付けば、ここにいる全ての者達の時間が、ノーモーションで右上段回し蹴りを決め、蹴り足を静かに元の位置へと戻している竜蔵によって止められていた。

自身よりも10?程、背の高い相手に、あまりにも唐突で、蹴った姿勢が一切崩れない、あまりにも美しいフォームを見せた竜蔵に、文字通り皆、魅せられていたのだ……。

そして、当の本人である竜蔵は、不意打ちとも言える一撃で意識を刈り取った相手など一瞥もせずに、残りの連中へと視線を向けた。「どうした？ 喧嘩をするんだろ？」

両手を広げ、相手に“来いよ”と挑発する彼の姿は、まさに場慣れした者の姿であった。

刀子は、そんな竜蔵の事を眺めつつも、自身の足元に転がった、既に意識が刈り取られている男に視線を下ろした。

男の目は閉じられ、蹴られた左頬は赤く染まっている……おそろくこの後、この赤く染まった部分は紫色に腫れ上がり、人前に出るのが恥ずかしくなるようなものとなってしまおうであろう。また、地面はアスファルトだったために、倒れた際にぶつけた右側頭部にも、ちよっとした出血が見られた。

そんな、地面にうつ伏せで沈んでいる男をみて、刀子は竜蔵の不意打ちを“見事”と評価した。

「だったら早く来いよ、焦れちゃうだろ♪」

心なしか、どこか楽しそうな声音で、竜蔵は残りの面子に対して挑発を行なう。

いや、むしろ彼は前へと歩き出した……それもゆつくりと、ギリギリ間合いを詰めるのではなく、大胆に、堂々と一步一步進んでいく歩き方だ。

不良のグループというのは、大抵が一番強い奴がリーダー格を任される。

故に先程、竜蔵が不意打ちとはいえ一撃で仕留めた体格の良い男が、この集団で一番強かったという事になるのだが。それを一瞬であっけなく倒した竜蔵に、残った面子は尻込みし始めてしまったのか……。

「おいおいおい……来ないのかよ？」

集団へと何の躊躇いも無く近づいてくる竜蔵に、残された面子は迂闊に出れないでいた。

男7人、女4人の計11人の集団が、たった一人が醸し出す雰囲気

に圧される……。この光景は、不良の世界では有ってはならぬもの……たった一人の相手に、ツツパリの世界に生きる者達が圧されてしまう事は、後

のためにも有ってはならぬ事。だが、さっきも言ったように、既に集団の中で一番強い人間はやられてしまい、ましてや、その時に見せたノーモーションの右ハイは素人には理解できずとも、格闘技経験者ならば一瞬で気づく事があった。

『あいっ……やばいんじゃないか？』

『ああ、蹴りが綺麗とか、そんなレベルじゃなかった。あれは、目の前でやられたら見えねえぞ』

『切れも半端なかったからな……こりゃあ、全員でマジになって掛

からないと拙いな』

そう、格闘技だけではない、これは全てのスポーツに関して言える事だが。

ワンピース……または、たった一動作。

これだけを見ただけで、理解できてしまう実力の違い……“次元の違い”というものがある。

それは、素人よりも一度直にその動きを経験した者ほど分かるもので。更に言えば、長く続けていれば続けているほど、トップと自身の差というものが、良く理解できるようになって来る。

この場に居る格闘技経験者達は、それをたったの一動作……竜蔵の、自然体からの無拳動の右ハイで理解してしまったのだ。

だが、そうこうしているうちに、その次元が違うと感じてしまう程の実力を持った男が、集団の最前列にいる三人の前に辿り着いてしまった。

間合いとしては約3歩半……無理やりに詰めれば、一挙動で接近できる距離だ。

しかし、竜蔵を前にした三人は出てこない。

むしろ、こちらから出るのではなく、竜蔵を迎え撃つようにして、各々好きな構えを取っている。

竜蔵から見て左がテコンドー……ほぼ半身の、蹴り主体の構え。

竜蔵から見て中央がボクシング……奥足である左の踵を地面から少し上げ、両腕でフアイティングポーズを取りつつも、目の前の獲物を狙うように身を屈めた、パンチ主体の構え。

竜蔵から見て右が素人……今にも飛び掛らんとした、構えと言えない構えを取っている。

其々が其々、好戦的な姿勢を見せているが一向に出てくる気配は無い。

それに竜蔵は一度、面倒臭そうに溜息を付くと、おもむろに、ブレーザーの前ボタンに手をかけ始めた。

三人の男達は、その様子を油断無く見つめている……。

「来ないのなら、俺からいっちゃうぞ♪」

竜蔵はボタンを外したブレザーを脱ぐ仕草そしながら、更に間合いを歩きながら狭めていく。

そして、竜蔵がブレザーを脱ぐかと思われた瞬間。

中央に立っていた、油断無くオーソドックスなファイティングポーズを取っていた男の顔面に、竜蔵の左拳が真っ直ぐに深々と突き刺さっていた――

「あ……」

その歩きながら、肩口から放たれた拳動の见えない左拳を引くと同時に、潰された男の鼻が露となるが。竜蔵は更に、その左を引く動作を利用して、足先と腰を順に右へと捻り、生み出した流れの力を乗せた右のストレートを、相手の顎へと突き出し、正面から打ち抜いた。

右の拳面に相手の顔面を打ち抜いた際の気持ち良い感覚が広がり、脱ぐと見せかけ、前ボタンだけを外していたブレザーが、竜蔵の体の捻りに同調して翻る。

上着を脱ぐという、不良の世界では様式美とも言える行動を、馬鹿らしくも逆手に取った、二度目の不意打ちに、顔面を正面と顎の二箇所打ち抜かれた男は、勇ましい構えなど無かったかのように、地面へと意識を沈めていった。

これにより、ようやく周囲の者達にも火が付いた様で……。

「てめえ!! よくもッ!?!」

竜蔵から見て左に立っていた男が、取っていた構えに違わない、鞭の様な左回し蹴りを。竜蔵の顔面に向けて蹴りだが……それは、竜蔵が相手の蹴り足の膝を、左の掌で押さえただけで止められてしまった。

「なッ!?!」

「フッ!」

短い呼吸と共に竜蔵の左下段廻し蹴りが、男の軸足であった右足を刈り取った。

凄まじい威力と脛の硬さに、左のハイキックを蹴った姿勢のままだった男の表情は一瞬で苦痛に歪む。

いや、そんな事よりも、流れるように蹴りの軸足を刈られてしまった男は、地面から足裏を剥離させてしまい、宙へと身を晒す事となってしまう……そして、待っているのはアスファルトの地面。

足を刈られ、宙を舞った男は落下する拍子に、その無防備となった後頭部をアスファルトの地面に衝突させてしまう。

まるでボールの様に弾んだ男の頭部は、その落下の勢いと威力を生々しく示し、当然の様に男はそのまま意識を地面に沈めていった。しかし、この現象を起こした当の本人は、既に近くにはいなかった。

次に竜蔵は、前衛三人のうち、残っていた素人の男へと爆発的な踏み込みで肉薄していた。

あまりに速い入り込み……竜蔵とさして背の変わらない男は、一瞬で懷を許してしまった事に驚きつつも、場慣れした反応で接近してきた竜蔵の顔面目掛けて、こちらも前に出ると同時にバツティング（頭突き）を仕掛けた。

だが、待っていたのは、竜蔵の硬い左肘……そう、左肘の打ち上げであった。

グシャリと、頭突きをしていた筈の男の顔面が潰れ、鞭打ちの様に後ろへと頭部が跳ね返された。

竜蔵は踏み込みの勢いを殺すために前に突っ張っていた左足を、今度は軸足へと変え、そこを起点にして左へと振り向き、肘で顔面を潰した男を無視しながら、再び残りの集団へと向き直った。

顔面を肘で潰された男が、後ろへと仰向けで倒れていく……その際、男の後頭部がアスファルトへと激突したのは、誰にも止められない事であった。

三人……三人だ。

最初のリーダー格に続いて、三人の男が、何の問題も無く無力化されてしまった。

まともな抵抗が出来たのは、その内の二人のみ……と言いたところだが、実のところ、竜蔵に受けを使わせた二人目の男しかなかった。

更に言えば、一人目のブレザーを脱ぐフェイクという、こちらの心理を突いた奇策。二人目の、落ち着いて蹴りを放つ際に重要な関節となってくる膝を押さえ、受け返しとして左のローキックで軸足を刈るという、切り返しの速さ。最後に三人目の、下手をすれば逆に肘を硬い額へと衝突しかねない状況を、躊躇せずに振り抜いた、度胸の強さ。

どれもこれもが、相手の場数の多さや、圧倒的な実力を示す指標となってしまう。

マジでやらないと拙い……そう考え、前衛三人に押さえさせた後、全員で袋にしようとしていた。だが、それすらも実力のみで打ち破られてしまった。

もう既に、自然体の状態で、こちらが来るのを待っている竜蔵に對して、残された者達が出来る事は一つしかなかった。

それは特攻——瞬間、残りの男4人が、一斉に竜蔵へと走り出した。

走り出した男達の中には格闘技や、その他のスポーツ経験者もいるために其々が良い体格をしており、まるで壁の様な印象を、この特攻に持たせていた。

しかし、その4人の男達の特攻に對して、竜蔵が取った行動もまた……。

突貫であった——

最初に肉薄をしたのは、真正面にいた二人……。

竜蔵は、その二人に對して、なんと多対一では考えられない“タツクル”を纏めてかました。

いや、“タツクル”というよりも、これはラグビーでいう“オー

バー”に近い。

“オーバー”とは、ラグビーの試合中に、タックルをされたプレイヤーが置いたボールをキープするために、大勢の男が、その置かれたボールに群がってくる相手を押し返す基本的な技術。だがこれは、時に得意な者が行なった場合、2人だろうが3人だろうが、まとめて一人で押し返すことがある。更に言えば、この技術はボールを奪う側も使うので、三人がボールを守るために固まっているところを、時に一人で剥がしてしまう者もいる。

そして、竜蔵が学園のラグビー部で付いているポジションはフォワードのフランカーという場所で、ある意味最も、この技術を得意とする者が付く場所なのだ。

故に、竜蔵の屈強な腕の力で胴体部分を捕まえられた男達は、衝突の力でも負け、簡単に地面から足を浮かされてしまう。

持ち上げられたと気付いたときには、既に竜蔵は二人を両腕で捕らえたまま、強靱な脚力でアスファルトの地面を走り出し、四人で構成されていた壁の中央部分を、強引にこじ開けてしまった。

だが、持ち上げられた二人もただでは……いや、次の瞬間には、二人とも竜蔵から解放され、押し出されるようにして元の場所へと放り投げられてしまった。

これにより、竜蔵は正面から4人を相手にするのではなく、あえて囲まれるように4人を相手にする事となった。

この状況の拙さを知っている者からすれば、何をやっているのかと問われそうだが、当の本人には関係が無く……むしろ早速この状況を覆そうと、左斜め後ろにいた相手に振り返り、その間合いを奥足である右足を使って一歩で詰めきった。

この爆発的な瞬発力から生まれる鋭い踏み込みに、接近を許した男は反応が出来ず――――

「シッ！」

カシャッ！！――――その顎を、竜蔵の左フックによって打ち抜

かれてしまう。

踏み込みと同時に、左の足先を内側へと捻り、その捻りの力を上手く膝・足の付け根・腰・腹と流し、最終的に胸や肩甲骨、腕などを通して拳面に宿らせた、完璧な左フックは、例外なく男の意識を一瞬で刈り取った。

糸の切れた人形のように、顎を右から横に打ち抜かれた男は、固い地面へと前のめりで倒れていく。

竜蔵は、そんな男など一瞥もせずに、すぐに後ろへと“左肩”から振り返った。

するとそこには、今にもこちらに振り上げた右拳で殴りこんできそうな男がいた。

しかし、そんな局面に立たされても、竜蔵の表情に焦りは見られない。

なぜなら、相手の右の拳は“こちらには届かない”と悟っていたからだ。

「だあッ!!」

男が気合を込めながら、振り上げていた右の拳を、大振りで振り抜く……が、空を切る音はしても、肝心な骨や肉を殴る生々しい打撃音は響かない。

なぜなら文字通り、男の大振りな打ち下ろしの右は、虚しく竜蔵のすぐ目の前の空を切ったからだ。

外した……そして、大きな隙を相手に見せてしまった。

それに気付いたとき、男の左側頭部に鋭い衝撃が“光の瞬きの様に起こった”。

その衝撃の正体は、竜蔵の右上段廻し蹴り……だが男は、この衝撃の正体すらも知る事が出来ずに視界を真っ暗に染めてしまった。

なぜ、迫ってくる相手に対して攻撃が届かないと判断したり、間合いが必要な蹴りが出せたのか？

それは竜蔵が振り返る際に“左肩”から振り返ったことで、奥足にする予定だった右足を更に前に出した状態から振り返ったため、

間合いを後ろから襲ってくる相手と“半歩分”空けた事に理由がある。

相手は後ろ向きだった竜蔵の頭部目掛けて拳を出そうとしていた……だから、半歩分空いた間合いに対応できず、そのまま振り切ってしまった。

また、この半歩分の間合いは、空手を得意とする竜蔵にとっては何の問題にもならない“蹴りの間合い”故に……空ぶった事によって出来た相手の隙を突く事は、竜蔵にとっては造作も無い事だった。右の足を、蹴った状態からゆっくりと引いた竜蔵は、視線を先程、四人の壁から引き剥がした二人へと向けた。

残るは二人……そう、もう8人もいた男達の集団は、既に2人だけになってしまったのだ。

『お、おい……どうすんだよこれ!?!』

『知るかよ! 俺だって訳わかんねえよ!!』

これまで6人の男達を、二人目以外一撃で済ませてきた男は、いま目の前で何事も無かったかのように佇んでいる。

『どうする、どっちが先に来る?』

すると狼狽する男二人に向けて、竜蔵が口を開いた。

当然、声をかけられたとしても、警戒してしまっている二人は黙り込んでしまって反応を見せない。

怯えた小動物かと、竜蔵は鼻で呆れるように溜息を付く。

しかし、そんな竜蔵の態度にも、二人は出て来る気配が無い……これは、もう終わりかなと、竜蔵がおもむろに刀子の方に視線を向けると。

「なんだ、もう終わってるのか」

「君の戦い方をゆっくり見学するためにね、少し急がせてもらった」
『ま、まじかよ……』

既に刀子の方は、4人居た全ての女を無傷で地に伏せさせた後で。彼女は静かに、手に持っていた木刀を、いつも通りの竹刀袋に納めている最中であつた。

残り二人の男達は、それを見て驚愕を覚える……。

いくら女だとしても、メンバーの中でも武闘派で通った気の強い女達4人を、何の問題も無く、あんな涼しい顔で片付けたのだ。そして更に言えば、4人中3人が武器持ちだったはず……だが、それらの武器は虚しく持ち主と共に、アスファルトの地面の転がっているだけだった。

男達2人が、そうやって木刀を竹刀袋に納め、見学のため胸下で腕を組み始めた、凜々しい顔立ちの刀子を見ていると……。

ドンッ！——「ううッ！？」

突然、一人の男が苦悶の表情をしながら、痛々しい呻き声を上げた。

その声と、何かの打撃音に驚きながら振り向いた、もう一人の男の目に入ったのは……。

「よそ見しちゃいかんだろ、なあ？」

仲間の男の右足の甲を、竜蔵が左足の足刀（“そくとう”と読み、足の外側で相手を蹴るというより刺す様に放つ蹴りの事）で踏み抜いていた光景だった。

仲間の男の靴を履いている右足に、竜蔵のローファアを履いた左足の外側部分が深くめり込んでいる。

当然だ、なぜならこの足の踏み抜きは、竜蔵がほぼ飛び蹴りの要領で蹴っていたので、全体重が仲間の男の右足甲に刺さっている状態だったのだ。

足を踏み潰されたかと錯覚を起こすほどの、あまりの痛みにも、仲間の男は後ろへと身を下げようとしてしまう……しかし、この足で相手の足に釘を打った様な状況を、竜蔵が見逃すはずも無く。

「シッ！」

踏み抜いた足はそのまま、奥足である右足を地面に着地させた瞬間……着地の際に屈伸をしていた膝を思いつきり地面を蹴りながら

伸ばし、その勢いを利用した右アッパーカットを、男のがら空きとなっていた顎に打ち上げた。

竜蔵の硬い拳が、男の下顎を粉碎すると同時に、頭も鞭打ちの様に後ろへと弾かせた。

すると、顎を打ち抜かれた男は、竜蔵に右足を踏み抜かれたまま、後ろへと仰向けで倒れていった。

「ひいッ!？」

そして、最後の一人となってしまった男が、この光景に驚愕を覚え、後退りをしてしまう。

最後の一人……そう、最後の一人なのだ。

12人いた集団が、たったの二人に対して、なす術も無く壊滅させられそうなのだ。

竜蔵が、今しがた仕留めた男の足から、左足を引いた。

「さて、どうする？」

暗に、“まだやるか？”と尋ねる竜蔵。

だが、男は自身よりも背が低い竜蔵を、驚愕の目で見つめるだけだ。

目を反らせばやられてしまう……だが、反らさずとも、まともにやって勝ち目など無い。

男は既に詰んだ状況に、歯噛みすら出来ないまま、とにかくガードを挙げた構えを取るしかなかった。

両拳を肩の位置まで挙げ、肘を緩やかに曲げた、背筋が伸ばされたアップスタイル……背の高い選手が、低い選手の顔面パンチを、身長差と障害物として置いている腕だけで防ぐ、なかなか厄介なガードスタイルだ。

しかし、そんなものは竜蔵にとって、物の数ではなかった。

アップスタイルというのは、上体を反らしているため、中々下や腹への攻撃に反応しづらい……その弱点を嫌というほど理解している竜蔵は、セオリー通りに、相手の伸ばされた足へと、右のローキックを放つ。

前へと出ながら、確りとバランスを固定した軸足である左足を捻り、全身の回転力を使って放たれた、竜蔵の鞭の様な右のローは、相手の左足の大腿四等筋を例外なく蹴り抜き、断裂させるという威力を見せ付けた。

「あ、あがぁッ!？」

竜蔵に左足を外側から蹴り抜かれた男は、悶絶しそうな痛みに耐えかね、思わず地面に頭を垂れてしまう……。

ローキック一発——たったこれだけで、竜蔵は自身よりも背の高い男を仕留めたのだ。

そんな竜蔵は、左足の太ももを押さえながら、苦悶の表情を浮かべる男を見下ろす。

「じゃあ、ちょっとだけ話に付き合ってもらおうか？」

既に勝敗が決したこの状況は、勝者である竜蔵と刀子に、全ての権利が委ねられていた。

「あ、ああああッ!！」

しかし、腿の筋肉を断裂した男は、額に汗を浮かべるほどに悶絶しながら、竜蔵の話を聞こうとはしない……いや、聞く余裕が無いのか？

すると、そんな情け無い悲鳴を上げる男に苛ついたのか、竜蔵が男の頭部を、軽くローファアが履かれた右足で小突いた。

「人の話ぐらい聞けるだろ？　おい」

「あッ！　あぐう……ッ！」

「はぁ……根性ねえな、お前」

竜蔵の言葉に、やはり男は答える余裕など無く、痛みの走る伸ばした左足を押さえながら、苦悶の表情を浮かべるのみであった。

そんな状況を見かねたのか、刀子が口を開いた。

「どうやら、情報を聞き出すには少しやり過ぎた様だな」

「……だな」

刀子の言葉に、竜蔵が疲れたように相槌を打つ。

だが、いま情報を聞きだす機会を失えば、いつ有益な情報得られ

るのか分かったものではない。

そうになると、妹に対しての盗撮被害が更に酷くなる恐れが有る。

これは、体裁なんか気にしている場合ではないかと、竜蔵は非情になる事を決断した。

「だったら、少し聞き方を変えてみるか」

「うん？　どういう事だ？」

突然、なにか思いついたらしい竜蔵に、刀子が不思議そうな表情を向ける。

すると、竜蔵は何やら制服のズボンの後ろポケットから、少々値の張りそうな長財布を取り出した。

そして、再び地面でもがいている男へと視線を戻した。

「おい」

「あ、あああッ！？」

短く呼びかけられた声に、男は呻き声を挙げながらも視線を向ける……どうやら、少しは意識を傾けるだけの余裕が出てきたようであった。

それを確認すると、竜蔵は次に、刀子の近くで意識を失わせていた4人の女達へと、何やら値踏みするような視線を向けた。

「よく聞けよ？　いま俺の財布の中には、コンドームが2つほど入ってる」

「「ッ！？」」

瞬間、痛みに喚いていた男だけではなく、竜蔵の仲間である筈の刀子までもが、信じられないといった表情をする。

しかし、そんな二人の視線と反応を無視しながら、竜蔵は手に持っていた長財布から、本当に二つの未開封になっているコンドームを取り出した。

「お前がこのまま何も喋らないのなら、俺はこの二つのコンドームを“有効活用”しなくちゃならない……ああ、俺は別に構わないんだ。だって気持ち良いし、それにいつまでも財布の中に入れておくものでも無いしな」

「て、てめえ……ッ!？」

痛みに耐えつつも、竜蔵に精一杯の睨みを向ける男であったが、本人には何も伝わっていないようだ。

「さて、そうすると誰にしようかな? ほお、結構可愛いのもいるんだな、お前のチームは」

竜蔵は、そう言いながら刀子の周りで伸びていた女達に歩み寄った。

「近づくんじゃねえ!! それ以上、そいつらに近づくんじゃねえ!!」

「それはお前次第だな。大体、お前らも同じような事をやって来てるんだろ? それが今更……」

男は地に這い蹲りながらも、メンバーである女4人を守ろうと、必死に声を荒げるが。竜蔵はそんな男には見向きもせず、倒れ付している女達を、一人ずつ顔を上げさせながら物色している。

そんな竜蔵の様子を見て、刀子は険しい目つきに表情を強張らせているが、特に口を挟む様子は無い。

「お、この娘いいな……それと、こっちの娘も、何だか肉感的でエロいな」

「おい! 触るな!! そいつらに触るな!!」

どうやら竜蔵は目当ての女を二人ほど見つけたのか、一度満足そうに頷いた後、倒れている相手の顔を物色するために屈んでいた体勢を戻した。

そして、立った状態になると同時に、少し離れた場所で、いまだ這い蹲っている男に目を向けた。

「だから言ってるだろ? それはお前次第だって……とりあえず、ちやつちやと始めるから、刀子は戻っててくれ」

「……」

言いながら、竜蔵は自身のズボンのベルトに手をかけた。

刀子はこの竜蔵の指示に一度目を瞑った後、暫く何やら考え込む素振りを見せながら、どうにか良心に了解を得たのか……そのまま、

広間の奥に置いてあった荷物を手に取った後、残された者達には目もくれずに、この場を後にしていった。

竜蔵と男は、この刀子が無言で去っていく様子を見た後に、再び目を合わせた。

「じゃあ、いただきます」

そう宣言すると、竜蔵は外したベルトはそのまま、刀子に無傷で気絶させられた、うつ伏せで寝ている一人の女の下半身に手を触れた……が。

「ま、待ってくれッ!? 話す! 全部話すから!!」

地面に這い蹲っていた男が、意外にも早く折れたようであった。

その言葉を聞き取ると、竜蔵はすぐさま外していたベルトを締め直し、這い蹲る男へと速い歩調で歩み寄り「そうか、なら早く話せよ? 今すぐにだ!」と、言に怒りの籠った声^{こゑ}で、這い蹲る男の胸倉を片手で掴み、引き上げた。

瞬間、無理やり引き起こされた事により、筋肉が断裂した左足に激痛を覚える男。

「あぐうッ!?!」

「情けねえ声を出す前に早く言え! てめえらは誰から指示を受けて、こんな事をした!?!」

肉体の割りに、ある程度整った輪郭と男らしい顔立ちをした竜蔵の表情が、怒気に歪む。

語気を荒げ、胸倉を掴む手には力みの証である、筋肉の筋や血管を無数に浮かばせながら、竜蔵はすぐにでも相手から情報を得ようとする。

その、目の前の男の形相に、胸倉を掴まれ無理やり引き起こされている男は。痛みと恐怖で顔を歪ませ、若干の涙を目に浮かべながら、竜蔵の指示に大人しく従うのであった……。



あの広間から少し離れた、薄暗い路地の入り口付近……つまり、明るい大通りとアンダーグラウンドの境目で、刀子は壁に背を寄りかかせながら、竜蔵の事を待っていた。

腕を組み黙して待つ、その凜々しい佇まいは、鋭い雰囲気と共に、彼女の現在の心情を表しているかのようであった。

すると、そんな彼女の待ち人である竜蔵が、やれやれといった雰囲気醸し出しながら、薄暗い路地からダラダラとした歩調で現れた。

しかし、竜蔵が戻った事に気付いている筈の刀子は、一向に“不機嫌そうに瞑った眼”を開こうとはしない。

（ああ……こりや完全に怒ってるな）

そんな彼女が醸し出す、己が心情を竜蔵は確りと察知し、現状がどういった拙さを持っているのか考えさせられた。

おそらく彼女は、いくら相手から情報を吐き出すためとはいえ、ああいった手法を取った事に腹を立てているのであろう……。

そう答えを導き出した竜蔵は、すぐさま彼女に向かって口を開く……。

「ごめんな、流石に、あのやり方は気分が悪かったか？」

「それもある……だが私にとっては、その程度の事は関係ない」

「へ？」

しかし、どうやら竜蔵が導き出した、彼女が怒っている理由は外れだったらしく、竜蔵は思わず呆けた声を出してしまう。

なら、他に彼女が機嫌を損ねている理由はどこにあるのか？

その答えは、背を預けていた壁から離れ、真っ直ぐにこちらを見る彼女から聞くことが出来た。

「私が気に入らないのは、君がやはり“あの時”、私に対してかなりの手加減をしていた事だ」

腕を胸下で組み、竜蔵へと鋭い視線を向ける刀子から出された、彼女が不機嫌な理由は。一昨日の放課後、学園の屋上で行なった、決闘に近かった二人の闘いの事であった様で。

竜蔵は、この答えを聞いた瞬間、ゲンナリとした表情を浮かべる……心なしか、いつもは堂々としている肉体と姿勢も、どこか疲れたような空気を出していた。

だが、そんな竜蔵の様子を目の前で確認したとしても、刀子は言いたい事を止めようとはしない……むしろ、ここぞとばかりに攻め立てる。

「さっきの乱闘の最中、私が君の闘いから眼を反らしていた部分があると思うのか？ 思うのであったら心外だ。あの程度の連中など、よそ見していても相手に出来る」

「は、はあ……」

「まあ、それは良いとして……問題は今回の君の動きと、あの時の君の動きに、明らかな違いがある事だ。その違いとは相手を叩き潰そうという敵意が込められているか、いなかの間違いだ！ どうして、あの時に同じような動きをしてくれなかった！！ 手心を加えて、私が悔しむ姿を嘲笑するためか？ そして今回も、そんな私の姿が見たかったからか？」

ああ……すごい面倒臭いと、内心想いつつも、どうにも目の前で憤慨する刀子に強く出れない竜蔵。

まあ、確かに手加減をしていたのは、終わった後にも言っていた事だし事実だ。それに、今回の動きと、あの時の動きに違いがあったのも事実だ……それは間違いない。

多分、目の前の冴島刀子という女は、本当に武術一直線で生きてきた人間なのであろう。だから、異性である自身であっても、手加減をされていた事に誇りが許さなかったのだろう。

そんな事を、学園の評判からしたら珍しく感情を露にし、こちらに向けて捲くし立てる彼女を眺めながら、竜蔵は考えていた……。

執行部のお仕事（7）

空を舞う妹・容赦のない妹（前書き）

今回は妹の場面です。

執行部のお仕事（7） 空を舞う妹・容赦のない妹

12人の集団を難無く倒し、そんな乱闘があつたなど感じさせない竜蔵と刀子の二人は、街の中心地でも有る、夜になればライトアップなどをして、とても視覚的な娯楽を与えてくれる噴水が名物の“中央公園”へと来ていた。

ここは、もう一つの繁華街である“二橋駅前”とは違って、街の中にも緑をと植えられた木々や、まるで自然の絨毯だと思わせる天然芝が広がり、公園の中心である噴水を起点にして、東西南北に分かれた、赤レンガが敷き詰められた通路が方々へ枝分かれしている。二人は、その中心地点である噴水の近くに設置されていた、雨を防ぐために天井のあるウッドデッキのベンチに座っていた。

そこで竜蔵は学園にいる木佐貫に自身の携帯電話で連絡を入れ、刀子はウッドデッキのベンチで、静かに姿勢良く座っている……。

「ああ、確かに第11区の連中だったみたいだ。それはちゃんと吐かせたから問題は無いんだけど……」

『問題は無いのだけど?』

竜蔵の耳に当てられたスマートフォンから、木佐貫の落ち着いた声音が聞こえている。

「どうやら、あいつらは外部の人間から金で雇われてたらしいんだ。それも一人2万だと……俺に喧嘩売るのに2万で受けるとか、安く見られたもんだよ」

『確かにそうですが、街のチンピラの小遣い稼ぎなんて、そんなものですよ。ただ、私が驚いているのは、外部からの犯行だったという事もあります。それよりも“会長の勘がまた当たった”事ですね』

驚いているとは言っているものの、やはり声に抑揚を入れてくれないため、全くそういった気配の無い木佐貫の落ち着いた様子。む

しろ、彼女から出てきた突拍子も無い事に、竜蔵が驚いていた。

「“また”ですか……あの人は、ホントに人なのかよ？」

『私も小さなときから一緒に育ってきましたが、あの方の勘や物事の感じ方は常人には理解しかねる領域に有る様に思います。だから私たちの様な凡人がいくら考えたところで、あの方には遠く及ばないでしょう……』

「確かに」

呆れたように木佐貫の考えに同意を示す竜蔵……その姿を、ベンチに姿勢良く座っていた刀子が静かに眺めていたのだが、当の本人は噴水に視線を向けているので、それに気付いていない。

『まあ、あの方をものに出来る人は、いるにはいるのですが……』

「はい？ ごめん、良く聞こえないんだけど？」

『いえいえ、何でもありませんよ』

何やら携帯電話の向こうで、勝手にこちらには聞き取れない声で独り言を呟いていた木佐貫に、竜蔵は怪訝な顔をするも、話を進める事にした。

「とりあえず、俺らはこれからどう動けば良い？ 一応、敵方が釣れたけど、まだやるのか？ てか、また釣れるのか？」

『それは無いでしょう、あれは敵戦力の把握および目的を探るための尖兵みたいなものです。その辺のチンピラでは相手にならないと理解出来たでしょうし、桐嶋さんが相手の内情を知ろうと“意外にも”尋問をなさったので、相手側はこちらが情報収集をしていると当たりを付けたはず。なら、もうアナタ達に探りを入れるような事はして来ないでしょう……よっぽどの馬鹿でなければ』

途中、木佐貫なりの皮肉を込めた言葉も入っていたのだが、竜蔵はそれに気付かず、ただただ彼女の分析に「そうか」とだけ短く答えた。

「なら、俺らは戻っていいのか？」

『そうですね……いや、戻るよりも、その辺をブラブラしててください。一応、あなた方は情報収集として動いている訳ですし、暇

があれば気の向いたときに聞き込みでも行なっていてくださいな』
どこかこちらを労っているかの様な声音に、竜蔵はどうにも怪しいと考えていたのだが。確かに木佐貫の言う事も一理はあるので、それに甘える事にした。

「分かった、だったら好きに暇を潰してくるわ」

『はい、よろしく願います。それと、どうしても途中で刀子さんを襲いたくなッ———』

プー、プー、プー……。

木佐貫との連絡も済んだ竜蔵は、携帯電話の通話モードを切ると、そのままベンチで静かに座っていた刀子へと振り向いた。

「千代女さんは何と？」

視線を合わせるのと同時に、刀子が至極真面目な凛々しい表情で、竜蔵に問いかけてきた。

それに竜蔵は「もう相手も来ないだろうから、好きに街を周れだ」とよ」と、疲れたという溜息を吐きつつ答えた。

「そうか、なら私はまだ情報収集を続けようと思うのだが、君はどうする？」

刀子は言いながら、春の風が吹く中、ゆっくりとベンチから立ち上がる。

その様子を一瞥しつつ、竜蔵は一拍の間だけ考える素振りを見せ……。

「俺は妹を探そうかと思うが……そうだな、ついでに何か買い物でもするか？」

などと、目の前の刀子に逆に聞き返した。

目の前に立つ男から、予想だになかった誘いを受けた刀子は、一瞬惑うも何とか持ち直し、相手の意図を探るために視線を合わせた。

「私は情報収集を続けると言ったのだが……」

「そのついでで良いし。てか、お前にとっても別に悪い話じゃないから、とりあえず頷いておけよ」

押しの強い……というより、どこか先輩が後輩を誘うときの様な雰囲気、竜蔵が洩る刀子に同意するよう他意の無い微笑みを向ける。

その微笑は、竜蔵の普段は仏頂面な表情とのギャップで、何故か相手を安心させるような優しさが滲み出ている。

おそらく彼は、もともと妹が二人もいる身分なので、外見や行動とは裏腹に面倒見の良い性格をしているのかもしれない……が、当の刀子は、そんな事など知る由も無い。

「いや、これまでの君の行動を振り返っていくと、かなり不安を覚えるのだが？」

「お前は失礼だな？　俺の何処に、そんな不安がらせる要素が有るってんだ」

心外と、竜蔵は当然の抗議を入れるのだが……。

「東野台での軽率な行動や、尋問のためとはいえ、性的な暴力に出るぞという脅しを、何の躊躇いも無く行なった事……これらをたった2時間程度の間にやってのけたのは、正直不安を覚えるには十分すぎる判断材料だと思うが？」

今回の聞き込みに向いた筈の計画が、自身のせいで頓挫してしまっている事を指摘され、竜蔵はまだ10代にも関わらず、ぐうの音も出ないという心境に立たされてしまった。

しかし、ここで何か言い返さなければ、今の誘いが下心のあるものだと勘違いされてしまう。

それは断じて無いと、竜蔵は己のプライドを賭けて、この状況を打破するために、強引に口を開いた。

「それはそれ、これはこれだろ！？」

「君は一度、自ら私の立場になってみて、今の言動を吟味する必要がある様だ」

無理矢理に出した竜蔵の言葉に、刀子は頬を引き攣らせながら、

呆れた様子を見せていた。

「……」

そんな彼女の視線と表情に、意心地を悪くしたのか、竜蔵が無言で反省したような、不貞腐れたような仕草をし始めた。

正直、筋骨隆々の男が、こういった子供っぽい態度を取る姿はどこかシュールな光景だったが……どうやら、その光景に耐えかねたのか、刀子が仕方ないといった様に頭を片手で押さえた。

「はあ……分かったから、そんな情け無い子供みたいな態度は取らないでくれ。一応、君は私に勝った身なのだぞ？ 確りしてもらわねば、私が負けてしまったのが馬鹿みたいではないか」

「ふふん♪ 勝負事で勝ち負け以前に、相手の性格にまで口出しするなんて、お前もまだまだ子供じゃん」

音を上げた刀子に対して、なにやら得意げになる竜蔵……。

そんな彼に刀子は再度、呆れるように溜息を付いたが、どうやらこれも目の前の男は無視したようで。

「まあ、そんな事はどうでも良いんだよ。とりあえず、ここから動くから着いて来いよ？」

言いながら、竜蔵はアクティブに呆れている刀子を置いて、ウツドデッキのテラスから軽快な足取りで行ってしまふ。

それに根負けした刀子も、普段は凜とした歩き方は成りを潜め、どこか仕方なくついていくといった雰囲気醸し出しながら、竜蔵の後を追うのであった。



竜蔵からの連絡を終えた千代女は、隣でいつも通りの微笑を浮かべながら、正面のスクリーンに閉じられた瞳を向けている姫樹に視線を向ける。

「どうやら、会長の“勘”はまたしても当たったようですね」
「そうね〜♪」

訳も無い……いや、当たっていて当然だとしても言うかのように、姫樹は特に何することも無く千代女の言葉に相槌を打った。

「桐嶋さんの所に当てられた12人の方々は、どうやら何者かに雇われて第十一区から来ていたようです。それも一人2万円だとか……」

「安く見られたものね、桐嶋君も刀子ちゃんも。私だったら、もうちょっとお金を積んだ後に、必ず相手を潰すための装備を持たせ、蜘蛛の巣の様に張り巡らせた罠を張ってから当てるのだけれど……まあ、彼らの事を良く理解していないようだったから、仕方ないわよね」

朗らかな微笑みを浮かべてはいるが、考えている事が徹底的な黒い思考という事に、色々と他者から見たら背筋が凍るような思いをするかもしれない。

だが、ここにいるのは昔から二橋姫樹という高校三年生の少女を知っている千代女しかない。

故に、彼女の裏の顔ともいえる黒い部分が垣間見えようと、全く表情は変えず、整然とPCのディスプレイに注視している。

「確かに、彼らの並外れた身体能力や格闘技術を知っていたのなら、それくらいは必要でしょう。まあ、そんな事よりも、一応相手方の裏に繋がりそうな情報は得られたので、これを元に探りを入れてみますが……」

言いながら、千代女はPCのディスプレイから正面のスクリーンへと視線を移す。

そこには、何者かに都会の裏路地で追われている、竜蔵に妹——桐嶋美夏の姿があった。

彼女は、持ち前の柔軟性や驚異的な身体能力を駆使して、追っ手から悠々と逃げ続けているのだが、相手もなかなかしぶとい上に、あまり加速が出来ない狭く、すぐに曲がり角が現れる道のせいで撒くに撒けない状況が続いていた。

「美夏さんが気になるの？」

正面のスクリーンに目を向けた千代女に、姫樹が視線は向けぬままに問いかける。

「ええ、少々梃子摺っている様ですし、それに……」

「伏兵がいる場所に誘き出されている？」

「その可能性があります……美夏さんも美夏さんで、どうやら自分で追っ手の事は解決しようとしているので、余計に心配です」

「人目のつかない裏路地。これなら、どこにでも伏兵なんて忍ばせられる……確かに心配ね、あの美夏さんがいくら桐嶋君から英才教育を受けていたとしても、素人の女の子が男二人以上を相手にするなんて無謀だわ」

「ですね……会長？」

「はい、なんでしょう♪」

千代女が、隣にいる姫樹に眼鏡越しの真剣な表情を向ける。

それが何を意味するのか察しがついている姫樹の表情は、どこか楽しそうな雰囲気醸し出している。

そして、千代女があくまで事務的な声音で言葉を続けた。

「これから私が直接、彼女の救援に向かいたいのですが……ここをお任せしても宜しいでしょうか？ 探りの方は、向こうで美夏さんを助け、追っ手の方から情報収集をした後に行なうので」

「ええ、任せて頂戴♪ あと急ぐでしょうし、車庫に駐車してるバイクも使って良いわよ♪」

「ありがとうございます」

姫樹の軽い許しを得ると、千代女はキャスタ付きの椅子から立ち上がり、深々と一礼をした後、すぐさま教員用のPCルームから立ち去っていった。

千代女が部屋から出て行くのを一瞥した姫樹は、再び視線をスクリーンへと戻す。

「さて、千代女が直接出向いたのなら、私はただ状況を眺めていれば良いということね」

この言葉からも、姫樹が千代女に絶対の信頼を置いている事が伺

えるであろう。

それだけ、彼女は様々な物事に関して優秀な人材なのだ。
そして二橋姫樹という少女は、彼女の様な優秀な人材を、すぐに
欲しがる癖が有る。

どうしても、目の前にどんな分野でも突出した才覚を持つ者が現
れてしまうと、様々な手を駆使して自身の傍に置きたくなってしまう
のだ。

他者から見れば悪い癖の様に思えるが、彼女や彼女の周りの人間
は、一切そういった事は思っていない。不思議な事だが、それだけ
彼女の“眼”は正しい人材を選定し、結果を生み出してきたのだ。
そしてまた、今の彼女の胸中には、欲しい人材がすでに二人ほど
リストアップされている。

一人は既に引き込むための最終段階に入った……そして、もう一
人は今、目の前のスクリーンで走る姿が映し出されている。

「この娘は私の直感通りの娘なのか……それとも、それ以上なのか
？ お手並み拝見といきましょうかね」

胸下で腕を組みながら、姫樹はいつも閉じられている瞳を珍しく
少しだけ開く。

すると、このスクリーン以外の明かりが無い暗い室内でも、妖艶
な輝きを放つ血の様に“紅い瞳”が姿を現す……もし、この場に誰
か他の人間が存在していたのなら、彼女の瞳を見た瞬間に、確実に
意識を奪われてしまうであろう。

それ程に美しく、そして吸い込まれるような魅力を持った“赤い
瞳”。

これが、人の才能や可能性を見抜いてきた姫樹の瞳の色であった。



狭く、薄暗く、そして何やら表の通りとは違った臭いがする裏路
地……。

人通りなんて皆無に等しく、建物と建物の間から差し込む太陽の光だけが視界を明るく照らしてくれるが、その殆どが建物の影によって陰気な印象を持たせている。

走れど走れど同じ風景。

アスファルトの地面にコンクリートの壁……時たま室外機や猫などといった、少しだけ違った光景も見られるが、基本的に一般人にとって長くは居たくない空間。

そんな中を、先程からひたすら走り続ける美夏は、少々焦りを感じていた。

（意外に離せないか……結構、相手も足には自信有るようね）

しなやかに伸びる脚を軽快な回転数で走らせ、自慢の長い黒髪を風に揺らしている最中、美夏は胸中で後ろから追ってきている一人の謎の男に対して、改めて警戒心を募らせていた。

そして目の前に曲がり角が見えれば、すぐに柔軟な体捌きで、ほぼ直角に近いコーナリングを見せる。

これまで既に10分以上を走ってきたが、未だ衰えどころか乱れすら見られない……ペース自体は中距離を走るときの7〜8割で走っているの、これは驚異的な持久力とも言える。

しかし、流石にこのペースで長い時間走るのは人体的に難しいものがあるのか、美夏の顔には汗が流れていた。

（たく！ しつこいっただら無いわね、糞の分際で……。あゝん！
こんな事になるんだったら、力づくでもお兄ちゃんに助けを頼むんだったよー！）

後ろから追ってくる男が、今しがた美夏が曲がった場所を、大外回りで曲がりきる。

今の男のコーナリングを見る限り、どうやら根本的な身体能力は美夏の方が上みたいだが、どうにも走っている環境が悪いせいか離し切れない。

ここは大通りに出るべきかと考えるも、どの道が大通りに通じているのか分からないために、ほとんど直感で走り続けているのだが、

一向に人通りがある場所には辿り着けない。

むしろこれは、どんな墓穴を掘っているのではないかと勘ぐってしまふほどであった。

（でも、今はそんな事を後悔してる暇なんて無いわよね！）

進めど進めど人通りのある道には出れず、どう離すか？ どう撒くかを考えようとも、狭い裏路地という空間では名案など浮かぶはずも無い。

携帯で連絡？ いや無理だろう————直線の道での走りならまだしも、こうも曲がり角が多くては、迂闊に意識を別方向へと向けるのは愚行と言える。

ならどうする……？

自身が裏路地の迷路の行き止まりに辿り着く前に、思考の方が行き止まりへと先に辿り着いてしまう。

（これはもう一か八か、撃退するしかないのかな……）

だがリスクが大き過ぎる……。

もし相手が強くて、撃退に失敗し、逆に捕らえられてしまったのなら？

そうなってしまうてはもう、創作物の世界でなければまずは無事では済まないであろう。

具体的に言えば、世の中が騒いでいる児童ポルノの問題なんて、屁のツツパリにもならないぐらいに身体的・精神的な傷を負わされてしまう。

自身が世界で最も愛している兄に貰ってもらう前に、他の屑または糞または蛆虫にも劣る劣等愚民に傷物にされるなど、有ってはならない事なのだ。

今はこの様にハイリスク・リターンという、撃退しても次が予測不能な不公平な状況なのだ……慎重に選択肢を選んでいかなければならない。

が————しかし。

「えッ！ うそッ！？」

美夏が、もう何度目か分からない曲がり角を曲がると、そこにはコンクリートの壁が聳え立つ、閉鎖的な空間が広がっていた。

そう、美夏は遂に行き止まりへと辿り着いてしまったのだ。

後ろから、これまで美夏の事を追いかけていた男の足跡が、駆け足で近づいてくる……。

まずい——早く逃げなければ——でもどこへ？

正面を見ても、無機質な色しかないコンクリートの壁。

後ろに振り返ってみても、先程曲がってきたばかりの場所以外に何も無い。

すると、とうとう追っ手であった男が、美夏の目の前に現れた。

「はぁ……はぁ……梃子摺らせやがって」

背丈はそれ程高くは無く、体型も細身でいかにも現代人といった雰囲気醸し出す、アパレルショップからこれまで美夏を追いかけてきた男性店員は、春用のシャツを汗で濡らし、顔や体にも大粒の汗を大量に流している。

どうやら、美夏とは違って、男の方は相当無理をして走っていたようだ。

（拙いわね……これは本格的に）

「は、はは！ 間違いねえ、写真の女だ……」

目の前に現れた、体型も何もかもどこにでもいそうな金髪の男の様子に、美夏は気味悪さと身の危険を感じ、身構えながら後退る……。

右肩を前に出した、真半身の構え……左利きである美夏が、もともと動きやすい形で、足の置き方もスタンスを広げるのではなく、すぐにでもステップを切れるように、ほぼ自然体で置かれている。また、荒事には免疫が無い美夏は、余計な力みが生まれないように、あえてガードを挙げていない。

その構えた姿は、表情に焦りは見えても、これまでの彼女とは違

った、可愛らしいではなく、凜とした印象を持たせていた。

当然、これは兄直伝の美夏専用の構えだ。

しかし、そんな裏事情など知った事かと、男は黒いジーパンのポケットから携帯電話を取り出し、ディスプレイを覗いた。

「へへへ……悪いが、ちよつとアンタの写真を撮らせて貰うぜ？

ああ、服は脱がなくていいぜ？　なぜなら、俺が脱がすんだからな！！」

（うわ……気持ち悪い）

走ったせいで汗まみれ・息切れの激しい男の様子に、美夏は嫌悪感を抱かざる負えない。

それに、なんだか勝手に発情して鼻息も荒いし……やっぱり、お兄ちゃん以外の男なんて、生きてる価値すらないのかもしれないね。美夏は目の前の男と対峙している最中、そんな事を直感的に考えていた。

しかし、嫌悪感を抱いている美夏などお構い無しに、男がジリジリとこちらへと間合いを詰めてきた。

男の体勢は、今にも美夏へと飛び着いてやろうと、前傾姿勢になっている。

気持ち悪い……ますますもって、気持ち悪い。

美夏があまりの嫌悪感に表情を歪めていると、男は何を勘違いしたのか。

「おお～いいね、その恐がった顔。ゾクゾクするわ！　特に下の方なんて、もう外に出たがって仕方がねえって言ってるよ！！」

恐がってるんじゃない、生理的に受け付けないだけだ。

そう言ってやりたいところだが、事実、美夏はあまりの緊張に体が強張りそうであった。

いけない……お兄ちゃんに言われていた事は、どんな事があっても、体の反応を鈍らせる無駄な力を入れるなだったと、美夏は自身を落ち着かせるために、兄の言葉と“声”を思い出していく。

『そうじゃない。股関節の力と脊柱起立筋の力を抜きながら立つん

だ』

『丹田ってのは、“ここ”下腹部の辺りにあるんだ。擦ってやるから、意識してみろ』

『柔らかく……そう、お前は柔軟性が武器なんだから、無理な体勢でも出来るだろ（蹴りを）？』

『脚の形といい、腰のしなやかさといい……お前はホント、良い体してるよな（競技者として）』

『そう、上下に動いて（膝のバネを使った、構えている最中のリズム取り）……』

『可愛いよ、美夏』

『大好きだ、美夏』

『抱かせてくれ、美夏』

（そう、思い出して……そうすれば、お兄ちゃんが力を貸してくれる！）

前半が色々と勘違いされそうな発言集で、後半はほぼ美夏の妄想であつたが、どうや彼女にはそれで十分すぎる様であつた。

恋する乙女とは、時に驚くべきポジティブ思考を誇るもの……それが常時解放できる状態なのだから、彼女は有る意味で精神的にタフな面を持っていると言える。

しかし現状は精神的なタフさを有していようと、目の前の鼻息荒く迫ってくる男をどうにかしなければ打破できない。

「はは、そう下がるなって。でも、壁際まで行ってくれるんなら手間が省けるよ。だって、あとはケツを向けさせれば突っ込んでやるだけだからな！」

「……」

自身の優位性を確信している男は、どこまでも下品な言葉を吐いてくる。

それを精神的に落ち着いた美夏は、無言で眺めている。

あと二歩……実際には、美夏と男の間には5歩分の間合いが空いている。

だが、竜蔵から自身の特性に合わせてもらった闘う術を教えられた美夏には、これでも射程圏内の距離。

「へ、へへ……ホントに良い体してんな、アンタ。それに顔もメチャメチャ可愛いしよ」

あと1歩……ジリジリと詰められてくる間合いに、美夏の集中力も更に研ぎ澄まされる。

ゆっくりと、膝にバネを最大限利用できるようにするため、ちよつとした溜めを作っていく。

自然立ちから少しだけ曲げられた美夏の傷一つない綺麗な両膝に、劣情に囚われた男は気づいていない。

「そうだ、そのまま怖がっててくれよ♪ 無理矢理ってのは燃えるか……」

男が前傾姿勢の大勢で、美夏の最も得意とする間合いに足を踏み入れた——その時であった。

「ふッ！」

美夏が短い息吹と共に、ほぼ無^{ノーマーシオン}拳動で中空へと舞い上がった。

「へ？」

突然視界から消えるほどの跳躍を見せた美夏に、間抜けな声を漏らしながら目を奪われる男。

しかし、完全には美夏の跳躍を追い切れず、男は彼女を視界の外……つまり死角へと逃してしまう。

（お兄ちゃんが言ってた。人間は、自分の想像を上回る事が起きると、一瞬硬直を見せるって）

弾まないアスファルトの地面からの跳躍だったにも関わらず、男の頭上を悠々と舞いながら、伸身の錐揉み回転を魅せる美夏の動き。それは驚異的な脚力と、強靱なバネや瞬発力が無ければ有り得ない跳躍。

そして美夏は、男の頭上を中空で頭と足を上下逆さにした状態から、体勢を元に戻す回転を加えながら、利き足である左足を後ろへと振りかぶり……。

スパーンッ！！——と、男の後頭部を、宙に舞いながら足の甲で蹴り抜いた。

「あう……」

相手を見失ったと同時に、突然後ろから襲ってきた美夏の蹴りの衝撃。

これに男は脳を完全に揺らされてしまい、蹴られた勢いで前のめに崩れ落ちてしまう。

そして男の後頭部を蹴り抜いた美夏は、元いた位置から扇を描いた曲線の跳躍のまま、地面へと華麗に着地をして魅せた。

舞っていた空から地へと降り立った美夏は、乱れた髪を整えながら、意識をすでに刈り取られた男へと、完全にゴミでも見るかのような見下した目を向けた。

「私の身体に危害を加えようなんて、身の程を知りなさい、この劣等生物が」

絶対零度の視線……美夏の怒りは計り知れないが、もしこれが特殊な性癖の持ち主だったりすれば、これだけでご褒美となってしまういかならないものであった。

しかし、そんな視線を裏路地に転がった生ゴミに長々と向けてやる義理はない。

美夏はそう考え、この薄暗い空間からさっさと出ようと考えたのだが。

（うん？ でもおかしい……どうして“コレ”は、私のことを執拗に追い掛け回し来たの？ そもそも、コレはショップの店員だった筈でしょ？）

ここで美夏は、そもそも何故、自らがここまで追われなければならないのかという疑問に行き着いた。

おそらく、これまで只管に逃げていたから、根本的な問題を考える暇が無かったのであろう。

浮かんできた疑問は、すぐに処理せねば納得がいかない。

もともと勤勉でもある美夏は、そういった疑問の下、すぐさま行動に出る。

まず、うつ伏せで倒れ伏している男に歩み寄る。

次に、その右の右側面へと位置を移す。

放り出された男の手……さらに言えば、その右手首に、まずは左足のつま先を置く。

そして仕上げに、右足の甲で男の小指を、下から迫り上げていけば……“パキッ!!”

「あッ、あああああ!!!?」

枯れ枝を折った時の小気味よい音と共に、苦痛の悲鳴を上げながら男が目覚めました。

「あら、おはよう。一回で目を覚ますなんて、残念ね」

「あ、あがああッ!?!」

目を覚ました男は、激痛を感じた右手へと視線を移す。

そこには、右手首を踏まれ、小指が本来なら有り得ない方向へと向いている光景が広がっていた。

しかし、男の悲劇は更に続く。

「こっちに顔を向けないでくれる? 汚いから」

グシャッ!——と、男の顔面が美夏の右足によって蹴り抜かれる。

突然の正面からの蹴りに、男は鼻から出血し、あまりの痛みに苦悶の表情を浮かべてしまう。

また、脳震盪から目覚めたばかりなので、状況整理と視界が定まらない。

そして更に言えば、頭もそうだが下半身にも力が入らない。

完全に足に来ていた様だ。

相手が反撃が出来ないと判断すると、美夏は再度、男の折れた右小指を右足のつま先で踏みにじった。

「ああああッ!!」

「痛いでしょ？ やめて欲しい？ やめて欲しいなら、今から私が言う事に全部答えなさい。答えられなかったら……分かるでしょ？ 一応ゴミ以下の分際でも、脳みそっていうのがある様だし」

戦慄を覚えるような微笑みながらも、どこか妖艶な雰囲気のある美夏の表情。

普段の可愛らしい彼女からは考えられない魔性の微笑みで見下ろされている男は、その顔すら崇める事が出来ずに痛みのにた打ち回る。

いい加減、男の癖に悲鳴しか上げない相手に嫌気が差してきたのか、美夏は更に器用な脚捌きで、今度は右手の薬指の腹に右足の甲を潜らせた。

「ねぇ？ いい加減に泣き喚くの止めてくれないかしら……あまりにも汚い声だから、耳が穢れそうなのよね」

また折られる——完全に恐怖心を掌握してしまった男は、唇を噛むようにして漏れ出てきそうな悲鳴を飲み込み、美夏の要求に首を振る事で答えた。

「そう、なら質問するわね？ お前は何で私を追いかけてきたの？ 明確な理由が出てこなかったら……察してくれたかしら？」

「はっ、はいいい！」

底冷えしそうな声音で尋ねてくる美夏に、男は視線を合わさずに怯えた様子を見せる。

だが、喋らなければ折られると……まだ視界や思考が朦朧とする中、それだけに狂信的に囚われながら男は知っている事を洗いざらい話したのだった。

執行部のお仕事（7） 空を舞う妹・容赦のない妹（後書き）

次回は息抜きとして、竜蔵と刀子の繁華街歩きと、美夏と木佐貫の遭遇。

そして、美夏が行きのバス内で気にしていた、あの場所へと竜蔵と刀子が入ってしまいます……。

また、美夏の戦闘描写は半ば読んで下さっている方々にイメージしてもらおうという、読者頼りな感じになっていますが、大丈夫でしょうか？

まだ一回しか書いていませんが、分かり難くは無かったですでしょうか？

それだけが心配です。

執行部のお仕事（8） 強引なプレゼントには気をつけろ（前書き）

今回も、あまりチェックなく、1万5千文字を垂れ流しです。

執行部のお仕事（8） 強引なプレゼントには気をつけろ

「なるほどねえ……私の盗撮画像が、そんなに高値で取引されていたの」

「あ、ああ！　だ、だからもう許してくれ！　ほ、ほんの出来心だったんだ！！」

美夏に右手首を踏まれ、既に小指を折られている男は、まるで命乞いでもするかのように必死の懇願を、こちらを絶対零度の視線で見下ろしている美夏に向ける……が。

パキンッ！！————「あゝあゝああッ！！？」

地に伏せる男の願いなど美夏が聞き入れるはずも無く、更に男の薬指が、彼女が右足に履くローファアの底によって反り返るように折られた。

枯れ枝が綺麗に折れた様な、実に小気味良い音……しかし、このコンクリートに囲まれた裏路地の行き止まりで木霊したのは、人間の骨が折られる音だ。

しかし、そんな痛みに歯を食いしばりながら悶絶する男を眺めていても、美夏の冷たい表情に変化は見られない。

そして更に、美夏は男の中指の腹に右足の甲を捻り込み、器用に動かして男の中指を靴底で押し込む形へと移していく——その様は、まるで足で紙などを二つ折りにするかのような、傍目から見れば滑稽なものであったが、やっている本人のバランス感覚や、やられている本人の心情などを察すると、笑い事では済まない。

「や、やめてくれッ！！？」

痛みに悶えていた男が気付き、驚いたように反応するが————パキンッ！！

再び、このコンクリートとアスファルトで構成された都会の薄暗い裏路地に、男の骨が折れる音と悲鳴が響き渡った……。

あまりの痛みと恐怖で脳震盪から目が覚めたばかりの男は、また再び白目を剥きながら失神している。

その直ぐ傍で、美夏は男の後頭部を蹴ったり、指を折ったりに使ったローファーを使い捨てのティッシュで綺麗に拭き上げていた。

理由は簡単だ……ただ、兄以外の男が触った・触れた物を、いつまでのそのままにしたくなかった。

それだけの理由だ。

まだ新品同様の艶を持っているローファーを拭き終えた美夏は、とりあえずここから出ようと、肩に掛け直していた鞆からスマートフォンを取り出し、GPSの地図アプリを起動する。

スマートフォンディスプレイを眺めながら、男から得た盗撮についての情報を、頭で整理していく。

（私の盗撮画像がネットに出始めたのが、入学式から直ぐの事……で、その肝心の画像は、どう見ても私自身の協力が無ければ撮れない、かなり距離の近いものばかり。更に言えば、その盗撮画像の他にも、サイト運営者を名乗る男から、私やサイト内にUPされていた被害者達の写真を撮ってきたら、内容に応じて賞金が支払われる……本当に糞みたいな奴らね）

美夏は裏路地が迷路の様に展開している地図を眺めつつ、このコンクリートの壁やらアスファルトの地面しか見られない閉鎖的な空間から出ようと、歩を進め始めた。

状況は、かなり芳しくは無い。

湧き出る嫌悪感や、自身が現状置かれている立場に対して感じる、背筋を這い回るような気味の悪い感覚……出来れば、今すぐにも兄や家族の下に行って、抱きしめてもらいたい。

そうすれば、幾分かは守られていると肌で感じる事ができ、少し

は安心できるかもしれない。

だが今は、人通りが皆無と言っても過言ではない、コンクリートの迷路を行き来している。

こんな所に、自分が望む存在が駆けつけてくれるとは思えない。故に進む……胸を張り、背筋を伸ばして、気丈に振舞いながら気を紛らわす。

しかし、もう何度目か分からない角を曲がったところで、美夏にとって最悪な光景が広がっていた。

（そんなっ！？ 二人も！）

曲がり角を曲がったばかりの美夏の目の前に、先程蹴り倒した男よりも体格の良い二人の若者が、狭い道を塞ぐように、こちらを向きながら佇んでいた。

いくら兄の英才教育を受けていた美夏でも、一人はもしかして二人となると手に負えない可能性が有る。

正面に佇む二人の男達に、まだ反応は見られない。

しかし、次の瞬間には二人の男が同時に前へと体勢を傾け始めた。走り込んでくる――美夏の脳裏に、最悪の状況というものが過ぎった。

二人の男に取り押さえられ、服を剥ぎ取られ、肢体を弄られ……嫌だ、絶対にそんな未来は迎えたくない。迎えてしまった場合、一生癒えない傷が残されてしまうかもしれない。

そんなことになってしまったら、愛する兄に見放されてしまうかもしれない……。

美夏が、こちらに走り込んでようと前傾姿勢になり始めた男達に対して、恐怖を感じつつも精一杯の構えを取った瞬間。

彼女が感じていた恐怖心は、杞憂に終わってしまった。

「あれ？」

先程の男を蹴り倒した際に見せた、右肩を前に出した真半身の構えを取っていた美夏が、目の前の光景に間拔けな声を漏らしてしまう。

なんと、前傾姿勢で走りこむ体勢に入っていたと思われていた男達が、まるでドミノ板の様に、力無く、体の真正面からアスファルトの地面に倒れこんでしまったのだ。

前のめりで倒れ伏せる際、男達の顔面がアスファルトに叩き付けられ、頭部がボールの様に弾むが、男達に目を覚ます気配は無い。突然、うつ伏せで沈黙してしまった男達を、美夏が訳が分からなといった風に見ていると。

「どうやら間に合った様ですね」

この閉鎖的な空間に、全く相容れない落ち着いた様子の女性の声が聞こえてきた。

もしこれが、夜などであつたら、思わず身をビクつかせてしまう所であつたが、幸いまだ15時の時刻を回ったところ。

故に美夏は、倒れ伏せた男達から声がした方向へと視線を上げていった。

そこには、一人の同じ学園の制服を身に纏った女子生徒が立っていた。

特徴的な大きな丸眼鏡や、三つ編みで結われた長い黒髪……背筋の伸びた立ち姿や、スラリと長い脚は、彼女の体型がとても整っている事を示している。

背は自身よりも少し低めだが、制服の左胸にある色つきの刺繍で、自身よりも二つ上の三年生だという事が分かる。

そして、そんな先輩の女子生徒を呆けた視線で美夏が眺めていると……。

「挨拶をするのは初めてでしたね。初めまして、私は生徒会副会長兼書記係の三年、木佐貫千代女と申します。以後、お見知り置きを……」

事務的な声音で自らを名乗り、目の前の地味な格好が特徴の女は、これまた事務的にペコリと一礼をする。

しかし、突然の状況の変化に少々戸惑い気味の美夏は、千代女の自己紹介に対応しきれず。

「あ、えつと……」

「取り合えずご安心して下さい。私は貴女、桐嶋美夏さんに害を及ぼす者ではありません……列記とした二橋学園の生徒であり、生徒会のメンバーです。ほら、これが生徒手帳と生徒会メンバーに配られる会員証です」

言いながら、自身の懷から小さなワインレッドの手帳と、その中から一枚のICチップ入りのカードを取り出す。

それをとにかく一端落ち着こうと、一度深呼吸した後に確認する美夏……いつの間にか、千代女との距離は、この確認のために大分近くにまで歩を進めていた。

「確認できましたか？」

「は、はい……その、危ないところを助けて頂いて、本当に助かりました」

「いえいえ、こちらとしても、貴女に危害が加えられてしまうと拙いものでしたので」

相手の胸の刺繍の色から先輩だと理解していた美夏は、自然と畏まった様子で千代女に頭を下げる。

千代女は、別に大したことはしていないと、美夏のお礼に手を振りながら答えた……が、美夏には少し気になるところがあったので、すぐに下げていた頭を戻し、千代女と視線を合わせた。

「あの、ところで、どうして私の名前を知っていたのですか？ それに、なんで私が危ない目に合うと木佐貫先輩が拙くなるのですか？」

冷静な者ならば、千代女との会話で必ず疑問に思う事を、美夏は助けてもらった相手に失礼が無いように尋ねる。

それに対して、千代女は。

「その事に関してですが……とりあえず、一度ここから出ましょう。一応、目につく限りの障害は排除したのですが、また新たに出てくるとも限りません。表に出ると、私のバイクがありますので、そちらで……そうですね、桐嶋さんにも状況の説明が必要だと思います

ので、学園に戻りましょう」

バイクという単語を出しても、とても二人で乗れるバイクに乗っている格好には見えないのもそうだが。それ以前に、突然現れ、突然男たちを倒し、突然こちらを連れて行こうとする千代女に、美夏は警戒心を覚え始めていた。

「どうして学園に戻らないといけないのですか？」

当然の疑問、だが千代女は極めて事務的に美夏の問いに答えた。

「そこが貴女にとって、今一番安全な場所だからです。それでも信用出来ないと言うのなら、お兄さんに今から連絡をしてもらって、私の素性確認を行ってください。一応、最近知り合った仲ですので、私の信用を証明してくれる筈です」

「兄が……ですか？」

流石に初めて話す先輩の前で、“お兄ちゃん”という呼び名を使わなかった美夏。

しかし、それ以前に目の前の千代女から、自身の兄に“信頼されている”というニュアンスの言葉が出てきたことに、内心で嫉妬の邪念を加熱し始めていた。

だが、実際いつまでもここで話している訳にはいかないし、現在の状況を教えてもらうためにも、美夏は千代女に着いて行かなければならない。

故に美夏は、懐疑心を捨て去れないながらも。

「……分かりました、そういう事なら着いて行きます」

まだ疑っているぞという視線を向けつつ、千代女の提案に同意を示した。

「そうですか、意外ですね。もう少し渋るのかと思いましたが……本当に、お兄さんには確認を取らなくて良いのですか？」

意外とは言いつつも、表情に変化は見られない千代女。

「はい、兄の言葉も大事ですが、実際に生徒会のメンバーのようですし。それに、目の前の助けて頂いた手前もありますし」

「ふむ。まあ、それでしたら早く学園に向かいましょうか。貴女も

現状、自分が置かれている状況を知りたいでしょうし……それに、貴女の事を待っている方もいらっしやいますし」

「待っている方ですか？ それは誰でしょうか？」

地図アプリを起動していたスマートフォンを鞆に戻しながら、美夏は不思議そうな声音で言葉を返す。

自身を待っている人物？

しかも、この状況で？

もともと登場の仕方もタイミングも、どうも怪しい雰囲気が漂っているのを否めない千代女に対して、美夏は益々疑り深い視線を向けてしまう。

それに一瞬「ふ」と、美夏に対して初めて苦笑という形で表情を崩す千代女。

すると、その様子に美夏が「何か可笑しかしな質問でしたか？」と、不服そうにしていた。

「いえ。ただ警戒の仕方というより、警戒心の強さがお兄さん譲りなのかなと……不思議と感じてしまいました」

「兄譲りですか……」

美夏の表情は真剣そのものだが、内面は兄に似ていると言われて、ガツポーズどころか小躍りしそうな程に浮かっている。

それを察してかいまいか……千代女は、これまでの無表情や苦笑とは違った、どこか優しそうな微笑を浮かべる。

「お兄さんに似ていると言われるのは嫌ですか？」

「い、いえ！ そんな事は……無いです」

内心を見透かされたのかと、一瞬驚きを見せた美夏であったが、素直に千代女の問いに答える。

別に隠す事でもない……何故なら将来は、似るだけではなく二人の“愛の結晶”も作る予定なのだから。

「兄妹仲が良いのは、とても素晴らしい事です。実際、貴女のお兄さんも素晴らしい方ですからね、大切にした方が良いでしょう」

「はい、私にとっても、兄は尊敬できる人なので」

「それをお兄さんが聞いたのなら、さぞ喜ばれるでしょう。なにせ、学年で成績トップの妹さんに尊敬されているのですからね……」

お世辞や社交辞令ではなく、目の前に立つ、奇跡とも呼べるぐらいに可憐かつ、異性を釘づけにしていまいそうな肢体を持っている容姿端麗な二つ下の後輩に、千代女は心から思ったことを素直に伝える。

だが、いつまでもこうしてはいられないと、本来の目的に戻るために、千代女は踵を返し、背中を美夏に向けた。

「さて、無駄話もこれくらいにして。そろそろ学園へと向かいましょうか」

問いかけるような口調だが、既に歩を、このコンクリートの迷宮の出口へと進め始めてしまう。

「え、あ、待ってください!」

突然、有無も言わず歩を進め始めてしまった千代女に、慌てて着いて行こうとする美夏。

それを振り返りもせずに千代女は確認すると、なるべく歩調を合わせつつも、少々急げるようにペースをコントロールしながら、後ろから着いてくる美夏を先導していくのだった。



半ば強引に……いや、呆れるぐらい自分勝手に竜蔵が刀子を連れてきた場所。

それは、今回の執行部としての仕事で始めに向かった、東野台の地に立つ前。

行きのバス内で起きた、現代技術によって生み出された最新機器に、まさか流行に敏感な筈の女子高生が、他者が見たなら絶句しそうなぐらい戸惑うという一幕で感じた危機感を解消できる場所。

そう、それは……。

「こ、ここは何だ？」

「見て分かれ。携帯ショップに決まってるだろう？」

目の前に佇む、現在売っている料金プランやら新機種やらを宣伝している旗が何本も店前に並んでいる、正面が完全にガラス張りの携帯ショップに、古風どころか文明が一つか二つ遅れている状況の刀子はオドオドとしながら、隣に立つ竜蔵へと視線を向けた。

その視線は、いつもの凛々しくも鋭いものとは違って、どこか不安を隠しきれない少女そのものであった。

しかし刀子が、どんなに目の前の携帯ショップに物怖じしていようとも、んなものは関係無いとばかりに、竜蔵は勝手に歩を進めてしまう。

「ま、待ってくれ!？」

勝手に店内へと向かおうとした竜蔵の制服の右袖を、刀子は思わず反射的に掴んでしまう。

突然、制服の袖を掴まれてしまった竜蔵は、若干鬱陶しそうにしながらも振り返りながら。

「早く来い……てか、別に恐がるどころじゃないだろう？ 携帯ショップだぞ？ その辺の店と、なんら変わり無いだろう？」

「だ、だが……こ、こういった場所は、初めて来たのだ。仕方ないだろう……」

普段のハッキリと物を言う彼女からは考えられない程の、気の弱い様子に竜蔵は。

「じゃあ、このまま入るぞ。そうすれば良いだろう？」

「え？ あ、おい！」

まるでお化け屋敷を恐る子供を、無理やり中に連れ込むかのよう
に、竜蔵は刀子に右の袖を掴ませたまま、店内の自動ドアを開け、
中へと入って行ってしまった。

当然、取り残されまいと、ほぼ無意識に竜蔵へと着いていく刀子。

その表情には、既に彼女の涼やかで凜々しい雰囲気は感じられない。

「いらっしやいませ〜♪」

しかし、状況は既に狼狽している刀子を容易く置き去りにしている。

目の前にはショップの店員である、上は長袖の白いワイシャツとベスト、下はタイトスカートを身に纏った、目下の泣き黒子が魅力的な大人の女性が立っていた……そして、その後ろには様々な機種が並べられた棚や、4つの番号が振られた受付カウンターなどが、白を基調とした店内に設置されている。

「本日は、どのようなご用件で？」

「携帯が欲しいんですが、何か良いのありますか？」

「はい〜♪ それでしたら、こちらどうぞ♪」

刀子が店内をキロキョロと、不安そうに眺めていると、竜蔵と店員が流れるように話を進めていく。

いや、むしろ話どころか、もはや他所の家に置かれた猫の様にしている刀子を置いて、さっさと2番の番号が振られた受付カウンターへと足を動かしている。

だが、そこはやはり日本中を探し見ても中々お目にかかれない身体能力と反応の持ち主。

店員と竜蔵に置いて行かれそうになるのを、再び前を歩む男の袖を掴んで阻止したのであった。

まあ、阻止したと言っても、ほとんど引き摺られる形で、受付カウンターへと連れ去られてしまったのだが……。

「何か、ご希望などがありますか？」

焦り、狼狽している自身にとって、いつの間にかに受付カウンター一の店員側の席へと移動していた、大人な色香のある女性店員は、こちらにお客専用の席に座るように促しながら、早速、様々な機種が表紙として載っている自社のパンフレットを、カウンターへと並べ始めた。

店員から、「どうぞ、お掛けになってください」のワードを聞くと、竜蔵は慣れた様子でカウンターに並べられた一脚の椅子を引くと、そのまま腰かけた。

刀子も、それに習って、不安そうな顔をしながらも、椅子に腰を下ろした。

「そうですね……取り合えずスマートフォンで、予算は“4～5万”くらいなんで」

「4～5万だと!？」

そんな金額、今の私は持ち合わせていない———そう、驚きを続けようとしたが。

「心配すんなって、金なら俺が持つてるから。お前は黙って、そこで座ってれば良いんだよ」

しかし、刀子の驚愕を読み取ったかの様に、竜蔵が声音でも表情でも心配ないと、視線を隣に座る彼女には向けずに答える。

だが、流石に4～5万の金額を、同級生の男子に払わせるくらいなら、即刻この場から立ち去った方が良いと考えた刀子は。

「いくら後から返すとしても、そんな大金を払わせる訳にもいかなしいし、ましてや返すにも大変な金額だ。流石に、相手に対しての思慮が欠けているぞ?」

などと、あまりの出来事から、ようやく立ち直った普段の様子で、店を出ようと席から立とうとすると。

「まあ、待ってって」

「きゃッ!？」

隣で、これまた何時の間にやら店員から勧められたパンフレットと睨めっこをしていた竜蔵が、席を立とうとしていた刀子の左腕を右手で掴み、そのまま無理矢理に元の席へと引き戻した。

そのあまりの引きの力と瞬発力に、刀子は思わず外見からは中々連想できない、とても女の子らしい短い悲鳴を上げてしまう。

しかし、そんな刀子など気にせず、竜蔵は視線をパンフレットの開かれたページに固定したまま告げた。

「金なら俺の奢りだよ……てか、簡単に言えばプレゼントだな」

「プ、プレゼントだと？」

個人的に、他人にはあまり聞かれたくは無い、情けない声を晒してしまった刀子は、珍しく、その白くきめ細かな肌をした頬を紅く染める。

だが、竜蔵から出てきた信じられない言葉に、顔を朱に染めながらも目を見開く。

当然だ、なにせ4〜5万の買い物、一介……ではないかもしれないが、高校生が他人のために金額払うと言っているのだ。

これには、刀子のみならず、目の前で竜蔵にパンフレットに記載されていることを説明していた店員すらも、驚きの表情を隠せないでいた。

そんな雰囲気を感じ取ったのか、竜蔵は特にこれといって気にした様子もなく、パンフレットのページを捲りながら言葉を続けた。

「別に遠慮しなくても良いんだぞ？ お前も知ってるだろ、俺が去年だけで、そんじょそこのリーマンよりも稼ぎ出した事なんて」

「だが、それでも受け入れる訳にはいかないだろう。金額が大き過ぎる」

「受け入れる受け入れないじゃない、受け取れ。これはお前のためでもある以前に、俺の……いや違うな。俺の妹のためでもあるんだからな」

「妹さんのため……？」

話していくうちに、朱に染まっていた刀子の表情が、もとの白面へと戻っていく。

それに連れて、ショップに入った時から落ち着かなかった心情も、次第に落ち着いていくのが感じられる。

どうやら、竜蔵から美夏を連想するワードが出て来た事で、今回の執行部の仕事について再認識できたのが要因となった様であった。「ああ。いま起こってる面倒事は、お前みたいな文明に取り残されかけてるアナログには荷が重いし、そんなのが相方としていたら、

それこそ足手まといになる」

言葉足らずではあるが、竜蔵が何を刀子に伝えようとしているのか？

学園でも、常に成績優秀者として数えられる彼女には、確りと理解出来ていた。

要は、今回の事件はネット上での問題や、最新技術が用意られているかもしれない可能性がある、現代的な要因が多数あるため、連絡手段の確立など、こちらも最低限の事は用意しておこうという事だ。

本来なら、連絡手段の確立など、現代に生きる若者なら日常的に完了している筈なのだが、携帯電話を所有していない刀子にとっては、それが出来ていない。

故に、竜蔵は満足な体制を整えるべく、刀子に携帯電話を持たせようとしているのだ。

そうすれば、別に一緒に行動をしていなくとも、個々で動いて、なるべく多くの情報が得られる筈なのだ。

それが出来ないという時点で、確かに頭と容姿は良いが、現代的な争いとなると、剣の腕しか役に立たない刀子は、役立たずと言われても仕方ない。

この事実には、刀子が気まずそうに表情を俯かせていると。

「まあ、でも気にするな。今日からお前も、これで文明人の仲間入りだ。金の事なら心配するな、去年稼いだは良いが、使い道が無さ過ぎて困ってた所だからさ」

「し、しかし……」

「しかし何も、俺は妹の問題の解決のために、ただ金を注ぎ込んでただけだぞ？ お前に拒否権どころか、気にする権利すらない」

「あとう、料金プランは“カップルプラン”で？」

「いえ、普通に学割で」

押しの強すぎる竜蔵に、完全に押し切られている刀子は、口ごもりながら反論しようとしても、すぐに言葉を発する前に棄却されて

しまう。

そして更に、本人を置いて料金プランの相談にまで発展している、竜蔵と女性店員のやり取り。

カウンターのの上には、学割プランの料金設定の内容が表記された、料金プランの説明用の紙が、既に置かれていた。

「だ、だが」

「黙ってる。取り合えずパケ放題とか、必要なのは入れておくから、月額でいくら掛かるのかとか記憶しておけよ？　まあ、たぶん後で会長とか木佐貫先輩とかが、色々教えてくれるとは思ってから安心しておけ」

言いながら竜蔵は、勝手にこれから刀子が使う事になる携帯電話の料金プランまで決めてしまった。

あまりにも身勝手、あまりにも傍若無人。

確かに最初の支払いはすると言っていたが、その後、こちらが支払う内容まで、刀子に相談すらせずに進めてしまう男。

本来の彼女なら、このような輩は、すぐにでも木刀で黙らせる術を取るのだが……。

ここは学園の中でも無いし、ましてや先程、大立ち回りをしていた裏路地などといったアンダーグラウンドでもない、ただの携帯ショップだ。

故に、何を言って良いか判らず、居心地悪そうにする以外、刀子には取れる行動が無かった。

ありがとうございました♪

先程まで購入する携帯電話について、色々と話していた女性店員が、営業スマイルと嫉妬に塗れた邪念を織り交ぜた、新手の笑顔を浮かべながら、見事なまでの一礼を入れて、店の外へと出て行く二

人を見送った。

外は既に、そろそろ空が日中の色から、次の色へと変わってしまうのではないかという予感させていた。

人の往来も、次第にピークを迎えつつある繁華街の情景。

そんな中、携帯ショップから出てきた竜蔵と刀子の二人は、取り合えず落ち着ける場所へと移動しようと歩き出した。

「そ、その……本当に良かったのか？　こんな高価な物を、私が無償で貰っても？」

人の行き来が盛んな歩道を、スラリとスカートから伸びる脚で、姿勢良く歩きながら、刀子が竜蔵に遠慮がちに尋ねてきた。

彼女の左手には、先程、竜蔵が刀子と自身の妹のために購入した、スマートフォンを箱に入れた紙袋がぶら下っていた。

どうやら竜蔵は本当に、刀子に対して料金プランなど合わせて、約4万7千円の買い物をキャッシュで行なった様であった……いくら自分で稼いだ金だとは言え、金遣いが荒いにも程があると感じる買い物だ。

しかし、当の竜蔵は訳も無いといった風に、刀子の問いかけに視線を向けずに答えた。

「お前に使わせるために金払ったんだから、当たり前だろ？」

「いや、だがしかし……」

「気が進まないなら、その分、今回の事件解決に力を回してくれ。そっちの方が、色々と建設的だ」

「……」

それっきり、これでこの話はお終いと言外で語るように、竜蔵は歩を早めてしまう。

突然の贈り物に、気持ちの整理どころか、本当に受け取って良いのかすら判断できない刀子は、先を行こうとする竜蔵を、つい追いかけてしまう。

おそらく、色々と強引に話を進められてしまったため、自分でもどうして良いのか分からないからであろう。

後ろから、ちょっとした早歩きで着いてくる刀子を認めると、竜蔵はようやく彼女へと視線を向けるために振り返った。

「本当なら、ここで二手に分かれてるのが理想なんだが……使い方、分らないだろ？」

いきなり振り返ってきた竜蔵に、少々驚きながらも、すぐに言っている事を理解し、刀子は左手に持っている紙袋に視線を下ろした。そこには、今まで自分が持つとは想像だにしていなかった、最新機器が収められた箱が入っている。

だが、確かに竜蔵の言うとおり、この最新機器の使い方など、縁の無かった刀子に分かる筈など無い。

「あ、ああ……」

別段、事情さえ分かっていたれば恥ずかしくも無い問いかけだったのだが、そこはやはり現代の女子高生。周りの同級生が皆、当然の様に扱える物を、自分は一切扱えないという事実、多少の羞恥心を感じてしまう。

そんな彼女の“らしくない”様子を見て、竜蔵は少し優しく微笑みながらも、取りあえずはそこからだと、次に向かう場所を告げようとする。

「だったら、とりあえず静かなところが良いな。そっちの方が、俺も教えやすい」

「お、教えてくれるのは嬉しいのだが……その、本当に」

「くどい。さっきも言っただろ？ 悪いと思うんなら、早くうちの妹から盗撮魔を引き離してくれて感じの事を」

「そ、それはそうだが……」

「納得が行かないなら、将来返せる余裕があったら返しに来い。取り合えず、俺はお前に“それをあげた”んだから、今は気にするな」本当に強引な男だなど思いつつも、これは一向に言う事を聞く気が無いと判断した刀子は、腑に落ちない思いを感じながらではあるが、一先ずは受け入れようと、とりあえずは無理矢理に納得をした。彼女から一応の納得を感じ取った竜蔵は、なら次は改めて場所移

動だとばかりに。

「じゃあ、この辺で俺が知ってる静かな場所に行くから、ちゃんと着いて来いよ？」

と言うものの、ズカズカと先に行ってしまうとする。

「ああ、分かった……」

その彼の様子に、また身勝手さ……というより、マイペースさを感じた刀子であったが、まあ今は言う事を聞くしかあるまいと、微妙に疲れた様子で着いていくのであった。

着いていこうと思ってしまったのは、本当に間違いだったのかもしれない――

「な、ななな……」

目の前に広がる、まだまだ日が落ちるには早いというのに、大体5階くらいで建てられた建築物群には、様々な色のネオンで照らされた看板が、この地域の在り様を妖艶に示していた。

そこに行きかう人々も、男女のペアで、各々どこか熱の籠った浮かれ具合を醸し出している。

「さて、久々に来たけど、ここも変わってないな」

アスファルトの道路に、左右に立ち並ぶ建物の配置自体は普通なものだ。だが先に示したように、醸し出す雰囲気や色は、これまで刀子が見てきた・感じてきた中でも許容し難い、“いやらしい”ものがある。

「な、なんなのだ、ここは……」

「うん？　ここか？」

あまりの非日常的な（刀子にとって）場の空気に、彼女は端正な顔立ちを真っ赤に染めながら、思わず前に立つ竜蔵に聞いてしまう。

しかし、刀子に聞かれた竜蔵は、訳もないといった声音で――

――ここはホテル街だ――

「あ、ああああ……」

その答えを聞いた瞬間、刀子からヤカンのお湯が沸騰した様な甲高い音が聞こえてきたような気がした。

また、彼女の特徴的な“刀の様に”妖艶で切れ長の瞳は、何度も瞼をパチクリとさせながら、閉じたり開いたりしていた……そして、既に顔だけではなく全身朱色に染まっている。

しかし、そんな後退りすらしてしまいそうな挙動すら見せている刀子に対して、竜蔵は。

「何してんだよ、早く行くぞ」

「あッ、おい！？　ちよっと待て!!」

持前のマイペースさと身勝手さを駆使して、彼女の紙袋を持っている左手を、同じく左手で掴み、そのまま強引に足を進めてしまう。当然、刀子もこんなネオンがかった街並みを、男に手を引かれて進みたくなくと拒絶反応を起こしたので、抗議の言葉を発した。

だが、やはりそこは高校生といえども、世界で活躍するプロの格闘家……ただでさえ異性であるのに、肉体も世界クラスの竜蔵に、刀子の非力な力で抗える筈もなく、必死の抵抗など無意味とばかりにズカズカと馬力を上げて行ってしまう。

「い、いくら静かな所といっても、ここは違うであろう!？」

前を問答無用で突き進む竜蔵に対して、刀子は全力で抗うが、強引な彼の手と歩みは止まらず、とあるピンク色の塗装が施された『Today』の自動ドアを通過してしまう。

中の様子は意外にも、座れば心地よく柔らかそうな待合用のソファーや、植木鉢に植えられた観葉植物などが整った洋装を示しているのだが、刀子にとってはそれどころではない。

「ま、待ってくれ!!　たとえば君に買ってもらった携帯電話のお返

しが、すぐには出来ないといっても、これは無理だ！　こればかりは無理だ！」

ジタバタと掴まれている手を引き剥がそうと、指取りを試みたり、捻って相手の重心を崩そうとしてみたりとしていたのだが、どうにも竜蔵の左手を引き剥がす事ができない。

これが彼の握力と軸の強さかと、一瞬感心しそうになるも、やはり今はそれどころではない。

既に刀子の手を引っ張っている竜蔵は、自動ドアから正面奥に行った場所にある壁に設置された、部屋指定用のパネル前に辿り着いていた……いや、もう手慣れた手つきで304の部屋指定パネルのボタンを押した後であった。

そして、竜蔵はそのまま近くにあった“部屋の鍵が纏められた柵を無視して”、この空間の隅にあったエレベーターへと歩を進める。

タイミング良く？　エレベーターの両開きの扉は、竜蔵と刀子を歓迎するかのように開かれていて、流れるように二人は案外広いエレベーターの中へと入って行ってしまった。

「ちょ、ちょっと本当に待ってくれ！？」　こ、これは問題どころではないぞ……！」

普段は凛々しい眼を全力で見開きながら、刀子はエレベーターの階指定をしている竜蔵へと訴えかけるが、当の本人は聞く耳を持たないというより、どうしてそこまで落ち着いた様子で異性を、こんな場所へと連れ込めるのかと驚く程であった。

すると、両開きで開いていたエレベーターの厚い扉が、無慈悲にも機械によって閉じられてしまった。

出来上がる、エレベーターという狭い空間の密室……。

その状況と空気を感じ取ってしまうと、次第に刀子の目から涙が滲み出てきてしまう。

怖い……もし、いまずぐ目の前の男が、こちらに襲いかかろうとすれば阻むものなど皆無だ。

自分自身、肩に掛けている木刀を使ったとしても、こんな狭い空

間では何も出来ずに押し倒されてしまうであろう……ましてや、この男は、その程度の抵抗では何の意味も成さない程に強い。

自身よりも強い人間が相手の際に生じる、どうしようもない無力感に、刀子が感じている身の危険は更に増大される事になる。

エレベーターが、目的の階である三階へと上がり始めた。

一瞬だけ全身に軽く重力がかかったと感じた以外、この場に変化は見られない。

目の前で背を向け、こちらの左手を掴んだままの男は、何も口を開こうとはしない。

エレベーターが目的の階へと到着する電子音を、やはり機械的に発した。

瞬間、再び目の前の竜蔵に、買ってもらった携帯電話が入った紙袋を持っている左手を引っ張られる。

それに気づいた頃には、エレベーターの厚い扉は、まるで竜蔵の進行を支援するかのように両側へと避けられていた。

辿り着いた三階の様子は、赤い絨毯を廊下中に敷き詰め、洋風の壁紙が張られた壁には、ほんのりと暖かい印象を持たせる、少々明りの弱い照明が、蝋燭立てに見立てた様子で幾つも等間隔で設置されていた。

そして、壁に視線を向けているなら、自然に視界へと入ってくる、“こういったホテルの部屋の扉”。

ネームプレートの代わりに部屋番号が入れている、普通のホテルと比べても差異のない、ロイヤルホワイトの扉……その扉の先では、今どういった“行為”が行われているのか？

考えた瞬間、あわあわと訳の分からない言葉を発しながら、刀子は混乱や狼狽などといった、思考の錯乱状態に陥ってしまう。

（お父様、お母様……）

刀子の手を強引に引っ張っていた竜蔵が、錯乱状態に陥ってしまったという刀子を無視しながら、三階のシックな雰囲気醸し出している廊下を突き進んでいく。

（今日、刀子はとんでもない過ちを犯してしまいました）

ズカズカとズカズカと、堂々と“こういったホテル”の廊下を進んでいく竜蔵の前に、遂に目的地である304の部屋番号が振られた扉が現れた。

（自己の弱さのせいで、流されるままに高額な商品を買ひ与えられ、そこに付け込まれ、遂にはこんな所にまで連れ込まれてしまいました）

もはや涙目で、目を漫画の様にグルグルと回している刀子は、ここにはいない両親に向けて、授かり受けた身体が意に反して汚されてしまう事に、心からの謝罪を胸中で懺悔していた。

（これから刀子は、このお父様・お母様から譲り受けた、穢れ一つない身体を、目の前の男に汚されてしまいます……どうか、お許しください）

そして、そんな刀子の悲哀など関係無いかの様に、竜蔵は目の前の扉のドアノブを右手で回した。

刹那――

「横に飛べ！！ 刀子！！」

「へっ!？」

突然、ドアノブを回していた筈の竜蔵が、錯乱して棒立ち状態であった刀子を抱え、目の前の扉の正面から外れる様に、真横へと飛んだ。

同時に、さっきまで二人が立っていた場所を、開ける予定であった“扉”が、室内から何か爆発に押し出されたかの様に吹き飛んできた。

厚さが防音対策のために足されているロイヤルホワイトの扉が、室内から吹き飛ばされた勢いそのまま、対面の廊下の壁へと轟音を響かせながら激突する。

「はえ？」

想像していた形こそ違えど、竜蔵から前倒しで覆いかぶさられていた刀子であったが、あまりの出来事に、それどころではないと思

考を再び混乱させてしまう。

吹き飛んだ扉が、もともとあった場所を見れば、扉の縁を枠ぐっていた箇所、所々衝撃によって出来てしまったひび割れなどが確認でき、室内から発生した何らかの力の威力を物語っている。

それを確認出来れば、本来は裏で色々と執行部の仕事をこなしていた刀子に、一切の混乱は見られなくなる……日常的な思考から、非日常的な思考へと、本能といっても過言ではないぐらいの切り替えを行なったのだ。

「ちっ……これも相変わらずか」

「何を落ち着いているのだ！　そこをどけ！　敵かもしれないのだぞ！？」

竜蔵に前倒しで押し倒されている状況ではあったが、肩に掛けていた木刀を素早く抜き出していた刀子は、自身の上で覆いかぶさりながら舌打ちしている男を、何とかどかさうと、その分厚い胸板を押ししてみたり、膝でゴリゴリとした鍛え抜かれている腹を押し出そうとしている。

しかし、一向に竜蔵が動く気配が無い。

それもそうだろう、まず体重や筋質量といった根本から違うのだし、もともと刀子は木刀などで打つのは得意でも、組み合った体勢はあまり得意ではない（ある程度の相手なら、それでも戦える）。

開けようとしていた扉が吹き飛ばされるという非常事態だというのに、妙に落ち着いた様子の竜蔵に苛立ちを覚えつつも、刀子はどかないのなら止む無しと、持っていた木刀の柄頭で、竜蔵の下顎を寝ている体勢で、下から打ち上げた。

もちろん、腕だけの力ではダメージなどは生まれないので、寝ていた体勢から瞬発力を利用して腰・腹・胸を一気に反りだし、その力を腕に伝えた体を使い方を行なったので。

ガッンッ！！——「あでッ！？」

見事に竜蔵の下顎を、寝ている体勢でありながらも、木刀と顎骨の衝突音を響かせながら打ち上げたのだった。

しかし、その程度で昏倒する男ではなく。

「痛えな!!　なにすんだよ!？」

下から襲ってきた木刀の柄頭の痛みを感じながらも、すぐさま視線を己の体の下にいる刀子へと落とした。

だが抗議の声も、確かにもっともな事なのだが、現状を考えれば……。

「何をするだと?　それは先程から、私が君に問いたかった事だ!　！　大体、突然このような場所に強引に連れてこられて、何度も拒否をしたのに無視をされ、あまつさえこの状況に陥った私の立場を考えれば、その程度の痛みでは足りないくらいだぞ?」

木刀を両手で持ちながら、押し倒されながらではあるが、これまでの鬱憤を晴らすかのように声を荒げる刀子。

そんな、一応両腕を地面につつかえ棒代わりに立てているが、自分の体の下で肩身狭くしている、万人が見ても美少女……いや、美女だと答えてしまう程の、凛々しくも可憐な容姿をした刀子に竜蔵は。

「いや……その、なんかゴメン」

顔を赤らめながら、どこか恥ずかしそうに明後日の方向を向いてしまう。

近くで見れば——いや、別に彼女の優美な姿に距離など関係ないのだが——細く整った輪郭に、触れれば解けてしまいそうな程に柔らかそうな唇……白く張りのある肌は、とても清純で汚れ一つ無く、筋の通った鼻筋は、まさに彼女の凛々しい顔立ちにピッタリのものであった。

だが何よりも、彼女の“刀”の様に妖艶で鋭い瞳は、見るもの全てを虜にしまいそうな、そんな深い魅力が感じられる。

故に竜蔵は、思わず顔を赤らめて視線を反らしてしまったのだが、今はそのような時ではない。

というより、どうしてこのタイミングで照れたのか、こちらが問
いたいぐらいだ。

突然そっぽを向いてしまった竜蔵に、刀子が怪訝な顔をする。
まさに、その時であった……。

「あゝらあら？ どこぞの馬の骨が来たと思ったら、アンタだった
の？」

扉が弾け飛んだ部屋から、一人の猫目が魅力的な女が出てきたの
は――――

執行部のお仕事（8） 強引なプレゼントには気をつけろ（後書き）

この文字数で良いのかな？

というより、本来なら、あと二場面ぐらい書きたかったのですが、そうするとどう考えても2万など軽く越えてしまいそうだったので、ここで切りました。

ラブホ……どうしてああいう所って、面白いネーミングが多いのでしょうか？

ま、ネーミングよりも、最近のは中の方が遊びだらけなんですけどね？

することなんて、実際には一つか二つしか無いってのに……。

とりあえず、今回はこの続きを書いて、その次の回で事件の中盤……いや、終盤に差し掛かるのかな？ を書きたいと思っているので、テンポ良く更新していきたいと思います。

できればだけどね！！

どうでも良いですが、あと1ポイントで総合100ポイントになるんですよ、この改訂版は……。

あと、できれば感ゲフン！ も欲しいかな……なんて。

とりあえず、この章が終れば、一応のほほんとした話に移るので、その時に色々聞きたいと思います。

ではノシ

執行部のお仕事（9） 藤城理香（前書き）

まずは遅れてすみません。

最近、色々と忙しくなってきた身+パソコンがインターネットに繋がりがづらいという状況に陥っていて、なかなか更新どころか執筆すら出来ない状況でした。

なので、今回はかなり合間合間で書いていたので、少しチグハグしているかもしれませんが、矛盾などを見つけて下さったら、何かしら報告して頂けると嬉しいです。

意図的に、あまり明るすぎない様にしている、落ち着いたシックな照明の明かりも然ることながら、広い洋風な部屋の中央には、キングサイズの円状のベットがスペースを陣取っている。

しかし、それはここという“場所”を考えれば、仕方の無い事なのかもしれない……そう、例えキングサイズのベットの頭側に位置する壁一面全てが、部屋の全体を映し出せるほどの鏡張りだとしても、仕方の無い事なのだ。

また、ここに入ってくる前に、向かいの廊下の壁へと吹き飛ばされた鉄製の扉は、応急処置程度の手抜き作業で、もとあった位置へとほぼ“立て掛けられている”状態だ。

扉付近……つまり、部屋の玄関に当たる場所には、なぜか来訪者に対して、すぐにでも体を綺麗にしるだけでも言っているかのように、妙に間取りのあるバスルームがある。

ここまでの説明でも、今現在、竜蔵と刀子がいる部屋が、ただ寝泊りするだけのホテルの一室でない事を物語っているのだが――
――ここには、まだ、ただのホテルの一室で無い事を示す、非常識なまでの機材が存在していた。

「おう、なんか、また増えてないか？」

「はあ？ そんなの当たり前でしょ。街のセキュリティってのは、日々進歩しているのよ」

「これは、凄いな……」

部屋の中央に設置された、円状のキングサイズベットを囲むように、様々な街の様子が映像として映し出されているモニターが、先導者の後ろを歩いている、竜蔵と刀子の二人を、機械による冷たい圧力で出迎える。

地面に敷いてある、カーペットの感触を靴底越しに感じつつ、目

の前にある50は越えているのではないかと思えるモニターの数に二人は其々、呆れ混じりの驚きと、素直な驚きを示す。

すると二人の前を先導していた、頭の両端にある二束の尻尾、つまりツインテールと、活発そうな猫目や愛らしい八重歯が特徴的な少女が、後ろへと軽快なターンをして見せた。

「まあ、この程度で驚かれるのも悪くは無いんだけど……まずは、ここに来た理由を聞きましようか？」

竜蔵と刀子に振り返った少女は、その逆三角形に整った輪郭と、活発そうながらも賢い雰囲気のある顔立ちが魅力的な美少女で、特徴的な八重歯と猫目が、今は妖しげな微笑を浮かべていた。

髪型は、真ん中に分け目こそあるものの、左は少しだけ下ろし、右は後ろに流しているという左右が対象ではない別け方をしており、また頭の両端には、彼女の肘辺りまで伸びた二つの尻尾が、柔らかそうにサラサラと揺れている。

体型は細くしなやかな腕や脚が、スラリと優美な線を描きながら伸びていて、女性らしい膨らみも、平均以上かつ美形という、完璧なスタイルを、竜蔵や刀子とは違った学校の制服越しに強調していた。

身長は、大体160後半で、170?の竜蔵と刀子の二人と比べても、さして差は無い。

また、いつもここでモニターを眺めているせいなのか、縁の赤いお洒落な眼鏡をかけている。

「久しぶりに会ったって言うのに、世間話も無しか？」

そんな、外に出れば直ぐに異性の視線を集めてしまいそうな少女に、ここに来た理由を問われた竜蔵は、どうせ期待する反応など返ってこないだろうと、分かりきった質問返しを、ちょっとした溜息交じりに行なった。

「一応、この私と腐れ縁だったら、分かるでしょ？　回りくどいは嫌いな、無駄だから」

「はいはい、そうだったなくそうだった。お前は、そういう奴だっ

たな」

少女は言いながら、特徴的な猫目を、眼鏡越しに細める……。

だったら聞くなという、意味の込められた少女の視線を、やっぱり聞くだけ無駄だったという態度を取る竜蔵は、若干うんざりしながら後ろへと流した。

しかし、久しぶりに出会った彼女の性格に変化が無い事を確認した竜蔵は、相手の言うとおり、早速本題へと入るため、近くにあった化粧台の椅子を引き出し、そこに腰掛けた。

「まあ、ここに来る理由なんて、一つか二つしか無いだろ？」

腰掛けた椅子に背を預け、だらりと下ろした両腕は、太ももの上で手が組まれている。

そんなリラックスした体勢を取りながら、竜蔵は既に、キングサイズベットに脚を組みながら腰掛けている、この部屋の主に問いかけた。

すると、この部屋の主は「確かに」と呟きつつ、自身と竜蔵とは違って、いまだに背筋を綺麗に伸ばしながら立っている刀子に、同じくベットへと腰掛けるよう促した。

「失礼する」

スツと、衣擦れの音を静かに鳴らしながら、刀子はこの部屋の主に一礼をしたあと、促された場所へと、近くに荷物を置いた後に腰掛けた。

腰掛けた場所は、丁度この部屋の主の右隣。

なぜ対面にならなかったのかと聞かれれば、この部屋に椅子が一脚しか存在しなかったからだ。

「それで？ その一つか二つしか無い理由の、どっちを私に頼みに来たの？」

刀子が自身の隣に腰掛けると、一瞬、この部屋の主である少女は、意味深な笑みを浮かべたが、すぐに竜蔵へと勝気な声音を向ける。

「両方だ」

部屋の主の問いに、竜蔵は即答する形で答えた。

「両方ね……」

「両方だ」

復唱する竜蔵に、少女は面倒臭そうに「はあく」と溜息を付く。

「なら、最初に一番面倒なのを聞きましようかね」

少女は組んでいた脚を解き、全身で体を気持ち良さそうに伸びをしたあと、制服は着ているがソックスは履いていない素足の状態で、キングサイズベットの中心へと振り返り際に飛び込んだ。

ボスっと、柔らかい掛け布団から空気の漏れ出す音がする。

ベットの中心に身を投げ出した少女は、そのままうつ伏せの状態で、視線を周辺を囲んでいるモニターへと踊らせ始めた。

その様子を、ただ見送っていた竜蔵は、相手の準備が出来たと判断すると、寛ぎながらの体勢であるが、真面目な話に入る事にした。

「俺がお前に頼みたいのは、いま起こってる盗撮事件についてだ」

「でしようね」

「なんだ、知ってたのか？」

素っ気無い様子で、既に周知だった事を告げる少女……そんな彼女に、竜蔵は言葉とは裏腹に、別段以外でもなんでもないといった様子で、話を続ける。

ベットに腰掛けながら、少しだけ身を捻り、少女の背中へと視線を向けている刀子は、二人のやり取りを黙って眺めているだけだ。

「知ってるも何も、最近、丁度その事について調べてたのよ。そしてたらアンタと、その冴島さんが色々と嗅ぎ回ってるって、ネット上で話題になってたから」

「私の事を知っていたのか？」

が、しかし……突然、まだ名乗りもしてないのに、自身の事を知られていた事に驚いたのか、刀子は思わず怪訝そうな表情を、ベットでうつ伏せになってモニターを眺めている少女に向けてしまう。

「知っているも何も、冴島さんを知らないなら、この業界では“もぐり”って呼ばれちゃいますよ？ あ、そういえば、まだ私が名乗ってませんでしたよね？ 私は第三区にある女子高に通ってる、藤ふじしろ

城理香^{りか}って言います♪」

視線は動かさず、藤城理香と名乗った少女は、履いている裾の短いスカートのポケットから、何やらタッチパネル式の携帯電話を取り出し、手馴れた様子で操作をしていく。

「ふくん、お前って、そんなに有名だったんだな？」

「私も初耳だ」

「ちなみに、アンタは中学の時からよ？ 随分と暴れてたものね。その度に“鬼姫”ちゃんを筆頭に、私・美夏ちゃんっていう順番で、どやされてたけど……よし、出てきた」

手に持った携帯機器を操作しながら、片手間で昔話を懐かしむ理香。

すると、どうやら彼女が行なっていた、何らかの作業が完了した様であった。

「とりあえず、どこでも良いからモニターの方を見てくれる？」

理香の指示に、二人は一面鏡張りの壁の前にある、天井に固定されているモニター群の真ん中辺りに視線を向ける。

「ネット・人脈・タレコミ・買収……色々とは使ってみたけど、どうにも不明瞭な点が否めないのよね、まだ」

二人が視線を向けると、モニターには数々の情報が箇条書き形式で羅列されていた。

その中には、自分達が今日行なった行動や、最初に千代女から言われていた予測など、様々な情報が表示されていて、必要なものは動画や画像などといったものまで添付されている。

「盗撮画像が撮られた地域関係だったり、アンタや冴島さんを襲ったチンピラ集団の背後関係、さっき美夏ちゃんを追い回していた男が、いつ犯人と交渉していたのかだとか……」

「美夏が追い掛け回された!？」

「追い掛け回されたけど、未遂で終わったわ。男は美夏ちゃん自身に撃退されたし、その後はアンタのこの木佐貫千代女に、バイクで学園に連れられてたから、もう大丈夫よ」

一瞬、竜蔵のもとと威圧感のある顔立ちが、怒気に染まりそうであったが、理香の事後報告を聞いた瞬間、乗り出していた椅子の背もたれに、再び体重を安心した様子で預けた。

「あの女がか……こりゃ、帰ったらお礼の一つはしておかないとな。てか、なんでお前が木佐貫先輩の事を知ってるんだ？」

素朴な疑問として尋ねたのだが。

「さあね。聞きたいのなら、“これ”を私に貢ぐ事ね」

などと言いながら、右手で人差し指と親指の先を合わせた“マネー”のジェスチャーを取る理香。

これは、あまり踏み込んではいけないものなのだと、竜蔵は長い付き合いである理香の様子で察した。

「まあ、そんな事より話を聞きなさい。不明瞭な点を挙げたら切が無いのだけど、それでも流石は私。事件が起きてから今日までの短時間で、ある程度の犯人へのルートは掴んでいるわ」

「いや、ちょっと待て。背後関係は分からないんじゃないのか？」

「実際に事件の手綱を握っている奴は、まだ把握していないけど、どこをどう調べれば良いのか？ または、どういった理由で犯人は犯行に及んでいるのかは分かってる……信用が無いのなら、教える意味ないしね」

うつ伏せの体勢で寝ていた理香が、今度は竜蔵に向けて悪戯な笑みを浮かべながら、ベットの上で胡坐を掻き始めた……すると、胡坐を組んでいる脚の間から、理香のスカートの中身が見えそうで見えないという、影を有効利用した高度なチラリズムスポットが発生した。

“そこ”を、ひたすらに興味が無いといった雰囲気醸し出しつつも、内心必死で覗き見ようとする竜蔵は、気持ち背もたれに預けていた体を、下に少しだけずらす。

「たっく、アンタってホント見境が無いわよね？ 見たって履いてるのはブルマよ、残念でした」

呆れたように、確信犯的な胡坐を掻いていた理香が竜蔵の行為を嘲笑する。

しかし、ブルマと申したか——竜蔵が目を送る集中力が、微妙に上がる。

ええい、もう少し透明度は上がらぬのか!?

竜蔵がチラリズムという、どうしても男としては反応せざる負えないチャンス物をにしようと躍起になっていると。

「その、少しでも良いのだ。貴女が知っている情報を、私達に教えて欲しい」

これまで竜蔵と理香のやり取りに、なるべく積極的な介入を見せなかった刀子が、一旦腰掛けていたベットの縁から立ち上がり、理香に真剣だという空気を伝えながら頭を下げた。

その様子に、流石の竜蔵も、くだらない事に構っている暇は無いと、元の位置へと背筋を戻した。

「報酬なら、使い道の無い金があるし、必ずお前が満足する額が払える。だから、今のは忘れてくれ」

「まあ、別に頭下げられなくても、お金さえ払ってもらえれば、私はいくらでも情報を垂れ流す準備はあるんだけどね。てか、アンタは真面目な雰囲気を少しぐらいは保ちなさいよ……」

はあくという、呆れた溜息と苦言を竜蔵に向けながらも、理香は持っていた携帯電話を操作し、モニターに移る映像を切り替える。

どうやら、彼女の持っている携帯電話は、ここにあるモニターのリモコンとしての役割を担っている様であった……つまり、電話でもあるが、多種に渡る機能が搭載された端末としても利用できるみたいだ。

「取り合えずは、話に戻るけど、大丈夫?」

「ああ、頼む」

竜蔵の返事と、刀子の頷きを確認すると、理香は二人に再びモニターへと視線を向けるように促した。

モニターには、前に木佐貫に見せてもらった、盗撮画像がUPさ

れているサイトが映し出されている。

「簡潔に説明すると、まず調べるなら、アンタの学園を調べた方が
良いわね」

理香から早速出てきた、今日行なった事が全て無駄になってしま
いそうな言葉に、竜蔵は首を傾げ、刀子は無表情で話を聞いていた。
「理由は二つあるのだけど……まず一つは、サイトに画像がUPさ
れてからの間に、アンタんとこの学園に在籍してる生徒が写ったの
が、他の学校の被害者よりも圧倒的に多い事。特に、美夏ちゃんの
画像がやたら多いわね」

美夏の画像が多いという理香の见解は、先に聞かされていた千代
女と同じもので、やはり彼女も妹が狙われていると、竜蔵に注意を
促した。

それに竜蔵は“分かっている”と、言外で語るように、一度だけ
頷いて見せた。

「で、二つ目は、今回の盗撮事件で使われている撮影機材ってのが、
半径30m以内で操作しないと、機能しないっていうやつだからよ」
「撮影機材っていうと……」

「超小型自立飛行偵察機。聞いた事は、あるでしょ？」

超小型自立飛行偵察機……理香から出てきたワードに、竜蔵と刀
子の視線が細まる。

そういえば、今回の聞き込みに出てくる前、教員用のP Cルーム
で木佐貫千代女が、この機械が使われている可能性があると言っ
ていた筈。

竜蔵が頭の中で、学園での事を思い出していると。

「その反応は、一応知ってるって感じの反応ね……なら、説明して
あげようかしら？」

二人の反応を伺った後、得意げな表情をしながら、理香が自らの
情報を誇らしげに垂れ流し始めた。

「超小型自立飛行偵察機ってのは、大体一ヶ月前に、学園都市の大
学で発表された、災害時や医療の現場などで活躍が期待されている

新技術よ。だけど、まだ発表段階で試作機が数機しかない状態の、貴重な機械なの」

貴重な機械という部分に、刀子が「貴重なら、こんな下らない事件に使用される事はないのでは？」と質問を投げかけてきたが、理香は「ところがどっこい！」と、待ってましたと言わんばかりに、刀子の質問に食いついた。

「その超小型自立飛行偵察機、通称『天道虫 (lady beetle)』は、作ったのは良いのだけれど、大学側がまだ試験飛行を外では行なっていない状況だったのよ。だからこそ、野外での操作が半径30m以内っていう欠点を修正できていなかった」

「はあ？　どんだけ抜けてるんだよ。もう発表してるんだろ？」

「ええ、多分、作った教授ってのが、これが初めての実績だったからでしょうね。興奮して、すぐに学会や、その他の報道機関に発表しちゃったそうなのよ。これは、その大学内にある様々な研究室の学生達から集めた情報だから、“まあ”信用して良いわね」

「まあって……頼りねえな」

「仕方ないでしょ？　その教授もそうだけど、大学自体、全然有名どころじゃなかったんだから」

教えてもらっているだけ、ありがたいと思いなさいと理香は付け加えながら、手に持っていた携帯端末を操作し、モニターに映っていた情報の映像を切り替えた。

すると、モニターに何やら、小さく白い球体の物体を説明する画像が映し出される。

「これが、いま説明してる『天道虫 (lady beetle)』の画像よ。大体、大きさは2ミリ程度で、重さは5グラムに満たない軽さ。内部には外から取り入れた空気を循環させ、また再び外に吐き出す事で推進力や浮力を得る装置が取り付けられているわ。まあ、これのせいで中身の大半が空洞になって、撮影用のカメラを当初の予定とは違って、正面にしか取り付けられなかったっていう事情もあるけれどね」

「初めはどうするつもりだったんだ？」

「名前の通り、てんとう虫の斑模様を真似て、全体にカメラを取り付けようとしていたみたいよ？　ま、そんな事したら、まずこれは飛べなくなっちゃうけど」

竜蔵と刀子は、理香の簡潔な説明に耳を傾けつつも、『天道虫（lady beetle）』が映し出されているモニターに視線を固定させている。

確かに、理香の言うとおり、『天道虫（lady beetle）』にはカメラが一つ、正面に目玉の瞳孔みたいに取り付けられている。それはまるで、てんとう虫というよりも、浮遊する目玉と称した方がシックリするぐらいにだ。

「基本的に色は白なのか？」

「そうね、だけど塗装次第で、その環境に擬態できる可能性があるわ」

「だとすると、目で見つけるのは難しいか……」

「確かに目視は辛いかもしれないけど、近くにいれば、この『天道虫（lady beetle）』が吐き出すエアの噴出音が聞こえるはずよ」

「いや待て。確かこれって、蚊とかハエとかよりも静かに飛ぶって話だろ？　音も聞こえづらいんじゃないか？」

竜蔵はモニターに対して、指をさしながら、事前の触れ込みとの違いを理香に確認する。

しかし、当の理香は、特に何に対して反応するでなく「別に、よくある事よ」と前置きをした。

「カタログ上のスペックと、実際のスペックが違う事は。ただ、それは大抵カタログスペックよりも下回る結果が付いてくるだけの話。簡単に言えば、話を盛ってるのよ、見栄を張るためにね」

なるほど、確かにと竜蔵は頷く。

実際、携帯電話のスペックを一つとったとしても、カタログ上の通信速度やら電池の耐久時間などで相違が見られる……それも、素

人目には良くわからない単位が使われた上、カタログに記載されたスペックを下回る形でだ。

これは所謂、理香の言うとおり見栄を張っているものであろうと、竜蔵は短い納得をする。

「だから、というのも変だけど。実際、この『天道虫(lady beetle)』は空を浮遊している最中、エアの噴出音やら、風を切る音だとかで結構うるさいらしいのよ。まあ、うるさいといっても、ふとした拍子に聞こえてくる程度だけだ」

大体、これぐらいかな……と、理香は興味なさげな様子で、『天道虫(lady beetle)』の説明を終え、次に移った。

「で、この機械が何で使われているのか分かったのかっていう……まあ、あれね。大学の研究室ではなくて、教授の自宅PCからメールの送受信履歴とかを覗いてみたの」

「……どうやって？」

「仮にも私と長い付き合いのアンタだったら、ある程度は予想が付くでしょ？」

「ハッキングってやつか？」

「ご名答♪」

周辺にキラキラとした星が舞っていそうな、愛らしい笑みを浮かべる彼女であったが、やっている事は完全に犯罪行為である。

そんな理香の様子に、竜蔵はうんざりとした視線を向けるが、彼女には一切答えた様子は無く、話を進めていた。

「覗いてみた結果、まあ、あのつまらなそうな教授から面白い情報が抜き出せたのよ」

「面白い情報？」

「ええ、どうやらあの名前も思い出せないほどに冴えない教授は、都市外に拠点を置く暴力団組織に対して、金目欲しさに『天道虫(lady beetle)』を数機、売り渡していたらしいわ」

「暴力団か……」

「厄介だな」

暴力団という、裏社会の中心的組織と言っても過言ではない名詞を聴いた瞬間、二人が苦い表情をしながら、今回の事件の危険度が上がった事を確認していた。

「冴島さんの言うとおり、実際かなり厄介な事になっているわ」

二人の苦い様子を見送ると、理香は再びモニターへと身を捻り、寝転がる様にしてから視線を向け、手に持っている携帯端末を操作する。

すると、これまで『天道虫(lady beetle)』を表示していた画面が、一斉に『鷹』の文字が中心に彫られた、確りとした作りの金バッチが表示された。

「『天道虫(lady beetle)』を教授から買い取ったのは、この紋を象徴としている“鷹蛇組”^{たかだ}。もともと長い間、日本極道の中心的組織である“花田組”^{はなだ}内で若頭を担ってきた組だけど、つい最近に組長が抗争で死んじゃったみたいでね、いわゆる、誰が次を引っ張るかの内部抗争の真っ只中なのよ」

理香は説明をしながら、モニターに映す映像を、流すようにして切り替えていく。

その中には、先程説明をした、鷹蛇組の組長の顔写真や、花田組の家紋、そして内部抗争を行なっている鷹蛇組での中心的人物二人の顔写真が映し出されていた。

これらの画像は、数あるモニターの真ん中辺りに有る画面が流し流された画像は其々他のモニターに留められていた。つまり、説明の流れを補っているのは、中心に位置する一つのモニターだけだ。

「そんな物騒な状況の組が、どうして最新の技術を欲しがったんだ？ てか、買い取ったのがコイツらなら、犯人もコイツらって事になるんじゃないか？」

「あら、アンタにしては珍しく正解を口にしたわね。正確には、この組にいる若手も若手の下っ端が、勝手に先走って、教授から『天道虫(lady beetle)』を、野外運用の試験結果も込みで買い取ったのよ。それも、かなりの大金を叩いてね」

「教授は、その大金に目が眩んで、折角発明した機械を、こんな連中に売り渡したという訳か」

呆れたと、刀子は姿も見た事が無い教授に対して、落胆どころか軽蔑の言葉を吐く。

実際これは、この部屋にいる他の二人も同じ感想のようで、なぜ成功間際まで来ていたのに、暴力団から出てくる大金に目が眩んでしまったのかと、理解出来ない様子でモニターを眺めていた。

「大金に目が眩んだってのもあるだろうけど、突然の成功に戸惑っていたってのもあるかもしれないわね。まあ、どうでも良いけど……取り合えず、話を戻すわよ？」

理香の言葉に、二人は無言で頷く。

それを彼女は確認するまでも無く、さっさとモニターに映る映像を切り替えた。

「教授の話はここまでにして、どうして暴力団の下っ端が、この機械を欲しがったのかについてなんだけど……これね」

この指示に、竜蔵と刀子の二人は、画面が切り替えられたばかりのモニターに注視する。

そこには、“新人アイドル発掘計画”などと書かれた、ある芸能事務所の企画書の文章が、文字がクッキリとした状態で映し出されていた。

「これは、なんだ？」

竜蔵が、その映像を見た瞬間、右頬をヒクヒクと不機嫌そうに引きつらせながら、怒気の孕んだ声音で理香に尋ねた。

すると理香は、さもありませんと、竜蔵の疑問に答える。

「なについて、芸能事務所の計画書よ？　もとは企画として、イベント形式で発掘させようとしていたそうだけど、予算の関係でボツになったものね」

「それはいい、別にどうでも良い……俺はただ、なんでこんなものが関係してくるのか、それを聞きたいだけだ」

「そうね、説明は簡潔に……理想だわ。じゃあ簡単に説明するけど、

ぶっちゃけこれが今回の事件で、犯人が目的としているものよ」

言いながら、理香が画面を端末を操作し、画面を再び切り替え、今回の事件の発端となった、盗撮画像が纏められたサイト、『女子高生丸秘盗撮画像館』が表示された。

「このサイトは一見、どっかの変態の屑が作成したものだと思うかもしれないけど、実は違う」

「どういう事だ？」

「分からないの？ 同類の変態の癖に？」

「俺は変態じゃない、ノーマルな人間だ」

「あゝはいはい、そういう事にしとくわ」

自身が変態ではないと否定する竜蔵に、理香は面倒臭そうに片手をフラフラと振りながら、話を先に進めようとする……しかし、自分から話を振っておいて、それは無いだろうという視線が、竜蔵から送られていたが、彼女がそれを気にするはずも無い。

「このサイトを良く見れば分かると思うけど、基本、従来の盗撮系統の画像と違って、自然な姿……というより、プライベート写真みたいな撮り方をした画像ばかりなのよ。で、ここに疑問を感じた私は、このサイトを運営している奴が誰なのか、色々と調べてみたわけ」

「またハッキングか？」

「違うわよ、ただURLとか調べていたら、ちょっとアンダーグラウンド的な掲示板に貼られてたのよ。“新アイドル発掘コンテスト”とかいう、ふざけたスレッドの中にね。で、そこを流し読みしてったら、スレ住人に投票とかさせてたわけ。ホント、くっだらない連中よね」

サイトのURLを貼られていたという事は、自身の妹の写真がネット上に、既に出回っているという事実直結している。

竜蔵は、これに嫌悪感と怒りを覚えたが、ここでどうこう出来ることでは無いので、それは胸の内に収める……だが、この事件で犯人を自分が見つけることになったのなら、その時は全力を持って潰

してやろうと、心に決める。

「で、ここからが漸く、暴力団の下っ端が『天道虫（lady beetle）』をどうして欲しかったのかって話に入るんだけど……まあ、これもそんな難しい話じゃないわね。ただ単に、この芸能事務所が新人アイドルを発掘するのを、『天道虫（lady beetle）』を使って協力しようって話よ」

「協力して、その暴力団員に何の得があるんだ？」

「まず、この芸能事務所にはスカウト専門の社員が一人もいないのよ。まあ、看板になるアイドルもいないし、ましてや立ち上げたばかりの事務所だから、仕方ないのかもしれないけど。だからこそ、今回の暴力団員の話は魅力的だった——だって、本来なら芸能関係の大人が入って来れない学園都市の内部で、新しい戦力となる女の子を掘り出せるかもしれないんだもの、そりゃ必死になるでしょ、他の事務所でも出来ない事だから、差も付けられるしね。暴力団員は、そこに金を持って来かけながら、卑しく付け込んで来たってわけ……実際、事務所側も発掘には全力で取り組んでる姿勢だしね、断られる心配も無かったみたいよ？　ただ、この暴力団員の狙いは、どうやらそこだけじゃないみたいね」

「どういう事だ？」

饒舌に語られる理香の情報であったが、要点自体は確りとしているので、竜蔵でも全てを理解する事が出来たが、どうやら話は……というより、今回の事件の主要人物である暴力団員が構想している絵は、ここからが本番であったようだ。

「聞いたこと無い？　アイドルの娘達が、自分の仕事を得るために、触りたくも無いオッサンと一夜を共にしたり、芸能事務所とヤクザの関係を保つために、また同じような行為を強制されるって話。アタも同じような業界で活動してるんだから、一度くらいは耳にした事、あるんじゃない？」

卑猥で卑劣な世界……もともと、荒事での裏社会に関わっている刀子は、こういった別の裏社会がある事も知ってはいたが、同性な

どを抜きにしても、腹から煮えくり返るような怒りを感じずにはいられなかった。

弱い立場の人間に対して、自らの欲求を満たすために、それに付け込む汚い者達。

どうしても刀子は、こういった連中を生理的に受け付けない性格なため、それに近しい業界に身を置いているという竜蔵に対して、達観した理香とは違った厳しい視線を送ってしまう。

だが竜蔵は、その刀子の視線に気付くと「俺がしてる様に見えるか？」と、別に気にしていない様子で尋ねた後、理香の投げかけに答えた。

刀子は無言で、厳しい視線を向けてしまったことの謝罪を含めて、彼の言葉に首を横に振っていた。

「枕営業ね……聞いた事はある」

「暴力団員が狙ってるのは、その利権よ。今回の盗撮で目を付けた娘に対して、何かしらのアプローチを後々かけていき、あわよくば芸能事務所に所属させて、金持ち相手に売春やら何やらもやらせ、その娘を心身共に弄んでいく……ホント、腐った連中よ」

そして、その目標に、^{ターゲット}美夏ちゃんが最重要人物としてリストアップされてる……。

理香は、これまで達観した面持ちからは想像できなかった、嫌悪の念と、苛立ちの念を、自らが操作しているモニターに対して露にし始める。それは、この話を聞かされた竜蔵も同じであった。

腐れ縁……彼女は、竜蔵に対して、自身との関係をそう表した。

という事は、竜蔵の妹である美夏も知られているのは当然の事である。

ちなみに、理香は美夏の事を、かなり好意的に見ている人物の一人だ。

「だからこそ、私も協力は惜しまないわ……お金は貰うけど」

「抜け目無いって、言ってるやりたいが、ありがとうな」

負の表情から、一気に小悪魔的な微笑みを浮かべた理香に、竜蔵

は呆れながらも素直に礼を述べる。

すると、何やら理香がモニターから視線を振り向かせた後、ハトが豆鉄砲をくらった様な、何ともいえない間抜けな表情を露にした。
「……なんだよ？」

その意外とでもいうのかの如く、視線を向けてくる理香に対して、竜蔵が居心地悪そうに尋ねた。

「いや……その、アンタが素直にお礼が言えるなんてね。少し驚いたっていうか、何と言うか……」

「お前は失礼な奴だな、本当に」

右頬をポリポリと掻きながら、馴れない相手の反応に戸惑う理香に、竜蔵は容赦の無い言葉を浴びせる。

しかし、やはり理香には堪えた様子など全く無く。

「ま、人は日々成長していくって事ね。じゃあ、そろそろ詰めに入りましょうか」

「たっく……」

飄々とした理香の変わり無い性格に、竜蔵はちょっとした懐かしみを覚えながらも、取りあえずは話を進めることに同意した。

「私が得た情報は、大体こんな感じなんだけど……細かい事を付け加えるとなると、まだ下っ端の暴力団員が無名すぎて誰なのか掴んでない事だったり、どうやって暴力団員は外から学園都市に接触をしているのかってぐらいかな？ 一応、下っ端が動いているっていうのは、外の情報網から仕入れたものだから、間違いは無いのだけれど……あと何で、少女売春みたいな事に及んでるのは、利権を自分の出世のために利用する事らしいわ」

理香が、これまで説明した事の補足事項を、掻い摘んで並べていく。

竜蔵と刀子は、それに真剣な表情で耳を傾けながら……。

「それだけ分かれば十分だ。後は、こっちで何とか出来そうだ」

「うむ、これで学園内にいる盗撮の実行犯を捕まえれば、もしかしたら裏に繋がる情報が手に入るかもしれないからな」

其々、これだけの情報を提供してくれた理香に対して、感謝の意を示した。

「確かに、冴島さんとアンタが通う学園にいる実行犯は、確実に『天道虫(lady beetle)』を渡されてる奴だしね、捻って絞れば、それなりの情報が出てくる可能性は大よ」

理香の言う通り、後は学園で実行犯を捕まえ、情報を吐かせれば、裏へのルートは容易に辿れる可能性が有る。

行動の指針が、聞き込みなどという曖昧なものではなく、明確に示された瞬間であった。

キングサイズのベットが中央を陣取る部屋で、照明以外に明りを灯していたモニター群の映像全てが、電気の無駄とばかりに消され、画面には無機質な黒が一面を支配していた。

故に、この部屋を照らすのは、仄かに明るい程度の、柔らかい照明のみ。

ただ寝泊りするだけが目的ではない、この場所で、こういった照明の中、男一人・女二人の組がする事と言えば……。

「しかし、アンタとも一年ぶりか……改めて見ると、またむさ苦しくなったわね」

「言い方が酷いぞ、お前」

「確かに、私も一学年の頃に何度か見かける事はあったが、肉体の成長には目を見張るものがあつたな」

昔話に花を咲かせる事……。

何とも色の無い話だが、所詮は初対面に近い刀子の存在や、別段男女の関係という訳でも無い竜蔵や理香にとっては、ここもまだ溜まり場と変わり無い場所なのかもしれない。

まあ、これには昔話ついでに、刀子に対して理香の紹介も含まれていたのだが。

しかし、ここで竜蔵がある事を思い出した。

「ああ、そう言えば、ここに来た理由って、他にもあったんだっただけ？」
「は？ あく言ってたわね、そう言えば。正直、説明してる間に忘れてたわ」

「他の理由？」

ど忘れとは、やろうやろうと考えていた所に、厄介事が舞い込んでくると、まるでデータの上書きの様に良く起こる事だ。

故に、この部屋にいた三人が、いま竜蔵が思い出すまで、今回の事件に関する情報を聞き出すのと違った理由を忘れていたのは、有る意味で仕方の無い事だったのかもしれない。

何故なら、もう一つの理由とは……。

「で、もう一つってのは何なの？」

「いや、ただ単に、コイツに携帯の使い方を教えるってだけなんだよ。ここには、教えるのに静かな場所を探してたから、そういえば近くにあったなって感じで、ついに入ってきた感じなんだわ」

「へへ携帯の使い方ね……」

この様に、どうしても良い事にも程があるものだったからだ。

竜蔵と理香に、同時に視線を向けられた刀子は、少々恥ずかしげに「な、なんだ？」と身構えた。

その様子に、理香が何を思ったのか。

「冴島さんって、携帯電話使ったこと無いんですか？」

「いや、まあ。その……はい」

「うっ……か、かわっ!!」

「うん？」

「可愛いッ!!」

「おわッ!？」

突然、恥ずかしそうに縮こまっていた刀子を押し倒す様に、見事なまでの某怪盗ばりのダイブを決め、彼女に飛び掛った。

しかし刀子には、剣術で鍛え上げた眼の良さや反射神経、そして体捌きがある……いくらキングサイズのベットに腰掛けてるとはいえ、何の抵抗も無く倒される女人ではな———

ドサッ！

否。

刀子は、あまりの理香の飛び掛りの勢いと力強さになす術無く、円状のベツトに前倒しで押し倒されてしまった。

覆いかぶさる様に、いつの間にか両手首を押さえられ、両脇腹の横に理香の両膝を置かれてしまった刀子。目の前には、その活発ながらも知的に整った顔立ちと、大きな吊り眼がちの猫目と八重歯が魅力的な理香の顔が、紅潮した状態で見下ろされている。

あまりにも相手との距離が近いため、理香が普段使っている香水の程よく甘い匂いが、刀子と鼻孔を擦る……また、四つん這いでこちらを押さえ込んでいるために、理香の特徴的なツインテールが、ベツトにしな垂れかかっている。

だが、このような状況になっても、刀子の表情には狼狽は見られない。

むしろ油断無く、こちらを前倒し状態で押さえ込んでいる理香を睨み付けているぐらいだ。

「今の動き……明らかに素人のもでは無いな」

「えへ☆ 私って実は、やってる武術の名前は言えませんが、足技とか得意なんですよ♪」

警戒心を募らせる刀子を流しつつも、理香はその形の良い胸の先端と、刀子の胸の先端を合わせるように体勢を屈ませ始めた……。

既に、顔と顔が、もう少しで接触してしまいそうな距離まで、二人は密着していた。

これだけ近いと、互いの髪の毛の匂いや吐息、肌の張りや瑞々しさまで、全てが手に取るように感じられる。

刀子が背中を預けるベツトが、理香が体重をかける度に軋む音を鳴らす……それは、シーツの衣擦れも同じように音を発していた。

「でもホント、噂通り綺麗な顔……肌も白いし、睫毛も長いし、何

よりその眼が魅力的なんですよね、冴島さんって」

「褒めてくれるのは素直に嬉しいのだが、これ以上、可笑しな真似をするというのなら、情報を提供してくれたとはいえ、それなりの対処をするが？」

押さえられるがまま、なすがままにされている刀子であったが、その表情に不敵な笑みを浮かべる。

だが、理香の行動は更にエスカレートし、遂にはその互いに長く優美な曲線を描いている脚を、絡みつかせるようにし始めた。

組み伏せられている刀子の股下に、理香の左足が無理やり捻り込まれる……なるほど、確かに足の力は得意というだけは有ると、刀子はそれでも尚、冷静に相手を分析していた。

手には木刀は無い、あるのは、いまだ傍観を決め込んでいる、あの薄情な男から買ってもらった、スマートフォンとやらが入っている紙袋だけだ。

「良い匂い……これって香水じゃないですよね？ それに、こんなに引き締まってるに、触ると柔らかいなんて」

「……」

耳元で囁かれる、理香の吐息に似た言葉に、刀子は無言で聞き流す。

次第に、理香が刀子の右手だけを解放して、自由になった右手で、彼女の体を弄り始めた。

が、しかし……。

「そろそろ、その辺にしとけよ？ さっきからブルマ履いたケツが丸見えだぞ？」

二人の間を割って裂くように、竜蔵が化粧台の椅子に腰掛けながらも、呆れた声音を理香の背中に発した。

「なッ！？ アンタ、どさくさに紛れて、どこ見てんのよ!!」

飛び跳ねる様に、理香が覆いかぶさっている刀子から絡めていた足を解き、上半身だけ起き上がり、捲れていたスカートを両手で押さえた。

すると……。

「へ？」

これまで自身を前倒しで押さえ込んでいた理香が膝立ちになったのを見計らって、刀子が電光石火とも称せる動きで、油断していた相手が何をされたか分からない程の投げを仕掛けて見せた。

いつの間にか取られていた右手首を起点にして、理香の視点が刀子を中心にしながら一回転し、ベットへとその背中を叩き付けられた。

幸い、柔らかくスプリングの利いた場所に投げられたため、理香はノーダメージで済んだが、一瞬何が起こったのか？———といった、啞然とした表情を、今度は逆の立場で、こちらを見下ろしてきている刀子に晒してしまった。

「図に乗るのも良いが、咄嗟の反応が弱い様だね」

「あ、あははは……」

形勢逆転された理香は、乾いた笑みを、明らかに凍て付くような微笑を浮かべながら怒っている刀子に向ける。しかし、その程度で許してくれるものでも無い。

「私も勉強になったよ。どんな時でも、相手を侮らない事……そういえば、ここに入ってくる際、扉が吹き飛んできたのは、君の足技だった様だね？ 初めは流石に何かの仕掛けかと考えていたけど、さっきの動きで合点がいった」

投げた体勢のまま、理香の右手首をいつでも極めれるよう、両手で取っている刀には、既にさっきまでの油断は一切見られない。

これはヤバイかも……と、理香が腹を決めようとした、その時。

「どうでも良いが、そんな一緒にふざけたいんなら、藤城、お前がソイツに携帯の使い方、教えてくれよ。お前、確か教え方上手かったろ？」

再び竜蔵が、二人の醸し出す蛇に睨まれた蛙の空気をぶち壊す様に、間に割って入ってきた。

まさか、あの白状で朴念仁で無愛想だった男からの救いの手が！？

思わぬところで、腐れ縁の男の成長を感じた理香であったが、こは機を見て敏なりを実践する状況、戸惑ってなどいられない。

「そ、そうね！ 携帯の使い方ぐらい私の手に掛ければ、どんな機械音痴でも30分で全機能を網羅するぐらいに教え込んで見せるわ！！」

刀子をベットから仰ぎ見る体勢であったが、理香は竜蔵の頼みに虚勢では無い自信を滲ませながら、全力で答えた。

「そうか。なら、あとはよろしく頼む……少し、美夏の方が気になるから」

言いながら、竜蔵は刀子と理香の二人を置いて、この本来なら寝るだけでは済まされないホテルの一室から退室しようと、化粧台の椅子からゆっくりと立ち上がった。

「つて！ ちょっと！？ まさか、このまま放置していく気なの！？」

折角の助けが、あまりの自分勝手気質が故に、マイペースに離れて行こうとするのを、理香が思わず呼び止める。だが、彼は無情にも刀子に手首を極められる寸前の彼女を置いて、部屋からスタスタと出て行こうと……いや、そのまま行ってしまうかと思われたが、ただ応急処置程度で立て掛けられている扉を前にして、二人に振り返った。

その様子に、理香は一瞬、あの男も捨てたものではないという希望的観測を、頭に過ぎらせたのだが。

「ああ、それと……ソイツ、かなりの機械音痴だから、一から教えてやってくれよ？ お前は、多分かなり迷惑を掛けるだろうから、言われた事を“落ち着いて”こなせよ？」

落ち着いてという部分に、妙に強調されたアクセントが含まれていたが、竜蔵はそれだけを言って、再び前を向き直り、立て掛けられていた扉をどかして部屋から出て行ってしまった。

おそらく、そのままエレベーターへと乗って、妹がいるであろう二橋学園まで行ってしまおう事であろう。

理香は、その事実……。

「ふ、ふふふ……」

「？」

「そうくるか……そうね、アイツは昔からマイペースだったものね」
「どうしたのだ？　というより、教えてもらう身としてではあるが、私も早く学園に戻らなくてはならないのだ。だから、早くご教授願いたいのだが……」

さっきまでは襲われた身であったが、ここからは教えを請う身であるため、刀子は極める寸前であった理香の華奢な右手首を離し、己自身も少しだけ相手と間を取り、キングサイズのベットに正座をした。

だが、当の理香の様子がおかしい……。

どうおかしいのか聞かれれば、何やら吹っ切れた印象が……。

「だったらコッチも好き勝手に“やらせてもらう”わよ！？　私の領域に女の子一人残していった事が、どういう意味を持つのか、アイツに再認識させてやる……！」

いや、何やら意味の分からない方向へと吹っ切れていた……。

多分、いくら腐れ縁とはいえ、アポ無で久しぶりに会った友人が関節技を極められそうにも関わらず、薄情・自分勝手に面倒事を置いていき、そのまま我関せずとばかりにトンスラをぶっこいた事に、怒りのメーターが振り切ったのであろう。

突然、訳の分からない怒りを露にしながら、ウガーッと起き上がった理香に、刀子はどうして良いか分からず、咄嗟に警戒心を高め、身構えてしまう。

しかし、刀子は知らなかった……。

この藤城理香という少女が怒り狂った時、なかなか竜蔵でも宥めるのに梃子搦る事に――――

そして、彼女が実は……。

百合レスっ気のある女性だという事に――――

執行部のお仕事（9） 藤城理香（後書き）

中途半端なのは、文字数的に切らなきゃ拙いと感じたからです。

執行部のお仕事（10） 見えてきた糸口（前書き）

明けましておめでとうございます、今年もよろしくお願いします。

・注意

今回ののは、結構合間合間に書いた話なので、所々に変な個所があるかもしれませんが、ですので、そこを見つけて頂いた場合、なにかしらアドバイスなどを頂けると嬉しいです。

また、文字数が3万を超えているにも関わらず、そこまで話も進んでいないので、ちょっと流し気味に読んだ方が良いかもしれません。

では、どうぞ。

執行部のお仕事（10） 見えてきた糸口

既に日中を示していた太陽の光も、夕暮れの茜色に染まりつつある時間。

今日は午前中のみだった故に、そろそろ学園内でも部活動などを終えた生徒達が、全員捌けて行く時間帯である。

そんな中、木佐貫が運転する中型バイクで美夏が学園の車庫へと到着を済ませていた。

学園の車庫は、カードをガレージの横にあるカードリーダーに翳すと、自動的に読み込んでシャッターを上にかける仕組みで、中には、いましがた木佐貫と美夏が二人乗りの形で跨っていた、陽光を煌びやかに反射させるワインレッドに塗装された、カワサキZZR250というダイヤモンドフレームと、空気抵抗を滑らかにするバイザーがスタイリッシュな印象を持たせるバイクが駐車されている。他にも車庫の中には、教員たちが普段乗っているセダンタイプの車や、丸みを帯びたボディが可愛いビートルなど、多種多様な自動車が駐車されていて、それらを天井に設置されている無数の蛍光灯が照らしている。

「では、行きましようか？」

しかし、そんな光景などには一切の興味を示さない千代女は、本校舎と車庫の出入り口である扉まで歩いていくと、後ろを振り返りながら、被っていたフルフェイスのヘルメットを慣れた手際で外した。

すると露わになる、丸眼鏡に三つ編みお下げという、何とも地味な、彼女のいつも通りのスタイル。

フルフェイスのヘルメットを、眼鏡有で被るという、中々に苦勞しそうなスタイルだが、どうやら慣れている彼女には関係が無いようであった。

そんな彼女とは対照的に、振り向き際に言葉を投げかけられた美夏は……。

「はい」

短い返事と共に、千代女と同じヘルメットを脱ぎ捨てる。

同時に露わとなる、手入れの行き届いた、きめ細かな黒髪に、清純で可愛らしく整えられた顔立ち。

その白く透き通るような肌には、慣れていないフルフェイスだったせいか、玉の汗が一筋の道を、滑らかに作り出していて、またそれが、彼女の瑞々しく可憐な魅力を更に引き立てていた。

この場にもし、彼女ら二人以外の人物がいたのなら、間違いなく美夏にだけ視線を釘づけにされていた事であろう。

美夏はヘルメットを被っていた事で、少し潰れてしまった頭の髪を整えながら、脱いだばかりのそれを、先程まで跨っていたバイクのシートに置いた。

「ヘルメットは、そのまま構いません。もともと、これは学園の物ですから」

「分かりました」

言いながら、千代女も扉の横に設置されていた木製の棚に、自分が持っていたヘルメットを置き、その上に、両手に嵌めていたグローブを重ねて乗せる。

そして、そのまま彼女は出入り口の扉のドアノブを回した。

しかし、同時に美夏が、ドアノブを回した千代女の背中に、ここへと連れてこられる時から疑問に感じていた事を尋ねる。

「あの、学園に戻ってくる前に、木佐貫先輩が、『私の事を待っている方がいる』と仰っていましたか……？」

「はい、今から、その方が待っている場所まで御案内しますので、着いて来てもらって、よろしいでしょうか？」

相手に確認を取るのには良いが、千代女は美夏の返事を聞く前に、ドアノブを回し切り、厚い鉄扉をゆっくりと開いてしまう。

どうやら、自身に着いて行かないという拒否権は存在していない

ようだと、美夏は千代女の後姿を見て理解した。



三回のノックが、学園の規模の割には質素な内装の生徒会室に響き渡る……。

「失礼します、会長。桐嶋美夏さんをお連れしました」

それに続くように、ノックが聞こえてきた扉の向こう側から、だいぶ馴染み深い幼馴染の、抑揚の無い、とても事務的な声が聞こえてきた。

三台の長机を“コの字型”に並べた生徒会室の窓際……つまり、“コ”の上座に、丁寧ふたつばしひめきに扱われているホワイトボードに背を向けて座っていた、二橋姫樹は、その事務的な幼馴染の声音に、もう少し柔らかな印象を持たせられないものかと考えながら「どうぞ、入って♪」と、いつも通りの朗らかな笑顔を浮かべて答えた。

「失礼します」

姫樹の許しに、千代女はスライド式の鉄扉を両手で丁寧に開け、一礼した後、極めて人間味を感じさせない機械的な規律を体现した動きで、生徒会室へと足を踏み入れた。

そして、これに続くようにして、美夏も優雅な一礼と共に「失礼します」と、透き通るような声音を發して、スラリと伸びた美脚でスカートを揺らしながら、初めての生徒会室へと足を踏み入れた。

千代女は、既にホワイトボードの前で座っている姫樹と、机を挟んだ所で直立している。

美夏は、それを見て、千代女から一步後ろに引いた位置で立ち止まり、姫樹に視線を向けたのだが。

「そんなに遠慮しないで、美夏さん。もうちょっと前に来て頂戴♪」

この部屋の主である彼女が、その様な堅苦しい空気を新入生に感じさせる事を良しとする筈がなく、嬉しそうな表情で、美夏を千代女の隣に立つよう、手招きをしていた。

本来なら、姫樹の朗らかで、どんなに緊張している人でも和んでしまいそうな微笑みを向けられたのなら、誰でも彼女の事を無意識の内に信賴してしまうものなのだが。

（この人……全く本心が読めない）

普段から、言い寄ってくる打算有の人間たちを内心で見抜き、毛嫌いしている美夏は、姫樹の表情とは裏腹の異様な中身を図りかねていた。

ただ、生徒会長である彼女が、何かしらを企んでいることは、ここに自身を連れて来た事、何故か先程の危機に瀕したとき、千代女がタイミングよく助けに来てくれた事から見抜けてはいた。

しかし、いつまでも、その様な人間観察などをしている訳にもいかず、美夏は姫樹の手招きに素直に従い、直立で眼鏡越しの瞳を生徒会長に向けている千代女の隣へと一歩進ませた。

その様子を満足そうな微笑みを向けながら、姫樹は早速と、美夏をここに連れて来させた——正確には千代女の独断で彼女を連れてきたのだが——理由について、口を開いた。

「本来なら、美夏さんにはオリエンテーションが終わった後、学園生活に慣れてもらってから会おうと考えていたのだけれど、状況が変わってしまって……突然で混乱しているとは思っただけ、私の話、聞いてくれるかしら？」

「はい。ですが、その前に危ないところを助けて頂いて、ありがとうございました。木佐貫先輩も、改めて本当に助かりました」

確かに生徒会長である姫樹の話聞くのも大事だが、まずは当たり前の礼儀として、美夏は東野台の繁華街で追われていた所を助けてもらった事について、二人に心からのお礼を述べる。

二人は、これに「いいえ」「私はただ、カメラの映像を見ていただけだから」などと、別段気にしてない様子で、美夏の礼を受け取っていた。

その反応を一瞥した美夏は「すみません、話を中断させてしまつて」と姫樹に、話を再開する事を暗に促す。

傍目から見れば、ただ普通のやり取りに感じられるが、美夏はこの時、言葉に駆け引きという挑発の意を込めていた……。

読めないのなら、読めるところまで引き摺り出せばいい。

強引な手法だが、姫樹の様な、もしかしたら一枚も二枚も上手かもしれない相手と対峙する場合、これぐらいの事が出来なければ、互角には持ち込めない。

更に言えば、この何の変哲もない言葉に寄せられた意に気づけない相手ならば、美夏の思い過ごしという事にもなる……故に、どちらにしたって、言葉に意を乗せることは、美夏にとってリターンにはなれど、ハイリスクには成りえない。

そして、どうやら美夏が警戒している姫樹も、彼女が乗せてきた意に気が付いたようで。

「いいのよ。当たり前のお礼を言えないという事は、その人が混乱している時か、それか日本の常識すら知らない基地外かですもの。それだけ、今の美夏さんは、落ち着いた思考を取り戻しつつあるという事なのでしょう……」

しかし、気づいたところで、姫樹は挑発に対して安易な買いは行わなかった。

かわりに少々棘のある、身を弁えろとでも言うかのような、彼女の柔和な雰囲気にしては厳しめの言葉を吐き、その場を流す。

姫樹は、目の前に設置されている長机の上に、両肘を置き、両手を組んで、これまで背もたれ預けていた身体を前に起こしながら美夏を閉ざされた瞳で見据えた。

「話を戻すのだけれど……美夏さん。今日ここに来てもらったのは、ただ安全面の確保というだけでは無いの。私から……いえ、学園の生徒会長である私から、折り入ってお願いしたい事があるのよ」

「お願い、ですか？」

美夏の聞き返しに、姫樹は普段浮かべている朗らかな微笑みを彼女に向ける。

「ええ。正直、さっきはオリエンテーションの後に、とか言ってし

まっただけだ……私は貴女を入学式で見たときから、本当はお願いしようかなって考えていたのよ♪」

「はあ」

いわゆる一目惚れってやつね——などと、全く持って言葉とは裏腹に乙女らしくない、既に昔の事のように微笑みを浮かべながら一言付け加えた姫樹に、美夏は思わず呆けた返事を返してしまう。

ふざけているのか？ それとも、こちらを試しているのか？

先程から、捉え所の無い姫樹の様子に、美夏はさらなる警戒心を抱き始めてしまう。

しかし、ここで美夏は気づくべきであった。

この真面目に話しているのか、それともこちらをからかっているのかという疑問を浮かべること自体、自身のペースを崩されている事に……そして、無用な警戒心を抱いている時点で、姫樹に吞まれている事に。だが、気づかなかったとしても、この場で別に、美夏に対して姫樹と千代女が何かをすると言う訳でもない。ただ、姫樹は目の前に立つ美夏を真っ直ぐに見据えて、不思議と体の中にまで浸透してくる、女子高生にしては大人びた声音で告げる。

「だからね、美夏さん？ 貴女には、生徒会の一員になってもらいたいのよ♪」

美夏のハッキリとしている、可愛らしい二重瞼のアーモンド形の目が、驚いたように見開かれる。

その期待通りの反応に、姫樹は普段通りの微笑みの裏で、期限を良くしながらも話を続けた。

「この学園の生徒会は、生徒たちの自主性を促す校風のお蔭で、普通の学び舎の生徒会組織なんて話にならないくらいの発言権や決定権が、学園の理事長および校長から与えられているの。これは、お兄さんから聞かされていると思うのだけれど……教えてもらえたのかしら？」

「は、はい……一応は」

突然の生徒会勧誘に、面を食らった美夏であったが、何とか姫樹

の問いかけに頷くことができた。

しかし、返事をしたところで、正確には嘘であり、実際には自身で事前に調べていたというのが正解だ……が、実は美夏の一手一投足から、姫樹には既に内心で見透かされていよう。

姫樹は、微笑みを浮かべた表情は一切崩さず、本来なら事前に先輩である筈の兄が、家で学園の内情を妹に教えていなかったという不手際について、この後、彼が帰ってきたら何かしらのペナルティを与えることにした。

いくらなんでも、そんな程度の事でペナルティの対象になるのか？ 傍目から見れば、そう考えてしまいそうになるが、これも強い権力を持たされる生徒会メンバーに課せられた、一種の課題であり義務であり当然の事なのだ。

そして会長として、執行部という特殊な役職ではあるが、組織内の後輩指導も仕事の内だ。

本当に、あの子は手の掛かる……美夏の嘘から、この後に控える事になった後輩指導に、姫樹は胸中で“舌なめずり”しながらではあるが、生徒会への勧誘を続けた。

「だったら、話は早いわね♪ 私は、今日いまここで貴女から了承が得られれば、明日にも教職員の方々や学園長に会長推薦枠として、貴女の生徒会への参加を、手続を踏まえて報告するつもりです」

両の掌を、パンツと短く合わせながら、美夏に“当然、参加するわよね？”という意趣を込めた、首を傾げる仕草を取る姫樹。

トントンの拍子で進んでいく話に、美夏は難なく思考を追いつける事はできたが、そう簡単に答えを出せないでいた……。

なぜなら美夏は、これからの学園ライフを兄に付きっきりでエンジョイしようと、中学で全国大会出場を果たすまで続けていた新体操を捨てる考えでいたのだ。

これに、もし生徒会などという教職員達の雑用係に参加してしまうような事があれば、これまで練ってきた——兄限定で——バラ色の学園生活を送る計画が早速頓挫してしまう。

しかし、目の前で嬉しそうに両の掌を合わせる生徒会長の誘いを断ってしまうと、どこかでその皺寄せが来ないとも限らない……最悪、その余波は自身のみならず、最愛の兄に及んでしまう可能性があるかもしれない。

そうなってしまうと、もしかしたら本末転倒という結果を導き出してしまうのではないか？

美夏が姫樹の話を吟味している時間など、ほんの数瞬の出来事であつたが、やはり彼女は、それだけでも相手が考え込んでいると見抜いたようだ。

「おそらく美夏さんは、お家の事で決めかねていると思うのだけど……違うかしら？」

実際には兄限定での事であるが、知ってか知らずか、姫樹は家の事情で美夏が生徒会入りを迷っているのではないかと指摘をする。

それに、美夏は一瞬ドキリと、一応は秘めていた兄への愛がバレてしまったのではないかと焦るも……。

「はい……その、やっぱり考える時間が欲しいので、返事の方は、また今度にしたいと思うのですが」

「……それもそうよね」

答えの先延ばしという、その場しのぎの上手手段を練り出したのであつた。

これには、いくら現在は生徒会室で二対一という有利な状況に立っていた姫樹と言えども、今後の事を考えれば無理強いは良くないという理由で、勧誘を残念そうに踏み止まらざる負えなかった。

すると暫く、この正方形の生徒会室に、美夏にとっては気まずい沈黙が流れ始める。

ほかの二人は、各々、変わらぬ微笑みを浮かべていたり、ひたすらに無表情で直立不動を決め込んでいたりをしていた。

しかし、そこで意外にも、沈黙に耐えかねた美夏ではなく、これまでモニメントの様に口を閉ざし続けていた千代女が、事務的な口調を一切崩さずに声を発し始めた。

「会長、勧誘の方は、もうよろしいので？」

「ええ、聞いている通り、時間が欲しいそうよ」

「では、私から話をして？」

「どうぞ♪」

「ありがとうございます」

なぜ一々、同級生である筈の姫樹に敬語で、しかも話を始めるのに許可を取るのか？

確かに、役職的には生徒会長と、副生徒会長という事で、姫樹の方が上に位置する地位についているのだが、それにしても学園内のみの役職である生徒会の立場に、ここまで畏まる必要があるのか？
美夏は二人のやり取りを、隣で眺めつつも、そんな事を思い浮かべていた。

姫樹から話をしていいという許可を得た千代女は、視線の高さはそのまま、隣に立っている美夏へと、一切のブレという無駄をなくした動きで振り向いた。

その動きは、どこか洗練されたものではあるが、印象的に言えば、先程から取っていた機械的なものに思えた。

初めて千代女の、こういった部分を見た者は、大抵“彼女は本当に機械なのでは？”と勘違いするものだが、彼女は列記とした親のいる人間だ……竜蔵に取っていた態度が、少々特殊なケースであったに過ぎないのだ。

「という訳ですので、私から少々、お話することがあります」

「はい……」

特徴的な丸眼鏡を直しつつ、美夏に視線を向ける千代女。

美夏は、この目の前にいる女性の雰囲気、いまだ慣れぬも、とりあえず返事を返した。

「お話の内容は、現在、貴女が置かれている状況についてです。ですが、お話をするに当たって、いくつか開示できない情報もありますので、その辺は説明をはぐらかしていきます」

「はぁ……？」

だったら、開示できない情報があるなんて言わないで、普通に話を進めていけばいいのに……などと、美夏は千代女の不思議な言い回しに、これまた会長と同じで掴みどころの無い人物だと認識をした。

「では、まずは先程、貴女が襲われる原因となった事から説明しましょうか……」

そう言って、千代女は今回の事件を“執行部”というワードを巧みに伏せながら、被害者の一人である美夏に、分かりやすく説明をしていた。



すっかり辺りも日が落ち始め、街灯がその存在を誇示しようとしている時間。

学園へと戻るために、東野台のホテル街から先程までバスに乗っていた竜蔵は、少々余裕の無い表情で、学園の敷地を早歩きで進んでいた。

いつもなら、彼の表情や歩く風貌は、どこか余裕のあるというより、自信に満ちた雰囲気醸し出しているのだが、今は何やら鳴りを潜め、夜桜が散る学園内を進む歩調に落ち着きが見られない。

一言で表せば、焦っているという表現が妥当か。

こういった時、よく人というのは慣れ親しんだ道を進んでいたとしても、いつもよりどこか長い距離に感じるものだ。

そして今現在、竜蔵が歩んでいる二橋学園の敷地は、正門と本校舎までの距離が他校よりも離れていて、もともと短気である彼にとっては、苛付いた気持ちに更に膨れ上がるといった悪循環に陥っていた。

歩けども歩けども、野球部専用のグラウンドを過ぎたり、部室棟を素通りしたり、文化系の部活が活動している建物を見向きもせずに通り返したり……それでもまだ、一向に本校舎へと辿り着く気配

が見られない。

いや、別に彼が迷っている訳ではないのだ……ただ、いつもは何も考えずに歩いているために、いつの間にか着いていたというのが普通なので、苛立ち、常時気が立っている現在では、体感している時間の長さが違うというだけなのだ。

するとようやく、彼が目指していた本校舎の外観が目の前に現れた。

改めて目的地である場所を確認すると、焦っていた気持ちが更に自らの身体を緊張させ、突き動かしていくのを竜蔵は無意識下で感じていた。

なぜ、竜蔵はここまで落ち着きがないのか？

それは、いくら無事だったという情報が入って来てはいても、自身の妹が繁華街で男に追い掛け回されていたと聞かされれば、どんな人間でも少しばかりは心配する気持ちというのが出てくるものだからだ。

実際、竜蔵も藤城理香がいたホテルの一室では、一応は冷静さを取り繕ってはいたが、内心ではすぐにでも妹の安否を、確りとこの目で確かめたいと思っていたのだ。

しかし、竜蔵という男は、なかなか素直に、そういった事を表に出すことはない……。

故に、今の誰も周りにいないという状況は、彼の気を緩めさせ、内心の焦りを外にさらけ出す効果を生んでいた様だ。

そんな焦りを孕んだ歩調で、学園本校舎の玄関へと入っていくと……。

「うん？ 桐嶋君じゃないか……」

「？」

学年とクラスごとに備え付けられた、かなりの数の下駄箱ロッカーの、とある個所から、ハスキーな声音ではあるがハッキリと女性と分かる、そんな声が竜蔵に掛けられた。

声のした方向に、竜蔵が何だと振り向くと。

「五十嵐先輩」

「春休み以来か、元気にしてたか？」

そこには、既に部活も終わり、学園指定の制服に身を包んだ長身の女性、五十嵐^{いがらし}真樹^{まさき}が、上履きから外履きのローファーへと履き替えた状態で立っていた。

彼女は、その浅黒く焼けた肌と、スカートの下から伸びる、筋肉質ながらも美しい脚線を描いた足で、竜蔵のところまでエナメルバツクを纏掛けにしながら歩み寄ってきた。

「そうですね、久しぶりです」

「また大きくなったんじゃないか？ 厚みというか、太みというか……」

真樹は、自身よりも背が10センチ近く低い竜蔵を見下ろす形で、彼と視線を合わせながら、いきなりそんな事を尋ね始めた。

ベリーショート的茶髪に、細く整った顔立ちと、少し垂れ気味のアーモンド形の瞳……細い眉毛は優美な曲線を描き、健康的に浅黒く日焼けした肌と合わせるように、唇もどこか薄い桜色をしている。スタイルは175センチを超える長身ながら、なかなかに出るところは出ていて、引っ込むところは服を脱げば筋が浮き彫りになっているぐらいに引き締まった、アスリート体型をしている。

そんな彼女と竜蔵が話すとき、大抵がこういったスポーツ関連の話題になる事が多いのだ。

また、話題振りは常に真樹の方からだ。

「今、やっと増量期間が終わったんで。まあ、またすぐに戻りますけどね」

「そうなのか」

「五十嵐先輩は、なんか調子良さそうですね」

「分かるか？」

「そりゃ、色々見えますから」

竜蔵にしてみれば、お返しに言った程度の事なのだが——調子がよさそうに見えるのは事実——真樹の顔が、少しだけ紅潮

するのが確認できた。

しかし、見上げる竜蔵からでは、照明やら何やらが陰になって、真樹の凛々しく整った顔立ちが赤くなっているのを確認できなかった。

そ、そうか……と、照れ隠しに視線を竜蔵から逸らしながら、他愛のない言葉を返す真樹。

「前回の試合も動きが切れてた感じでしたからね、次の試合も期待してますよ」

「あ、ああ、任せておけ。今年は俺も最後の年だし、新しい娘たちも入ってきたし、必ずインハイ優勝してみせるさ」

力強く、男勝りな口調に、これまで焦り気味であった竜蔵も思わず頬を緩める。

この先輩は、いつも強気で芯の通った人だと、竜蔵は一年の頃から真樹に対して好感を持っている。

好意ではなく、好感だ……つまり、同じアスリートとして尊敬している内の一人という認識だ。

実際、五十嵐真樹という高校三年の女生徒は、部内でもクラス内でも学園内でも、思いつきの良い姉御肌の女性として知られている。

そんな人柄だからか？

彼女には性別や性格問わず、様々な生徒たちが信頼を寄せている。だからこそ、女子バスケット部でキャプテンを務め、部活連という各部活動を一つの集団として纏めている組織でも、女子部活動の代表生徒として選ばれているのだ。

真樹の自信に満ちた決意表明を聞いた竜蔵は、そろそろ本題である生徒会室へと向かおうかと思ったのだが……。

「おー！ 竜蔵じゃないか!!」

そこに、また一人、女子バスケット部のエナメルバックを襷掛けにしている女生徒が、竜蔵の下へと突貫してきた。

ダカダカダカッと、騒がしく上履きのまま駆け込んでくる小さな

物体に対して、竜蔵は身体の正面を、やれやれといった態度で向け始めた。

そして——「元気にしてたか——！！ このすつとこどっこい——！！」

「お前もな——」

などと、太陽のような笑顔を露わにしながら叫んで、こちらに突っ込んでくる小さな物体もとい、小動物もとい御来屋鳴子みくりやなほこを、竜蔵は彼女が掛けている眼鏡が、自身の鋼鉄の腹筋に衝突しないように、寸での所で相手の両肩を軽く抱き止める事で防いだのだった。

しかし、突貫の勢いと竜蔵の止めによって生まれた、急停止のインパクトによって、もともとサイズが少しだけ合ってなかった鳴子の眼鏡だけが、竜蔵の腹筋に飛び出し、虚しく軽い衝突音を鳴らしながらぶつかってしまった。

竜蔵の腹筋にぶつかった事で、跳ね返るフレームの無い、ちよつとお洒落で軽い眼鏡。

これをこのまま地面に落下させてしまった場合、おそらくはレンズが無事では済まないだろう。

だが、それは近くにいた真樹が、超反応とも呼べる動きでしゃがみこみ、竜蔵の足もとに落ちかけていた眼鏡をすくうようにキャッチした事で難を逃れた。

「ははッ——！！ やっぱお前の手、意味分らないぐらいに硬いな——！！」

ほぼミサイルの様な体勢で突っ込んでいた鳴子は、地面に足を着けると、まず初めに両肩に置かれた竜蔵の手の感触の感想を、やけに嬉しそうな様子で述べる。

竜蔵は、そんな鳴子を仕方ないといった微笑みを浮かべながら見下ろし。

「意味分らないぐらいに硬いって何だよ？ それより、眼鏡飛んだぞ？」

言いながら、竜蔵は鳴子のミサイルタックルで乱れた、癖毛の目

立つセミロングの金髪を、いつも通りの軽い七三へと整えてやった。すると鳴子は、その確りと見開かれた吊り目と、活発で愛らしい顔立ちを、これまでよりも満開な笑顔に満たす。

「ほら、御来屋」

「ありがとうございます！ 五十嵐先輩!!」

横から鳴子の眼鏡を救出した真樹が、その女性にしては大きな手で、彼女の眉間に眼鏡を掛け直す。

眼鏡が戻ってきた鳴子は、そのまま目の前で佇む筋肉の壁を見上げる。

「竜蔵！ こんなところで何してたんだ？」

テンポの速すぎる会話の展開に、竜蔵は苦笑しつつも、先程は鳴子の髪を整えていた両手をポケットに入れながら答えた。

「ちよつと生徒会室まで行こうとしたら、五十嵐先輩に会ってな。そしたら、お前が突っ込んできた」

「はははッ！ そうか!!」

「ああ、そうだ」

ニカッと、白く綺麗な歯並びを見せながら、無邪気な笑みを向けてくる鳴子に、竜蔵はまた微笑みを浮かべてしまう。

この御来屋鳴子という、少し強く抱きしめてしまえば、すぐに壊れてしまいそうな華奢で小さな少女は、竜蔵と同じ学年で、どうしてか彼に異常に懐いている。

理由は彼女曰く『なんだか一緒にいると、無性に飛び込みたくなる』という訳もわからないものののだが……竜蔵自身、別に悪いものでもないと思っているし、それに一番下の妹と、どこことなく彼女が似ているために、何だか不思議と拒めないのだ。

また、これは本人は気づいていないが、鳴子と接している時の竜蔵は、いつもと違った朗らかな表情を良く見せる。これもまた、一番下の妹にどこことなく似ているのが原因かもしれない。

そしてそれは、高校一年前半時の竜蔵を知っている者達からすれば、とても信じられない現象だったらしく。当時は、この現象を見

た者達からは“桐嶋ロリコン説”まで浮上した程であつた——この“説”は、実は今でも囁かれているが……。

「お前は部活終わりか？」

竜蔵の素朴な問いに、鳴子は必要以上の声量と笑顔で。

「そうだぞ！ だから、これから五十嵐先輩と寮に帰るんだ！！」

「へへ、そいつはお疲れさん」

「えへへ。今日な！ 鳴子な！ 新しく入ってきた一年全員抜いてやったんだぞ！！」

「ほへ、凄いじゃん。ああ、そういえば美夏の友達が女バスに入ってるって言ってたな」

「たぶん、そいつも鳴子が抜いてやったぞ！ ちよろいもんだつた！」

勇ましく言う割には、いささか迫力の無い出で立ちの鳴子だが、こう見えても彼女は女子バスケット部二年の内でも、かなりの技術と“特技”を誇っている。

故に、その事を知っていた竜蔵は、これを当然の様に受け止めていた。

高校と中学では、チームプレーでもそうだが、何よりもプレイヤー一人一人の技量や強さが違う……これは、どうやら才能を寄り集めた第一区の二橋学園でも同じ事だったようだ。

「桐嶋君の妹というと、美夏っていう娘だったな」

「はい。それで、確か友達の名前は……木下だったけ？」

「ああ、藍か」

「ああ！ そうです！ きのしたあい 木下藍です」

まだ一度しか会っていない相手だったため、竜蔵は名前を練り出すのに時間がかかったが、真樹の助けでようやくフルネームを思い出せた。

木下藍という名前を聞いた瞬間、なぜかこれまで満面の笑みを絶やさなかった鳴子の表情が、少しだけ陰りを見せた。

これに気づいた竜蔵が「どうした？ 急に元気を無くして」と、

鳴子に尋ねると、本人ではなく真樹が、ニヤニヤと意地悪な笑みを浮かべながら答えた。

「ふふ、御来屋は確か、一回だけ完璧に止められたんだったな」

「あ、あれは！　ただパスを回そうと思っただけ！　鳴子が抜かなかっただけ！！」

「どうやら相当に悔しかったのか、鳴子は先輩である真樹に敬語すら忘れて抗議をする。」

「そうか？　そのあと普通にパスカットもされてたじゃん」

「む、むーッ！！」

むきー！　と、遂に沸点の低い怒りを露わにした鳴子が、真樹に襲い掛かる。しかし、それは真樹が片手を突っ張り棒がわりにして、鳴子の頭を押さえただけで阻止されてしまった。鳴子は、届かぬ手を必死に振り回して、真樹にどうにか一撃を入れられぬものと、ジタバタと暴れまわる。

「はっはっは！　どうした御来屋、届いてないぞ？」

「むー！！」

その光景を目の前で見ていた竜蔵が、そろそろ本気で生徒会室に向かわないと拙いと、ようやく気付き。

「ああと、俺そろそろ行かないと拙いんで、この辺で行かせてもらいます」

「ああ、それじゃあな、桐嶋君」

「はい、さようなら。鳴子も、また明日な？」

「むー！！　むうーッ！！」

頭を押さえている真樹に怒りを噴火させつつ、さよならの挨拶という竜蔵にも軽く手を振る鳴子。

二人の様子を見送りながら、竜蔵は学園本校舎の玄関を後にするため、下駄箱から上履きを取り出し、ローファーから履き替えると、そのままの足で生徒会室へと駆け足で向かう……。

そこで竜蔵は、ふと自身の心の中に、焦燥感というものが消えていた事に気が付く。

おそらくは、あの対照的ながらも、意外と相性の良い二人の空気に、少しずつ気持ちや和らいでいったのであろう。
やはり、人と接するというのは、なんらかの影響を必ず受けるものなのだと、竜蔵はこの時、しみじみと感じていた。



竜蔵が去り、こだまするのは目の前でジタバタと、自身に片手で頭を押さえられている鳴子の怒声だけとなった、この空間で、五十嵐真樹は、思いつきりの良い彼女らしくもない、後悔の念の詰まった盛大な溜息を吐いた。

これには流石に、後輩に一度だけ苦汁を舐めさせられた事をネタにされ、怒っていた鳴子も首を傾げる。

「うん？ どうしたんですか、五十嵐先輩？」

鳴子は、高校入学当時は酷かった言葉遣いを、なんとか矯正して会得した、微妙にイントネーションが軽々しく聞こえる敬語で、真樹に問いかける。

すると真樹は、鳴子を押さえていた片手を放すと、そのまま髪を掻き揚げ、なにやらムシヤクシヤした様に頭を掻いた。

「いや、なんでもないよ……」

鳴子の問いに、ぶっきらぼうに答えた真樹は、頭を掻き終え、竜蔵が去った方向を一瞥した後、学園の玄関を歩幅の広い歩みで出て行ってしまう。

これに続く形で、落ち着きを取り戻した鳴子も、少し歩調の速い歩みで、真樹の後を追う。

どうでも良いが、真樹の後ろをちょこちょこと動き回る鳴子の姿は、その華奢で背の小さな体型のせいで、どう見ても散歩中の小型犬にしか見えなかった。

そんな鳴子を後ろに従えながら、帰路へと着いている真樹は、先程の竜蔵とのちょっとした一時を胸中で思い出していた。

（はあ……どうして俺は、もっと女らしい会話が出来ないんだ）
胸の内をムカムカさせながら飛び回っているのは、花の女子高生らしいからぬ真樹の悩み。

実は、この五十嵐真樹という男勝りにも程がある性格と身長は誇っている、傍から見れば美女の類に入りそうな高校三年生は、先程まで玄関で話していた後輩である桐嶋竜蔵に、少なからぬ好意を持っているのだ。

理由は、今は省かせてもらうが、簡単に言ってしまうえば、彼がそこら辺の異性よりも男らしいというのが主だった内容だ。

しかし、今は彼女の胸中で駆け巡っている乙女の悩みに視点を置いてみよう。

（他に何かあっただろう。春休み中に行った買い物の話とか、部活仲間で見に行った映画の話とか、そこで食べたスイーツの話とか……どうしてこう、筋肉とかスポーツの話を真面目にしてるんだよ）

真樹は竜蔵と出会うと、どうしてもアスリートの近況の話、肉体的な調子の話、トレーニング法の話などをしてしまう傾向にある。

これは、彼に好意を寄せる前からそうであったらしく……というより、最初から竜蔵に興味本意で話しかける際に話題として持ってきた事から、ずっと続いてしまっている。

（あゝ絶対にまた、女として見てもらってないよ……あれじゃ、ただのマッチョ女じゃないか）

先程から、学園本校舎と正門の間に舞い散る桜の花びらや、後ろで訳もなく騒いでいる鳴子が良い意味でも悪い意味でも気になるが、今はそちらに気を回している余裕が全く無い。

なぜなら、彼女は恋する乙女特有の……というより、恋する人間特有の、一人で気にして一人で悩んでというのを、まさにリアルタイムで痛感しているところなのだから。

（大体、部活始まる前に見た、“あの”事だって聞けてないし。ましてや、桐嶋君って、意外なところから人気のある男子だって、姫樹のやつから聞いたことあるし……）

真樹が部活の始まる前に見たというのは、竜蔵と刀子が東野台へと聞き込みに向かうために、学園の正門を通り過ぎようとしていた時の事である。

そういえば、あの時、彼と一緒にいた女子は、かなりの美人で男子や女子からも人気のある娘だと、あとから後輩に聞いたことで知った。その時、同時に見せられた、件の女子の携帯写真は、同じ性別どころか、同じ年代の人間なのかと疑うぐらいに、真樹は件の女子の優美で精整な容姿に魅了されてしまっていた。

しかし、五十嵐真樹という女子は、生粋の負けず嫌いでも有名な人物である。

故に、それ程までの女としての戦力差を見せつけられようとも……。

（だけどまあ、そんなに気にしてたってしょうがないか……鳴子も言ってたけど、いま桐嶋君って完全なフリーみたいだし、どんなにライバルがいようとチャンスは平等にある様だし、まだまだ落ち込む所でもないでしょ！ ああ、そうだ！ 落ち込むことなんて無いじゃん！！）

といった具合に、一人で勝手に自己解決してしまうのであった。

真樹は心の中で握り拳を作りながら、自分に言い聞かせるように、これまた心の中で呟く。

（大丈夫、俺だってスタイルには自信あるし、顔だって地元じゃ商店街の人たちから美人だって言われてるんだ。大丈夫、俺にも勝ち取れる可能性はある！！）

真樹は自己暗示を専門知識など全く無いにも関わらず、自身に確りと掛けながら、学園から寮までの帰路を、後ろでやかましい鳴子を従えながら歩いて行くのであった……。



美夏・千代女・姫樹のいる生徒会室に、スライド式のドアを三回

ノックする音が聞こえてきた。

そのノックは、普段彼女らが想定しているノックの音よりも少し重めで、そして硬い何かでドアが叩かれているような錯覚を持たせるもので……しかし、これを耳に入れた瞬間、今回の事件の概要を聞かされて、暗く塞ぎ込んでいた美夏の表情が、パッと明るくなる。美夏は知っていた。

このリズム、この音……間違いない、これは兄のものだと、ノック一つだけで、彼女はドアの向こう側にいるのが誰なのかを当てたのだった。

故に、これまで生徒会室正面に座っている姫樹に向けていた美夏の身体が、後ろのドアへと180度回転し、彼女の長く艶やかな黒髪が、まるで今の心情を示しているかのように舞い踊った。

「お兄ちゃん！」

「失礼しま……おっと！」

案の定、ドアの向こう側にいた竜蔵が、スライド式のドアをガラガラと開けると、それと同時に美夏が嬉々とした表情で抱き着いてきた。

突然の抱擁に、竜蔵は驚くも彼女を確りと抱き留め、その柔らかな感触とぬくもりを感じながら、家族である妹が本当に無事だったことを実感する。

互いに、入る者と、入る事を許可する者の言葉を見殺した行動であったが、姫樹と千代女は、この二人の兄妹を生温かな視線で見守る。

「私、怖かった……突然、男の人が追ってきて、裏路地まで逃げただけで、行き止まりで、それで」

自身に縋り付く様にして、しがみついている美夏が、その普段は可愛らしく見開かれた瞳を潤ませながら、こちらを見上げてくる。

「そうか、怖かったな。だけど、もう大丈夫だろ？ 助けてもらっただけだし、ここには俺もいるし」

「うん」

相手を落ち着かせるために、優しいな声音で美夏の頭を右手で撫でる竜蔵。

少しだけぎこちない撫で方だったが、これも兄なりのやり方だと理解している美夏は、それに一度頷く事で答える。

周りから見れば、この光景は怖い目にあつた妹が、いつも頼りにしている兄に慰めてもらっているという、ハートフルな光景なのだが……実を言えば。

（ああ！　すごい！　こんな幸福があつて良いのかしら！？　あの普段は、こういう事を恥ずかしがってやってくれないお兄ちゃんが、今こうして！　周りの目も気にせずに！　私を“愛でてくれている”なんて！）

そう、この光景は、か弱い妹が兄に思わず抱き着いてしまったなどという、暖かなものではない

これは、彼女の意図的に涙目になれるという、いつどこで練習したのかも分からない特技によって生み出された、兄の優しさを感じたいがための芝居だったのだ。

「それで怪我とかは無いんだな？　特に、何されたとかは無いんだよな？」

美夏が役得、もしくはここぞとばかりに兄の背中まで回していた手が引き離され、両肩を押さえたというより掴まれた状態で、幸せな感触から放されてしまった。

しかし、普段は向けてくれない、兄の真剣そのものの眼差しが、こちらに向けられてくる。

鋭く、力強い、なんとも男らしい顔立ちから向けられる眼差しは、それだけで美夏を卒倒させる破壊力を誇っていた……まあ、彼女限定の話だが。

「うん……危ないところを、木佐貫先輩に助けてもらったから、何もされてないよ」

だから、お兄ちゃんに捧げる“純潔”は無事だよと、胸中で付け加える、危ない思考を持った妹。

実際には、追いかけていた男は美夏自身が蹴り倒し、その後に千代女に助けてもらったというのが正確な情報なのだが、上手いこと彼女はそれをはぐらかし、か弱い妹という姿を演じ続けた。

まあ、か弱いのは事実なのだが……人前でこれ程までに、裏のあの演技を出来る女を、か弱いと呼ぶ訳にもいかないであろう。

美夏から出て来た、木佐貫という苗字に、竜蔵はようやく、この室内に他にも人がいた事に気づいた。

本来なら、こんなミスはしない男なのだが、さっきまで心配していた人物が突然抱き着いて来て、涙目になっていたのなら、仕方無いことだったのかもしれない。

だがミスはミスだ……竜蔵は生徒会室の入口で、人目も憚らずに妹と抱き合っていた事、妹の頭を優しく撫でていた事に赤面し、急いで目の前の美夏の両肩から手を放した。

「あ……」

同時に、残念そうというより、まだ感触を感じていたかったというふうに、美夏が悲しげな声を漏らした……それに竜蔵は一瞬、すまなそうな顔をするが「後でな」とだけ言って、そのまま生徒会室の真ん中まで歩を進めた。

「あら？　まだやってて良かったのよ？」

悲しげに後ろから兄を見る美夏に視線を向けながら、一人この部屋で席に座っている姫樹が、いつも通りの微笑みを浮かべたまま、悪戯っぽい声音で竜蔵に言う。

これにむきになりそうだった竜蔵は、すぐに喉の手前まで登ってきていた反論したい言葉を押し戻し、赤面したままであるが、どうにか落ち着いた様子で、姫樹の意地悪な弄りを無視した。

「とりあえず、妹を助けてくれて、ありがとうございます」

さっきまでの事を誤魔化す様であったが、竜蔵は本心からそう言いながら、姫樹に頭を下げた。

「私は監視カメラの映像を見ていただけよ。お礼なら、千代女に言っ頂戴♪」

「木佐貫先輩、妹を助けてくれて、本当にありがとうございました」
姫樹に言われたからでは無いが、竜蔵は身体の正面を、隣にいた千代女に向けると、そのまま同じように頭を下げた。

これに千代女が、後ろに立っている美夏に聞こえない様な、絶妙な加減を聞かせた小声で。

「感謝をしてくださるのなら、子種の一つや二つ……」

「それで会長。まだ冴島から連絡とかって来てませんか？」

よくわからない事を口走り始めた千代女を放置しながら、竜蔵は再び姫樹へと体を向ける。それと同時に、やはりこの悪乗り丸眼鏡に対しては、敬意を払う必要はないと理解した。

しかし、姫樹は竜蔵の問いの意図がいまいち理解が出来ず、不思議そうな表情を浮かべながら問い返してしまう。

「刀子ちゃんから？ いいえ、まだ来てないけど……というより、アナタ、刀子ちゃんはどうしたの？ 一緒に戻ってきたのではないの？」

「いや、途中から別行動を取ってたんですよ」

本当は、“あの”藤城理香が根城にしているホテルの一室に、新しいスマホの使い方を覚えさせる名目で置いてきただけなのだが……真実を知らない姫樹と千代女は、竜蔵の言葉に首を傾げざる負えなかった。

同時に、竜蔵の隣にいた千代女が、おふざけから真面目な様子に切り替えて口を開いた。

「会長」

しかし、口を開いた際に、言葉を発した方向は姫樹にであって、竜蔵ではない。

だが、これだけで姫樹は相手の言いたいことを察して。

「別に構わないわよ？ さっきは意図的に伏せてたけど、どうせいずれは、美夏さんにも教えることだし……というより、今回の事柄については丁度いい機会だし、ついでに教えてしまいいいかな」
「分かりました」

二人のやり取りを後ろで聞いていた美夏は、何のことやらと理解は出来ていなかったが、事情を知っている竜蔵は何となく理解した様子で。

「ちょ、待ってくださいよ。美夏も巻き込むんですか？」

「もう巻き込まれてるでしょ？　むしろ被害者の中でも一番犯人に目をつけられてるのだから、既に舞台のヒロイン役に座っているわ」
微笑みの絶えない様子から帰ってきた、抗議すら受け付けないという意思。

それでも竜蔵は、姫樹がやろうとしている事に食い下がろうとするが……。

「だけど、守秘義務があるんじゃないですか？　美夏は完全な部外者ですよ」

「あら、桐嶋君？　その発言自体が、アナタの妹さんに守秘すべき存在の匂いをチラつかせている事になってるって、気づいていないのかしら？」

ぐっと、竜蔵が言いよんだのを認めると、姫樹は表情を朗らかな微笑みに固定させたまま、畳み掛け始める。

それは相手の隙を作り出した事を喜ぶ微笑みか？　それとも、相手を黙らせることに快感を覚えている表情なのか？　どちらにしても、今の竜蔵には、彼女のいつも通りの微笑みが何よりも不気味に感じられた。

「私の記憶が正しいのなら、たしか規約事項には、存在を仄めかす事も禁じられていた筈よね？　それも、都市から出されている分厚い方じゃなくて、うちで書いた一枚の紙の方に？　あらあら……せっかく今日の朝の感じで、アナタが去年よりも少しは成長したと思えたのに、これじゃ、また再教育を始めなきゃね♪」

瞬間、竜蔵の背筋が気持ち後ろへと反られるのを、この部屋にいた三人の女性たちは目撃した。

その様子は、ギクリという擬音がぴったりの反応で、竜蔵が姫樹の再教育を、どれだけ恐れているのかを体現したものであった。

だが、ここで引いてしまつては、自分自身、ひいては妹に会長である姫樹の魔手が及んでしまう。

故に、竜蔵が「か、会長だつて、いま同じことしてるじゃないですか」と、小学生でもなかなか選択しないような反撃とも言えない返しをするのだが。

「会長は別に構わないと、さっき千代女に言つたはずだけど？　バラしても良いというより、むしろバラした上で、美夏さんを生徒会に入れようと考えているのですから」

開き直つた……という訳でもなく、姫樹は本当に考えている事を晒しても問題ないという声音で、美夏にも聞こえるように、守秘義務すらある執行部をバラしても構わないと言い放つた。

これには竜蔵も、口を紡ぐほかなく……姫樹はそれを一瞥すると、本来、話を切り出す筈であつた千代女に視線を向ける。

「全く……桐嶋君がダダを捏ねるから、千代女が待ちくたびれてしまっているじゃないの」

「いいえ、私は別に」

プンスカと頬を膨らませながら、言い負かした竜蔵の事を茶化す姫樹であつたが、千代女の普段通りの事務的な反応を見ると、すぐに何事もなかったかの様に「なら、どうぞ♪」と、千代女に話を始めるように促した。

千代女は一度、姫樹の方に目礼をすると、竜蔵の方へと振り返つた。

「会長の言うとおり、随分と待たされてしまいました……」

姫樹に言い負かされたうえで茶化され、更に千代女に茶化された竜蔵は、眉間に皺を寄せ、額に血管を浮き出させていた。

しかし、千代女は竜蔵の怒りの形相など気にもせず、そのまま話に入り始めた。

「まずは、今しがた刀子さんとは別行動を取っていたと言っていましたか、それはいつごろの話ですか？　私は、美夏さんのところに向かつていて、途中から監視カメラの方は覗けなかったので」

それは私も気になるわね……姫樹が千代女の疑問に同調する。

「その時に千代女から監視カメラを見ていてと頼まれてたから、ずっと見ていたのだけれど……途中でアナタ、監視カメラの着いていないホテルに、刀子さんと入っていったわよね？」

これは一体、どういう事なのかしら？——姫樹の微笑みに、危険な影が掛かり始める。

竜蔵は、その姫樹から発せられる危機感に、背中から嫌な汗が流れているのを感じていた。

だが、ここで本当の事を言わなければ、自分はホテルに女連れ込んで、そのまま“やり捨てた”最低男だと勘違いされてしまう。

それに、今、後ろにいる美夏から目の前にいる会長に負けず劣らずな、冷たい威圧感プレッシャーを受けているのは気のせいでは無い筈だ。

「いや、あれはただ、静かな場所を探した結果であって……」

「「「静かな場所？」」」

苦し紛れの反論に、なぜか三人の女性から冷たい視線を同時に向けられてしまった。

なぜだ、俺は嘘は言っていないはず……。

竜蔵が右頬から、冷や汗を一筋垂らすと、不意に、これまで生徒会室の入口付近に立っていた美夏が、ゆっくりと歩み寄ってきた。

「確か、私がお兄ちゃんを見たのって、東野台のハンバーガーショップだったよね？　だとすると、あの辺にあるホテルって、まさか……」

冷や汗に、なぜ分かってくれないという焦りに駆られた竜蔵は、妹がすぐ後ろに来るまで全く気づけなかった。

故に、美夏の声で振り返った竜蔵の表情は、冷や汗だけではなく、完全な動揺が見られるほどに目が泳ぎ切っていた。

まずい……妹にまで冷たい目で見られてる。

竜蔵は、どうにかして現在の危機的状况を逃れようと、胸中でライフカードよろしくの選択肢を幾つか広げ始めた。

（待て……落ち着け俺。まず前提として、藤城の事を、そうホイホ

イと人に話して良いものじゃないんだ、そこは見誤るな。見誤ったら、俺が今度、社会的に何されるか分かったもんじゃない……とにかくだ、この場で会長と美夏の誤解を解かないと、それこそ俺に未来は無いんだから、真剣に考えるんだ)

今現在、彼の心の中の選択肢には【正直に全てゲロってしまおう】、【買ってやったスマートフォンを使い方を教えてやるため】、【だんまり作戦】、【土下座して、何も聞かないでと懇願する】という、なんともどれもダメそうなものが、堂々と挙げられている。

そのあまりの頼りなさに、竜蔵は自身の機転の利かなさ加減に嫌気がさしそうであったが、これ以上、新しい考えが浮かんてこないのも事実。

故に彼は、この中から、現状を打開する言動を選択するしかなかった。

(まず、会長と刀子の奴は、確か昔からの付き合いがあるとか言っていたから、下手なことを言ってしまうえば、俺は明日からお天道様の下を歩けなくなる可能性がある。そして、美夏の場合は、何だか家族とか兄とか以前に、道徳的に拙いペナルティが来そうな予感がする……どっちにしたって、ここで失敗をしてしまうえば、明日からは俺の日常など無いと考えた方が良い)

今日、竜蔵は刀子と一緒に放課後を過ごしたことで、彼女と姫樹たちの大体の関係を知ることができた。

だからこそ、姫樹がどれだけ刀子に対して信頼を置き、そして好意を寄せているかを、ある程度理解していた。

そして、その信頼のおける身内に外部から危害が加えられた場合、二橋姫樹という一つ上の女性が、こういったアクションを起こすのかも、竜蔵は約一年の交友を経て学んでいる。

妹の美夏の場合は言わずもがな、一向に兄離れしてくれない性格もさることながら、こちらが異性と共にいる姿を目撃した時はいつも、不機嫌そうな顔をしながら乱入してきたり、酷い時は、その異性を無理矢理(言葉攻め)で引き離そうとしてくる始末。

どちらにしても、今回の疑惑を晴らせなければ、今現在、竜蔵が頭の中で思い描く以上の未来が待っているかもしれない。

まだ答えは出てこない……だが、時間と三人（千代女は見るからに悪乗りで）からのプレッシャーが、刻一刻と竜蔵の焦りを増長させ、精神を削り取っていく。

次第に、右頬だけではなく、背中も冷や汗を掻き始め、着ている衣服を肌張り付けてくる。

いくら考えても出てこない、最良の答えに、竜蔵は三人の視線を浴びたまま、口を噤んでしまう。

近くでは、妹である美夏が、こちらの様子を訝しみつつも、何かに気づいたのか、悲しそうな表情をしている。

さて、お前が考えている事は、確実に間違った答えだ……直ぐにでも、そういつて妹を安心させたかった竜蔵だが、いかんせん、藤城理香という、腐れ縁ながらも、アンダーグラウンドの情報屋として有名な彼女の名前を、ここで出す訳にはいかない故に、良い言葉が浮かばぬまま、時間は過ぎてしまう。

いつそのこと、もう“あそこに行ったのは、藤城理香に会って、ついでにアイツに携帯の使い方を教えるためだ”と、素直にゲロツてしまおうかと、最初に浮かんだ選択肢を選ぼうかとも考えたが、流石にこれをやってしまうと、彼女の潜伏先がバレ、色々と厄介な事になってしまう可能性が大なため、竜蔵はこの案を切り捨てた。

普通の男なら、ここでドロップアウトをしてしまいそうな雰囲気だが、幸か不幸か、竜蔵という男は肉体通り、並みの男ではなかった。

こと勝負事に関しては、同年代で右に出るものなどいないほどに、プロ格闘の大舞台を何度も経験している……故に、こういった逆境の中でこそ、彼の並外れた精神が真骨頂を——「うん？」

逆境に立たされている最中、竜蔵の制服のブレザーの右ポケットから、何やらスマートフォンが着信を知らせる振動を唸らせ始めた。これ幸いと、竜蔵は相手に有無を言わさぬ速さで「すみません電

話っす！」と、思わず出てしまった高校生然とした敬語を、姫樹たち三人に使ってから、鳴っている携帯を取り出した。

「もしもし？」

三人は、竜蔵のあまりの携帯の早取りにポカンとしながらも、取りあえずは彼が逃げの一手を得た様子だったので、油断なく警戒を、聞き耳を立てながらする事にした。

そんな三人の様子を見まわしながら、竜蔵は一先ずの猶予を得られたことに感謝しつつ、誰から来たのか確認しなかった電話の向こう側に意識を傾ける。

『もしもし、馬鹿？ アンタに電話するなんて久しぶりだけど、間違っていないわよね？』

電話の向こう側から聞こえてきたのは、勝気な女性の声……これは、さっきまでホテルの一室に、刀子と共にいた藤城理香のものだ。竜蔵は、一瞬証人が来たと考えるも、どっちにしたって使えないことに気が付くと、とりあえずは気を抜いて理香の名前をポロリしないように気を付けながら、会話を始めた。

「ああ、間違っていないぞ」

『そう……』

「わざわざ俺に電話なんて、何かあったのかって聞きたいところだけど……お前、なんか疲れてないか？」

しかし、なにやら電話越しの理香は疲れている様子……。

彼女は普段、あの根城にしているホテルから外へと出ようとはしない。

故に、彼女は今、あの一室で竜蔵に電話をかけてきている。

証拠に、電話の向こう側からは、全くと言っていいほど、外特有の雑音というものが聞こえてこない。

『疲れたと言うか、寝てたって言うか……』

「どうした？ 調子も悪そうだぞ？」

電話という事で、耳元で囁かれる、理香の吐息混じりの声音に、竜蔵は変な感覚を覚えながらも、何やら調子の悪そうな相手を気遣

う。

『調子……うん、たしかに調子も悪いわね。なんだか、まだ視界がぼやけてるから』

「おい、本当に大丈夫か？」

『ふん……アンタが他人の心配なんて、本当に変わったわね』

「他人って、お前……」

腐れ縁だが、一応友達ではあるだろう——と、竜蔵が返そうとした時、何やら後ろの方……とりわけ、生徒会室の入口であるスライド式のドアが、バンツと大きな音を立てながら開かれた。

これに、竜蔵が振り返ると……。

『まあ、それより聞きなさい』

そこには、凛々しくも美しい顔立ちを怒りの形相に染め上げた、華奢な物腰だが、確りと芯の通った女人、冴島刀子が立っていた……怒りに染まった彼女の白面でも、一際他者を魅了する“刀のような妖艶さ”を持った、切れ長の瞳は、スマートフォンを耳に当てている竜蔵へと、真っ直ぐに向けられている。

『アンタが置いてってくれた、冴島さんだけど……あの後、あたしがスマホの使い方を教えようとしたら、突然木刀を構え始めちゃって』

理香の溜息すら聞こえてきそうな項垂れた声音に、竜蔵は何となく、彼女が言わんとしている事を察した。

「それで、反撃を受けたと？」

『そうなのよ……で、気づいたら部屋には誰もいないし、寂しい置手紙だけは残されてるし』

生徒会室中の視線を集めていた、“袋から出された木刀持ち”の刀子が、ゆらゆらと覚束ないながらも、無駄な力が一切感じられない歩みで、竜蔵へと近づいてくる。

これに、竜蔵は耳に当てたスマホを手放せないまま、身体を後ろへと後退さる。

「置手紙？」

『うん……すごい綺麗で丁寧な字で、“情報は有難いが、私にはそういった趣味はないので、他を当たってほしい” って書かれた紙切れね。要は、振られちゃったって訳よ……』

やれやれと、仕方ないといった雰囲気で溜息をつく理香であったが、竜蔵はそれどころではない。

『でも、あたしだってタダで伸ばされてた訳じゃないわ。一応、冴島さんの首筋に“跡”^{マーキング}も残したし、ある程度は冴島さんの肉感ってやつを堪能できたから、満足しているつもりよ。だから、彼女を連れてきてくれたアンタに請求する、今回の情報提供の額は、2割だけ割り引いとくから、後でメールを確認しておきなさいよ？』

藤城理香の情報提供を利用したとき、消費者の方は供給者側からの後日メールで、情報の支払額を知らされる。

だが、何度も言うが、今の竜蔵にそれを喜ぶ暇はない。

もともと、あの時は本当に、携帯機器の使い方のレクチャーを理香に丸投げしたため、善意で置いて行った訳でも無いし、更に言えば、既に木刀を右手に持った刀子が、一步半の間合いを開けて、こちらを見つめていたからだ。

見つめているという表現なら、歓迎するのだが、正確には睨まれているというのが正しい。

よく見れば、刀子の首筋……とりわけ、右鎖骨と喉の間ぐらいの位置に、薄い桃色のリップの跡がある。これは、ブレザーの下に着ているワイシャツの襟から、ギリギリ見える程度のものであったが、おそらくは理香が着けたと言っていたものであろう。

また、更によく彼女を観察してみれば、服装の所々に、ちょっとした皺の様なものが出来ている。これも、理香ともみ合った際にできたものの様だ。

「なあ？ ちょっと聞きたいんだが……」

『なによ？』

姫樹が両肘を乗せている長机に、竜蔵の臀部が当たる……つまり、これ以上、後ろには下がれないという事だ。

それを確認した刀子が、ゆっくりと持っていた木刀を持ち上げ、素人なら、これを前にしただけで足を地面に縫い付けられてしまいそうな、隙のない上段の構えを取り始めた。

そうか、上からカチ割るつもりか……竜蔵は無意識に相手の手を理解した。

「お前の事、本当なら他にバラしちや拙いんだよな？」

『何言ってるのよ、当たり前でしょ？ 今回ののは、アンタが信用してるのと、名前の通った人だったから許しただけよ？ 本来なら、うちの敷居を跨いだけで、一見さん以外は皆お引き取り願ってるんだから』

「そうか、分かった。また今度、忘れてなかったら連絡する」

『え？ そう……なら、また今度ね』

急いでいる様子で切ろうとする竜蔵を、不思議に思いつつも、理香は一切の未練すら見せずに、彼との電話を切るのであった……。

そして、電話の向こうからは何も聞こえなくなり、竜蔵はゆっくりと、視線を刀子に固定したまま、右手に持っているスマートフォンを、元のポケットへと仕舞い込んだ。

「どうやら、三途の川を渡る準備は出来たようだな、桐嶋君？」

静かに、底冷えしそうな冷たい美声で、刀子は木刀を上段の構えで固定したまま、竜蔵に問いかける。

「いや……俺には、まだやる事があるんでな」

しかし、もともと往生際の悪い竜蔵は、一度不敵な笑みを浮かべた直後、表情を闘争に生きる者の“それ”に変え、刀子を見据えながら、摺り足で左肩が前のファイティングポーズを取り始めた。

「良い度胸だ……あれほど無責任な事をしておきながら、まだ抵抗しようと思えるとは、私も、慣れないタクシーを使った甲斐があったよ」

なるほど、これ程に早く学園へと辿り着けたのは、あのホテルのロビーに備え付けられている、専用タクシーを呼び出すための“黒電話”を使ったからかと、竜蔵は一人、納得を得ていた。

「そうかい、そいつは良かったな」

「ふふふ……では、昨日のリベンジと行かせてもらおうか」

昨日の屋上では見られなかった、構えを取った竜蔵に感化されてか、刀子は相手に一切の隙を見せぬよう、無表情のまま喉で笑いながら、上段で構えている木刀の切っ先にまで、神経と集中力を届かせる。

期せずして、先程まで修羅場になりかけていた生徒会室の、ほぼ中心で、二人の闘争者が、互いに必殺の間合いを形成してしまう。

一步半……これだけあれば、素手の竜蔵でも、相手の顎に無挙動で蹴りを飛ばせる距離であり、それは木刀を構える刀子も同じ事であった。

だが、その時であった。

「ッ!？」

突然、これまで竜蔵へと鋭い眼光を向けていた刀子が、後ろへと振り向き際に、上段で構えていた木刀を流れるように振り落した。

この意味深な動き……いや、とんでも無い隙を突こうと、竜蔵が後ろ足の爪先から、爆発的なダッシュ力を発揮しようとする。

「ッ!」

「残念ですが、もうそろそろ落ち着きましょうか?」

目の前に、さっきまで竜蔵と刀子のやり取りに傍観を決め込んでいた千代女が、全く認識できない内に現れた。

これに驚きを隠せない竜蔵であったが、更に後ろから、何やらブレザーの背中部分を摘まんでくる感触が感じられた。

それに振り向くと。

「何の理由で刀子さんを怒らせたのか? 会長、とても興味がある所なのだけど……まずは、この生徒会室での荒事は、この私が許さないという事を、忘れないでもらいたいわ!」

そこには、普段は閉じられている姫樹の両赤眼がハッキリと開かれて、こちらを見上げている光景があった……口調は穏やかで、いつも通りの期限がよさそうなものなのだが、明らかに表情と目が笑

っていない。

竜蔵が、下から不気味に見上げてくる姫樹の眼に、文字通り、“吸い込まれるように”目を奪われていると。

「突然入ってきて、人の兄に木刀で殴りかかろうなんて、どういう見なんですか？」

今しがた、刀子が木刀を振り抜いた方向から、妹の少し怒気が込められた声が聞こえてきた。

「君は……？」

刀子が振り向き際に木刀を上から下へと落した格好で、この一太刀を軽々と避けた美夏へと、油断なく問いかける。

しかし、刀子の木刀の、ちょうど右横腹の横で、身体を真半身に切っていた美夏は……。

「人に名前を尋ねるときは、普通、自分から名乗るものだと思いますが？」

先輩であると、相手が着ているブレザーの左胸に刺繍されている色つきのラインで気づいている筈であったが、彼女は普段は見せない、少々強めの口調で刀子に質問返しをする。

この時、美夏は既に目の前の刀子が、昼間に兄とファーストフード店で一緒にいた女性だと感じていた。

美夏に強めの指摘を受けた刀子は、ここでもうやく、思わず条件反射で後ろから近付いていた彼女に、自身が木刀を振り下ろしていた事に気づく……どうやら、自らが形成した間合いに入ってきた者を、ほぼ無意識で迎撃出来るほどに、刀子は竜蔵との束の間の立ち会いというより、復讐劇に集中していた様であった。

「こ、これはすまない！ 怪我は無いか！？」

幸い避けた様ではあったが、見ず知らずの他人に、たとえ無意識とはいえ、木刀の一太刀を浴びせようとしてしまった事に、刀子は羞恥心と罪悪感を感じながらも、とにかく避けてはいるが相手の万が一のために安否を確認しようと、木刀をすぐ横にあった長机に立て掛け、美夏に焦りの色が見える瞳を向けた。

しかし、美夏は……。

「当たっては無いので、別に怪我はありません。ただ、まずは名前を教えて頂けませんか？」

どう見ても聞いても不機嫌な様子の相手に、刀子は益々罪悪感に駆られるも、ここでふと、ある事に気が付いた。

そうだ、よく見れば目の前にいる彼女が、今回の事件での被害者ではないか……しかも、さっきまで撲殺しようとしていた男の妹——やはり私と違って、写真の通り、実に女の子らしい、可憐な容姿だなど、刀子は思わず美夏の愛らしく整った顔立ちを見て、そんな事を考えてしまった。

だが、いつまでも不機嫌な相手に対して見惚れているものではないと、刀子は己に叱責を加えると。

「そ、そうだな……だが、君を危険な目に合わせてしまった事は事実なのだ、本当に申し訳ない」

深々と、相手に頭頂部を向ける程の一礼を交えた謝罪をした。

これに美夏は、一度軽い溜息を付いてから。

「大丈夫です、一応これでも鍛えているので」

と、言いながら胸下で腕を組む。

美夏の言葉を聞いて、下げていた頭を、きめ細かな黒髪を揺らしながら、刀子は上げて行く。

「そうか、改めて、本当にすまなかった……私は冴島刀子という。君のお兄さんと同じ学年の二年だ」

先輩の前であるが、堂々と不機嫌そうに腕を組む美夏に、刀子は極めて爽やかに名乗りをする。

流石に、立て続けに三度も先輩に謝られてしまったのは、木刀でいきなり切りつけられそうになった身と言えども、許さぬわけにはいかず、美夏は新生にしては生意気な態度を解き、軽く微笑みを作りながら。

「桐嶋美夏です。そこにいる桐嶋竜蔵の妹で、学園には入学したての新生です。よろしくお願いします、冴島先輩」

「ああ、よろしく」

ようやく機嫌を直してくれたのかと、刀子も美夏に微笑みを浮かべながら、返事を返すが……。

（この女が、今日お兄ちゃんと一緒にいた女で良いのよね……）

当の美夏は、目の前に立つ、美しい外見ながらも、凛々しさを纏っている刀子を内心で値踏みするかのようには、観察眼をフル稼働させていた。

鋭くも、凛々しく見開かれている瞳に、細い輪郭と白面と言ってもいいほどに白い肌……優美な曲線を描いている眉毛辺りで切りそろえられた前髪と、形の良い胸とは反比例した、キュツと引き締まっている腰まで伸びた、真っ直ぐな黒髪は、まるで夜闇の様に黒く美しい。また、自身よりも5センチは高そうな身長と、スラリと伸びた美脚は、見るもの全てを釘づけにしていまいそうな印象を持たせていた。

目の前に立つ彼女の魅力は、油断なく観察した美夏に……“もしかしたら、自分よりも兄に相応しいのではないか”と、思わず考えさせてしまう程であった。

しかし、いくら一瞬、同性であるにも関わらず見惚れてしまいそうになっていたとしても、後ろに近づいただけで、いきなり木刀を振り下ろしてくるような相手に、美夏が負けを認める筈もなく……。

「それで、冴島先輩？」

「うん、なにかな？」

「家の兄と、東野台のホテル街にいったと、今さっきまで話題になっていたのですが、それって本当ですか？」

全く臆した様子も見せずに、しれっと先程まで竜蔵を苦しめていた問題の事実確認を行い始めた。

美夏と刀子……この二人の高校生美少女が向き合っている姿は、例えそれが、質素な雰囲気漂う生徒会室だとしても、大変絵になる光景で、傍から見ていた竜蔵・姫樹・千代女の三人も見入っている様であった。

というより、美夏が無意識に醸し出している敵対心・対抗心が、気づいていない竜蔵はともかく姫樹と千代女の介入を許そうとはしていなかった。

美夏の何の遠慮もない事実確認に、刀子は何もやましいことはない、非常に落ち着いた様子で口を開いた。

「ああ、本当だ。だが、別に男女の逢引きなどという、色のあることをしていた訳ではない」

「では、何をしていたのですか？」

ここで刀子は、竜蔵の後ろで座っている姫樹へと視線を向ける：姫樹は、特に問題はないとばかりに「別に構わないわよ♪ もう殆どの概要は教えちゃったから」と、いつも通りの微笑みを向けながら返した。

次に刀子は、千代女の方へと視線を向ける……千代女は、静かに一度だけ頷くだけであった。

二人の別に教えても構わないという許しを得た刀子は、改めて美夏へと視線を向ける。

「どうかしましたか？」

向き合っている最中に、意図的に数秒視線を反らされた美夏は、訝しげな表情で刀子を見る。

「いや、ただ確認を取っただけだよ。今回の事件は、色々と面倒は状況だから」

既に、自身がこういった事柄に巻き込まれているのか伝えられていた美夏は、刀子の溜息混じりの口調に、本当に厄介な事になっているのだと悟った。

刀子は、胸下で腕を組みながら、後ろの机にちょっとだけ腰かける形で語り始めた。

「まず、君のお兄さん……そこに立っている桐嶋君と東野台のホテル街に行ったのは、私にスマートフォンなるものの使い方を教える事と、今回の事件の情報収集のためだ」

まだ語り始めたばかりであったが、ここで竜蔵が割って入ってき

た。

「冴島、一応あそこでの事は他に漏らさないようにしてくれよ？
教えるのなら、得た情報だけを教えてやってくれ」

「うん？ どうしてかな？」

藤代理香の事は他言無用……この事を刀子に伝えることを、全く
持って忘れていた竜蔵は、ここで彼女に釘を刺そうとしていた。

が……やはりそこは桐嶋竜蔵。

情報源である理香の事を匂わせることなく、目の前で他人に釘を
さす事など出来る訳もなく。

「いや“あいつ”の事は外に漏れると拙いんだよ。もともと家出同
然で、あそこに居座ってるから」

「あいつ？ ホテル街に居座ってる“あいつ”……桐嶋君？ 会長、
とてもその人の事が気になるのだけど、教えてくれないかしら？」
思いつ切り伏せなければならぬ人物の影を匂わせてしまい、後
ろで座っていた姫樹に突っ込まれてしまった。

「え？ あ……いや、その」

「あなたにしては、ホテル街に居座っている謎の人物っていう、か
なり色のある話だから、会長、とても気になっちゃったのよ」

気になったと言われても、もしも漏らしてしまった場合、このす
ぐ振り向いたところにいる人物に、どんなアクションを起こされる
か分かったものではない。

最悪、居場所を漏らした自身を理香が特定し、本気で社会的に抹
殺しかねない行動に出してしまうかもしれない。

そうなった場合、既にプロ格闘界で活動している竜蔵にとっては
大変拙い状況になってしまう。

どうする……結局、刀子との逢引き疑惑は完全に本人に否定され、
有耶無耶になったものの、今度は違った所で問題が発生し始めた。
しかし、ここで竜蔵本人からは出来過ぎた妹と称される、ブラコ
ン妹から、まさかの助け舟が出された。

「その、二橋会長？ 本人があまり話したくない感じですし、今は

私に現在の状況を教えて頂けませんでしょうか？ 冴島先輩も、まだ話し始めたばかりですし……」

恐る恐るといった様子で、兄と姫樹の間に入る妹……だがこれは、決して偶然などではなく、彼女が兄の困った様子を敏感に感じ取った結果に過ぎない。

そして、美夏の恐縮した様子に悪戯心もとい探究心・好奇心を削がれたのか、姫樹は「そう。なら刀子さん、続けて頂戴。一応、桐嶋君の言うとおりにね♪」と、話始めで既に手持無沙汰になりそうであった刀子に先を促した。

刀子は「分かりました」とだけ頷いて、話を再開した。



「なるほどね……裏には暴力団が絡んで、そこを經由して芸能事務所に、まだ未発掘の逸材の宝庫である学園都市の女の子を紹介していく構図ね。それも、組は特定してはいるけど、誰が主犯なのかは掴めていないと……更に言えば、実行犯は無数にいるし、既に被害者の娘達の写真はネット上に出回っている状態」

刀子が理香から得た情報を聞いた姫樹は、なにやら思案顔で新たに追加された情報を整理していく。

「また、使用されていた機材も予想通りの物でしたね」

「そうね、やっぱり千代女の言うとおりであったみたいね」

「それを言うのなら、会長の勘がまた当たったのも事実ですよ？」
長机を間に挟んで、姫樹と千代女は二人で何やら慣れ親しんだやり取りを交わしていく。

称賛にも似た言葉に、姫樹は「よして頂戴」と返しながら。

「所詮、確証の無いものよ……とは言うけど、当たっちゃうのも否定できないのよね♪」

「全く、困ったものです。色々と調べまわった私の立場がありません」

「だけど、千代女や刀子さん達が動いていなかったら、ずっと確信には変わりえないわ。そういった面でも、所詮は“勘”なのよ……たとえば、当たっていたとしてもね♪」

うふふと、嬉しそうに微笑む姫樹の表情は、どこか考えていた答えが当たっていた時の子供を彷彿とさせるものであった。

すると、姫樹と千代女の二人で、色々と情報の整理と軽い雑談などを交わしている空間に、これまで手持無沙汰気味であった竜蔵が割って入っていた。

「それで、これからどうすれば良いんですか？　いくら盗撮の手口だとか、事件の概要だとかを知ったとしても、肝心な“誰を潰せば良いのか”が出てこないんじゃない？　俺も動けないですよ？」

竜蔵のもっともな質問に、姫樹ではなく千代女の方が、その丸眼鏡で天井に設置されている蛍光灯の光を反射させながら答えた。

「確かに、これではどこをどうすれば解決するのかわか見えてきません……が、我々にとっては今の時期はともタイミングが良かった様です」

言いながら千代女は、いつの間にか自然と兄の隣に立っていた美夏へと視線を移す。

「え？」

隣に立つ兄と会話をしていた人物が、突然視線をこちらへと向けてきた事に、少々困惑しそうになる美夏。

しかし、そんな彼女の反応など気にもせず、千代女は極めて事務的に、自身の考えを語り始めた。

「今回の事件で、一番重要な被害者になっているのは美夏さん、貴女です。これは、盗撮サイト内での画像投稿率や、投票率・観覧率などから見ても明らかな事です。よって、犯人の足を掴むなら、貴女に対して私たちが張った方が、もしかしたら効率的なのかもしれません」

「どうして、私に張った方が効率的だと言えるのですか？」

不安そうな表情の美夏から来た当然の疑問に、千代女は訳もない

といったふうに答える。

「主犯である人物が横の繋がりとして利用しているのが、まだ発展途上の芸能事務所……更に言えば、そこは将来、自分たちで売り出そうとしている娘を探している、それも、得体の知れない暴力団関係者にお金を払ってまでです。ですが、ここに付け入る隙があるのです」

「付け入る隙？」

竜蔵が首を傾げると、千代女は美夏に視線を固定させたまま話を続けた。

「はい、付け入る隙です。実際、今は横の繋がりと称しましたが、この芸能事務所は今回の事件のスポンサーになっていると言った方が適切だと私は感じています……そこで桐嶋さんに質問です」

「何だ？」

既に千代女の事は、あまり尊敬できない先輩と認識してしまった竜蔵は、姫樹や真樹とは違った、おざなりな態度で返事を返す

「確かアナタは今現在、スポーツ用品の企業とスポンサーの契約を結んでいますね？」

「うん？ ああ、まあ」

何度も言うが、桐嶋竜蔵という男はプロの世界で活躍する、現役高校生の特権家だ。

故に、彼はプロの世界で生活するためと、お金を稼ぐために、とあるスポーツ用品の企業とスポンサー契約を結んでいるのだ。

これを突然確認してきた千代女に、竜蔵は少々戸惑うも、彼女はそのまま質問の意図を明かした。

「なら、スポンサーから色々なサポートを受けている筈ですね？」

「まあ、金ももらったり、練習着ももらったりしてるな」

「その他に、なにか注文されるような事はありましたか？」

「ああ、あるぞ。たしか、企業の名前のロゴを、試合用のトランクスに着けて欲しいだと言われたな、それと雑誌のモデルだとかな」
竜蔵の言う雑誌のモデルとは、スポーツ用品の雑誌に、例えば広

告されたラッシュガードなどを着た姿などを写真として撮られると
いったもので、決してお洒落な世界のものではない。

「はい、そういった具合に、お金を出したりサポートをする側とい
うのは、色々と対象に注文を付けてくるものなのです。まあ、株式
会社みたいなものですね」

株式会社といっても、あまり政経に関しては得意ではない竜蔵は、
その仕組みすら理解ができておらず、ただこの部屋で一人、首を傾
げた。

その様子に、千代女は一度溜息を付くと。

「もっと分かりやすく言えば、“援助してやってんだから、こっち
の言う事も聞け”という事です」

「ああ！なるほどな、分かりやすいわ」

ダメな生徒に優しく教える先生のように、かなり噛み砕いた言葉で
教えてあげたのだった。

これには流石の竜蔵もようやく理解した様で、納得を得たとばか
りに声を弾ませる。

しかし、隣からは優等生というより、第一学年で首席の成績を誇
っている妹からの冷たい視線が注がれていた。

「お兄ちゃん、ちゃんと勉強はやってるって、前に言ってなかった
っけ？」

ギクリと、竜蔵が妹の責めるような声音に身体を弾ませると、今
度は姫樹からも……。

「これは、今度の中間が楽しみね♪」

といった、何を企んでいるのか分からない、非常に不気味な微笑
みを向けられていた。

「まあ、桐嶋さんの高校生にもなって株式会社すら知らないという
無知にも程がある恥は置いておいて、話を進めますと……」

「……」

ぐうの音も出ないという状況を、よもや自身で体现する事になる
とはと、竜蔵は胸中で奥歯を噛みしめるように悔しがりながらも、

“だって、政治経済とか苦手なんだもんよ”などと、どうしようもない言い訳を呟くのであった。

だが、千代女たち女性陣は、本当に彼の恥を置いてけぼりにしたまま、話を進めてしまう。

「今のような、桐嶋さんとスポンサーとの関係の様に、今回の事件に参与している芸能事務所も、何らかの注文を、主犯である人物にしていると考えるのが妥当なのです」

「なるほどね、確かに、いくら掘り出しの娘を見つけてくれたとしても、そこは商売。どの娘の写真がもっと欲しいだとか、どういったタイプの娘を探して欲しいだとか、色々と芸能事務所側も注文を付けたがるでしょうね」

千代女の説明の意図を完全に理解した姫樹が、納得を得たように、いつも通りの微笑みで頷く。

「はい、だからこそ我々にとっては丁度良い状況とタイミングなのです」

先程から丁度いいだとか、タイミングが良いだとか、少し意味深な事を言っている千代女に対し、美夏が「あの、何がどうタイミングが良いのか、私には分からないのですけど？」と、恐る恐る尋ねた。

すると、千代女がかけている丸眼鏡が、これまでよりも更なる光の反射をした様な気がした。

「要するにです、現在、盗撮サイトでは美夏さん。貴女の写真が多く掲載されていて、尚且つ、いまだ更新中という状況にあります。この状況は、“貴女が芸能事務所側に目を付けられた可能性が非常に高い”という事であり、また“明日からも撮られる可能性があるという”事でもあります」

この再確認させられた事実、美夏は背筋に嫌な悪寒を感じるも、もう既に巻き込まれてしまった事とやかく言ったとしても仕方がないと割り切り、千代女の説明に真剣な眼差しを向け始めた。

「つまり、美夏さん。今回の事件を解決するには、貴女を超小型自

立飛行偵察機……『天道虫(lady beetle)』を使って直接盗撮に及んでいる実行犯を捕まえる必要があるのです。一番人気の娘を撮影している実行犯ならば、誰から指示を受けたのか、詳細に知っている可能性がありますしね」

既に公に発表されている『天道虫(lady beetle)』のスペック的に、あまり遠くに離れた状態では操作出来ないという事により、美夏を盗撮した場合、その近くに実行犯である人物がいる可能性が高い。

この事を既に知らされていた美夏は、どうやら千代女の言いたいことを姫樹同様、完全に理解した様で。

「なるほど。つまり木佐貫先輩は、私に囧になれと言いたいのですね？」

「はい、その通りです」

理解の速い美夏に、千代女が少しだけ口で笑みを作りながら肯定を示した。

流石に、ここまで説明をされれば、隣に立っていた自称“シスコンではない”シスコンこと桐嶋竜蔵も理解した様で、自身の妹を囧に使うという案に、あまり騒ぎ立てずに一応の納得をした様であった。

「また、明日は一年生の体力測定がある筈です。故に、実行犯は確実に動きます」

妙に自信あり気に断言した千代女に、これまで生徒会室の隅で壁に背を預けていた刀子が不思議そうに口を開いた。

「千代女さん、どうして、そう言い切れるのですか？」

この素朴な疑問を投げかけた刀子に、千代女は美夏から視線を移しながら“この娘はやはり、なにも分かっちゃない”とばかりに、やれやれといったジェスチャーに溜息一つを付け加えた。

「本当に分からないのですか？ 女子高生の体力測定ですよ？ つまり、女子高生が体操着を着て、色々とマニアな方々が喜びそうな測定をするんですよ？」

千代女の説明が、何一つ理解できなかった刀子は、胸下で腕を組みつつ、頭の上にクエッションマークが浮かび上がりそうな思案顔を始めた。

これに、本当に呆れたとばかりに、千代女が再び溜息を一つ付く。

「なるほど……その様子では、本当に分からないのですね」

「……すみません」

千代女のここまでの落胆ぶりを見た刀子は、自分が本当に無知だった故に、尊敬する人にガツカリされてしまったと勘違いをしてしまふ。

その様子を見て、千代女は仕方ないといった雰囲気で、今度は竜蔵へと視線を向けると。

「この事は、桐嶋さんが良くご存じな筈なので、あとで彼に聞いてよく学んできてください」

「はい、わかりました……」

「いや、分からなくていい」

後々、かなり面倒な役割を任せられそうであった竜蔵は、この二人のやり取りに割と真面目なツツコミを入れた。しかし、そんな竜蔵のツツコミなど、どこ吹く風とばかりに千代女は自らの考えを、ようやく語り始めた。

「まあ、要するにです。明日、必ず実行犯である人物が動きます。それも、美夏さんの体操着姿を盗撮するために……これは、確実に注文を受けている筈の画である筈ですしね」

断言をする千代女の言葉に、刀子だけが良くわからないといった雰囲気を一人醸し出していたが、この部屋にいる彼女以外の者達は、それを綺麗に無視した。

「故に明日、私たち“執行部”が美夏さん。貴女に全力で張り付きますので、ご安心してくださいね？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9403w/>

仁義なき妹【改訂版】

2012年1月11日10時46分発行